

**屋敷古墳群・鋤崎古墳群・足頭古墳群
長廻古墳群・海部城跡
杓子觀音 I 古墳群・杓子觀音 I 遺跡**

主要地方道宍道インター線道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002年3月

島根県教育委員会

**屋敷古墳群・鋤崎古墳群・足頭古墳群
長廻古墳群・海部城跡
杓子觀音I古墳群・杓子觀音I遺跡**

主要地方道宍道インター線道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002年3月

島根県教育委員会

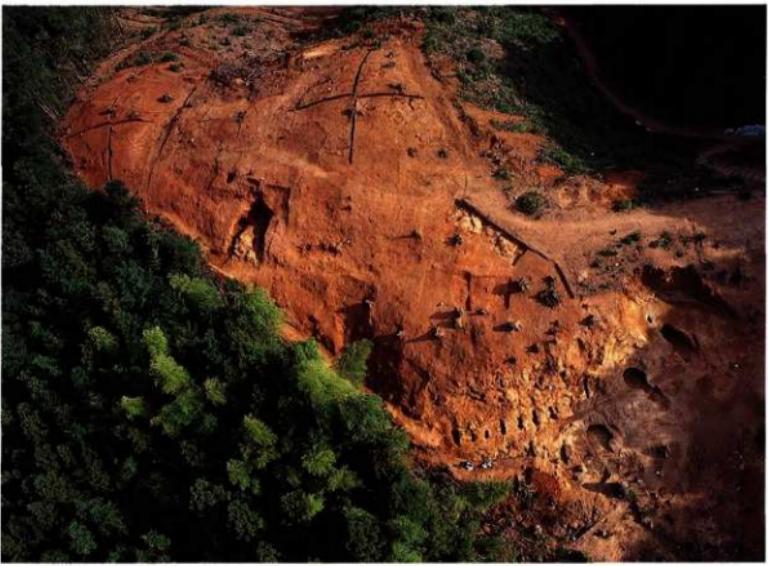


銚崎古墳群南東上空から出雲平野を望む

カラー図版2



屋敷古墳群Ⅰ区全景



屋敷古墳群Ⅱ区全景



足領古墳群全景

カラー図版4



長廻古墳群全景



杓子観音I遺跡 S I - 01

序

この報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部の委託を受けて、平成10年度と平成12・13年度に実施した主要地方道宍道インター線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

調査は、八束郡宍道町佐々布に所在する屏敷古墳群をはじめとする7つの遺跡について実施しました。これらの遺跡からは、弥生時代から中世にかけての集落跡や墓など多様な性格をもつ遺構が見つかりました。中でも屏敷古墳群、長廻古墳群などで横穴墓が多数確認され、古墳時代後期の社会像を解明するうえで貴重な資料となりました。

本報告書が宍道湖南岸地域の歴史を解明する一助となり、広く一般の方々が文化財について理解と関心を高めるうえで役立てば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、調査に御協力いただきました地元の皆様はじめ、宍道町教育委員会、島根県土木部ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎 悠雄

例 言

1. 本書は、島根県教育委員会が、島根県土木部から委託を受けて平成10・12・13年度に実施した主要地方道穴道インター線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査を実施した遺跡は次のとおりである。(職名・所属は当時)

屋敷古墳群 八束郡穴道町佐々布3475-15外(平成10年度)

鶴崎古墳群 八束郡穴道町佐々布2331外(平成10年度)

足頭古墳群 八束郡穴道町佐々布3245-3外(平成10年度)

長廻古墳群 八束郡穴道町佐々布3286-2外(平成10年度)

海部城跡 八束郡穴道町佐々布2525-18外(平成10年度)

杓子観音I古墳群 八束郡穴道町佐々布3262-1外(平成12年度)

杓子観音I遺跡 八束郡穴道町佐々布3262-13外(平成13年度)

3. 調査組織は次のとおりである。

[平成10年度]

事務局 勝部 昭(文化財課長)、穴道正年(埋蔵文化財調査センター長)、秋山 実(同課長補佐)、松本岩雄(同課長補佐)

調査員 宮本正保(調査第1係主事)、池瀬 茂(同調査補助員)、角田 順(同)、中岡宏樹(同)、原 和美(同)、木下 誠(穴道町教育委員会主事)

[平成12年度]

事務局 穴道正年(島根県埋蔵文化財調査センター所長)、内田 融(同総務課長)、松本岩雄(同調査課長)、今岡 宏(同総務係長)

調査員 宮本正保(調査第1係主事)、岡本育子(同調査補助員)

調査指導者 井上晃孝(鳥取大学医学部助教授)

[平成13年度]

事務局 穴道正年(島根県埋蔵文化財調査センター所長)、内田 融(同総務課長)、松本岩雄(同調査第1課長)、今岡 宏(同総務係長)

調査員 広江耕史(調査第1係長)、宮本正保(同文化財保護主事)、伊藤幸子(同調査補助員)、是田和美(同)

4. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々から有益な御指導、御協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

穴澤義功(たたら研究会委員)、稻田 信(穴道町教育委員会)

5. 掘図中の方位は測量法による第III座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。

6. 本書に掲載した遺跡位置図は、国土交通省国土地理院発行の地形図を使用した。また、第3・77・93・105・130図は穴道町道路台帳図(平成10年度当時のもの)、第4・45・94・106・131図は、導入図が作成したものを基にしている。

7. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。S I…竪穴住居 S D…溝状遺構 S K…上坑 S X…性格不明遺構 P…ピット

8. 本報告書に使用した実測図は、各調査員のほか杉原みゆき、錦織美千恵、渡部恵子が作成し、
杉原、錦織、渡部、吉田典子、瀬川恭子、馬庭志津子が添書した。
9. 本書の執筆は第10章を除き、各調査員が分担して執筆し、文責を日次に記した。このほか第9
章2節五輪塔の項は、間野大系（島根県埋蔵文化財調査センター企画調査係文化財保護主事）
が執筆した。
また、第10章については、井上晃孝氏（元鳥取大学医学部助教授）に御執筆いただいた。
10. 本報告書に使用した写真は各調査員のほか、林健亮（島根県埋蔵文化財調査センター調査第1
係文化財保護主事）が撮影した。なお、図版89に使用した写真は、井上晃孝氏に御提供いただ
いた。
11. 本書の編集は、広江・宮本が行った。
12. 本書に掲載した遺跡出土の遺物・実測図及び写真は島根県教育厅埋蔵文化財調査センターで保
管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	(宮本)	1
第2章 調査地の位置と環境	(宮本)	2
第3章 屋敷古墳群		5
第1節 調査の経過と概要		5
第2節 I区の調査	(木下)	9
第3節 II区の調査	(宮本)	36
第4節 小結	(木下・宮本)	60
第4章 銚崎古墳群	(宮本)	64
第1節 調査の経過と概要		64
第2節 調査の結果		64
第3節 小結		77
第5章 足頭古墳群	(宮本)	79
第1節 調査の経過と概要		79
第2節 調査の結果		79
第3節 小結		90
第6章 長廻古墳群	(木下)	91
第1節 調査の経過と概要		91
第2節 調査の結果		91
第3節 小結		110
第7章 海部城跡	(木下)	113
第1節 調査の経過と概要		113
第2節 調査の結果		113
第3節 小結		116
第8章 純子観音I古墳群	(宮本)	117
第1節 調査の経過と概要		117
第2節 調査の結果		117
第3節 小結		122
第9章 純子観音I遺跡	(広江)	123
第1節 調査の経過と概要		123
第2節 調査の結果		127
第3節 小結		134
第10章 自然科学的分析	(井上)	135
第1節 屋敷古墳群II区1号穴出土人骨		135
第2節 屋敷古墳群II区7号穴出土人骨		137
第3節 長廻古墳群2号穴出土人骨		141

挿 図 目 次

第1図 調査地の位置	2
第2図 調査地の位置と周辺の遺跡	3
第3図 屋敷古墳群調査区位置図	6
第4図 屋敷古墳群I区調査後地形測量図・遺構配置図	7
第5図 屋敷古墳群I区S I - O 1実測図(1)	8
第6図 屋敷古墳群I区S I - O 1実測図(2)	9
第7図 屋敷古墳群I区S I - O 1遺物出土状況実測図	10
第8図 屋敷古墳群I区S I - O 1出土遺物実測図(1)	11
第9図 屋敷古墳群I区S I - O 1出土遺物実測図(2)	11
第10図 屋敷古墳群I区S I - O 1外周溝出土遺物実測図	12
第11図 屋敷古墳群I区S I - O 2実測図	13
第12図 屋敷古墳群I区S I - O 2出土遺物実測図	14
第13図 屋敷古墳群I区S I - O 3実測図	14
第14図 屋敷古墳群I区S I - O 3出土遺物実測図	14
第15図 屋敷古墳群I区建物跡1実測図	15
第16図 屋敷古墳群I区SK - O 1実測図	15
第17図 屋敷古墳群I区SK - O 1出土遺物実測図	16
第18図 屋敷古墳群I区加工段1実測図	16
第19図 屋敷古墳群I区加工段1遺物出土状況実測図	17
第20図 屋敷古墳群I区加工段1出土遺物実測図(1)	17
第21図 屋敷古墳群I区加工段1出土遺物実測図(2)	18
第22図 屋敷古墳群I区加工段1出土遺物実測図(3)	18
第23図 屋敷古墳群I区加工段2・3実測図	19
第24図 屋敷古墳群I区加工段3出土遺物実測図	19
第25図 屋敷古墳群I区加工段4実測図	19
第26図 屋敷古墳群I区加工段4出土遺物実測図	20
第27図 屋敷古墳群I区加工段5実測図	20
第28図 屋敷古墳群I区加工段5出土遺物実測図	20
第29図 屋敷古墳群I区1・2・5号墳調査前地形測量図	21
第30図 屋敷古墳群I区1・2・5号墳調査後地形測量図	22
第31図 屋敷古墳群I区1号墳墳丘上層断面図	23
第32図 屋敷古墳群I区1号墳主体部実測図	24
第33図 屋敷古墳群I区3号墳実測図	25
第34図 屋敷古墳群I区3号墳石棺実測図	26
第35図 屋敷古墳群I区3号墳石棺掘方実測図	27
第36図 屋敷古墳群I区3号墳周溝出土遺物実測図	27

第37図	屋敷古墳群 I 区 4 号墳実測図	28
第38図	屋敷古墳群 I 区 4 号墳出土遺物実測図(1)	28
第39図	屋敷古墳群 I 区 4 号墳出土遺物実測図(2)	29
第40図	屋敷古墳群 I 区 5 号墳墳丘上断面図	30
第41図	屋敷古墳群 I 区 穴歛開実測図	31
第42図	屋敷古墳群 I 区出土鉄器・管玉実測図	32
第43図	屋敷古墳群 I 区道構外出上遺物実測図(1)	32
第44図	屋敷古墳群 I 区道構外出上遺物実測図(2)	33
第45図	屋敷古墳群 II 区 調査後地形測量図	37
第46図	屋敷古墳群 II 区 1 号墳・後背墳丘調査前地形測量図	38
第47図	屋敷古墳群 II 区 1 号墳墳丘測量図・上断面図	39
第48図	屋敷古墳群 II 区 1 号穴実測図	40
第49図	屋敷古墳群 II 区 1 号穴底道部遺物出土状況	41
第50図	屋敷古墳群 II 区 1 号穴玄室内遺物出土状況	42
第51図	屋敷古墳群 II 区 1 号穴出土上遺物実測図(1)	43
第52図	屋敷古墳群 II 区 1 号穴出土上遺物実測図(2)	43
第53図	屋敷古墳群 II 区 2・3・6 号穴位置図	44
第54図	屋敷古墳群 II 区 2 号穴実測図	45
第55図	屋敷古墳群 II 区 後背墳丘測量図	45
第56図	屋敷古墳群 II 区 2・3・6 号穴周辺上器片分布状況	46
第57図	屋敷古墳群 II 区 2 号穴前庭部出土上遺物実測図	47
第58図	屋敷古墳群 II 区 3 号穴実測図	48
第59図	屋敷古墳群 II 区 3 号穴出土遺物実測図	48
第60図	屋敷古墳群 II 区 6 号穴実測図	49
第61図	屋敷古墳群 II 区 6 号穴玄室内遺物出土状況	50
第62図	屋敷古墳群 II 区 6 号穴出土遺物実測図	50
第63図	屋敷古墳群 II 区 4 号穴実測図	51
第64図	屋敷古墳群 II 区 5 号穴実測図	52
第65図	屋敷古墳群 II 区 5 号穴閉塞石・屍床・遺物検出状況	53
第66図	屋敷古墳群 II 区 5 号穴川上遺物実測図(1)	54
第67図	屋敷古墳群 II 区 5 号穴出土上遺物実測図(2)	54
第68図	屋敷古墳群 II 区 7 号穴実測図	55
第69図	屋敷古墳群 II 区 7 号穴前庭部立面図・断面図	56
第70図	屋敷古墳群 II 区 7 号穴遺物出土状況	57
第71図	屋敷古墳群 II 区 7 号穴出土遺物実測図(1)	57
第72図	屋敷古墳群 II 区 7 号穴出土遺物実測図(2)	57
第73図	屋敷古墳群 II 区 7 号穴出土遺物実測図(3)	57
第74図	屋敷古墳群 II 区 S K - O 1 実測図	58

第75図	屋敷古墳群II区S X - O 1実測図	59
第76図	屋敷古墳群II区後背墳丘・遺構外山上遺物実測図	60
第77図	錫崎古墳群調査区位置図	65
第78図	錫崎古墳群調査後地形測量図	66
第79図	錫崎古墳群後背墳丘調査前測量図	67
第80図	錫崎古墳群後背墳丘調査後地形測量図・出土遺物位置図	68
第81図	錫崎古墳群後背墳丘出土遺物位置図	69
第82図	錫崎古墳群1号穴実測図	69
第83図	錫崎古墳群1号穴玄室内遺物山上状況	70
第84図	錫崎古墳群1号穴前部遺物山上状況	71
第85図	錫崎古墳群1号穴山上遺物実測図(1)	72
第86図	錫崎古墳群1号穴山上遺物実測図(2)	73
第87図	錫崎古墳群2号穴実測図	73
第88図	錫崎古墳群2号穴遺物山上状況	74
第89図	錫崎古墳群2号穴山上遺物実測図	74
第90図	錫崎古墳群3号穴実測図	75
第91図	錫崎古墳群3号穴山上遺物実測図	75
第92図	錫崎古墳群4号穴実測図	76
第93図	足頭古墳群調査区位置図	80
第94図	足頭古墳群調査後地形測量図	81
第95図	足頭3号墳調査前地形測量図	82
第96図	足頭古墳群土層図	83
第97図	足頭3号墳調査後地形測量図	84
第98図	足頭3号墳第1主体部実測図	85
第99図	足頭3号墳第1主体部出土遺物実測図	86
第100図	足頭3号墳第2主体部(石棺)実測図	86
第101図	足頭3号墳第2主体部(掘り方)実測図	87
第102図	足頭3号墳第3主体部実測図	88
第103図	足頭3号墳南溝内墓壙実測図	89
第104図	足頭3号墳南溝内出土遺物実測図	90
第105図	長廻古墳群調査前周辺地形図	92
第106図	長廻古墳群調査後地形測量図・遺構配置図	93
第107図	長廻古墳群1号墳調査前地形測量図	94
第108図	長廻古墳群1号墳調査後墳丘測量図	94
第109図	長廻古墳群1号墳墳丘土層断面図	95
第110図	長廻古墳群1号墳主体部実測図(1)	96
第111図	長廻古墳群1号墳主体部実測図(2)	97
第112図	長廻古墳群1号墳石棺内遺物・砾出土状況実測図	98

第113図	長廻古墳群1号墳出土遺物実測図	98
第114図	長廻古墳群1号墳主体部掘方実測図（石棺除去後）	98
第115図	長廻古墳群1号穴実測図	99
第116図	長廻古墳群1号穴遺物・閉塞石出土状況実測図	100
第117図	長廻古墳群1号穴玄室内出土遺物実測図	101
第118図	長廻古墳群1号穴出土遺物実測図	102
第119図	長廻古墳群1号穴（前庭部）出土遺物実測図（床面付近）	103
第120図	長廻古墳群2号穴実測図	104
第121図	長廻古墳群2号穴遺物・人骨・閉塞石出土状況実測図	105
第122図	長廻古墳群2号穴玄室内出土遺物実測図	106
第123図	長廻古墳群2号穴出土遺物実測図	106
第124図	長廻古墳群第1郭調査前地形測量図	106
第125図	長廻古墳群第1郭上層断面図	107
第126図	長廻古墳群第1郭調査後地形測量図	108
第127図	長廻古墳群坑道状遺構実測図	109
第128図	長廻古墳群坑道状遺構上層断面図	110
第129図	長廻古墳群遺構に伴わない遺物実測図	111
第130図	海部城跡位置図	114
第131図	海部城跡調査後地形測量図・遺構配置図	115
第132図	海部城跡縦断土層断面図	115
第133図	海部城跡SK-01(pitNo.4)実測図	116
第134図	海部城跡SK-02(pitNo.2)実測図	116
第135図	海部城跡SK-03(pitNo.1)実測図	116
第136図	海部城跡出土遺物	116
第137図	杓子観音I古墳群・杓子観音I遺跡調査区位置図	118
第138図	杓子観音I古墳群1号墳地形測量図	119
第139図	杓子観音I古墳群1号墳調査後地形測量図	120
第140図	杓子観音I古墳群1号墳土層断面図	120
第141図	杓子観音I古墳群1号墳主体部実測図	121
第142図	杓子観音I遺跡遺構配置図	123
第143図	杓子観音I遺跡S I-01・S D-02遺物出土状況	124
第144図	杓子観音I遺跡S I-01・S D-02実測図	125～126
第145図	杓子観音I遺跡S I-01出土上器実測図	127
第146図	杓子観音I遺跡S I-01出土下器実測図	127
第147図	杓子観音I遺跡S I-01東側Pit群実測図	128
第148図	杓子観音I遺跡Pit群周辺出土遺物実測図	128
第149図	杓子観音I遺跡S X-03実測図	129
第150図	杓子観音I遺跡S X-03五輪塔実測図	130

第151図	杓子観音 I 遺跡 S X - 0 2 実測図	131
第152図	杓子観音 I 遺跡 S X - 0 1 実測図	131
第153図	杓子観音 I 遺跡 S K - 0 1 実測図	132
第154図	杓子観音 I 遺跡 S K - 0 2 実測図	132
第155図	杓子観音 I 遺跡 S K - 0 3 実測図	132
第156図	杓子観音 I 遺跡 S D - 0 1 実測図	133
第157図	杓子観音 I 遺跡遺構出土土器実測図	134
第158図	杓子観音 I 遺跡遺構出土石器実測図	135

表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧表	4
表2	屋敷古墳群 I 区出土遺物観察表	34~35
表3	屋敷古墳群 II 区出土遺物観察表	62~63
表4	鋤崎古墳群出土遺物観察表	78
表5	足頭古墳群出土遺物観察表	90
表6	長廻古墳群出土遺物観察表	112

図 版 目 次

屋敷古墳群

図版1	屋敷古墳群 I 区 S I - 0 1 完掘状況
	屋敷古墳群 I 区 S I - 0 1 甑形土器出土状況
図版2	屋敷古墳群 I 区 S I - 0 1 鉄器出土状況
	屋敷古墳群 I 区 S I - 0 2 完掘状況
図版3	屋敷古墳群 I 区 S I - 0 3 完掘状況
	屋敷古墳群 I 区加工段 1・2・3 完掘状況
図版4	屋敷古墳群 I 区加工段 1 土層
	屋敷古墳群 I 区加工段 1 遺物出土状況
図版5	屋敷古墳群 I 区加工段 2・3 完掘状況
	屋敷古墳群 I 区加工段 2・3 土層
図版6	屋敷古墳群 I 区加工段 4 完掘状況
	屋敷古墳群 I 区加工段 4 土層
図版7	屋敷古墳群 I 区加工段 4 遺物出土状況
	屋敷古墳群 I 区加工段 5 土層
図版8	屋敷古墳群 I 区 S K - 0 1 遺物出土状況
	屋敷古墳群 I 区 1 号墳調査前
図版9	屋敷古墳群 I 区 1 号墳

- 星敷古墳群 I 区 1 号墳主体部
- 図版10 星敷古墳群 I 区 1 号墳土層（墳丘北側を西から）
星敷古墳群 I 区 1 号墳土層（墳丘南側を東から）
- 図版11 星敷古墳群 I 区 1 号墳土層（墳丘東側を南から）
星敷古墳群 I 区 1 号墳土層（墳丘西側を北から）
- 図版12 星敷古墳群 I 区 2 号墳
星敷古墳群 I 区 3 号墳石棺及び周溝完掘状況
- 図版13 星敷古墳群 I 区 3 号墳石棺掘方掘削状況
星敷古墳群 I 区 3 号墳石棺取り上げ後状況
- 図版14 星敷古墳群 I 区 SD-03 土器溜まり
星敷古墳群 I 区 SD-03 土層
- 図版15 星敷古墳群 I 区 SD-03 完掘状況
星敷古墳群 I 区 畠歴間
- 図版16 星敷古墳群 I 区 SI-01 出土遺物・SI-02 出土土器・SI-03 出土上器
- 図版17 星敷古墳群 I 区 SI-03 出土土器・SK-02 出土土器
- 図版18 星敷古墳群 I 区加工段 1 出土土器
- 図版19 星敷古墳群 I 区加工段 1・3 出土遺物
- 図版20 星敷古墳群 I 区加工段 4・5 出土土器・SI-01 外周溝出土遺物
- 図版21 星敷古墳群 I 区 3 号墳周溝出土土器・4 号墳周溝出土土器
- 図版22 星敷古墳群 I 区遺構外出土遺物
- 図版23 星敷古墳群 I 区遺構外出土遺物・I 区出土鉄製品・管玉
- 図版24 星敷古墳群 II 区調査前全景（南から）
星敷古墳群 II 区調査前全景（北から）
- 図版25 星敷古墳群 II 区 1 号墳全景
星敷古墳群 II 区 1 号穴渓道部遺物出土状況
- 図版26 星敷古墳群 II 区 1 号穴閉塞石検出状況
星敷古墳群 II 区 1 号穴玄室内遺物出土状況
- 図版27 星敷古墳群 II 区 1 号穴玄室内遺物出土状況（近景）
星敷古墳群 II 区 1 号穴玄室内完掘状況
- 図版28 星敷古墳群 II 区 1 号穴完掘状況
星敷古墳群 II 区 2 号穴検出状況
- 図版29 星敷古墳群 II 区 3 号穴検出状況
星敷古墳群 II 区 6 号穴遺物出土状況
- 図版30 星敷古墳群 II 区 6 号穴完掘状況
星敷古墳群 II 区 2・3・6 号穴完掘状況
- 図版31 星敷古墳群 II 区 4 号穴完掘状況
星敷古墳群 II 区 5 号穴石床検出状況
- 図版32 星敷古墳群 II 区 5 号穴閉塞石検出状況

- 尾敷古墳群II区5号穴完掘状況
図版33 尾敷古墳群II区5号穴完掘状況（玄室内）
尾敷古墳群II区7号穴遺景
図版34 尾敷古墳群II区7号穴玄室内遺物出土状況
尾敷古墳群II区7号穴前庭部遺物出土状況
図版35 尾敷古墳群II区7号穴玄門検出状況
尾敷古墳群II区7号穴玄室内完掘状況
図版36 尾敷古墳群II区SK-01完掘状況
尾敷古墳群II区SX-01焚き口検出状況
図版37 尾敷古墳群II区SX-01全景
尾敷古墳群II区横穴墓・SX-01検出状況（南から）
図版38 尾敷古墳群II区1号穴出土須恵器
図版39 尾敷古墳群II区1号穴出土鐵製品・II区2・3・6号穴周辺出土須恵器
図版40 尾敷古墳群II区3号穴出土鐵製品・II区6号穴出土須恵器
図版41 尾敷古墳群II区5・7号穴出土土器
図版42 尾敷古墳群II区7号穴出土鐵製品・II区遺構外出土須恵器
- 銚崎古墳群
図版43 銚崎古墳群調査前全景
銚崎古墳群1号穴前庭部遺物出土状況
図版44 銚崎古墳群1号穴玄室内遺物出土状況
銚崎古墳群1号穴全景
図版45 銚崎古墳群1号穴玄室内全景
銚崎古墳群2号穴玄室内遺物出土状況
図版46 銚崎古墳群2号穴玄室内全景
銚崎古墳群2号穴玄門検出状況
図版47 銚崎古墳群2号穴全景
銚崎古墳群3号穴完掘状況
図版48 銚崎古墳群3号穴玄室内遺物出土状況
銚崎古墳群3号穴完掘状況（玄室内）
図版49 銚崎古墳群4号穴完掘状況
銚崎古墳群4号穴完掘状況（玄室内）
図版50 銚崎古墳群1号穴後背墳丘出土土器
図版51 銚崎古墳群1号穴出土土器
図版52 銚崎古墳群1号穴～3号穴出土遺物
- 足頭古墳群
図版53 足頭古墳群調査前全景（南から）
足頭古墳群3号墳第1主体部検出状況（内側土坑）
図版54 足頭古墳群3号墳第1主体部礎出土状況

- 足頭古墳群3号墳第1主体部鉄器出土状況
図版55 足頭古墳群3号墳第1主体部完掘状況
足頭古墳群3号墳第2主体部検出状況
図版56 足頭古墳群3号墳第2主体部検出状況
足頭古墳群3号墳第2主体部石棺内完掘状況
図版57 足頭古墳群3号墳第2主体部掘方
足頭古墳群3号墳第3主体部検出状況
図版58 足頭古墳群3号墳第3主体部完掘状況
足頭古墳群3号墳南溝内墓壙検出状況
図版59 足頭古墳群3号墳南溝内墓壙完掘状況
足頭古墳群出土遺物
- 長廻古墳群
- 図版60 長廻古墳群1号墳
長廻古墳群1号墳周溝上層
図版61 長廻古墳群1号墳石棺内流人土除去後
長廻古墳群1号墳石棺内砾・刀子出土状況
図版62 長廻古墳群1号墳石棺取上げ後掘方
長廻古墳群1号穴前庭部縦断土層
図版63 長廻古墳群1号穴前庭部遺物出土状況
長廻古墳群1号穴閉塞状況
図版64 長廻古墳群1号穴玄室内遺物出土状況
長廻古墳群1号穴玄室内大刀出土状況
図版65 長廻古墳群1号穴玄室内完掘状況
長廻古墳群1号穴全景(完掘状況)
図版66 長廻古墳群2号穴閉塞石出土状況
長廻古墳群2号穴玄室内遺物出土状況
図版67 長廻古墳群2号穴前庭部完掘状況
長廻古墳群2号穴玄室内完掘状況
図版68 長廻古墳群坑道状遺構1号穴
長廻古墳群坑道状遺構2号穴(南より)
図版69 長廻古墳群坑道状遺構2号穴(南西より)
長廻古墳群坑道状遺構3号穴
図版70 長廻古墳群1号墳出土鉄器・1号穴出土須恵器
図版71 長廻古墳群1号穴出土須恵器
図版72 長廻古墳群1号穴出土須恵器
図版73 長廻古墳群1号穴出土鉄器・2号穴出土須恵器・鐵鎌
図版74 長廻古墳群遺構に伴わない遺物

海部城跡

- 図版75 海部城跡調査前（曲輪）
海部城跡曲輪縦断土層
図版76 海部城跡切岸縦断土層
海部城跡SK-03（ピット1）土層
図版77 海部城跡SK-03（ピット1）完掘状況
海部城跡SK-02（ピット2）土層
図版78 海部城跡SK-02（ピット2）石検出状況
海部城跡SK-01（ピット4）土層
図版79 海部城跡SK-01（ピット4）石検出状況
海部城跡出土遺物

杓子観音I古墳群

- 図版80 弔子観音I古墳群遠景
弔子観音I古墳群1号墳主体部完掘状況（南から）
図版81 弔子観音I古墳群1号墳主体部完掘状況（東から）
弔子観音I古墳群1号墳墳頂部完掘状況（南東から）
図版82 弔子観音I古墳群1号墳主体部検出状況
弔子観音I古墳群1号墳主体部土層堆積状況（B-B'西側）
弔子観音I古墳群1号墳主体部土層堆積状況（B-B'東側）
図版83 弔子観音I古墳群1号墳主体部自然石出土状況（南東から）
弔子観音I古墳群1号墳自然石検出状況（東から）
弔子観音I古墳群1号墳主体部完掘状況（東から）

弔子観音I遺跡

- 図版84 弔子観音I遺跡全景（北から）
弔子観音I遺跡調査区西側ピット群（北から）
図版85 弔子観音I遺跡SI-01遺物出土状況（北から）
弔子観音I遺跡SI-01完掘状況（北から）
図版86 弔子観音I遺跡SI-01土層堆積状況（西から）
弔子観音I遺跡SX-03石・人骨出土状況（東から）
図版87 弔子観音I遺跡SX-02検出状況（北から）
弔子観音I遺跡SX-01検出状況（東から）
図版88 弔子観音I遺跡SI-01出土遺物
弔子観音I遺跡遺構外出土遺物

横穴墓出土人骨

- 図版89 屋敷古墳群II区7号穴1号人骨
屋敷古墳群II区7号穴1号人骨骨折痕
長廻古墳群2号穴2号人骨

第1章 調査に至る経緯

主要地方道穴道インター線は、国道9号線及び54号線から中国横断道自動車道尾道松江線への接続道路である。

平成6年3月に松江土木建築事務所より穴道町教育委員会へ埋蔵文化財の有無についての照会があり、穴道教育委員会は分布調査を実施した。分布調査前からインター線のルート上に、屋敷古墳群、足頭（あしがしら）古墳群、及び鈎崎（すきさき）遺跡があることはわかっていたが、その他に海部（おんべ）城跡など、遺跡の可能性がある箇所が確認された。

平成9年7月から12月にかけてそれらの箇所で範囲確認調査を実施した。トレンチ調査を中心に行い、造構・遺物の有無について確認を行った。その結果、屋敷古墳群の向かい側にある丘陵先端頂部のトレンチ内から石棺の蓋と思われる石材を検出して古墳の可能性が高まったため、小字名から遺跡を長廻（ながさこ）古墳群とした。またインター線のルートから外れていた鈎崎古墳群と同・丘陵上では、古墳と見られる高まりが確認されたため鈎崎古墳群の一部として調査を実施することとした。なお、トレンチ調査の結果、全面調査が必要な面積は6000m²を越えることが判明し、穴道町教育委員会では穴道インター線の開通予定期までに発掘調査を終了することが困難であると見られた。このため、穴道町教育委員会と鳥根県教育委員会の協議により穴道町教育委員会からは発掘調査員1名を派遣し、発掘調査は鳥根県教育委員会が主体となって実施することとなった。

発掘調査は平成10年度に実施し、平成12年度には報告書を刊行する予定であったが、平成12年8月、平成13年9月の二度にわたって穴道インター線隣接地で地滑りによる亀裂が確認され、丘陵を削り取る工事が必要となった。このため、鳥根県教育委員会により平成12年9月に杓子観音I-1号墳、平成13年10月に杓子観音I遺跡の発掘調査を実施した。

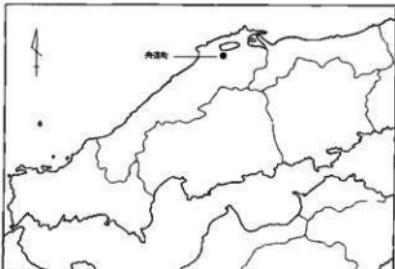
第2章 遺跡の位置と歴史的環境

この報告書に記載する屈数古墳群ほか7つの遺跡は、島根県八束郡宍道町佐々布に所在する。宍道町は国内7位の面積をもつ汽水湖である宍道湖の南西岸に位置し、東は八束郡玉湯町、南は大原郡加茂町と大束町、西は嚴川郡斐川町と境を接する。佐々布地区は宍道町西部に位置し、奈良時代の地誌である『出雲國風土記』に見える意宇郡宍道郷に該当するとされる。宍道駅が置かれ古代山陰道の存在が推定されるなど、古代より交通の要衝であった。現在でもJR山陰線と木次線、国道9号線と54号線の分岐点として出雲平野と山間部・山陽地方をつなぐ要の位置にある。

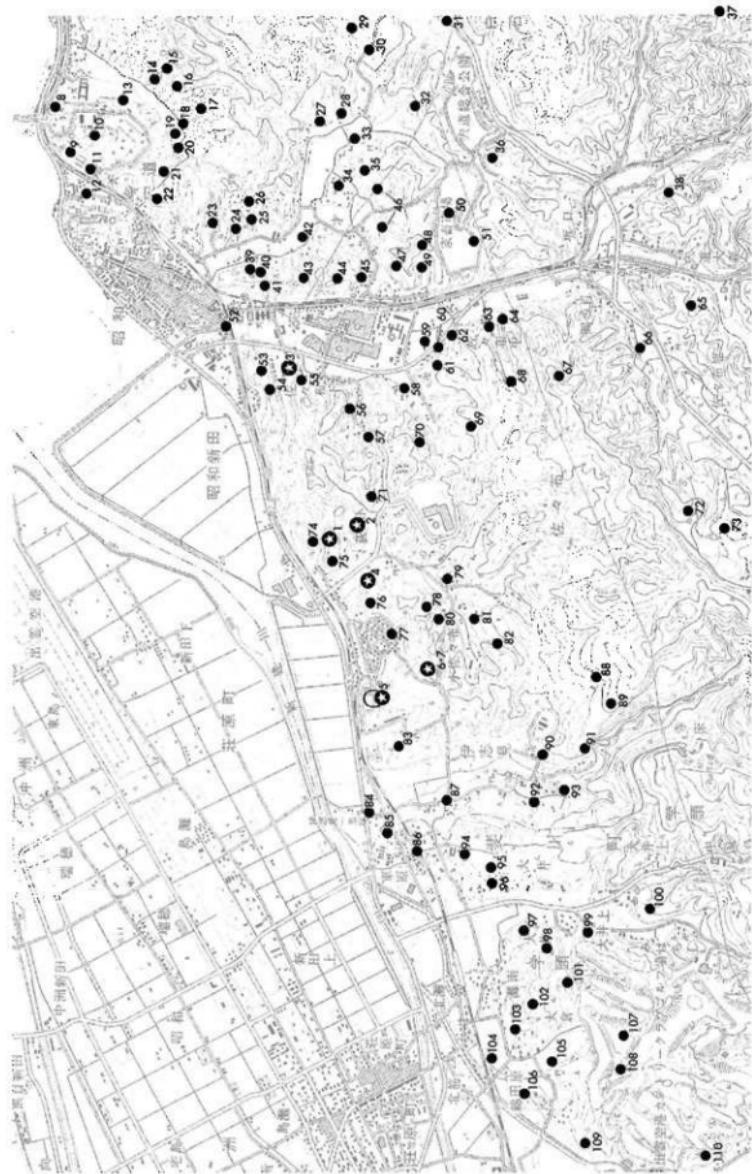
今回報告する遺跡は、宍道湖・出雲平野に向かって伸びる低丘陵及び斜面上に立地する。出雲平野までの距離は数百メートルで、ほとんどの遺跡から宍道湖と出雲平野を望むことができる。

宍道町では、旧石器時代のナイフ形石器が出土した堤平遺跡¹⁾、繩文草創期の落とし穴を検出した野津原II遺跡²⁾など、少數であるが縄文時代以前の遺跡が確認されており、当時から人々が暮らしを営んでいたことがわかる。弥生時代に遺跡数は大きく増加し、北ヶ市遺跡³⁾、山守免遺跡⁴⁾では集落が発見されたほか、清水谷遺跡⁵⁾などでは墳丘墓も確認されている。また宍道町には山麓地方出土とされる福田型銅鐸が伝えられ、墳丘墓の存在とともに当時の集団関係を示すものとして注目される。このほか上野II遺跡⁶⁾では鉄素材が出土し、弥生時代の対外交流と鉄生産を考える上で興味深い。古墳時代に入ると佐々布地区に佐々布下1号墳⁷⁾、上野1号墳と前期古墳が築造される。このうち上野1号墳は、長大な粘土郭を主体部にもつ長径約40mの大形円墳で、斜縁神獣鏡、勾矢、鉄劍などを出土している⁸⁾。古墳時代中期には、水溜古墳群⁹⁾、足頭古墳群¹⁰⁾など墳丘規模の小さい古墳群が造られ、古墳の石材として来待石が用いられるようになる。後期には横穴式石室を主体部にもつ古墳と横穴墓が造られるが、遺跡の所在する宍道町西部では横穴式石室は少なく、横穴墓が多く確認されている。同-の横穴墓群内でも玄室形態が混在している点が周辺地域と比較して特徴的である。このほか、古墳時代から中世の遺跡では、荻田遺跡で鍛冶炉、礪の羽口などを伴う集落跡が見つかっている¹¹⁾。中世には金山要害山城をはじめ、丘陵上を利用した山城が多く築かれるようになる¹²⁾。特に現在の国道9号線と国道54号線の分岐点から南側に集中して立地し、東西と南北の交通の要衝を重要視したことがわかる。

以上のように、この一帯は出雲地方東部と西部、山間部とを結ぶ要の地として発展してきたといえよう。



第1図 調査地の位置



第2図 調査地の位置と周辺の道路 (S = 1 : 25000)

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	星敷古墳群	古墳	38	金山五輪塔群	古墓	75	北ヶ市遺跡	住居跡
2	鏡城古墳群	古墳	39	穴道要雪山城跡	城跡	76	小界古墳	古墳
3	海前城跡	城跡	40	穴道要雪山古墳	古墳	77	萩田遺跡	住居跡
4	長郷古墳群	古墳	41	櫻塚遺跡	散布地	78	小佐々布古墳群	古墳
5	足頭古墳群	古墳	42	六反田遺跡	散布地	79	北ノ堀遺跡	散布地
6	杓子殿宮古墳群	古墳	43	西代遺跡	散布地	80	庭田遺跡	散布地
7	杓子殿宮古遺跡	集落・墓	44	長瀬古墳	古墳	81	ソラ田遺跡	散布地
8	音の木遺跡	散布地	45	種原遺跡	散布地	82	小佐々布横穴群	横穴
9	小宮田遺跡	散布地	46	才崎古墓群	横穴	83	佐賀塙	郡域
10	荒坪遺跡	散布地	47	OM公園墓穴羣	横穴	84	伊見一里塙	一里塙
11	向野原遺跡	散布地	48	女夫尚遺跡	祭祀跡	85	津原千人塚古墳	古墳
12	下野原遺跡	散布地	49	女夫岩西遺跡	古墳	86	軍原古墳	古墳
13	伝塙治高良首塚	古墳	50	清水谷遺跡	古墳	87	原添遺跡	散布地
14	カシヤク古墳	古墳	51	矢筋遺跡	横穴・散布地	88	荒瀬遺跡	散布地
15	小町遺跡	古墳	52	加茂分進跡	散布地	89	ラント遺跡	散布地
16	後谷横穴墓	横穴	53	掛山城跡	城跡	90	寺ノ前遺跡	散布地
17	元氣師遺跡	散布地	54	佐々布下古墳群	古墳	91	上遺跡	散布地
18	山の神谷横穴墓	横穴	55	観音寺横穴墓	横穴	92	庭田遺跡	散布地
19	岩穴口古墳	横穴	56	中屋敷遺跡	散布地	93	上ソリ遺跡	散布地
20	打越遺跡	散布地	57	大郷ヶ遺跡	散布地	94	草原丘上古墳群	古墳
21	船登駁遺跡	散布地	58	西原分進跡	散布地	95	大井古墳	古墳
22	上野原遺跡	散布地	59	石造仙	石造	96	冥原Ⅰ遺跡	散布地
23	隨音寺横穴墓群	横穴	60	竹ノ崎横穴墓群	横穴	97	久ノ元1号墳	古墳
24	八斗久保遺跡	散布地	61	上野遺跡	古墳・住居跡	98	久ノ元2号跡	城跡
25	横桟横穴墓群	横穴	62	竹ノ崎遺跡	散布地	99	大井城跡	城跡
26	横桟遺跡	散布地	63	矢谷下遺跡	散布地	100	湯谷城跡	城跡
27	外垣内遺跡	散布地	64	散手遺跡	散布地	101	大倉城跡	城跡
28	原田遺跡	散布地	65	大森経塚	横塚	102	大倉横穴群	横穴
29	野津原Ⅱ遺跡	住居跡	66	平田遺跡	散布地	103	大倉Ⅱ遺跡	散布地
30	山守免遺跡	住居跡	67	佐々布要雪山城跡	城跡	104	大倉Ⅲ遺跡	散布地
31	女ヶ崎横穴	横穴	68	矢田上遺跡	散布地	105	大倉Ⅳ遺跡	散布地
32	塙平遺跡	寺跡・住居跡	69	上野Ⅱ遺跡	住居跡	106	錦田原Ⅰ遺跡	散布地
33	佐賀利遺跡	散布地	70	城山城跡	城跡	107	大倉Ⅴ遺跡	散布地
34	向原遺跡	散布地	71	岩穴横穴跡	散布地	108	錦田原城跡	城跡
35	才古墳	古墳	72	普門院跡	寺跡	109	錦田原古墳群	古墳
36	水溜古墳群	古墳	73	佐々布1遺跡	散布地	110	宇屋谷遺跡	散布地
37	金山要吉山城	城跡	74	椎ノ木原古墳群	古墳			

註

- 1) 丹羽野 裕「島根県における旧石器時代研究の現状と課題」『島根考古学会誌』第8集 1991
- 2) 「野津原Ⅱ遺跡」『島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報』V 1997
- 3) 「北ヶ市遺跡」『宍道町史』史料編 1999
- 4) 「川守免遺跡」『島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報』VI 1998
- 5) 「清水谷遺跡、矢頭遺跡発掘調査報告書」『宍道町坪藏文化財発掘調査報告』4 1985
- 6) 「上野Ⅱ遺跡」中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10 2001
- 7) 西尾克己「宍道町の古墳時代」宍道町ふるさと文庫6 1992
- 8) 「上野遺跡・竹ノ崎遺跡」中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7 2000
- 9) 「水溜古墳群」『宍道町坪藏文化財調査報告』6 1988
- 10) 「足頭古墳群」『宍道町史』史料編 1999
- 11) 村上勇「宍道・萩出住宅団地遺跡(I・II)」『島根県埋蔵文化財発掘調査報告書』X II・X III 1986・1988
- 12) 島根県教育委員会「出雲・薩岐の城館跡」 1998

第3章 屋敷古墳群

第1節 調査の経過と概要

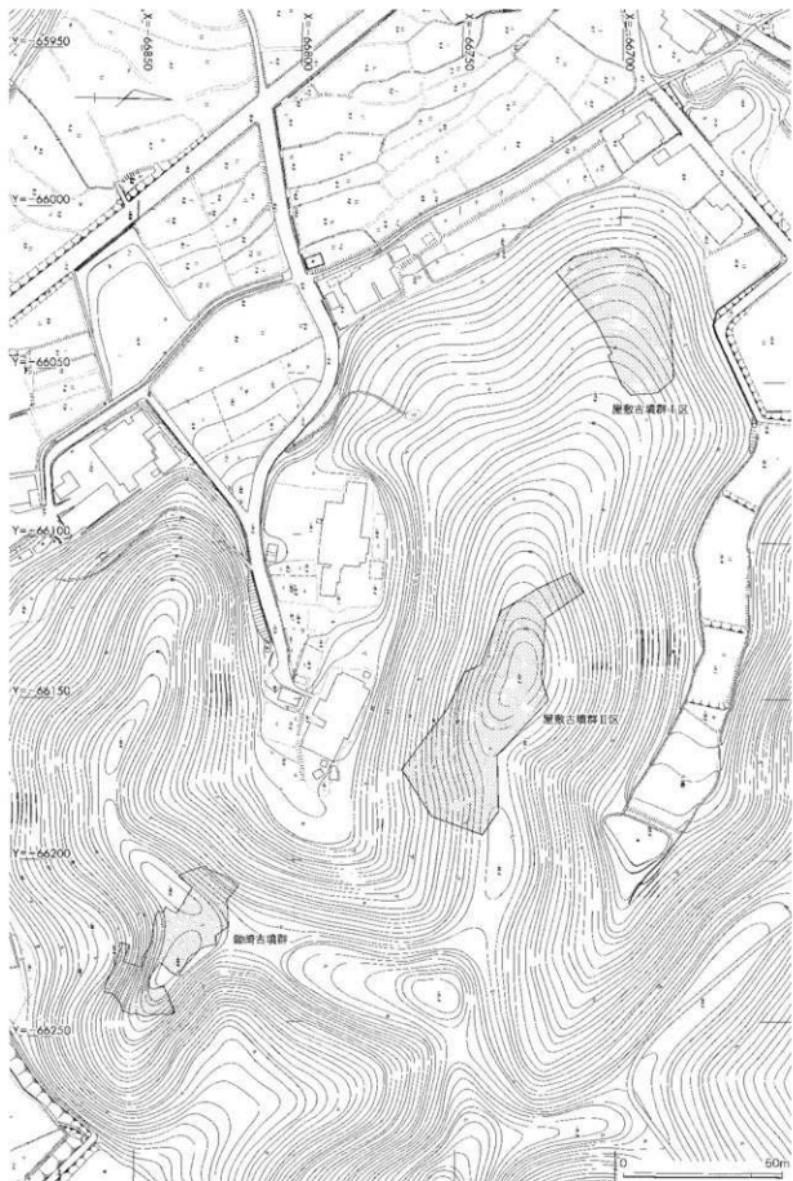
屋敷古墳群は、八束郡宍道町大字佐々布3475-15外に所在する。宍道町西部を流れる江尻川東岸に位置し、北西へのびる丘陵先端付近の頂部から斜面にかけて立地する。北東に宍道湖、北西に出雲半野を望み、宍道湖との距離は現在では約1kmであるが、当時は遺跡のすぐ近くまで宍道湖が迫っていたと考えられる。丘陵の標高は、II区の尾根上で44mとそれほど高くはないが、宍道湖や出雲半野に近いため北へ西への眺望は開けている。調査区は2カ所設定し、西へのびる丘陵先端付近の緩斜面をI区、I区の東側約100mに位置する尾根および斜面をII区とした。

周辺の遺跡は第2章に記したとおりであるが、I区南側に隣接して弥生時代の堅穴住居跡を検出した北ヶ市遺跡¹⁾が存在した。開発に伴い既に消滅したが、本来は屋敷古墳群I区と一連のものであったと見られる。また第4章に掲載した鯨崎古墳群は南東約100mの尾根上に位置する。

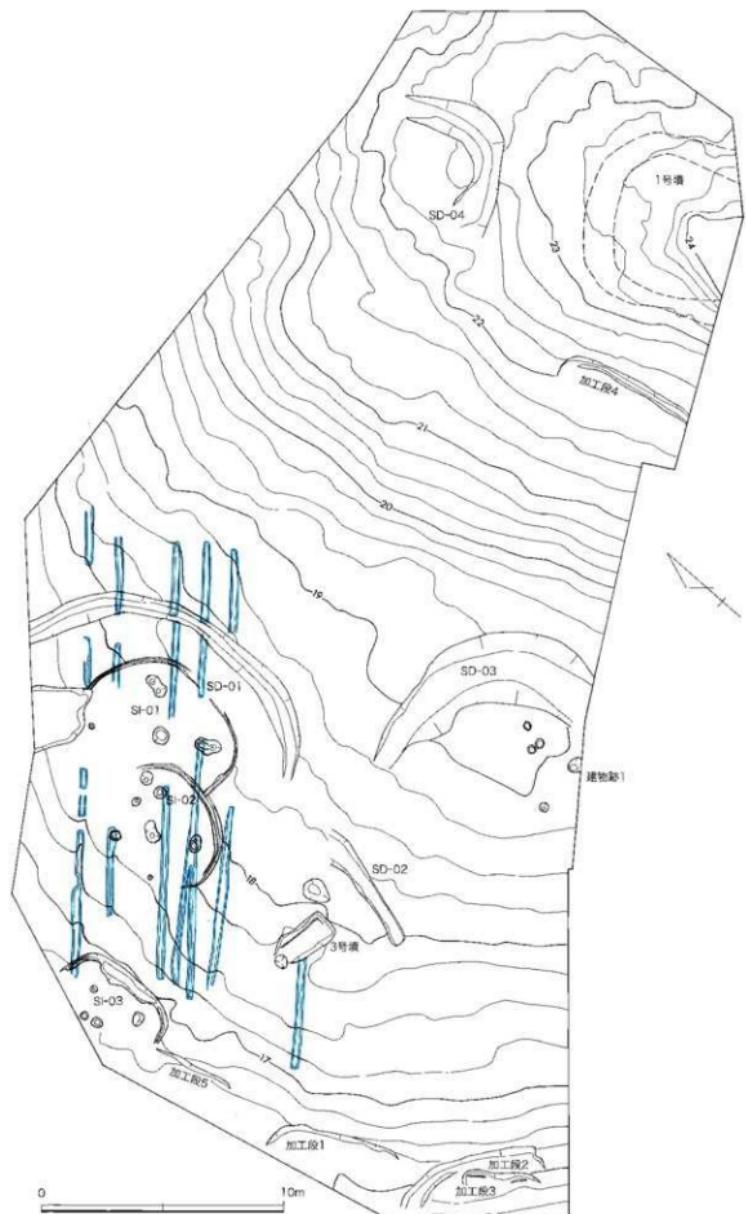
この遺跡は以前から古墳の存在が想定されており、平成9年に宍道町教育委員会により行われた範囲確認調査では、丘陵先端の平坦面で石棺の一部を検出している。

全面調査は平成10年4月～8月に実施した。4月13日にI区、4月21日にII区に着手した。I区では、トレンチ調査の状況から、後世の地形改変により遺構の遺存状態は良くないことが想定されたが、古墳4基、堅穴住居跡3棟、嵐の歴間とみられる溝も確認し、8月6日に終了した。II区では、古墳1基、横穴墓6穴、掘削途中の炭窯と見られる遺構1などを検出し、8月7日に調査を終了したが、8月末に横穴墓1穴が工事中に発見され、これについて8月31日から9月7日まで調査を行った。

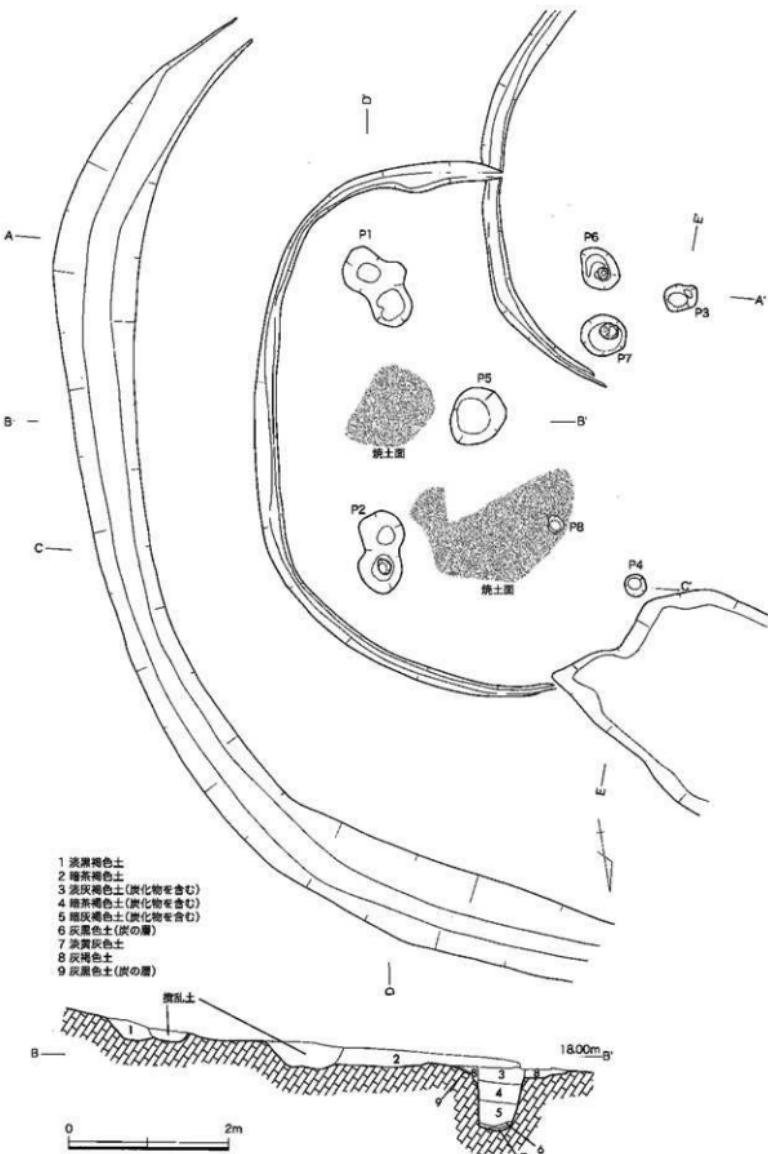
全面調査の方法は、重機及び人力による表土掘削の後、人力による掘り下げ・清掃を行って遺構を検出した。遺物の取り上げ、実測には主として遺跡調査システム「S I T E」を使用し、調査員による補正を行った。



第3図 屋敷古墳群調査区位置図



第4図 屋敷古墳群I区調査調査後地形測量図・遺構配置図 ($S = 1 : 200$)



第5図 屋敷古墳群 I区 S.I-01実測図(1) (S = 1 : 60)

第2節 I区の調査

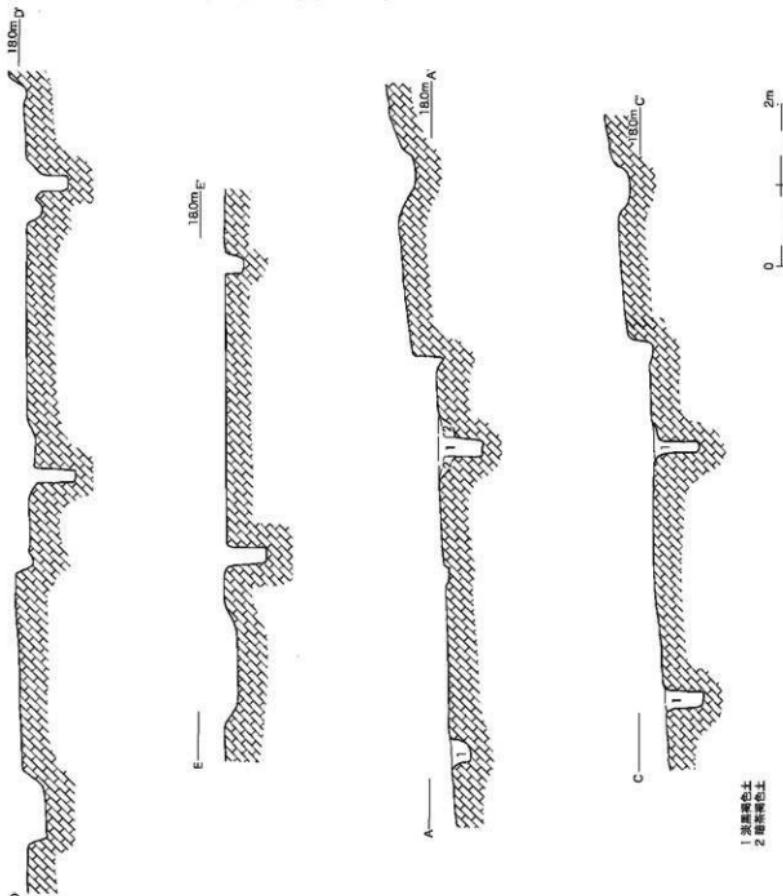
調査区の立地

I区は東西にのびる標高約20mの舌状丘陵の先端に位置している。当調査区域は約1,400m²である。当調査区東側は比較的緩やかな傾斜となっているが、西側は平坦な面が続いている。

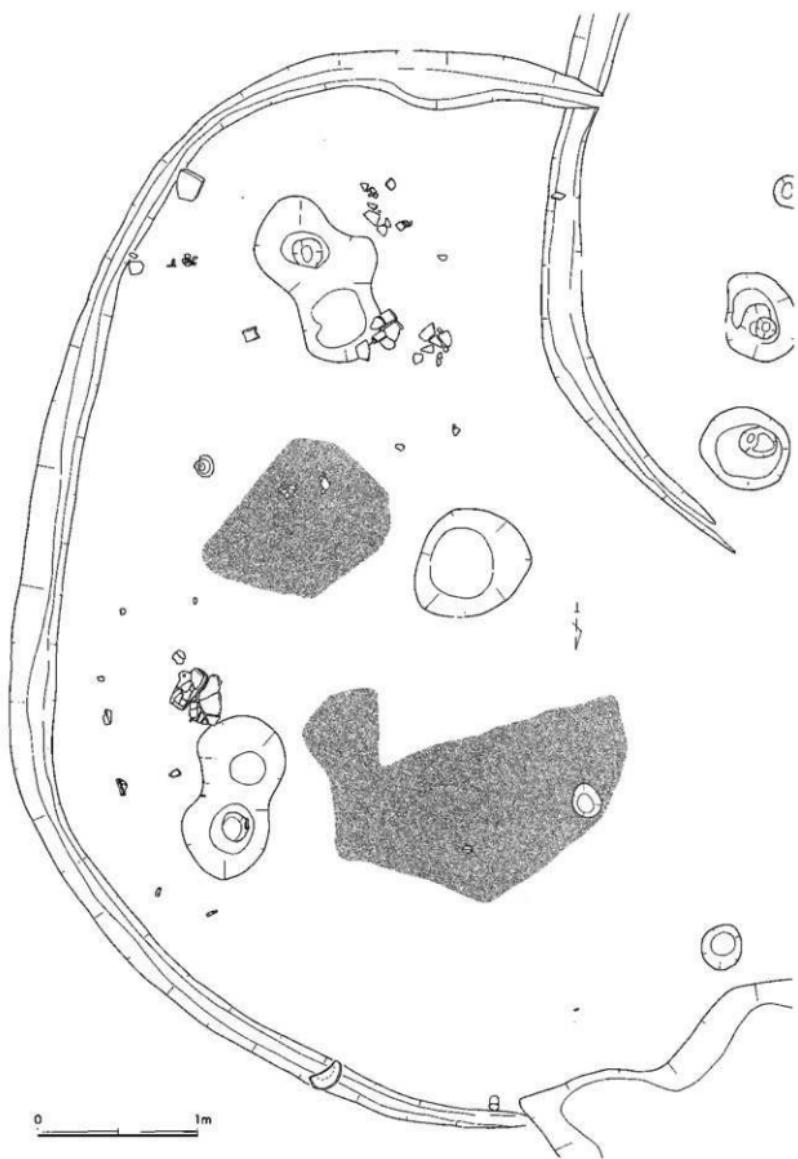
当調査区では古墳群と弥生時代後期の集落を中心に検出した。先に弥生時代集落跡について記述し、後で古墳群について記述したい。

弥生時代集落の立地

I区では竪穴住居跡（S I）を3棟検出した。すべて後世の削平によると思われる平坦面から検



第6図 屋敷古墳群I区S I - 01実測図(2) (S = 1 : 60)



第7図 屋敷古墳群I区S1-01遺物出土状況実測図 (S = 1 : 30)

出している。この堅穴住居跡は調査区外に統いており、この遺跡のすぐ西側には当遺跡とほぼ同時期と考えられる弥生時代後期の堅穴住居跡を2棟検出した北ヶ市遺跡がある。本来の集落の範囲は当遺跡と北ヶ市遺跡を含めた広範囲なものであったと予想される。

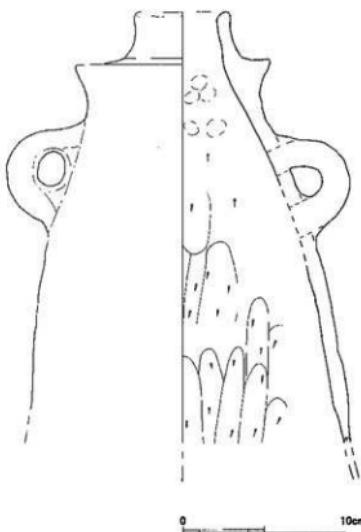
古墳群の立地

当調査区内の古墳群は北西に向かって舌状にのびる標高16m～24mの丘陵端部付近に位置している。

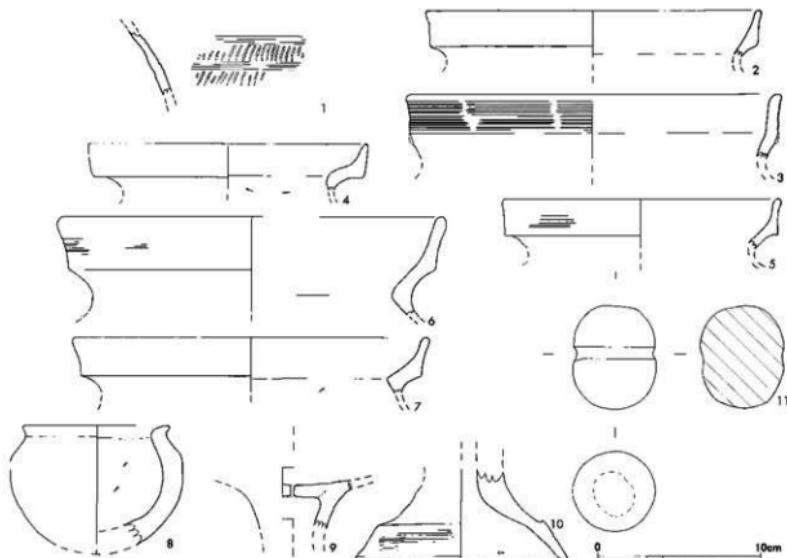
1号墳は、当調査区南東端、標高約24mの尾根中央先端部に位置している。

2号墳は、1号墳南東側に隣接しており、当調査区外に位置している。

3・4・5号墳は、後世の削平の被害を受けており、当時の立地条件が不明であるが、5号墳については、1号墳の北西にのびる丘陵の尾根先端部、1号墳北西側に隣接していると推定される。



第8図 屋敷古墳群I区SI-01出土遺物実測図(1)
(S=1:3)



第9図 屋敷古墳群I区SI-01出土遺物実測図(2) (S=1:3)

島遺構の立地

後世の削平により全容は不明であるが、当調査区の西側、標高17m～19mの丘陵先端部付近に複数の溝が均一間隔で斜面に直行している。遺物は出土していないため時期については不明だが、遺構の形態より島の歴史跡であると推定した。

以下、建物跡、土坑、加工段、古墳群、島遺構の順で各遺構の概要について述べる。

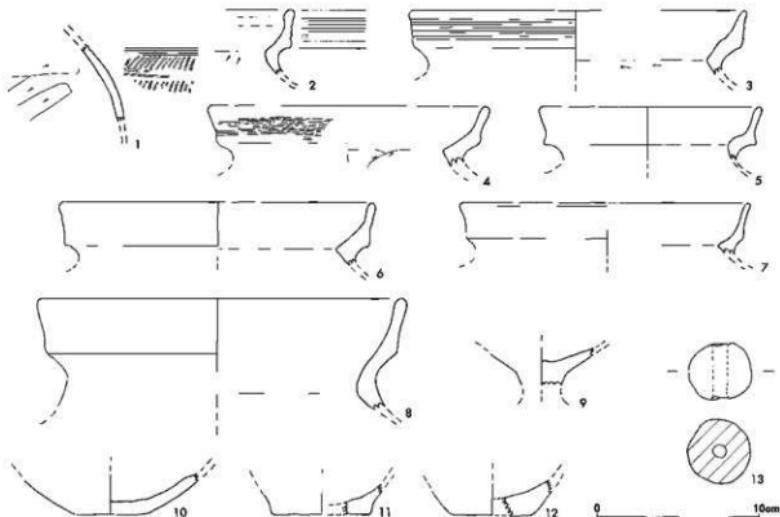
1. 建物跡の調査

S I - 01 (第5図～第10図)

調査区の北西側、標高18m前後の平坦面上に位置する。後世の削平の影響で平坦面となっているが、当時は斜面に位置していたのか、竪穴住居跡の尾根側に、竪穴住居跡の3方向を取り囲むような溝（外周溝と呼ぶ）が廻っているのが特徴である。なお、当遺跡に隣接し当遺跡とはほぼ同時期であると考えられる北ヶ市遺跡の竪穴住居跡にも同じように外周溝が廻っている。

規模・形態 前述のとおり、かなり削平されているため、全容は明らかでないが、当住居址は当遺跡の中で最も規模が大きな住居址であると推定される。現状での残存部分の形態は、平面丸方形を呈し、1辺約6.5mである。また、当住居址から約2.1m離れた周辺に当住居址に伴うと推定される外周溝を検出した。外周溝の北西側部分が調査区外へ続いており、外周溝の全容はつかめないが、現状では、当住居址の北東部分周辺に位置している。外周溝の規模は、長さ約12.6m、幅32cm～108cm、深さは30cm前後である。

土層 後世の削平を受けていたため全容は不明だが、現状では、覆土は1層である。この層は削平の影響が少なかったのか、遺物の出土状況が比較的良好であった。貼床は検出されなかった。

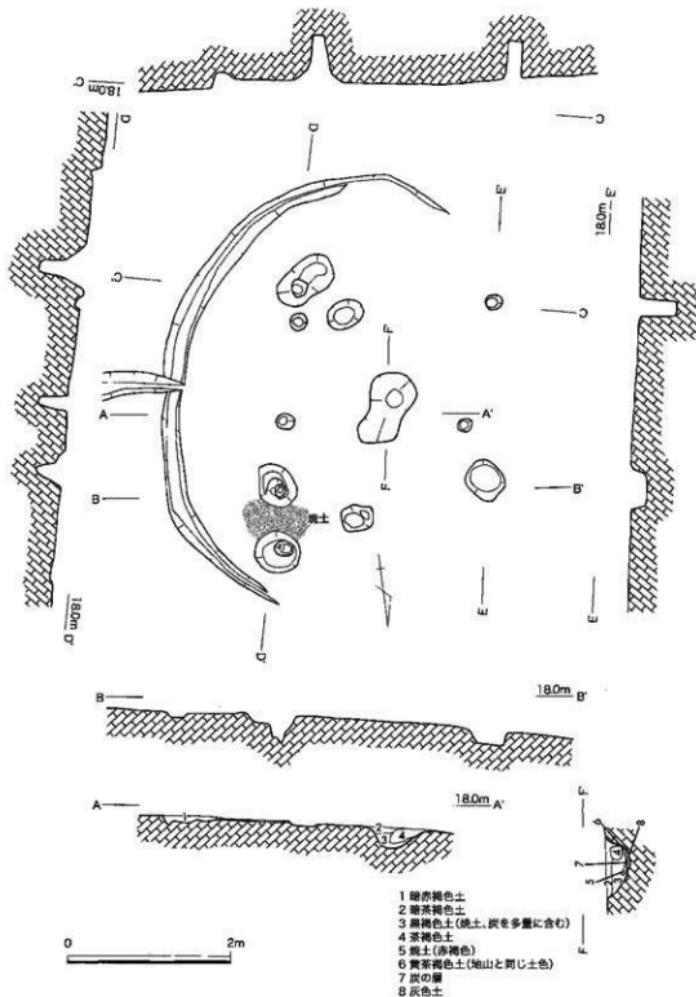


第10図 屋敷古墳群I区S I - 01外周溝出土遺物実測図 (S = 1 : 3)

柱穴・壁体溝 当住居址内からはピットを10基検出している。柱穴は比較的深くしっかりしている。柱間距離は約3.1m～3.8mである。壁沿いには壁体溝が廻る。

炉・焼土面 炉と推定される中央ピットを1基検出している。中央ピットは主柱穴との関係からみて、当住居址中央部よりやや東寄りに位置するものと考えられる。炉は2回に分けて掘られている。

遺物の出土状況（第7図） 遺物は住居址覆土中、中央ピット内、外周溝内から出土している。住



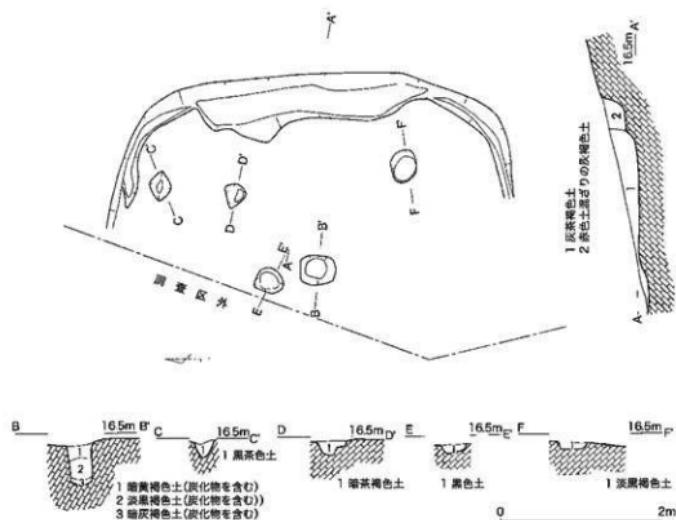
第11図 屋敷古墳群I区S1-02実測図 (S = 1 : 60)

居址床面出土遺物は第8図の瓶形土器、第9図11の石鍤、2、3、8の弥生土器である。瓶形土器は柱穴付近から出土している。中央ピット内出土遺物は第9図5の弥生土器である。外周溝内出土遺物は第10図である。

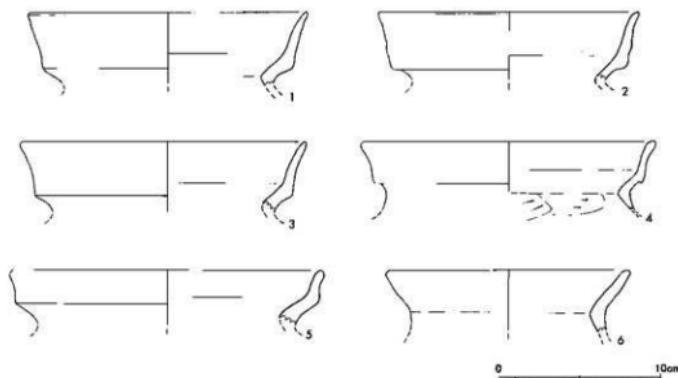
S I - 0 1 出土遺物（第8図～第10図）



第12図 屋敷古墳群I区S I - 0 2出土遺物
実測図 (S = 1 : 3)



第13図 屋敷古墳群I区S I - 0 3実測図 (S = 1 : 60)



第14図 屋敷古墳群I区S I - 0 3出土遺物実測図 (S = 1 : 3)

詳細については遺物観察表に譲る。

年代 床面付近からの出土遺物からみると、草田2期もしくは草田3期²⁾であると思われる。

S I - 02 (第11図)

S I - 01 のすぐ西側に位置し、S I - 01 によって切られており、S I - 02 → S I - 01 の前後関係にあると考えられる。

規模・形態 S I - 01 よりも削平の被害を受けており、斜面下方側の約 1/2 の概要が不明である。削平の被害が大きくなっている。平面プランは圓丸方形であると思われる。現存する規模で、径 5.2m である。

土層 削平の被害を受けているため全容は明らかでないが、現存する状態では 1 層が確認できる。貼床は検出していない。

柱穴・壁体溝 当住居址からはピットを 10 基検出している。主柱穴は 4 本である。柱穴は比較的深くしっかりしている。柱間距離は約 2.2m ~ 2.5m である。壁沿いには壁体溝が廻る。当住居址西側が削平の被害を受け全容が不明となっているため、壁体溝が全周するかどうかは不明である。

炉・焼土面 炉と推定される中央ピットを 1 基検出している。中央ピットは主柱穴との関係から、当住居址中央部付近に位置するものと考えられる。

遺物の出土状況 後世の削平の被害を大きく受けているためか、出土遺物は少なく図化できたのは第12図のみである。

S I - 02 出土遺物

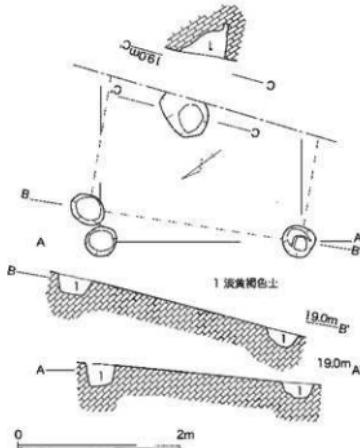
詳細は観察表に譲る。

年代 出土遺物が乏しく現状で判断することは困難であるが、第12図の土器を重視すれば草田1期に比定される住居址と思われる。

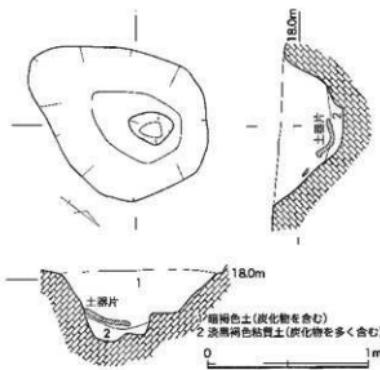
S I - 03 (第13図)

S I - 03 は、S I - 01, S I - 02 とは少し離れており、S I - 02 より西へ約 4 m、当調査区西端で、西向きの斜面、標高約 16.5m に位置している。

S I - 03 も後世の削平の影響を受けており、また、当住居址の西側はかなりの部分が



第15図 屋敷古墳群 I 区建物跡 1 実測図
(S = 1 : 60)



第16図 屋敷古墳群 I 区 SK-01 実測図
(S = 1 : 30)



第17図 屋敷古墳群 I 区 SK-01 山上遺物実測図 ($S = 1 : 3$)

流出していく全容は明らかでない。

規模・形態 斜面下方側の約半分が流出しているが、当住居址は平面隅丸方形と考えられる。現存する規模で、南北5.0mである。

土層 後世の削平の影響を受けていたため全容は明らかでないが、現状で確認できるところでは1層である。貼床は検出していない。

柱穴・壁体溝 当住居址からはピットを5基検出している。削平の度合いが大きいため主柱穴が確認できない。

炉・焼土面 炉と推定される中央ピットを1基検出している。炉の平面形は円状を呈する。

遺物の出土状況 後世の削平の被害を受けているためか、出土遺物は乏しく第14図のみである。

S I - 03 出土遺物 (第14図)

詳細は観察表に譲る。

年代 出土遺物が乏しく現状で判断することは困難であるが、床面付近出土遺物のIを重視すれば草田4期に比定されると思われる。

建物跡 1 (第15図)

建物跡1は後に4号墳となる場所にあったと推定される建物跡で、標高約19m付近に位置している。削平の被害が大きく、ピットのみ検出した。また、調査区東端に位置し、ピットは調査区外に続いているものと推定される。

柱穴 ピットを4基検出している。ピットの配置から建て替えを行ったものと推定される。柱間距離は約2.5m、2.7mである。

炉 炉と推定される中央

ピットを1基検出している。

平面形は不整形な梢円形を呈する。削平の

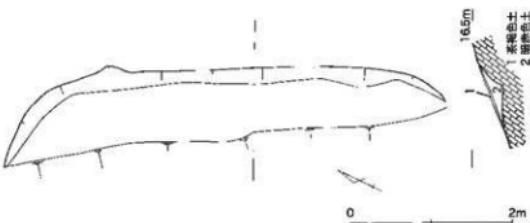
被害を大きく受けている

ため全容は明らかでない

が、現状では炉内の埋土

は1層である。

2. 土坑の調査



第18図 屋敷古墳群 I 区加工段 I 実測図 ($S = 1 : 60$)

SK-01 (第16図)

S I - 02 の南東約4mのところで検出した。削平の被害を受けているため全容は明らかでない。

規模・形態 SK-01の平面形は不整形な楕円形状の形態をなしている。土坑の規模は、上面で $0.9m \times 1.2m$ 、深さ45cmである。土坑の断面形態は、V字形状を呈する。

土層 削平の被害を受けているため全容は明らかでないが、現状では土層の埋土は2層に分かれている。遺物は暗褐色土層内より1点出土している。

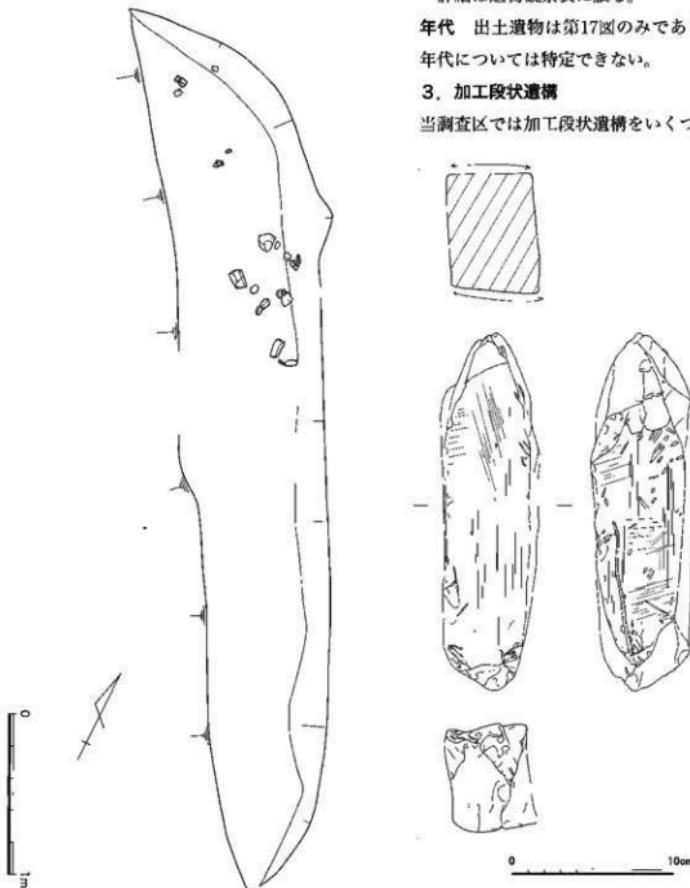
SK-01出土遺物 (第17図)

詳細は遺物観察表に譲る。

年代 出土遺物は第17図のみであり、年代については特定できない。

3. 加工段状遺構

当調査区では加工段状遺構をいくつか



第19図 屋敷古墳群I区加工段1遺物出土状況実測図
(S = 1 : 30)

第20図 屋敷古墳群I区加工段1遺物
実測図(1) (S = 1 : 3)

検出している。これらは出土遺物から弥生時代集落に伴うものと考えられる。

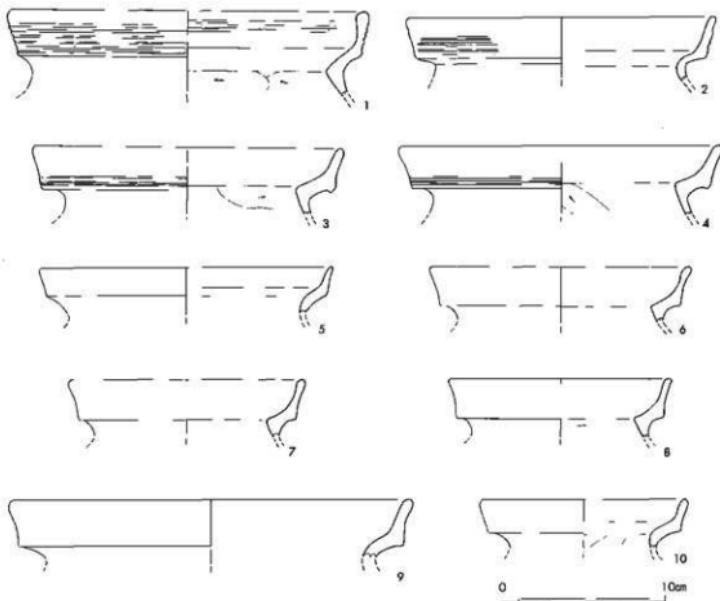
加工段1(第18図)

当調査区西端、S 1-0 3の南側6m、標高約16.5mに位置し、同一レベルには加工段状遺構がいくつも隣接している。また、後世の削平により全容は明らかでない。

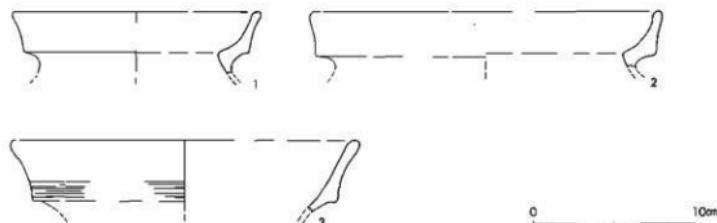
規模・形態 平面形態はコ字形を呈する。ほとんどが後世の削平により流出しており、遺構の性格は不明である。

土層 加工段中の覆土は上から茶褐色土、暗赤色土の順で堆積していて、弥生上器を含んでいる。

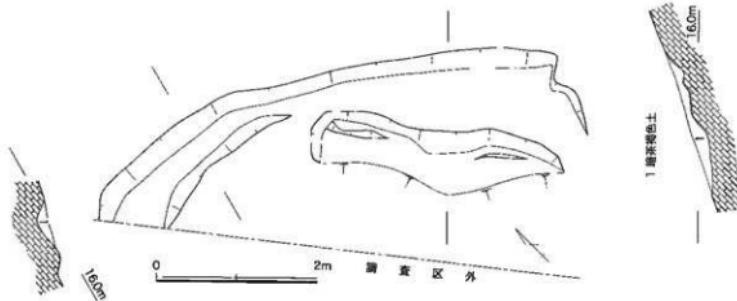
遺物の出土状況(第19図) 当遺跡の加工段の中では最も多くの遺物が出土している。第20図は床



第21図 屋敷古墳群I区加工段1出土遺物実測図(2) (S = 1 : 3)



第22図 屋敷古墳群I区加工段1出土遺物実測図(3) (S = 1 : 3)



第23図 尾敷古墳群I区加工段2・3実測図 ($S = 1 : 60$)

而付近出土遺物であり、第21図と第22図は覆土中の

出土遺物である。

加工段1出土遺物（第20図～第22図）

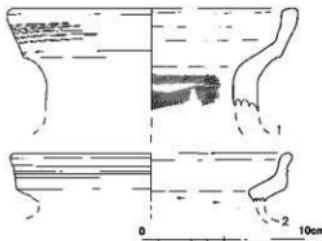
詳細は遺物観察表に譲る。

年代 草田3期に比定されると思われる。

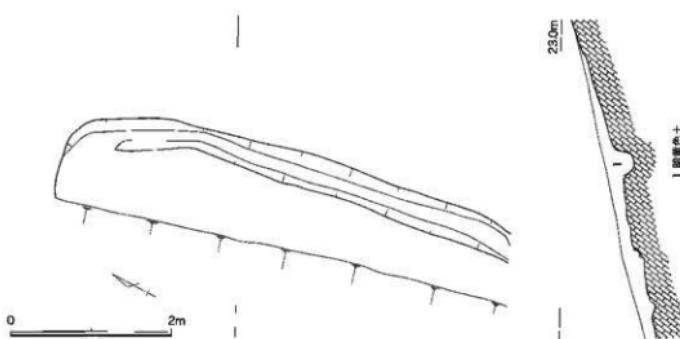
加工段2・3（第23図）

当調査区南西部、加工段1の南側1.2m、標高約16mに位置する加工段状遺構である。後世の削平により全容は明らかでない。

規模・形態 加工段状遺構の壁はやや緩い傾斜をもって掘り込まれ、後世の削平の影響を受けていて全容は明らかでないが、現状では加工段2の壁高は約30cm、加工段3の壁高は約20cmである。



第24図 尾敷古墳群I区加工段3出土遺物
実測図 ($S = 1 : 3$)



第25図 尾敷古墳群I区加工段4実測図 ($S = 1 : 60$)

土層 後世の削平を受けているため全容は明らかでないが、現状で加工段2・3の覆土は1層である。

加工段3出土遺物（第24図）

詳細は遺物観察表に譲る。

年代 出土遺物が乏しく、年代については明言できないが、草田2期に比定されると思われる。

加工段4（第25図～第26図）

当調査区南端、標高約22mの比較的傾斜が急な斜面上に位置する加工段状遺構である。

規模・形態 加工段4は後世に削平を受けたのか、全容が明らかでない。また、遺構の南側が調査区外にのびており、調査区外に遺構群がのびている可能性がある。現行での規模は、長さ5.7m、幅1.3m、床面と推定される部分は幅約1mである。

土層 前述のとおり全容が明らかでないが、覆土は1層であり遺物を出土した。

柱穴・壁体溝 保存状況が悪く、柱穴らしきピットは全く検出していない。壁体溝は加工段状遺構東側で検出している。

加工段4出土遺物（第26図）

詳細は遺物観察表に譲る。

年代 川土遺物が乏しく、年代については明言できないが、草田1期に比定されると思われる。

加工段5（第27図、第28図）

当調査区西端、S I - O 3のすぐ南側、標高約16.5mに位置する加工段状遺構である。後世の削平により全容は明らかでない。

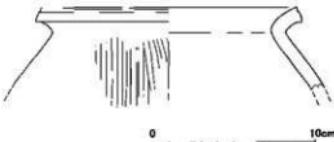
規模・形態 前述のとおり全容は明らかでないが、現状では形態は直線状を呈し、規模は長さ3.6mである。

土層 加工段5の覆土は2層である。覆土中より弥生土器が出土している。

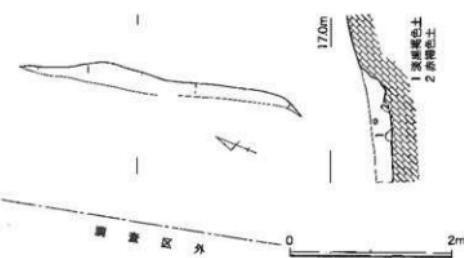
加工段5出土遺物（第28図）

詳細は遺物観察表に譲る。

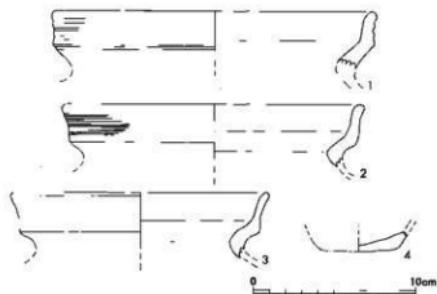
年代 出土遺物が乏しく現状で判断することは困難であるが、草田2期に比定されると思われる。



第26図 屋敷古墳群I区加工段4出土遺物実測図 (S = 1 : 3)



第27図 屋敷古墳群I区加工段5実測図 (S = 1 : 60)



第28図 屋敷古墳群I区加工段5出土遺物実測図
(S = 1 : 3)

3. 古墳群の調査

1号墳

調査区の設定 調査を実施したところ、方墳となる可能性が強かったため、各辺の中心と考えられる点を結んだ十字のラインを設定し、4つの区に分けて調査を実施した。

1号墳の南東側は、調査区外に位置するため、発掘調査が実施できず、測量調査のみを実施した。

① 墓丘の概要



第29図 屋敷古墳群I区1・2・5号墳調査前地形測量図 ($S = 1 : 200$)

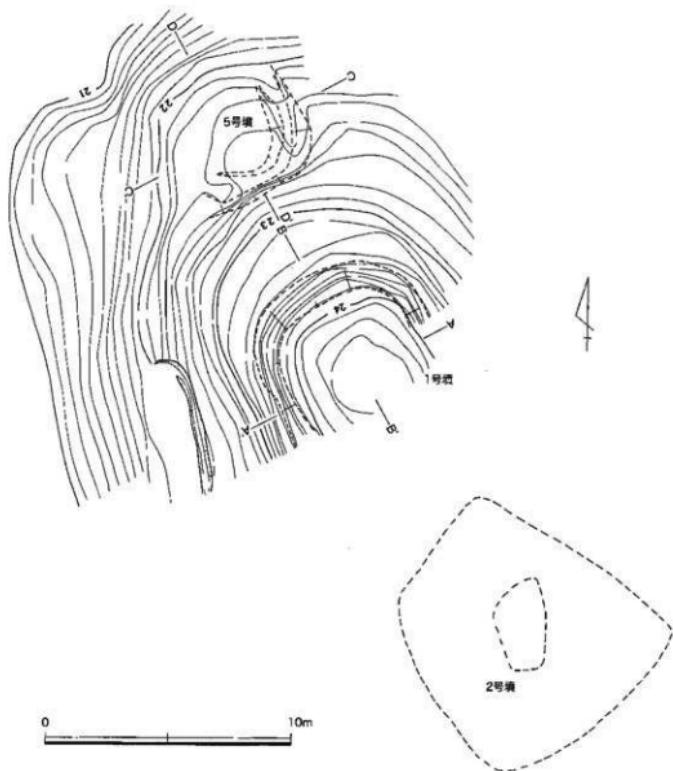
規模・形態（第30図） 小形の方墳である。前述のとおり1号墳の南東側は発掘調査を実施していないため不明だが、調査を実施した範囲では墳丘規模は1辺約8mである。

墳丘の高さは1mである。1号墳は丘陵尾根先端部に位置し、尾根先端部側（北西側・穴道湖側）は自然の丘陵傾斜を墳丘の一部として取り入れ墳丘を大きく見せようとしたためか墳裾が明瞭でない。穴道湖から見ると実際より大きく見えたことと推定される。調査区内において周溝は検出しなかつたが、調査区外に周溝らしき溝が見てとれた。また、墳丘に段築は認められなかつた。

② 墳丘の築成（第31図）

墳丘築成の概要 墳丘の築成は基本的に地山を削り出し、その上に削り出し時の残土を盛り上げていく一般的な手法によるものである。盛土の高さは、高いところで約1mに達し、墳丘のほぼ全部が盛土によって構成されているといえる。

盛土の種類 墳丘盛土は基本的に周辺の地山を削り出したものを利用したものである。盛土は3層に分かれると考えられる。



第30図 屋敷古墳群I区1・2・5号墳調査後地形測量図 (S = 1 : 200)

③ 墳輪

1号墳からはコンテナ約1箱分の埴輪片が出土している。前述のとおり1号墳南東側の周溝と推定される部分は調査していないため、実際にはもっと多くの埴輪が当古墳で使用されていたものと想定される。

④ 埋葬施設（第32図）

主体部の配置 前述のとおり1号墳南東側の調査を実施していないため全容は明らかでないが、調査をした範囲内では埋葬施設1基を検出した。墳頂中央部付近に位置し、墓壙の主軸方向はN-13°-Wである。調査を実施していない部分がありはつきりとしないが、今回検出した埋葬施設は、当古墳の中心主体部であると考えられる。

規模・形態 当主体部は、墳丘盛土面において検出したもので、菟塙は基本的に2段掘りの不整形な台形プランである。現状での規模は、1段目が、長さ1.86m、幅は短辺0.51m、長辺1.14m、深さ9cm、2段目が、長さ1.47m、幅は短辺0.33m、長辺0.63m、深さ12cmである。北側の幅が広くなっている。

棺の構造 墓壙の床面はほぼ平坦である。床面には小口板の掘り込み等の痕跡は確認できなかった。北側が若干高くなっている。

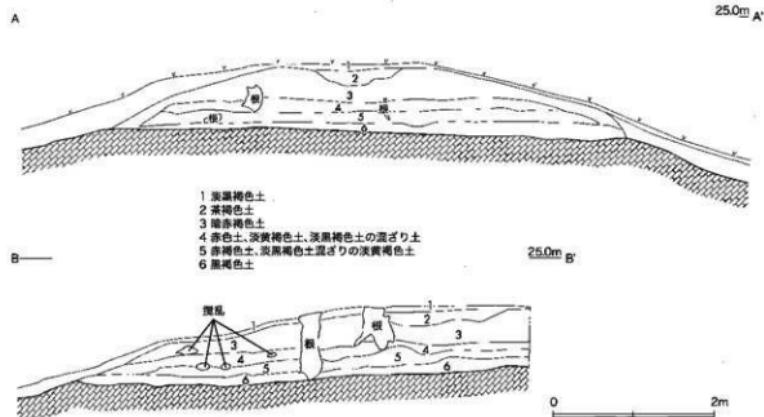
墓壙内で木棺状の痕跡は確認できなかった。このように棺の構造を知りうる手がかりに乏しいが、墓壙の形態からみて箱形状の木棺であったと想定される。北側の墓壙幅が広く、北側の床面が若干高いことから、北頭位の可能性が強い。

遺物の出土状況 墓壙内から上部器と思われる遺物が出土したが、破片が細かく図化できなかった。

年代 年代を判断する遺物等の資料が乏しいため不明である。

2号墳（第29図、第30図）

前述のとおり、2号墳は調査区外に位置していたため、発掘調査は実施していないが、測量調査を実施した。



第31図 屋敷古墳群I区1号墳墳丘十層断面図 (S = 1 : 60)

規模・形態 2号墳は1号墳の南東の尾根上に位置し、小形の方墳である可能性が高いと推定される。

墳丘規模は、発掘調査を実施していないため正確な数値は不明であるが、一辺約10m程度である。墳丘の高さは、約1m前後であると推定される。

年代 発掘調査を実施しておらず年代等を判断する遺物等の資料が乏しいため不明である。

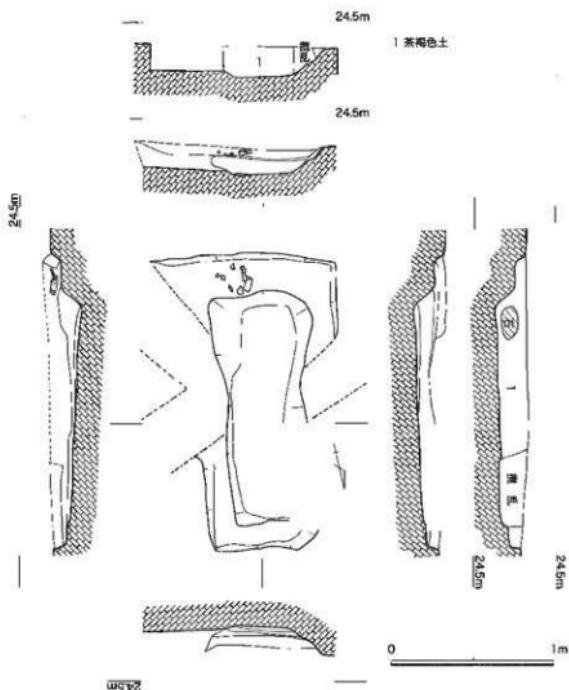
3号墳

① 墳丘の規模（第33図）

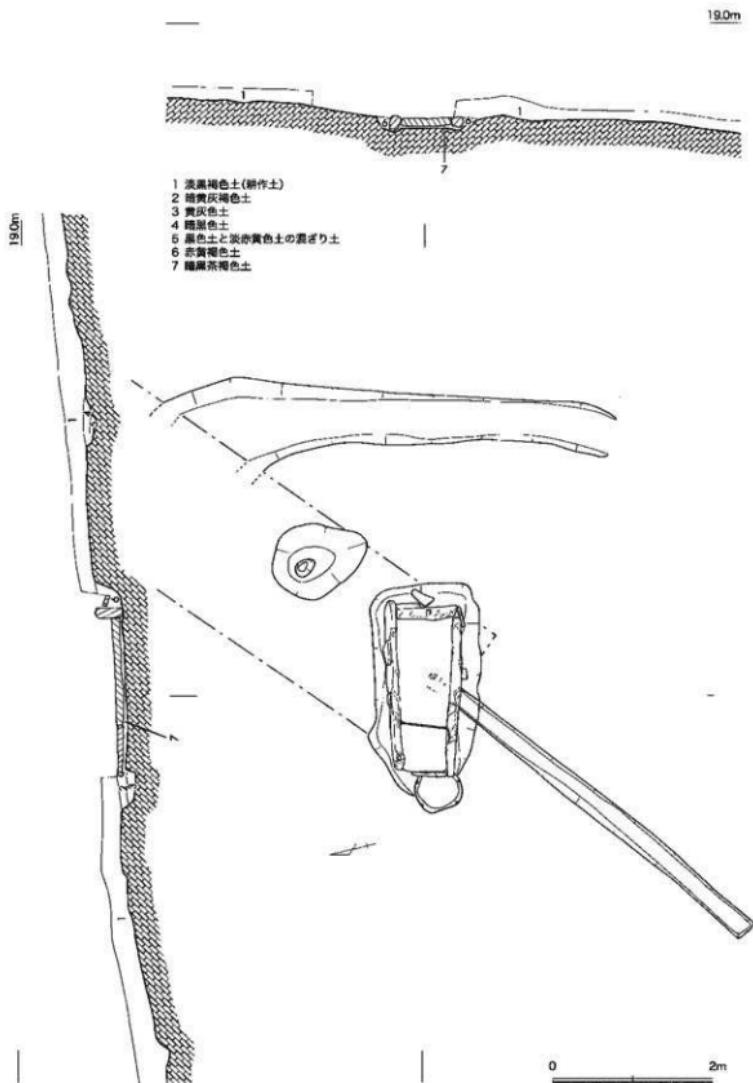
規模・形態 3号墳は4号墳の西側に位置する。後世の削平によりマウンドは検出されなかつたものの、埋葬施設（石棺）の残存部と想定される石組状遺構と周溝の残存部と想定される溝を検出したため、3号墳と命名した。

前述のとおり石棺東側に小規模な周溝の残存部を検出したのみで正確な規模は不明である。周溝の残存部はわずかであるが、形態より方墳であると想定される。

周溝 周溝は石棺東側で長さ5m程度を検出したのみである。周溝は幅80cmで、断面形は浅いU字形を呈する。遺存状況が悪く、土層は1層だった。



第32図 屋敷古墳群I区1号墳主体部実測図 ($S = 1 : 30$)



第33図 屋敷古墳群 I 区 3号墳実測図 ($S = 1 : 60$)

② 墓葬施設

規模・形態 前述のとおり後世の削平により全容は不明であるが、石棺の基底部と想定される部分を検出した。石棺は後世の耕作土直下の浅い箇所から検出し、石棺の上部は後世の削平により滅失している。

墓壙（第35図） 墓壙は基本的に素掘りで長軸を東西方向にやや斜行する形で位置している。平面プランは不整形な長方形をなし、規模は検出面で長さ2.64m、幅1.29mを計測する。深さについては、削平の被害を受けているため正確な数値は不明だが、現状で0.36mで、地山に掘り込まれている。底面には向小口石や側石を据える際に掘り込んだ掘り方が数箇所確認できた。

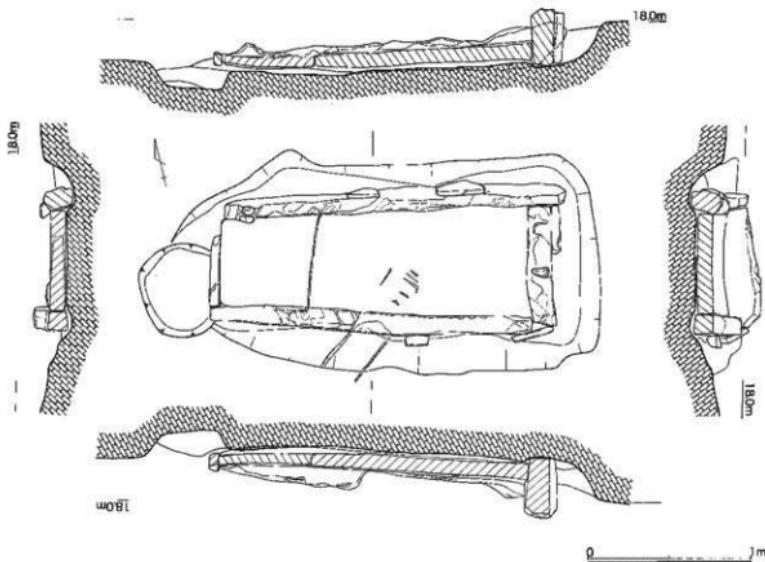
石棺（第34図）

石材 棺材に用いた石材はいわゆる米待石である。

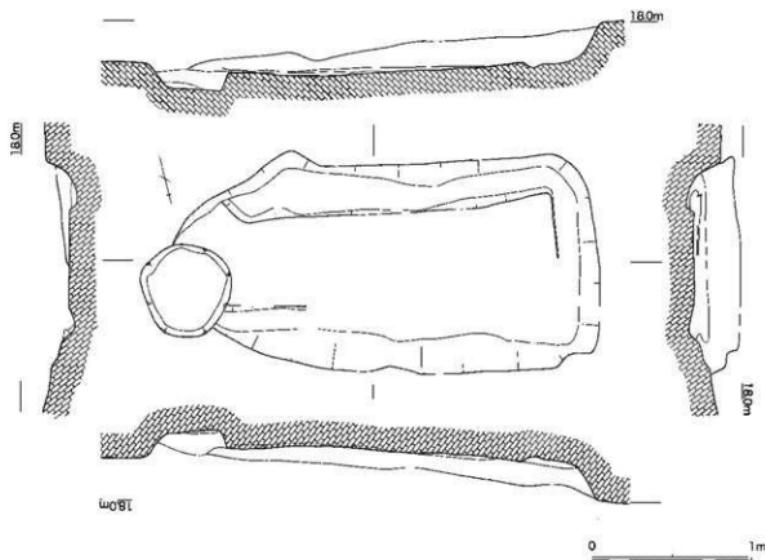
規模 石棺は墓壙のほぼ中央に位置しており、石棺の規模は内法で長さ1.92m、幅54cm～69cmで、東側がやや幅広くつくられている。石棺上部は削平されているため高さは不明であるが、現状では底石からの高さは18cmを計測する。棺の主軸はN-76°-Wである。

棺身 棺の構造は側石で小口板を挟み込むタイプのものである。両側石に比較的厚みのある石材を用いており、北側、南側、それぞれ2枚ずつ使用している。小口板の東側は厚手の板状の石材を用い、西側は薄手の板状の石材を用いている。向小口に掘り方を設けた後、石材を配置している。

底石 比較的厚みのある人形の板状の石材を2枚敷いている。東から西へ向けて緩やかに傾斜している。このように、床面は東側が高く、また、東側の幅が広いことから、東頭位であったと考えら



第34図 扇敷古墳群I区3号墳石棺実測図 (S = 1 : 30)



第35図 屋敷古墳群Ⅰ区3号墳石棺掘方実測図 ($S = 1 : 30$)

れる。後世の耕作によるのか、底石に鉢痕が残っている。

棺外 東側小口外側および両側石外側に数個の裏込め石材を確認した。

③ 遺物 (第36図)

周溝内より須恵器片が2点出土した。詳細は遺物観察表に譲る。

年代 須恵器壺身の口縁部には段をもつたため、大谷編年の出雲2期A³³に比定されると思われる。

4号墳 (第37図～第39図)

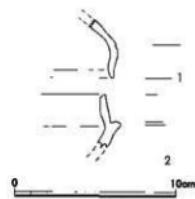
① 墳丘の概要

規模・形態 3号墳の東側に位置している古墳で、後世の削平の被害を多く受けしており、マウンドは検出されなかつものの、周溝の残存部と想定される溝を検出したため、4号墳と命名した。

残存している周溝が少ないため、墳形や墳丘の正確な規模は不明である。

周溝 前述のとおり周溝は斜面上方部分のみでプランを検出した。周溝は弧状を呈し、周溝の南側は調査区外に位置する。後世の削平の被害を受けているため全容は不明だが、断面形は緩やかなU字形を呈し、周溝内の覆土は主に2層である。

周溝内の遺物出土状況 須恵器壺片がまとまって (スクリーントーン



第36図 屋敷古墳群
Ⅰ区3号墳周溝川土遺物
実測図 ($S = 1 : 3$)

の範囲内で) 出土している。

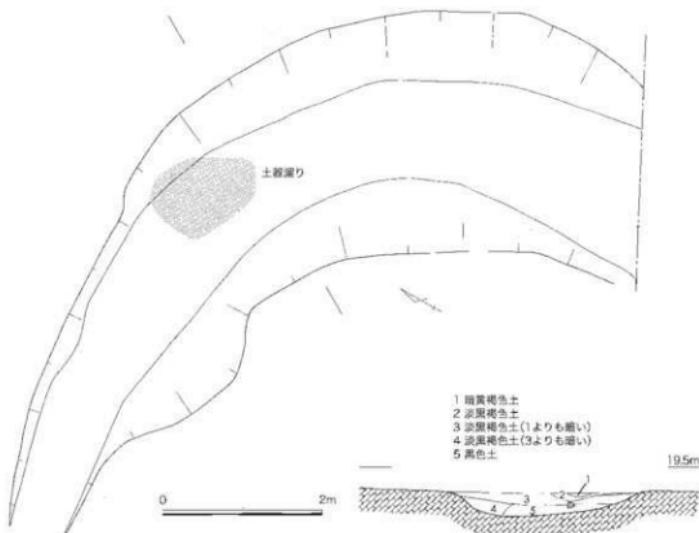
② 埋葬施設

当古墳からは埋葬施設らしきプランは検出していない。

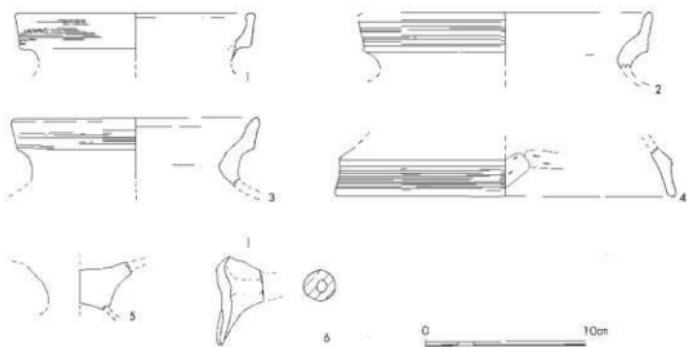
③ 出土遺物 (第38図、第39図)

詳細は遺物観察表に譲る。

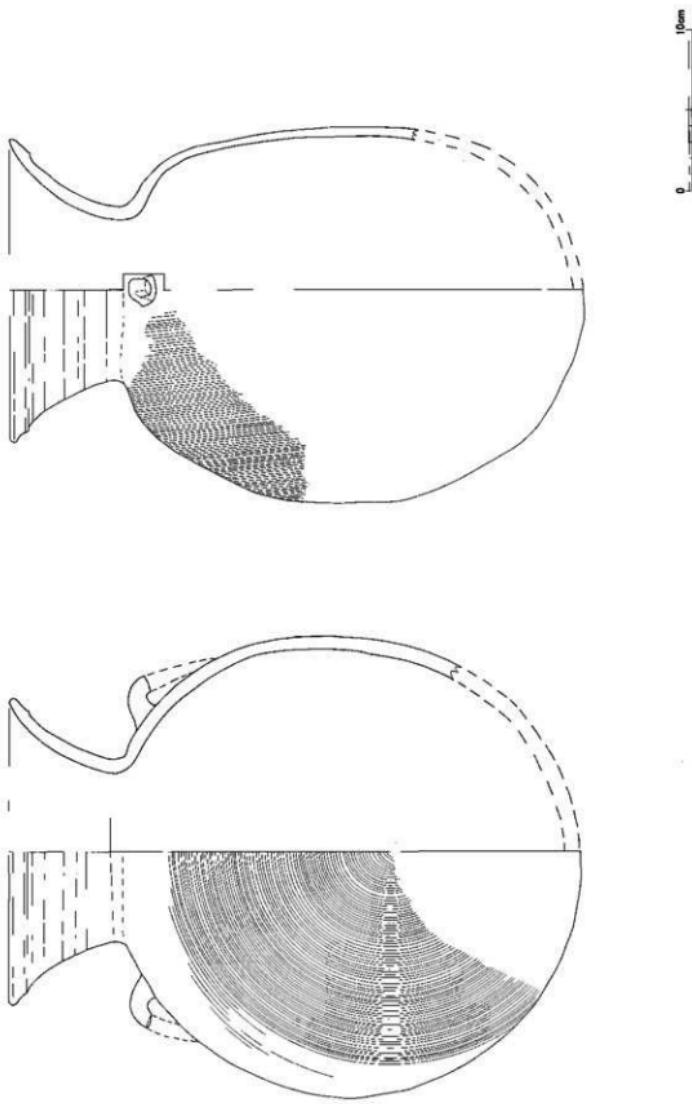
年代 年代を判断する遺物等の資料が乏しいため不明である。



第37図 屋敷古墳群I区4号墳実測図 (S = 1 : 60)



第38図 屋敷古墳群I区4号墳出土遺物実測図(1) (S = 1 : 3)



第39図 屋敷占墳群I区4号墳出土物実測図(2) ($S = 1 : 3$)

5号墳（第40図）

① 墳丘の概要

規模・形態 後世の削平の被害を多大に受けており墳丘は確認できなかつたが、周溝の残存部と想定される溝を検出したため、5号墳と命名した。1号墳の北西に位置している。残存している周溝の位置・形態より1号墳と同様に小形の方墳であると考えられる。正確な規模については不明である。

周溝 墳丘東側の周溝と想定される部分のプランを検出した。「く」の字形を呈している。後世の削平の被害を受けているため全容は不明だが、断面形はU字形を呈する。

周溝内の遺物出土状況 当周溝内からは遺物が検出されなかつた。

② 埋葬施設

当古墳からは埋葬施設らしきプランは検出されなかつた。

年代 遺物が検出されなかつたことから年代等は不明である。

4. 墓造構の調査（第4・41図）

前述のとおり、後世の削平により被害を受けて、敵の部分が削平されている。このため、歎間とみられる溝も当初の規模については不明である。

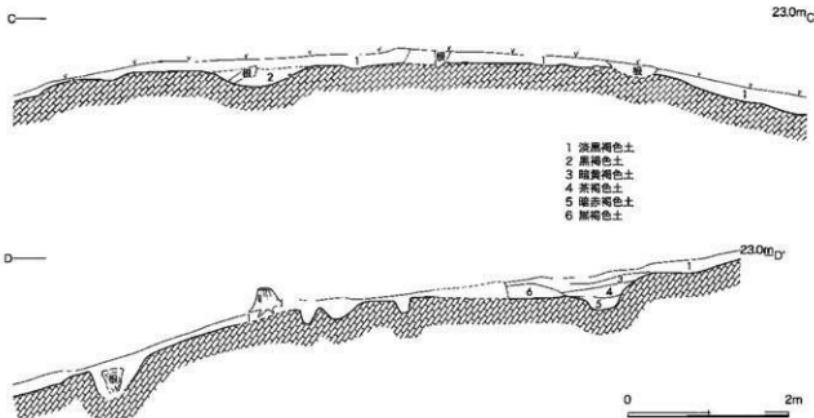
規模・形態 前述のとおり、後世の削平の被害を多大に受けているため全容は不明であるが、現状では歎間と考えられる溝を6本検出している。敵の幅は2箇所で広くなっているが、基本的に約100cmで、歎間（溝）の幅は約30cm、長さは約2mである。

遺物の出土状況 歎間付近から第44図の須恵器片が出土したが、造構に伴うとは断定できなかつた。

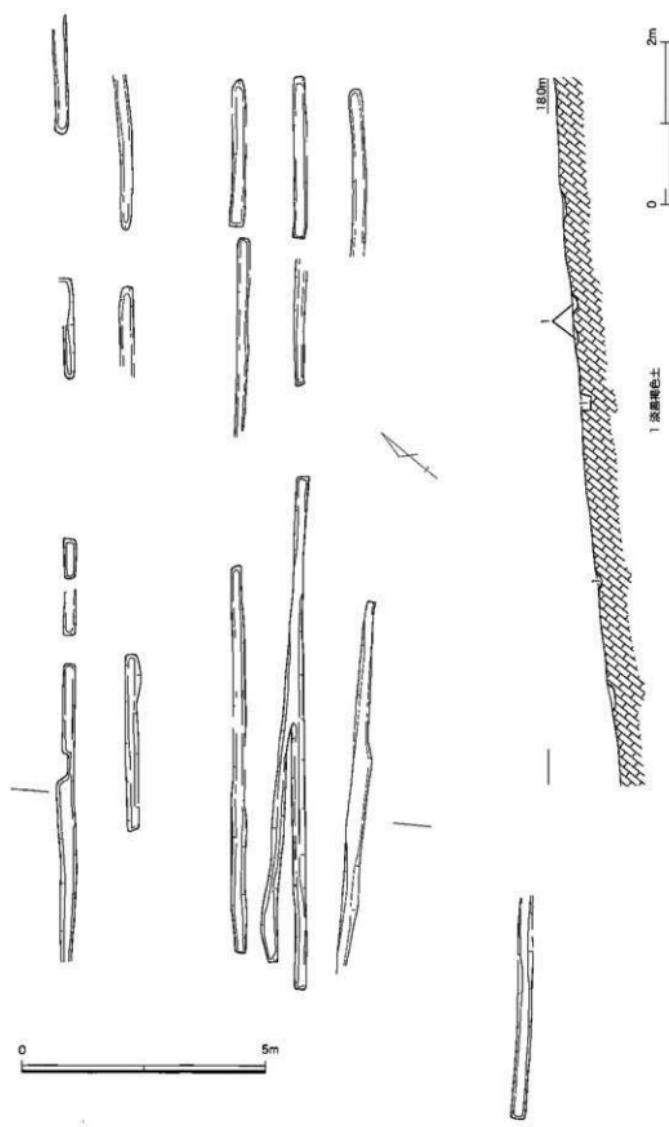
年代 年代を判断する遺物等の資料がないため不明である。

I区出土鉄器（第42図）

1は3号墳付近から出土した。2から5についてはS I - 01の床面付近から出土した。詳細に



第40図 屋敷古墳群I区5号墳墳丘上層断面図 (S = 1 : 60)



第41図 屋敷古墳群 I 区 岳歎問実測図 (S = 1 : 100 上層 S = 1 : 60)

については遺物観察表に譲る。

I区遺構外出土遺物（第43図）

～第44図）

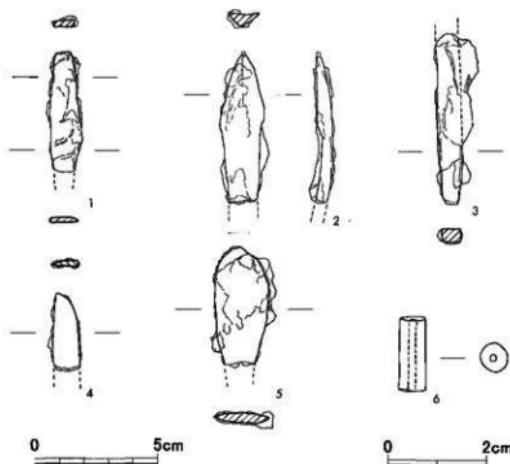
詳細については遺物観察表に譲る。

5. I区のまとめ

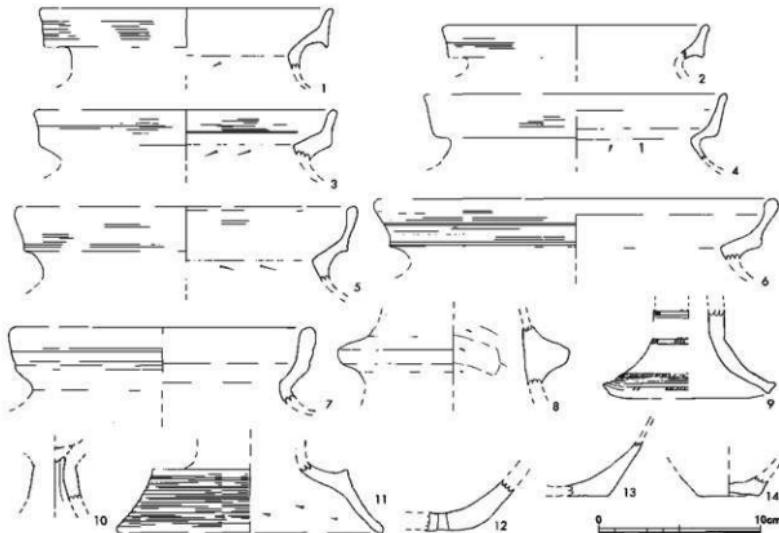
検出された遺構・遺物を時期ごとに概観してまとめとしたい。

弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡3棟、加工段4基が検出された。隣接する北ヶ市遺跡とあわせて弥生時代後期に集落が形成されていたものと考えられる。後世の削平により断定はできないが、低丘陵裾付近で斜面の傾斜も緩

いにもかかわらず外周溝をもつ竪穴住居跡が北ヶ市遺跡も合わせると3棟にもなる（5棟のうち）。平面プランは隅丸方形である。また、鉄製品が住居址床面付近から4点出土し、瓶形土器、石錐も



第42図 屋敷古墳群I区出土上鐵器・管状米測岡
(1~5 S=1:2 6 S=1:1)



第43図 屋敷古墳群I区遺構外出土上遺物実測図(1) (S=1:3)

出土し、バラエティに富んだ遺物を検出できた。遺物の年代としては、草田1期から草田4期（後期前半から後半）までの遺物を確認できたが、中心は草田2期と3期のものである。

古墳時代の追構としては、古墳を4基検出した。後世の削平の被害もあり遺存状態が悪く遺物も少なかったため、詳細な年代や性格を把握することができなかつた。しかし、3号墳の石棺は、ほとんど底部部分しか残っていなかつたが、内法の長さが1.92mと比較的大きかつた。



第44図 屋敷古墳群I区
遺構外出土遺物実測図(2)
(S = 1 : 3)

表2 星数古墳群I区遺物觀察表

総遺物番号	種類	法面 (cm)		形態・手法の特徴	出土場所・生年月日	土色・色調・焼成	備考
		口径	底径				
8	土師器 瓶	5.6		外表面：ヨコナデ、ナデ 内表面：ナデ	取上No.4 980703	1~2mmの砂粒を含む 淡黄褐色	内面把手上方部に用 意記載
9-1	甕			外表面：ナデ 内表面：ナデ	取上No.6 980704	1mm程度の砂粒を含む 外表面：淡黄褐色	他に同一個体と見 れ毛土器片1点
2	甕 蓋	20.4		外表面：ヨコナデ 内表面：ナ デ？（底面により不明瞭）	底面No.25 980706	2mm以上25 1~3mm程度の砂粒を含む 淡黄褐色 良好	口縁部残存率1/11
3	“	22.7		外表面：ヨコナデ 内表面：ナ デ？（底面により不明瞭）	底面No.26 980707	底面No.26 上 ナ2.6 980707	1~3mm程度の砂粒を含む 外表面：淡茶灰 色 内表面：淡黄褐色 良好
4	“	17.1		外表面：底減 内表面：頭部以下ヘラケズリ	2段1層 PNo. 253φ・258	1mm前後の砂粒を含む 淡黄褐色 良好	口縁部残存率1/6
5	“	17.0		外表面：底減 内表面：ナデ	中空ビット1層 980714	中空ビット1層 1mm程度の砂粒を含む 外表面：褐色 内 表面：淡褐色 良好	擬似鉢文6本確認
6	“	23.3		外表面：ヨコナデ（一部頭部尚 ナデ） 内表面：ナデ、頭部以下底減	取上No.9 980703 取上No.2 980706	1~2mm前後の砂粒を含む 淡黄褐色（外 面若千赤味）良好	口縁部残存率1/9 擬似鉢文4本
7	“	21.6		外表面：底減のため不明 内表面：ナデ？（頭部以下ヘラ ケズリ）	1段1層 PNo. 249 980625	1mm以下 の砂粒を含む 黄褐色 良好	口縁部残存率1/10
8	土師器 壺or壺	21.6		外表面：底減のため不明 内表面：頭部以下ヘラケズリ	P1-No.4 底面上 980713	1mm前後の砂粒を含む 外表面：褐色 内 表面：淡褐色 良好	口縁部残存率1/3
9	土師器 高杯			外表面：底減 内表面：ナデ？（底面）	底上No.23、24 980713	1mm程度の砂粒を含む 淡茶褐色 良好	杯中心に小孔
10	土師器 盤	12.7		外表面：ヨコナデ 内表面：ナ デ？（ヘラケズリ）	底上No.5 980703	1~3mm程度の砂粒を含む 淡黄褐色 (底面部分淡褐色) 良好	擬似鉢文6本確認
10-1	甕 蓋			外表面：ナデ 内表面：ナデ？（ヘラケズリ）	1層 PNo.25 980625	1mm程度の白砂粒を含む 外表面：淡黄褐色 内表面：墨褐色 良好	外圍に淡紅鐵錆斑に上 る刻文
2	甕 蓋			外表面：ヨコナデ 内表面：ナ デ？（ヘラケズリ）	2段1層 PNo. 980624	1~2mm程度の砂粒を含む 淡黄褐色 内表面：淡褐色 良好	口縁部残存率1/6
3	“	20.6		外表面：ヨコナデ 内表面：ナ デ？（ヘラケズリ）	P-No.234 980625	1~2mm程度の砂粒を含む 淡茶褐色（底 面若千淡褐色） 良好	口縁部残存率1/11
4	“	16.9		外表面：ヨコナデ 内表面：ナ デ、ナデ？（ヘラケズリ）	第1ベルト1層 No.355 980626	1~2mm程度の砂粒を含む 淡褐色（内 面第一ベルト淡褐色） 良好	口縁部残存率1/6
5	“	13.5		外表面：ナデ、ヨコナデ 内 表面：ナデ？（ヘラケズリ）	2段1層 PNo. 248 980624	1mm前後の砂粒を若干含む 淡黄褐色（外 面若千淡褐色） 良好	口縁部残存率1/6
6	“	19.0		外表面：ヨコナデ 内表面：ナ デ？（ヘラケズリ）	1層 PNo.221 980625	1mm程度の砂粒を含む 淡褐色（内 面若千淡褐色） 良好	口縁部残存率1/6
7	“	17.6		底減のため調整不良	1層 PNo.180 980625	1~2mm程度の砂粒を含む 淡褐色（底 部部分淡褐色） 良好	口縁部残存率1/7
8	“	22.4		外表面：ナデ、底減をナデ溝？ ヨコナデ 内表面：ナデ	1層 PNo.237 980625	1mm前後の砂粒を若干含む 淡黄褐色	口縁部残存率1/10
9	甕 高杯			外表面：ナデ 内表面：ナデ	4段1層 PNo. ?? 980625	1mm弱の砂粒を若干含む 明茶褐色 良 好	
10	甕 底部	2.3		外表面：ナデ 内表面：底減	4段1層 PNo. 230・239 980625	1~3mm程度の砂粒を含む 外 面：淡褐色 内表面：淡灰色 良好	
11	“		2.8	底減のため不明	1層 PNo.183 980611	1~2mm程度の砂粒を含む 淡褐色	底部残存率1/3
12	“			外表面：ナデ 内表面：ナデ	堆土中	1~2mm程度の砂粒を含む 外表面：非褐色 内表面：墨褐色 良好	底部残存率1/4
13	土瓶	長3.4 幅3.9 高4.0			3段1層 PNo. 252 980625	1~2mm程度の砂粒を含む 明黄褐色 良 好	
12	甕 蓋	20.5		外表面：ヨコナデ 内表面：底減、 ヘラケズリ	取り上げNo.1 980622	1mm前後の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/9
14-1	“	17.0		外表面：ナデ？（底面底減） 内表面：底減？（上部不明）	底面No.2 PNo. 296 980621	1~3mm程度の砂粒を含む 外表面：淡茶褐色 内表面：淡褐色 良好	口縫部残存率1/14
2	“	16.1		内・外表面：ナデ？（底面底減） ナデ	1層 PNo.279 980724	1~2mm程度の白砂粒を含む 外表面：褐色 内表面：淡褐色 良好	口縫部残存率1/11
3	“	17.3		内・外表面：底減、ナデ	1層 PNo.250 980724	1~2mm弱の砂粒を含む 外表面：淡黄褐色 内表面：淡白色 良好	口縫部残存率1/6~1/ 7
4	“	17.8		外表面：ヨコナデ、底減 内 表面：ナデ？（ヘラケズリ）	1層 PNo.257~ 277 980724	2mm前後の砂粒を含む 淡黄褐色 良好	口縫部残存率1/12 +抹片2点
5	“	18.9		内・外表面：ナデ？	1層 PNo.283 980723	1~2mm程度の砂粒を含む 外表面：淡褐色 内表面：淡褐色 良好	口縫部残存率1/12 +抹片2点
6	土師器	14.8		内・外表面：ナデ	1層 PNo.282 980723	1~3mm程度の砂粒を含む 淡褐色 内表面：淡褐色 良好	口縫部残存率1/4
17	土師器 蓋？			外表面：底減 内表面：ヘラケズ リ？（底面のため不明）	1層 980729	1~2mm程度の砂粒を含む 外表面：淡茶褐色 内表面：淡褐色 良好	部残存率1/2
21-1	甕 蓋	21.7		内表面：ナデ、ヘラケズリ	取り上げNo.6 980622	1mm程度の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/6
2	“	18.7		内・外表面：ナデ	980622	1~3mm程度の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/7
3	“	18.8		外表面：ナデ 内表面：ナデ、ヘラケズリ	取り上げNo.3 980622	1~2mm程度の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/4
4	“	19.6		内・外表面：ナデ	取り上げNo.12 980622	1mm弱の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/9
5	“	17.8		内・外表面：ナデ	取り上げNo.1 980622	1~2mm程度の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/18
6	“	15.8		内・外表面：ナデ	取り上げNo.1 980622	1~3mmの白砂粒を含む 外表面：淡茶褐色 内表面：淡褐色 良好	口縫部残存率1/9
7	“	14.2		内・外表面：ナデ	取り上げNo.5 980622	1~3mmの白砂粒を含む 外表面：淡茶褐色 内表面：淡褐色 良好	口縫部残存率1/7
8	“	13.4		外表面：ナデ 内表面：ナデ、ヘラケズリ	取り上げNo.6 980622	1~4mmの砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/11
9	“	24.4		内・外表面：ナデ	底上No.2 PNo. 168~169 980622	1~2mm程度の砂粒を含む 外表面：淡褐色 内表面：淡褐色 良好	口縫部残存率1/10

探査番号	種類	法面 (cm)			形状・手法の特徴	出土場所・年月日	地土・色調・構成	備考
		口径	底径	壁厚				
21-10	寄生 巣	12.4			外縁：ナデ 内縁：ナデ、ヘラケズリ	取り上り場No.13 980622	1mm程度の砂粒を含む (2mm大砂粒1ヶ) 淡青色、良好	口縫部残存率1/12 断面図文4本
22-1	"	15.0			内・外縁：ナデ	2区1層Pm.165 980526	1~2mm程度の砂粒を含む 淡黄褐色 良好	口縫部残存率1/9 外縁に「窓」付着
2	"	21.3			"	2区1層Pm.170 980526	1~2mm程度の砂粒を含む 淡青褐色 良好	口縫部残存率1/8 断面図文4本
3	寄生 巣	21.1			外縁：ナデ(巣底あり) 内縁：ナデ	2区1層Pm.165 980518	1~2mm程度の砂粒を含む 淡黄褐色 良好	口縫部残存率1/10 断面図文4本
24-1	寄生 巣	17.4			外縁：ナデ 内縁：ヨコナデ、ハケメ	1層Pm.210 980423	1mm前後の砂粒を含む 外縁：緑褐色 内縁：淡黄褐色、茶褐色 良好	口縫部残存率1/4 断面図文6本
25	寄生 巣	17.1			外縁：ヨコナデ 内縁：ヨコナデ、ヘラケズリ	1層Pm.290 980620	1~2mm程度の砂粒を含む 淡青褐色 良好	口縫部残存率1/13 断面図文3本
26	"	15.7			外縁：ヨコナデ、横ハケメ 内縁：ナデ	980622	1~3mm程度の砂粒を含む 外縁：淡青褐色 内縁：淡黄褐色 良好	口縫部残存率1/13 同一個体1点あり
28-1	"	19.6			内・外縁：ヨコナデ	Pm.284 980729	1~2mm程度の砂粒を含む 外縁：緑褐色 内縁：淡青褐色 良好	口縫部残存率1/9 断面図文1本
2	"	16.1			内・外縁：ナデか	1層 980728	1~2mm程度の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/7
3	"	15.5			"	1層 980723	1~2mm前後の砂粒を含む 淡青褐色 良好	口縫部残存率1/5
4	寄生 巣				"	1層 980722	1~2mm程度の砂粒を含む 外縁：淡褐色 内縁：淡黄褐色 良好	口縫部残存率2/3
36-1	洞巣器 巣				内・外縁：ナデ	SE区 1層 980528	1mm弱の砂粒を含む 淡青褐色 良好	口縫部残存率1/8 同一個体1点あり
2	洞巣器 巣				"		1mm位の砂粒を含む 青褐色 良好	残存率3/10
38-1	寄生 巣	14.6			内・外縁：ヨコナデ	3層 Pm.193 980615	1~3mm前後の砂粒を含む 外縁：淡青褐色 内縁：淡褐色 良好	口縫部残存率1/8 断面図文8本
2	"	17.9			外縁：ヨコナデ 内縁：ナデ	1層 980612	1~2mm程度の砂粒を含む 淡黄褐色 良好	口縫部残存率1/8 断面図文6本
3	"	15.1			外縁：ヨコナデ 内縁：主にヨコナデ、ヘラケズリ?	3層 Pm.190 980612	1~2mm前後の砂粒を含む 外縁：淡茶褐色 内縁：淡褐色 良好	口縫部残存率1/7
4	寄生 巣	20.9			外縁：ヨコナデ 内縁：ヘラケズリ?	3層 Pm.195 980615	1~2mm程度の砂粒を含む 外縁：淡青褐色 内縁：淡青色 良好	口縫部残存率1/14
5	寄生 巣				内・外縁：ナデ? (巣底のため不規則)	1層 Pm.85 980723	1~2mm前後の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/8
6	寄生 巣				"		1~2mm前後の砂粒を含む 淡黄褐色 良好	口縫部残存率1/8
39	洞巣器 巣	18.7	35.3		外縁：田軒ナデ、ナデ、カキメ 内縁：ナデ	NE Pm.154 980515	1mm程度の砂粒を含む 外縁：淡褐色 内縁：淡褐色 良好	直状の把手(破損)
43-1	寄生 巣	17.9			外縁：ヨコナデ 内縁：ナデ、ヘラケズリ?	3号機場区2層 Pm. 33or.26 980424	1~2mm程度の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/5 断面図文4本
2	"	16.0			内・外縁：ヨコナデ	3号機場区2層 40. 980524	1mm弱の砂粒を含む 黄褐色 良好	口縫部残存率1/10 断面図文3本
3	"	18.3			外縁：ヨコナデ 内縁：ヨコナデ、ヘラケズリ?	3号機場区1層 Pm. No.154 980527	1mm前後の砂粒を含む 淡青褐色 良好	口縫部残存率1/14
4	"	18.3			外縁：巣底のため不規則 内縁：ナデ?、ヘラケズリ?	3号機場区2層 Pm. 69. 980424	1~2mm程度の砂粒を多く含む 暗褐色 良好	口縫部残存率1/6 断面図文3本
5	"	20.7			外縁：ヨコナデ 内縁：ナデ、ヘラケズリ?	3号機場区新作P. No.26 980521	1mm前後の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率1/6 断面図文4本
6	"	24.4			外縁：ヨコナデ 内縁：ヨコナデ、頭部以下巣底	3号機場区 美士1 980421	1mm程度の砂粒を含む 棕褐色 良好	口縫部残存率1/8 断面図文7本
7	"	18.3			外縁：ヨコナデ 内縁：ナデ、頭部以下巣底	1号機主体部取付 No.1 980724	1mm前後の砂粒を含む 淡青褐色 良好	口縫部残存率1/7 断面図文2本
8	埴輪				外縁：ナデ 内縁：ヘラケズリ	P-1号機場区2層 No.19 980421	1~2mm程度の砂粒を含む 外縁：暗褐色 内縁：淡褐色 良好	遺物残存率2/3 日本文あり
9	寄生 巣	9.8			内・外縁：ナデ	1号機場区2層 980430とか	1mm大の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縫部残存率2/3 日本文あり
10	"				外縁：ナデ 内縁：ヨコナデ	1号機場2層	1mm程度の砂粒を含む 棕褐色 良好	赤色顔料付帯 内面 に工具痕
11	寄生 巣	16.2			外縁：ヨコナデ 内縁：ヘラケズリ	HR 1層 Pm.292 980603	1mm程度の砂粒を含む 黄褐色 良好	断面図文1.5本
12	寄生 巣				"	3号機場1層 Pm. 147 980505	1~2mm程度の砂粒を含む 外縁：淡褐色 内縁：淡褐色 良好	成形痕跡孔
13	"				外縁：ナデ? 内縁：巣底	3号機場2層 980424	1mm程度の砂粒を含む 外縁：褐色 内縁：淡褐色 良好	
14	"	3.7			内・外縁：ナデ	3号機場区2層	1~2mm程度の砂粒を含む 棕褐色 良好	
44	洞巣器 巣				内・外縁：田軒ナデ	盒 3~3 1層 980702		クシ幅波状文

(単位: cm)

探査番号	種類	全長	頭部長 (刃部)	刃幅	刃部厚	出土場所・年月日	備考
42-11鉈		4.9	1.2	0.4	0.3	4号機場NE区1層横付近	
-2鉈		6.2	1.3	0.75	0.1	-0.3床面直上 取上No.1	
-3鉈		7	1	0.6	0.1	-0.3床面直上 取上No.2	
-4不明		3.2	3.2	1.15	0.3	0.3 S I - 0.3床面直上 取上No.3	
-5鉈某式鉈		5	5	2.25	0.5	S I - 0.3 P I t 2 頭	

第3節 II区の調査（第45図）

II区は、西へのびる丘陵の頂部から斜面にかけて設定した調査区で、標高は31m～44mである。分布調査の結果などから丘陵頂部には古墳の存在が推定されたほか、南側斜面でも性格不明の横穴が検出され、横口式炭窯が存在する可能性も考えられた。

検出した造構は、調査区西側の尾根頂部で古墳1基、南斜面から横穴墓6穴、炭窯と見られる造構1、北側斜面から横穴墓1穴を検出した。調査区内的最高所（標高約44m）についても、地形測量の段階では古墳である可能性があったが、調査の結果横穴墓の後背墳丘と判断した。造構の時期は古墳時代後期から奈良～平安時代と考えられ、遺物は須恵器を中心であるが、横穴墓の中には鉄鎌、耳環のはか人骨を検出したものも存在する。

尾根上及び南側斜面には山道が造成され、特に1号穴前庭部先端から炭窯と見られるSX-01前方にかけて斜面が削られ、地形が大きく改変されている。また、1号穴については、天井崩落のおそれがあつたため、玄室部の調査に入る前に天井部を重機で取り除いている。このため、1号穴周辺では、調査後の地形が本来のものと異なっている部分がある。

後背墳丘（第47図）

丘陵頂部東端に位置する高まりで、調査区内の最高所に立地しており標高は44mである。調査前は古墳と見られており、北東部と南西部が後世の地形改変で削られていた。トレント調査では主体部、周溝ともに検出されず、盛土も確認できなかつたため、一旦は自然地形と判断したが、その後南側斜面から2・3・6号穴が検出され、これらの横穴墓の後背墳丘である可能性が高くなつた。高まりの平面形は西側に前方部をもつ前方後円形にも見え、横穴墓もくびれ部付近に玄室が来るよう意識して掘削された可能性も考えられる。この高まりを人為的に加工した痕跡は明確には認められないが、横穴墓玄室のほぼ真上に当たる付近から須恵器の完形品などが出土していることも考慮し、後背墳丘と判断した。

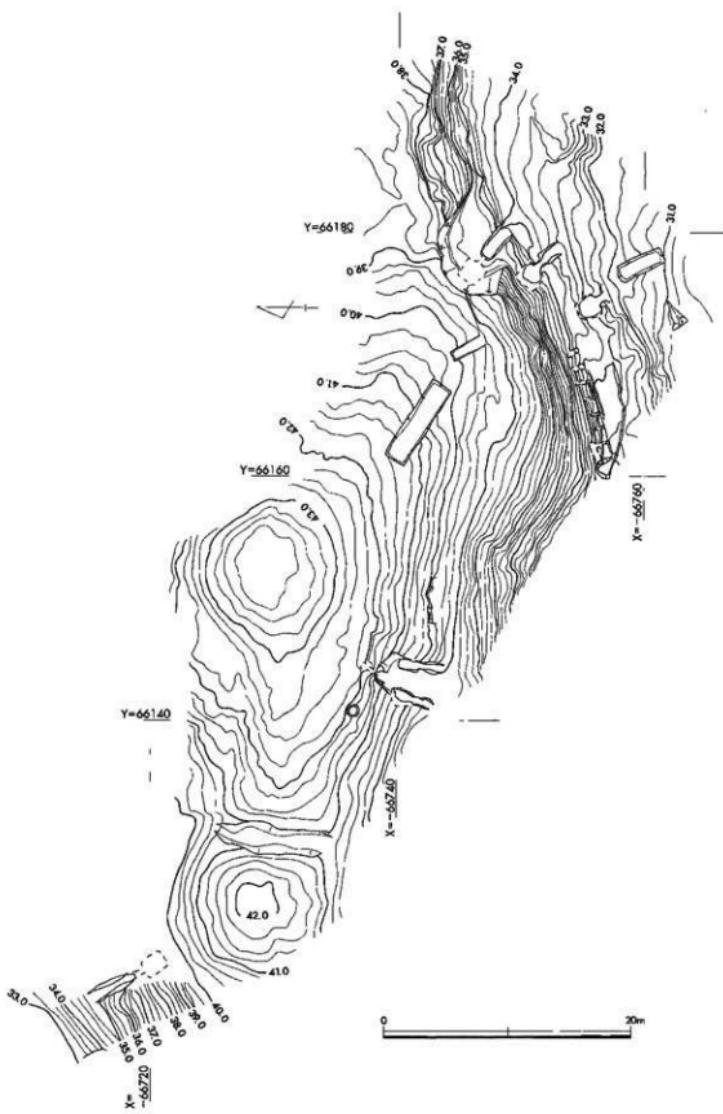
1号墳（第48図）

1号墳は、II区西端の丘陵頂部に位置する。墳頂での標高は42.5m、調査前の地形測量では、一辺約10m、高さ約1mの方墳で、主軸をほぼ南北にとるものと見られた。発掘調査の結果、墳丘規模は南北13m、東西9mの方墳で、高さは約1mであった。

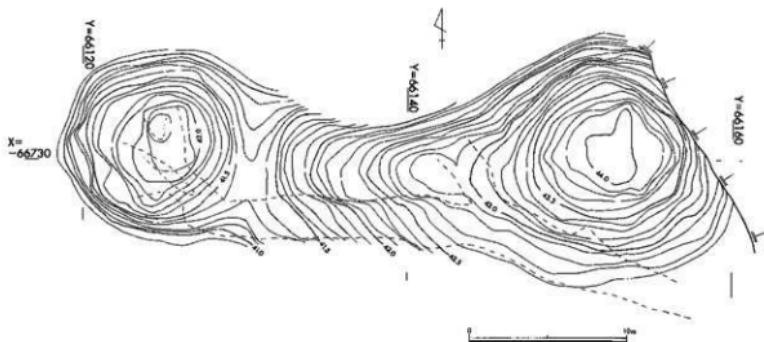
墳丘 墳丘は墳頂部から南側にかけて、後世に造られた山道により地形が改変され等高線が乱れている。西側の墳端は調査区外のため確認できなかつたが、東側では尾根に直交する上端幅0.7～2.5m、深さ約0.2mの浅い溝が検出された。北・南側の墳端も明瞭ではないが、わずかなテラス状部分があり、この付近を墳端と推定した。埋土の厚さは約30cmと薄く、多くは流出しているとみられた。主体部は検出できなかつたが、土層観察では墳頂部から墳丘西側にかけて旧表土と見られる黒色土層を検出している。（第48図 土層断面図のスクリーントーン部分）

出土遺物は、墳丘盛土から鉄製品を検出しているが、覆土が薄く攪乱を受けているため、確実にこの古墳に伴うものか明らかではない。上器・埴輪などは全く出土しなかつた。

なおII区の北側斜面でも横穴墓1基を検出し、これを7号穴としたが、7号穴の主軸は1号墳の墳丘に向かっている。1号墳は古墳と判断したが、主体部が検出できなかつたことから本来は7号穴の後背墳丘として構築された可能性も否定できない。



第45図 屋敷古墳群II区調査後地形測量図 ($S = 1 : 400$)



第46図 屋敷古墳群II区1号墳・後背墳丘調査前地形測量図 (S = 1 : 300)

1号穴 (第48図～第50図)

II区南側斜面の中腹に存在し、南東に開口する。ほぼ同じ標高で西側に4号穴、5号穴が隣接する。標高は前庭部で34mである。談道部の調査中に玄室天井付近に亀裂が見つかり、危険防止のため談道部から玄室にかけて天井部の上砂を重機で取り除いた後、玄室の調査を行った。これにより、談道天井部については一部状況を明らかにしえなかつたところがある。

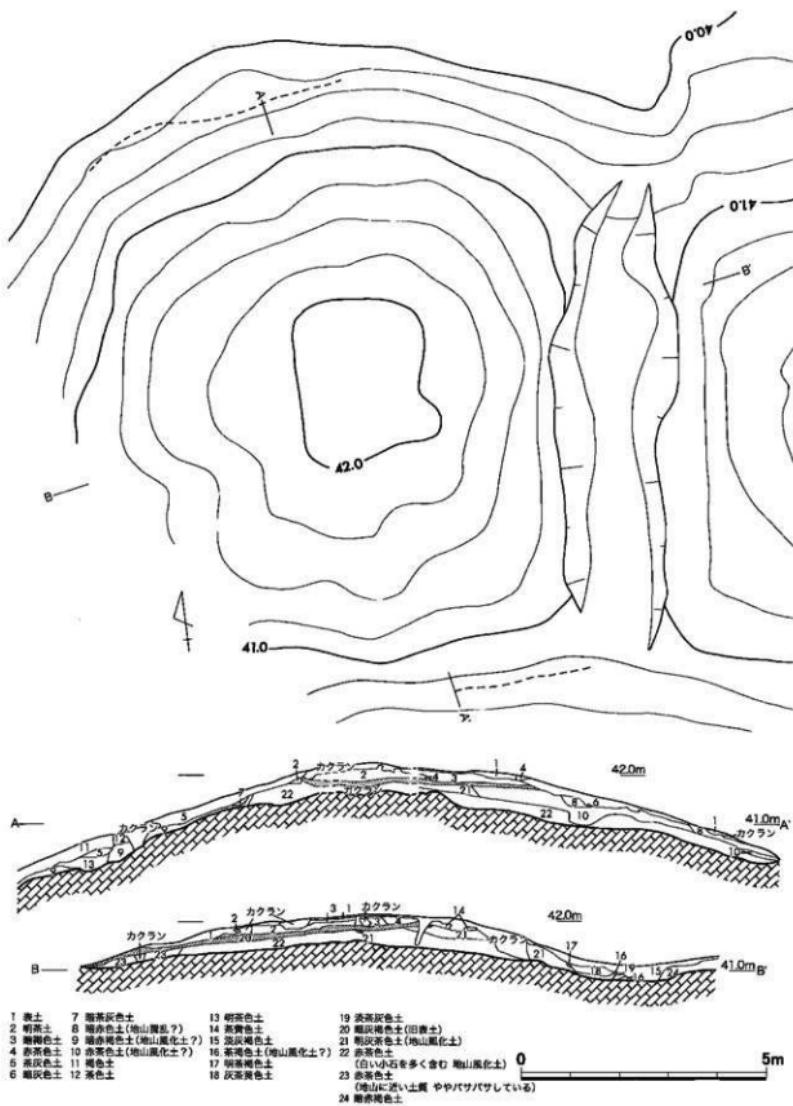
前庭部・談道部 先端付近を山道が通り、地形改変を受けているため前庭部と談道部の境界は明らかでないが、閉塞石か確認された付近から奥にかけては天井が部分的に残存しており、玄門の前方3m付近まではトンネル状の構造をとっていたと見られることから、この部分は談道部であったことが考えられる。この場合、談道部の規模は長さ3.4m、床面の幅0.9～1.1mで、ほぼ長方形の平面形である。さらに地形改変を考慮するならば、談道部の長さは4mを超える可能性もある。談道部の天井形態については崩落が激しく不明である。床面は、奥に行くにつれて徐々に高くなる。

また先端付近には、前方に伸びる幅40cmの溝をもつテラスが存在し、1号穴に伴うものであると考えられるか⁵、前庭部となるのか墓道となるのかは不明である。このほか、墓道東側斜面には幅20～30cmの溝、西側には一辺50cmの十坑が検出されたが、これらについては、地山が風化を受けやすい土質のため、人為的に掘り込まれたものかどうか確認できない。

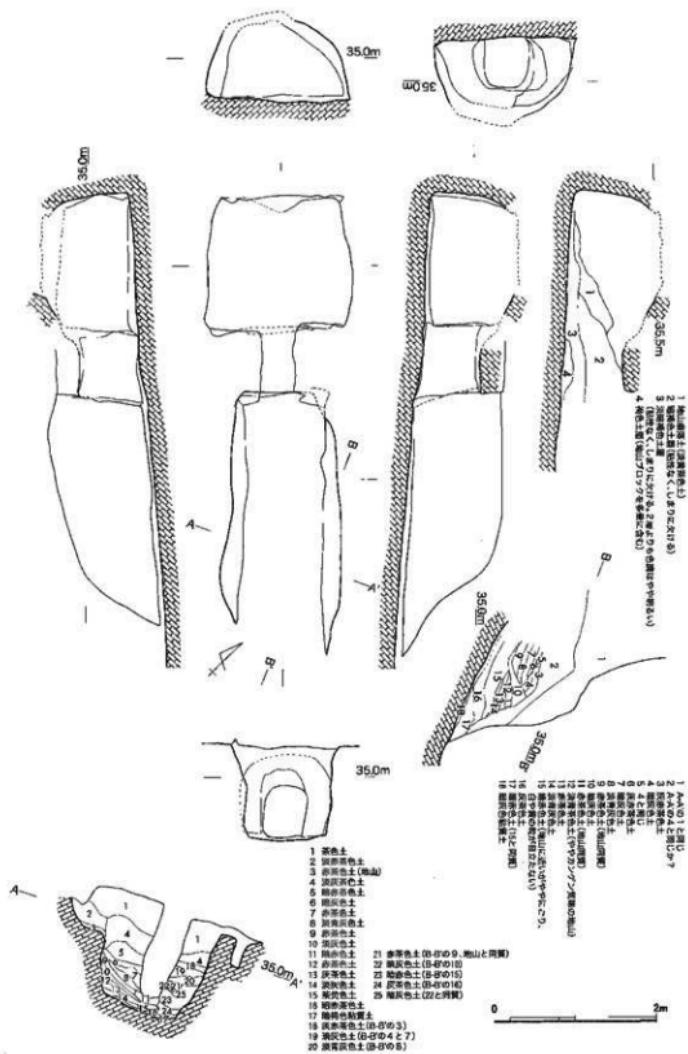
玄門部 長さ0.8m、幅0.4m、高さ0.7m～0.8mである。平面形は長方形で、床面は玄室側で高くなっている。天井部はやや丸みを帯びているが、棟線などは認められなかった。

玄室 玄室は奥行き1.6m、幅1.7m～1.5mで奥壁側がやや狭くなるが、正方形に近い平面形をとる。天井中央付近が崩落しているため正確な高さは不明だが、約1.2mと推定される。玄室形態は、前壁と奥壁は比較的垂直に近いのに対し、両側壁は内傾していることから妻入りのテント形である可能性があるが、詳細は不明である。

堆積状況 墓道、玄門は閉塞時の覆土や流入土でほぼ埋まり、玄室床面も流入土や崩落土でほとんど覆われていた。攪乱と見られる流入土を除去すると、土層はかなり細かく分層することができた。墓道から玄門までを通した土層観察ができなかつたため、検討は不充分であるが、初葬後再掘削が



第47図 屋敷古墳群II区1号墳墳丘測量図・土層断面図 (S = 1 : 100)



第48図 尾敷占墳群II区1号穴実測図 (S = 1 : 60)

複数回行われたことは明らかで、閉塞石の状態も考えると盜掘が行なわれた可能性もある。

閉塞状況（第49図）

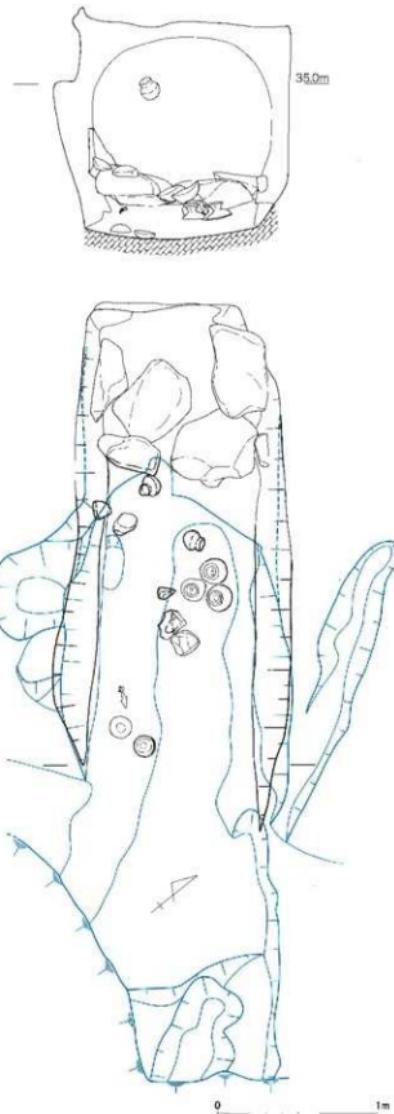
玄門部前方で、数点の石材が倒れた状態で検出された。いずれも自然石で加工した痕跡は認められなかった。閉塞はこれらの石材を積み重ねて行ったものと見られる。玄門には閉塞に伴う削り込みなどの加工は認められない。

羨道部遺物出土状況（第49図）

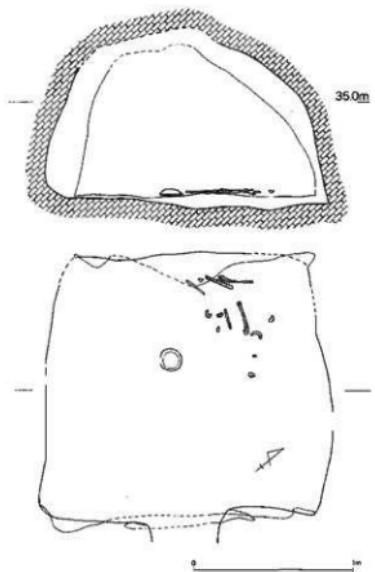
羨道部では、須恵器と鉄鏃、玄室内で須恵器と人骨が出土した。羨道部先端付近では床面近くから壺蓋と壺身、鉄鏃と茎がそれぞれ1点出土し、閉塞石の前方付近では高环3点と直口壺がまとまって検出された。高环は3点とも倒立した状態で出土しており、意図的に置かれていたことは明らかである。また、出土位置が床面であることから初葬に伴うものと考えられる。このほか、閉塞石前方の埋土中から直口壺1点が確認されている。

玄室内遺物出土状況（第50図）

玄室内では、中央やや奥壁寄りの床面で壺身1点を確認したほか、土砂に覆われていた右奥部で人骨が出土した。人骨の残存状態は悪く、天井からの崩落土や流入土の影響を受けなかつた骨だけが残存したものと見られる。分析の結果、被葬者は1体で、若年の女性であることが明らかになった。分析についての詳細は、第10章を参照されたい。



第49図 屋敷古墳群II区1号穴羨道部遺物出土状況
(S = 1 : 30)



第50図 屋敷古墳群II区1号穴玄室内遺物出土状況
(S = 1 : 30)

1号穴出土遺物（第51図・第52図）

第51図は須恵器である。3が玄室床面から、そのほかは墓道部からの出土である。1は壺蓋で、口径は12.3cmである。器壁が厚く、天井部と体部の境界付近の突帯が全く表現されないものである。2は壺身で、口径11.5cmである。かえりが短く内傾するものである。3も壺身でかえりが短いが、端部はやや上方に向く。1～3とも調整は回転ナデで、ヘラケズリの痕跡は認められない。4・5は、直口壺である。4は口径8.9cm、器高13.6cm、5は口径10.3cm、器高13.7cmである。いずれも体部の下位1/3程度をヘラケズリ調整するが、4はヘラケズリ後回転ナデを加えているようである。6～8は低脚の無蓋高壺である。6は、口径14.7cm、底径8.7cmで、7・8と比較するとわずかに小形である。また器壁が厚く、底面からII線部へ緩やかに立ち上がる壺部の形態も、7・8とは異なる。透かしはいずれも2方向1段であるが、孔の形状は6が方形、7・8は切り込み状である。

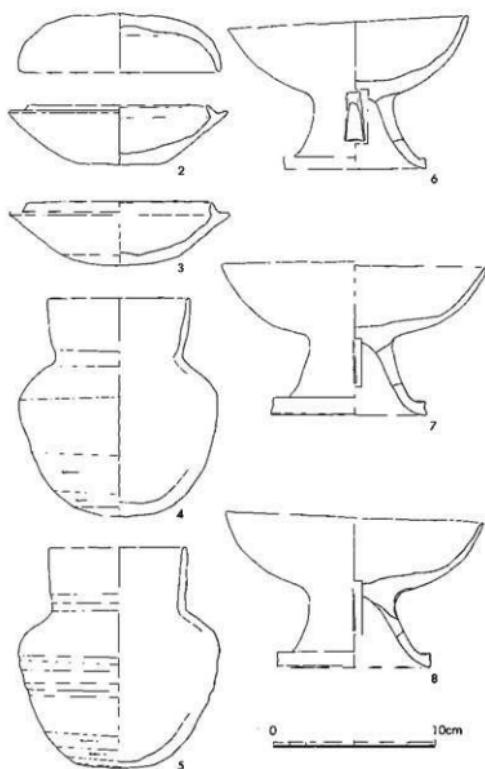
第52図は鉄鎌である。1は鎌身部の長さ7cm、幅が3.2cmと広身のものである。関の一部と茎の大部分が欠けており、木質は確認できない。三角形鎌群のB-I形式に分類される⁴⁾。2は茎の先端付近である。断面は長方形で、1と同一個体の可能性があるが、直接は接合しないため、確認できない。出土遺物の時期は、玄室内出土と墓道出土のものに時期差はなく、出雲5期～6期のものである。

2号穴（第53図・第54図）

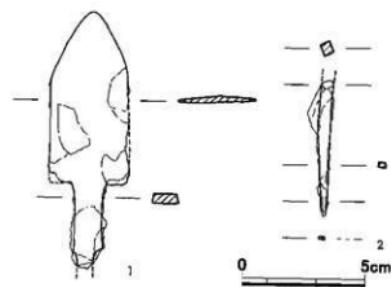
調査区内の最高所となる丘陵頂部の高まりを南西斜面に下った位置にあり、南西に開口する。標高は前庭部床面で39.5mで、今回調査した横穴墓の中では最も高い位置に掘り込まれている。検出中には、広大な前庭部をもつものと考えていたが、前庭部の側壁に接して3号穴と6号穴が検出され、この2基の横穴墓が壊されて前庭部がつくられていたことが明らかになった。

前庭部 2号穴前方の平坦な部分を前庭部と考えると、その規模は長さ3.1m、幅2.8m～3.6mとなる。前庭部の両側壁は2号穴、6号穴の側壁とほぼ重なるようにつくりだされている。また、横断面の上層堆積状況から、3号穴、6号穴が2号穴の前庭部掘削以前に存在していたことが確認された。

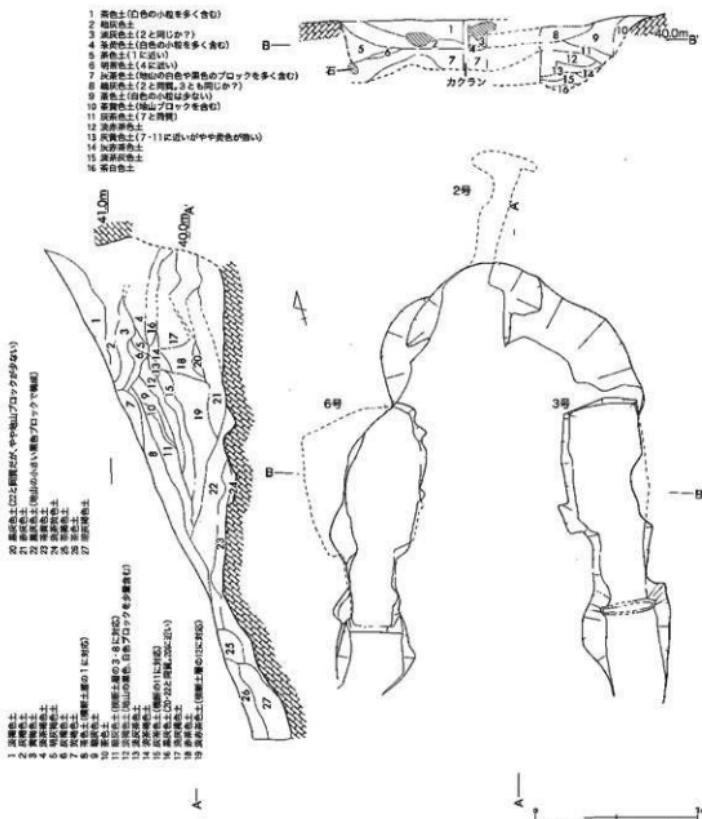
縦断面では22層上面などで再掘削が行われた可能性を示す面があるが、詳細は不明である。



第51図 屋敷古墳群II区1号穴出土遺物実測図(1) ($S = 1 : 3$)



第52図 屋敷古墳群II区1号穴出土遺物実測図(2) ($S = 1 : 2$)



第53図 屋敷古墳群II区2・3・6号穴位置図 (S = 1:60)

羨道部 長さ0.8m、幅0.7m~0.9mで、玄室側がやや狭くなる不整形な四角形の平面形を呈する。前庭部の中央よりかなり左側に寄った位置に掘削されている。

玄門・玄室 羨道部の左側に寄った位置から掘削される。主軸は東側に振られ、前庭部の軸とずれている。平面形は奥側が広くなるT字のような形をとり、長さは1.7m、幅は羨道部側で0.3m、奥側の広い部分で0.8mである。高さは羨道部側で1.2m、奥壁沿いでは0.2mとなる。閉塞のための溝や掘りこみ、閉塞石などは検出されなかった。また、内部には流入土と見られる土砂が天井まで堆積していた。

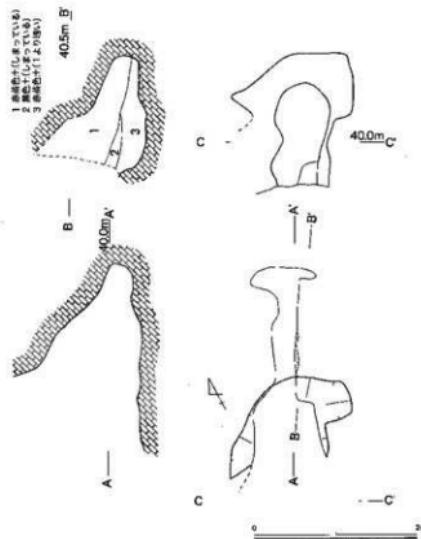
後背墳丘（第55図）

調査終了後の2・3・6号穴と後背墳丘との位置関係を示した。高まりの頂部は標高約44mで、2号穴前庭床面との標高差は4mである。2号穴の主軸が東へ振られているのは、高まりの頂部を

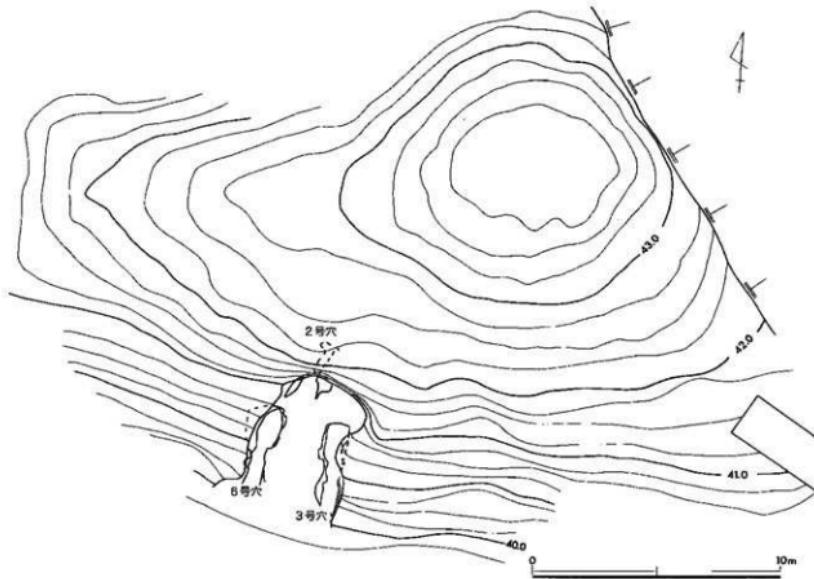
意識している可能性もある。

遺物出土状況（第56図）

2号穴の狭道部、玄門玄室からは遺物は出土しなかったが、周辺及び前庭部からは多量の須恵器片が確認された。これらの多くは前庭部の前側、特に前庭部先端から斜面に傾斜が変わる付近に集中している。床面から出土したもののはほとんどないが、土器片を接合した結果、壺身1点、大甕4点を復元することができた。なお、平面図で3・6号穴上にも須恵器片の出土上を示す点があるが、いずれも2号穴前庭部埋土中からの出土で、3・6号穴に伴うものではないと見られる。



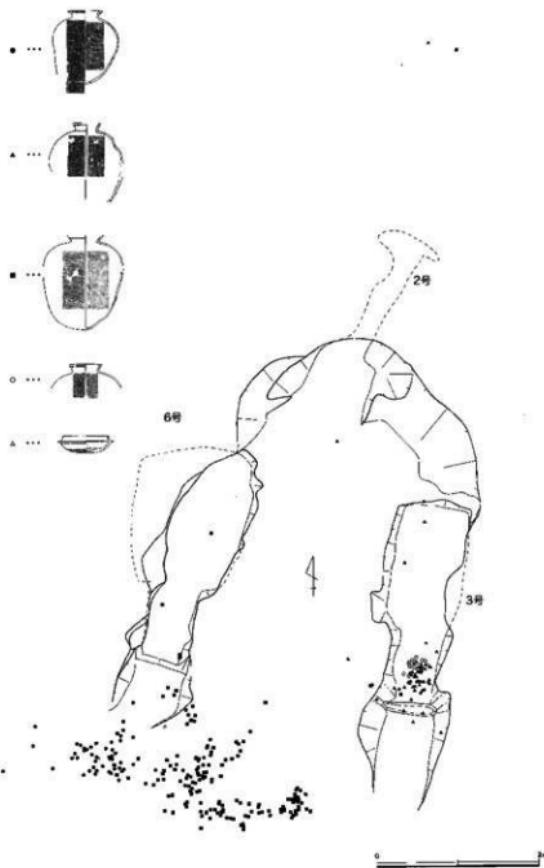
第54図 屋敷古墳群II区2号穴実測図 ($S = 1 : 60$)



第55図 屋敷古墳群II区後背墳丘測量図 ($S = 1 : 200$)

2号穴前庭部出土遺物（第57図）

1は壊身で、口径11.0cm、器高4.3cmである。外面底部付近は回転ヘラケズリで調整される。2～5は大型である。口縁部、体部ともゆがみがあるものが多く、底部が割れており器として用を成さないものもあった。口縁部は外面に面をもち、複合口縁状を呈する。口径は2が19.8cm、3が22.0cm、4が16.4cm、5が21.4cmである。器高は3が58.1cmであるが、ほかは底部付近を復元できなかったため不明である。時期を推定できる遺物が壊身しかないので詳細は不明であるが、およそ出雲4期～5期と考えられる。



第56図 屋敷古墳群II区2・3・6号穴周辺土器片分布状況 (S = 1 : 60)

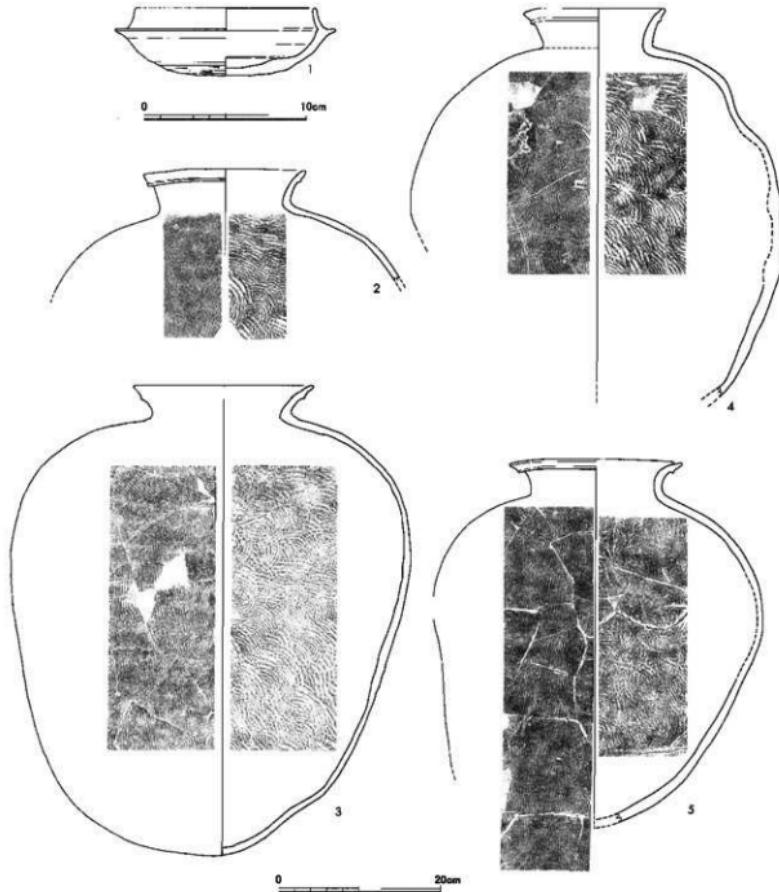
3号穴（第58図）

2号穴前庭部の右側壁沿いで検出された小規模な横穴墓で、標高は墓道床面で約39mである。2号穴前庭部の掘削に伴い、右側壁上部から天井部、左側壁の大部分を失っている。横穴墓と認識したのは、半分以上掘り下げた後だったため、墓道の土層堆積状況は不明である。

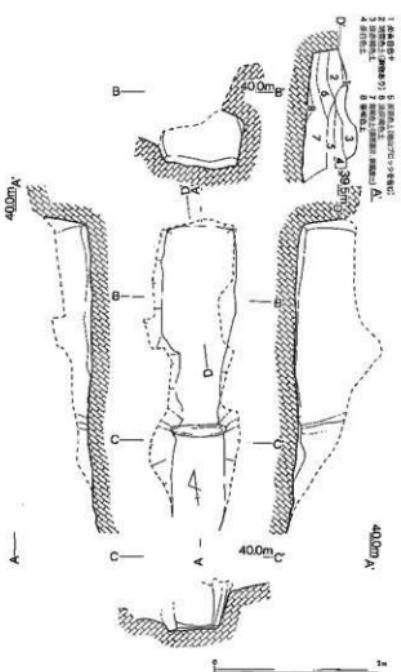
墓道 長さは検出時で1.2m、幅は0.6mで平面形は長方形である。床面はほぼ水平で玄門に至る。

玄門 長さ1.0m、幅0.5mである。墓道との境界付近の床面から側壁にかけて、閉塞用のものとみられる幅10cmの浅い掘り込みがあるが、閉塞石などは認められなかつた。

玄室 床面で長さ1.6m、幅0.9mである。玄門と玄室との境界が不明瞭で、左側壁では鈍角ながら



第57図 屋敷古墳群II区2号穴前庭部出土遺物実測図
(1のみS=1:3 2~5 S=1:6)



第58図 屋敷古墳群II区3号穴実測図 (S = 1 : 60)



第59図 屋敷古墳群II区3号穴出土遺物実測図 (S = 1 : 2)

角をもつが、右側壁では玄門から玄室へ緩やかにつながり、徳利形ともいべき平面形である。玄室形態は大井部のほとんどが失われ、軒線なども認められないため、不明である。

堆積状況 墓道から玄室まで完全に土砂が堆積していた。2号穴前庭部の掘削に伴うのは3~5層で、その他はそれ以前の堆積と考えられるが、どの層がこの横穴墓に伴うのかは明らかにできなかった。

3号穴出土遺物（第59図）

墓道の埋土から出土した刀子で、刀身の一部と茎である。前庭部の土層は不明だが、出土位置から7層中から出土したものと推定した。現存長は7.7cmで、鍔金具が認められる。茎の断面は四角形を呈する。

6号穴（第60図）

2号穴前庭部の左側壁沿いで検出された小規模な横穴墓で、規模・形態とも3号穴に酷似する。2号穴前庭部主軸線で3号穴と対称の位置にあり、2号穴前庭の掘削で右側壁から

天井部にかけて失われている。床面の標高は約38mである。

墓道 幅、長さとも0.7mと規模が小さく、西側に湾曲している。床面は玄門に向かって高くなる。

玄門 長さ1.0m、幅0.5m~0.6mで墓道床面より10cm高くなる。この段の法面から側壁にかけて面取りされているが、これは閉塞用の加工と見られる。

玄室 長さ1.6m~1.8m、幅1.0m~1.3mで奥壁側が広く台形に近い平面形である。玄門と玄室の境界は3号穴と異なり明瞭である。天井部の右側約1/2を欠くため玄室形態は不明である。

堆積状況 6号穴も完全に埋没しており、2号穴前庭部掘削による影響を受けていると見られるが、どの層が掘削時の埋土かは明らかにできなかった。

玄室内遺物出土状況（第61図）

玄室内から須恵器の蓋坏、壺片が出土している。蓋坏は蓋と身が4点ずつ検出され、床面直上もしくはそれに近い位置にあったことから、この横穴墓に伴なうものと考えられる。

6号穴出土遺物（第62図）

1～4は坏蓋、5～8は坏身である。1は口径10.1cm、器高3.1cmで、他の3点と比べて器壁が厚く小ぶりである。天井部と体部の境界付近は沈線のみで、口縁端部にも浅い沈線を巡らせる。2・3は天井部と体部の境界付近に2本の沈線を入れ、口縁端部に浅い沈線を巡らすなどよく似る。口径は2が13.0cm、器高4.3cm、3が口径12.3cm、器高4.1cmである。4は突帯が明瞭に表現され、口縁端部がやや鋭くなるもので口径11.1cm、器高4.1cmである。いずれも天井部付近は回転ヘラケズリが施され、1と4は天井部外面にヘラ記号をもつ。

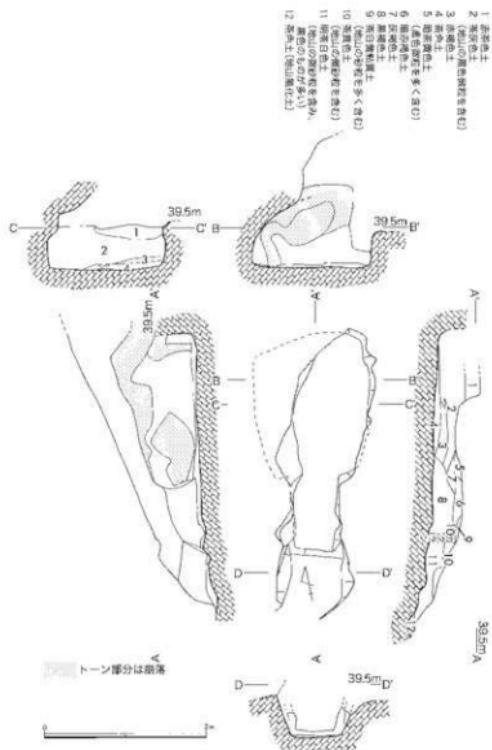
5～8は坏身で、6と8には焼き歪みがある。5は口径11.6cm、器高4.1cmで、立ち上がりは短く外湾する。6は口径11.6cm、器高4.1cmで立ち上がりは直線的に伸びる。7は口径10.7cm、器高4.5cmで、立ち上がりが大きくな内傾する。8は本来6に近い器形と考えられるが、歪みのため口径は8.9cm、器高4.2cmとなっている。調整は底部付近にヘラケズリを施すものが多いが、8にはヘラケズリは認められず回転ナデ仕上げる。遺物の時期は出雲4期と考えられる。

4号穴（第63図）

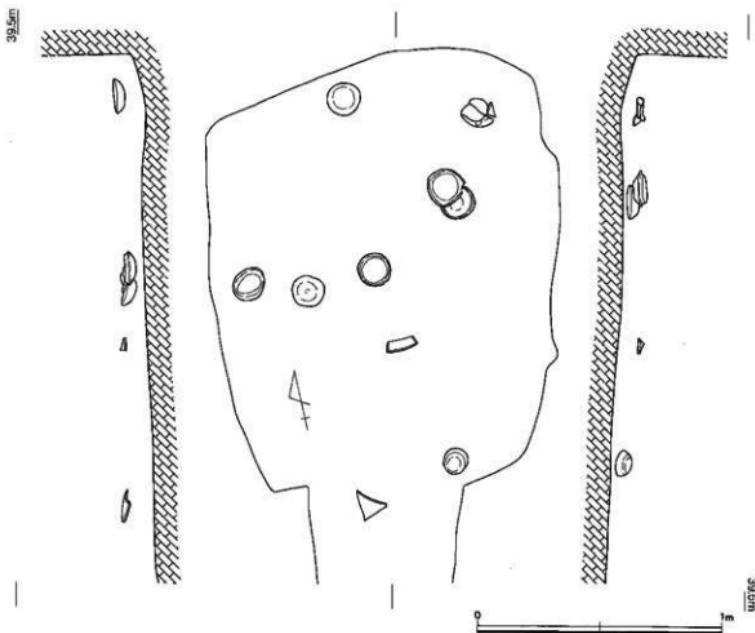
4号穴は、調査区東部の南側斜面に開口し、1号穴の南西4mに位置する。この横穴墓の調査開始直前に、玄門から玄室天井部にかけて天井部が落盤した。標高は墓道床面で約33mで、開口方向は南東である。

墓道 幅1.3m前後で、玄室に対して軸が西へ振れているものと見られるが、ほとんどが失われているため詳細は不明である。

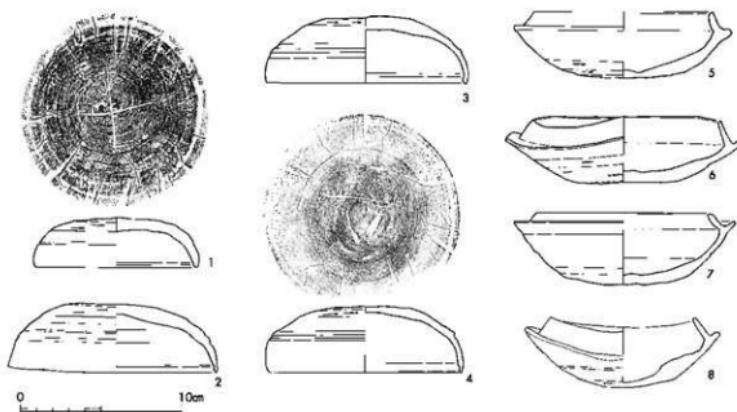
玄門 長さ0.7m～0.9m、幅0.7mで、墓道との境界付近



第63図 屋敷古墳群II区 4号穴実測図 (S = 1 : 60)



第61図 屋敷古墳群II区6号穴玄室内遺物出土状況 ($S = 1 : 20$)



第62図 屋敷古墳群II区6号穴出土遺物実測図 ($S = 1 : 3$)

に閉塞用の掘り込みをもつが、閉塞石などは認められなかった。玄室にかけて浅い掘り込みが存在する。

玄室 長さ1.8m、幅1.7m～1.5mで、奥壁側がわずかに幅狭となるが正方形に近い平面形である。玄門から玄室中央付近にかけて、幅20cm～60cmの浅い溝状に掘り込むことで、玄室奥壁側と両側壁側を一段高くし、簡単な屍床としている。界線は比較的明瞭であるが、天井が崩落したため玄室形態は不明である。なお、この横穴から遺物は出土していない。

堆積状況 墓道から玄室まで地山ブロックを多量に含む土が堆積していた。この層は分層できなかったことから、調査前の落盤による堆積土と考えられる。

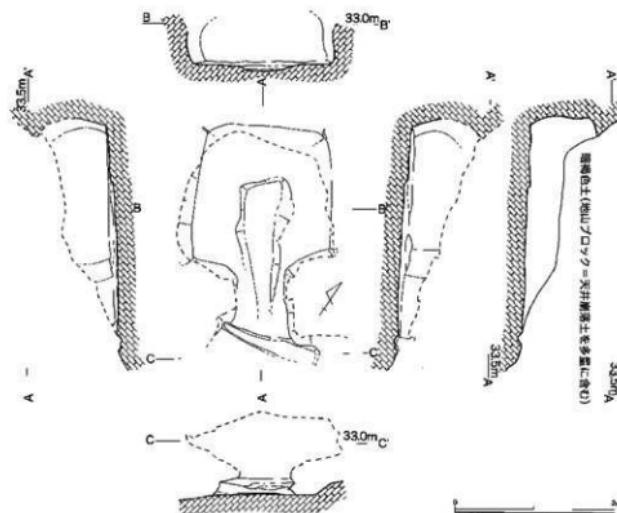
5号穴（第64図）

4号穴の南西約6mに位置し、南東に開口する。標高は約33mで今回検出された横穴墓の中で最も低い位置にある。玄門から玄室中央にかけて天井が崩落しており、規模、形態は4号穴に近い。

墓道 先端部は山道により失われているが、現状で床面の長さ1.0m～1.7m、幅0.7m～0.9mで、先端に行くにつれて南側に曲がっていく。床面はほぼ水平である。

玄門部 玄室前壁までの距離が左右で異なり、玄門部の長さは右0.7m、左1.2mとなる。幅0.4mであるが、墓道側では0.8mまで広がる。床面はほぼ水平で、墓道との境界付近では床面に閉塞用の掘り込みをもつ。天井形態は崩落のため不明である。

玄室 玄室の長さは左側壁沿いで1.6m、右側壁沿いで2.1mと大きな差がある。幅は2.0mで前壁側と奥壁側とで差はない。玄室床面は両側壁側が1段高く、奥壁側はそれよりさらに1段高くなり、屍床を意識した造りになっている。界線は比較的明瞭だが、天井崩落のため、玄室形態は不明である。



第63図 屋敷古墳群II区4号穴実測図 (S = 1 : 60)

る。また、右側壁側には板状の石を積み重ねて石床を設けている。石の厚さは最大20cmで極端に厚いものはないが、風化が著しく削石に加工したものかどうかは確認できなかった。

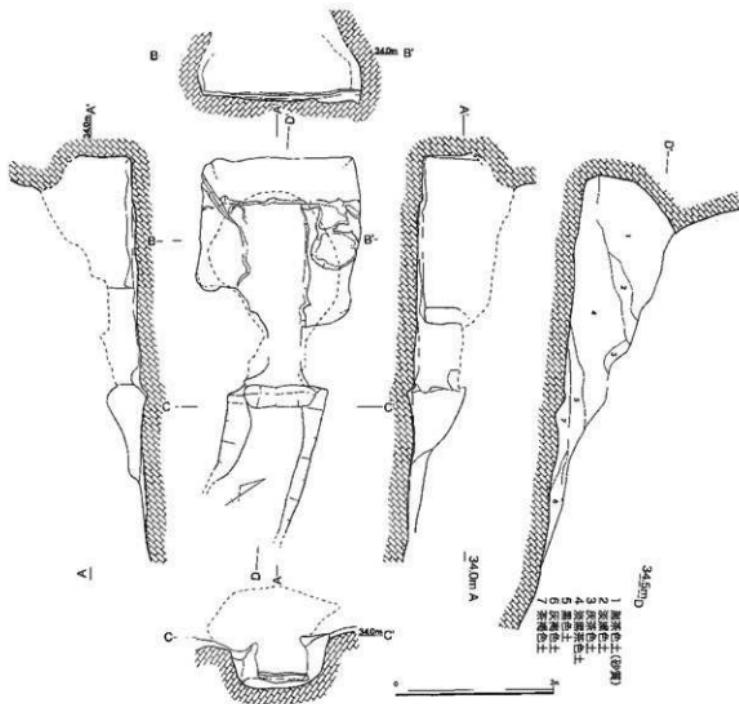
堆積状況 天井崩落などにより、玄室内まで完全に土砂が堆積していた。これらは8層に分層できるが、追葬や盜掘、崩落に伴う層がどの層かを明らかにすることはできなかった。

遺物出土状況（第65図）

石床の上面から須恵器の壺蓋、壺身各1点と耳環が2点出土している。これらは、出土位置から石床への埋葬に伴う可能性が高い。このほか玄室内の4層中から高壺が出土している。

5号穴出土遺物（第66図・67図）

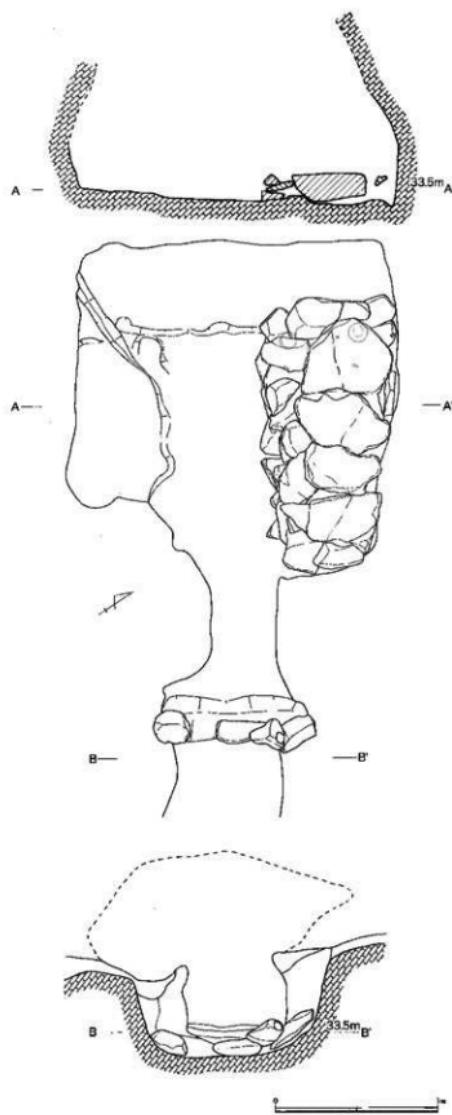
1は壺蓋で、口径は11.5cm、器高3.1cmである。外面の突帯は表現されず、口縁端部も丸くおさめられ、沈線などは施されない。調整は、ナデと回転ナデのみである。2は壺身で、口径10.0cm、器高4.1cmである。立ち上がりは短く、底部付近は回転ヘラケズリ調整が施される。また、底部外面には「×」字状のヘラ記号をもつ。3は高壺で、口径8.8cm、器高8.6cmの脚部が短くなるものである。壺部外面には3本の沈線が巡る。脚部には切り込み状の透孔が3方向に入り、端部は肥厚し



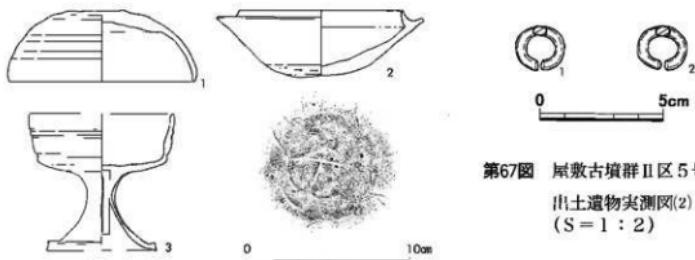
第64図 屋敷古墳群II区5号穴実測図 (S = 1 : 60)

て外面に面をもつ。第67
図は耳環である。1、2
とも長径2.0cm、短径1.8
cmで、断面形は隅丸長方
形となる。

遺物の時期は、蓋坏の
特徴などから平安5期と
考えられる。



第65図 屋敷古墳群II区5号穴閉塞石・屍床・遺物検出状況
(S = 1 : 30)



第66図 屋敷古墳群II区5号穴出土遺物実測図(1)
(S = 1 : 3)

7号穴 (第68図)

II区の北側斜面で唯一検出された横穴墓である。北西に開口し、標高は墓道床面で約35mである。先述したとおり主軸は1号墳に向かっている。なお、工事中の発見であったため、玄室天井の一部が失われている。

墓道 長さ3.4m、幅0.7m～1.0mと比較的狭長で、玄門部側がやや幅狭となる長方形の平面形を呈する。床面はほぼ平坦である。

玄門部 長さ1.7m、幅0.5mで、高さは約1mと考えられる。床面は墓道よりも20cm高くなり玄室に向かって徐々に高くなっていく。墓道との境界付近には浅い掘り込みが認められ、閉塞用の施設と見られるが、閉塞石などは検出されていない。また玄門部入り口は上端が下端より狭くなり、正面からみると台形である。天井部は残存部の状況から平坦なものと推定される。

玄室 長さ1.8m～2.1m、幅1.5mで平面形は縦長の長方形に近いが、左側壁が右側壁に比べ短く、軸が墓道～玄門部より東に振る。床面は平坦であるが奥壁に向かって徐々に上っており、奥壁沿いでは前壁沿いより20cm程度高くなる。天井形態は、中央付近が失われているが軒線が比較的明瞭に残っており、妻入りの家形と推定される。

堆積状況 墓道と玄門部の境界付近にある12層は、その位置などから閉塞に伴う埋土ではないかと考えられる。なおこれを切って玄門部に堆積している5、7、13層については、天井からの崩落上である可能性が強いが、詳細は不明である。

墓道遺物出土状況 (第69図)

墓道では、埋土中から土師器の壺、須恵器の高杯、短頸瓶が出土した。いずれも埋土の中でも高い位置からの出土で、この横穴墓に伴なうものかどうかは明らかではない。

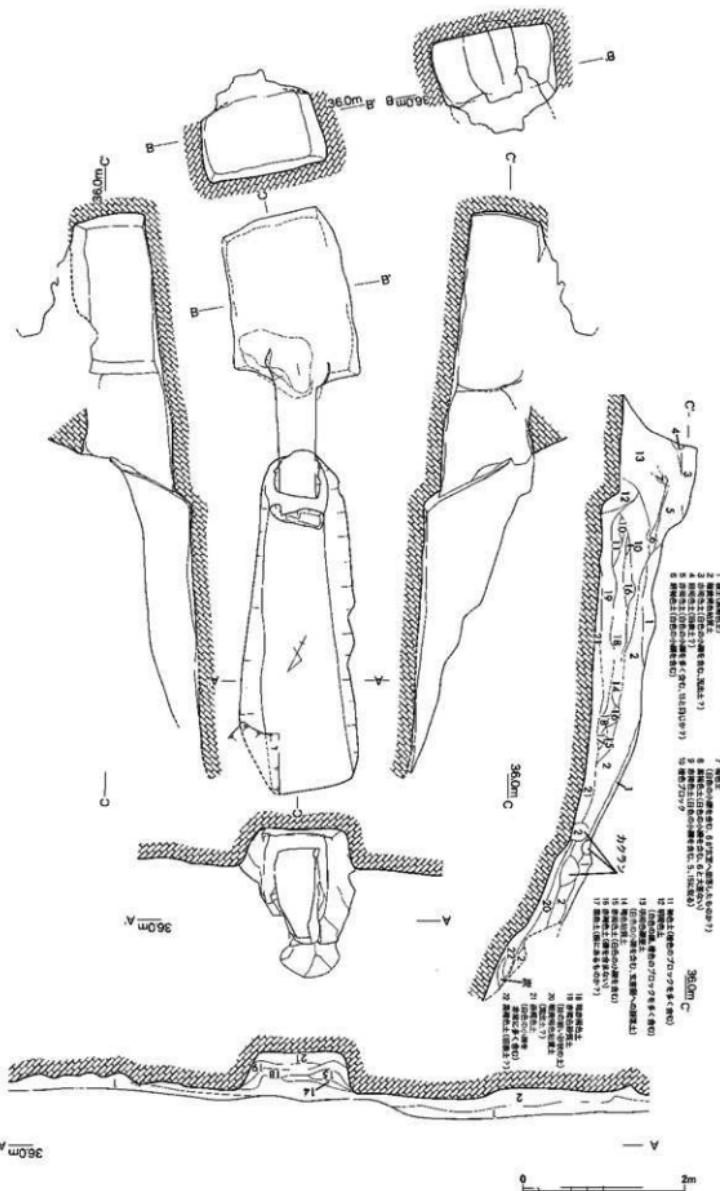
玄室内遺物出土状況 (第70図)

玄室内からは床面で須恵器、刀子のほか人骨が出土した。須恵器の壺身1点が玄室入り口付近で検出されたほかは、いずれも玄室右側の奥壁沿いからの出土である。人骨についての詳細は第10章を参照されたい。

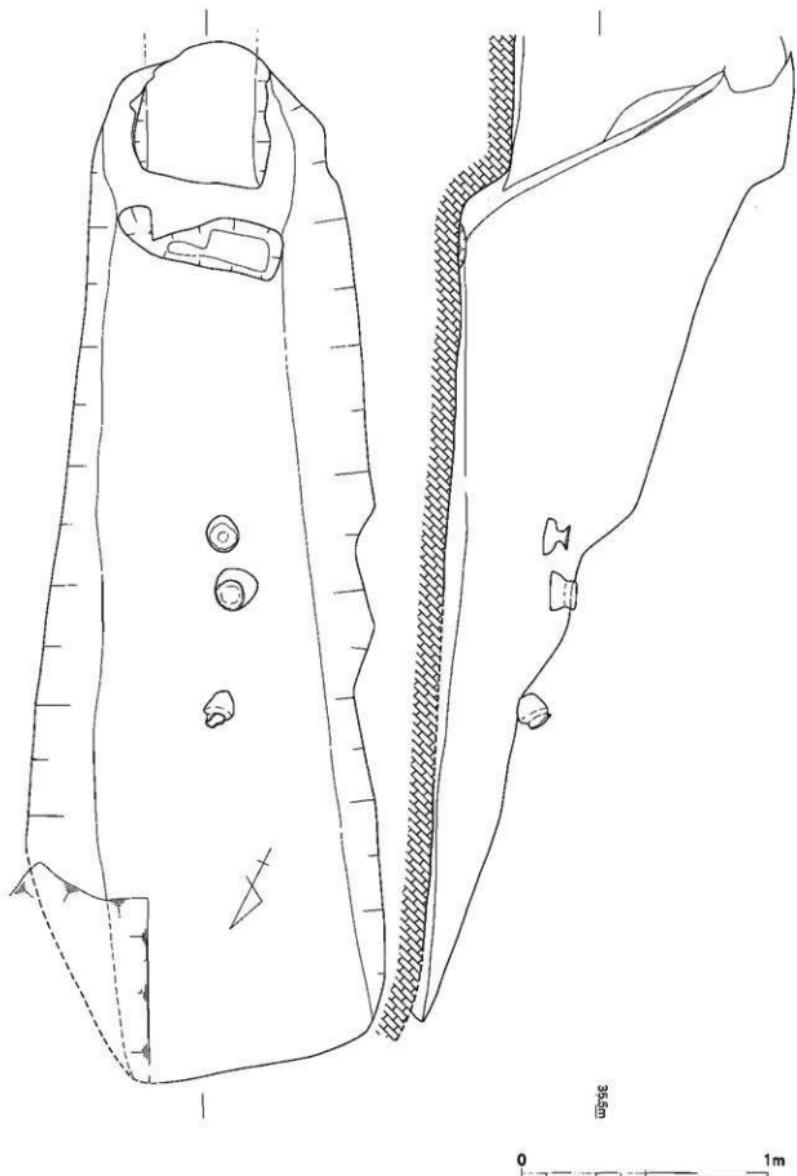
7号穴出土遺物 (第71図～第73図)

第72図は墓道から出土した遺物で、1は土師器壺の頸部付近である。内面頸部以下にヘラケズリが認められる。2は須恵器の高杯であるが、焼成が不良で風化が著しい。口縁部と脚端部を失なつ

第67図 屋敷古墳群II区5号穴
出土遺物実測図(2)
(S = 1 : 2)

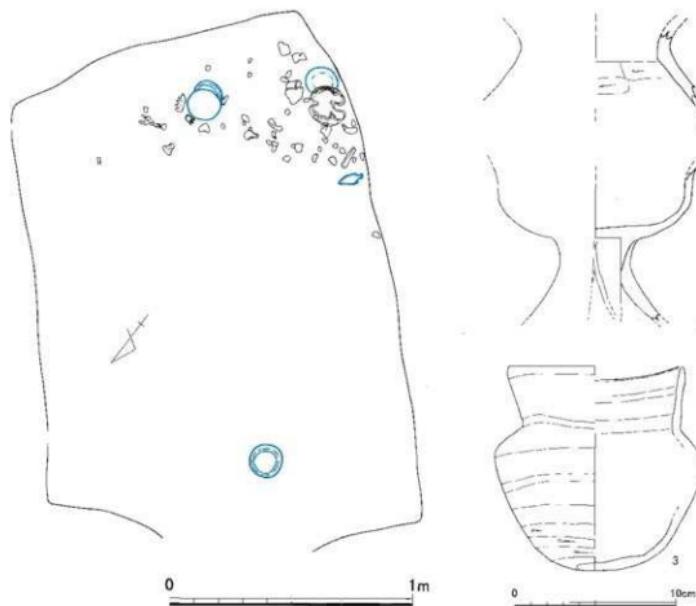


第68図 屋敷古墳群II区7号穴実測図 (S = 1 : 60)



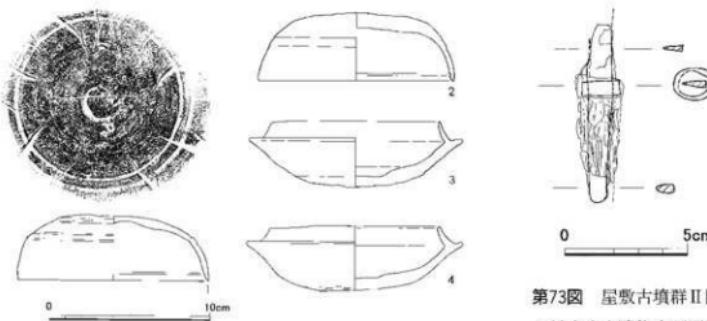
第69図 屋敷古墳群II区7号穴前部立面図・断面図 (S = 1 : 20)

ており口径等は不明だが、三角形透かしを2方向にもつものである。3は須恵器の直口壺で焼き歪みがある。口径10.8cm、器高12.8cmで、外面底部付近は回転ヘラケズリが施される。第73図は玄室内出土の須恵器で、1・2は壺蓋、3・4は壺身である。1は口径11.8cmで、外面の突帯は2本の



第70図 屋敷古墳群II区 7号穴遺物出土状況 (S=1:20)

第71図 屋敷古墳群II区
7号穴出土遺物実測図(1)
(S=1:3)



第72図 屋敷古墳群II区 7号穴出土遺物実測図(2) (S=1:3)

第73図 屋敷古墳群II区
7号穴出土遺物実測図(3)
(S=1:3)

— 57 —

沈線で表現され、口縁部内面には沈線を施す。回転ヘラケズリは外面天井部付近にのみ認められる。2は口径12.1cmで、器形は1に近いが、沈線が浅く不明瞭になる。調整はナデと回転ナデのみが施される。3は口径10.4cmで、調整は回転ヘラケズリを施さず、ナデで仕上げるものである。4は口径10.7cmで器形は3に近いが、底部付近にヘラケズリが施される点が3と異なる。

第74図は刀子の茎部で、現存長7.2cmである。刃部のほとんどを欠くが、鍔金具、木質が残っている。

遺物の時期は72-3が出雲4期に、73図の須恵器が出雲4期～5期に相当すると考えられる。

SK-01 (第74図)

丘陵頂部からやや南に下った緩斜面で検出した土坑で、検出面の標高は約42mである。平面形はほぼ円形で、径1.6m、深さ0.7m～1.2mである。周間にこれに関連するような土坑、ピットは存在せず、遺物も出土しなかったため土坑の時期・性格は不明である。

SX-01 (第75図)

南側斜面の中腹、丘陵頂部から約10m下った急斜面で検出した遺構で、標高は32m～34mである。形態から掘削途中で放棄された横口式炭窯と見られ、焚き口と横口7個を確認した。焚き口、横口とも地山を掘り込んでつくられている。なお、煙道に相当するものは検出できなかった。

焚き口は幅1.0m、奥行き1.5mで、前端から約1m付近に燃焼部に相当するトンネルが掘られている。トンネルは床面で幅0.5m、高さ0.5m～0.8mで2m掘り進んだ所で止まっており、焚き口に最も近い横口とつながっている。トンネル床面は焚き口より約10cm高くなる。

横口は1.1m～1.5mの間隔を置いて掘り込まれる。横口は地山の風化もあり不整形だが、幅30cm～50cm、高さ20cm～40cmで、焚き口とつながる1個以外は約1m掘り進んだところで止まって

- 1 地山の土（地山に近い土質で他の層よりしきっている）
- 2 焚き口（窯か？）
- 3 指示標高（土よりやや高い、バババしている）
- 4 明治時代（2と3の窯の跡がある。十葉はに近い）
- 5 埋め立（）
- 6 番号（小さな木製のブロックや鉛を含む）

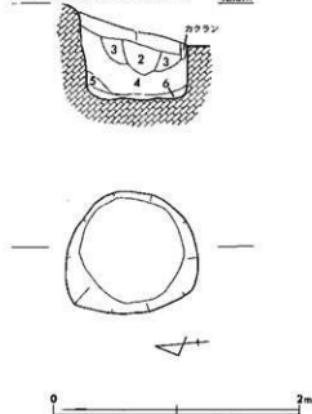
いる。横口の床面は焚き口から遠くなるほど標高が高くなり、焚き口床面と東端横口床面では1.3mの差がある。横口の前方は、一部に幅20cmの狭いテラスが認められるほか傾斜が非常に緩やかになる部分が存在する。ただこの付近は山道が走っていた部分であるため、これらがどの程度まで炭窯に伴うものかは不明である。この遺構に伴う遺物は出土していない。

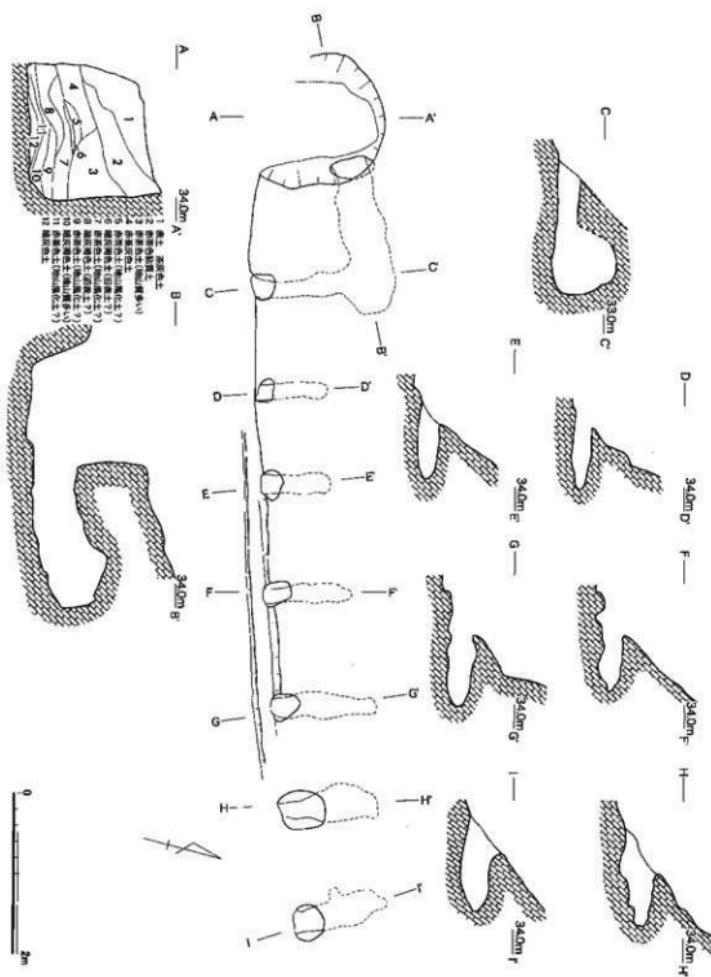
後背墳丘・遺構外出土遺物（第76図）

1は直口壺で、体部下半に回転ヘラケズリを施すものである。2は口縁部で口径8.4cmであるが、器種の詳細は不明である。3は壺身の口縁部付近で、口径9.3cmである。4は大形の壺ないし椀と見られる。底部には高台がつき、回転ナデ調整を施す。5は平瓶の破片で、口径12.8cmを測る。

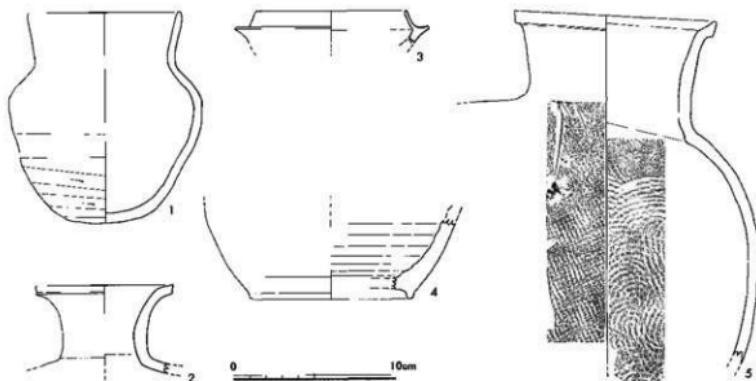
遺物の時期は出雲3期以降と見られる。

第74図 屋敷古墳群II区 SK-01 実測図
(S = 1 : 40)





第75図 屋敷古墳群II区SX-01実測図 (S = 1 : 60)



第76図 屋敷古墳群II区後背埴丘・遺構外出+遺物実測図 (S = 1 : 3)

第4節 小結

1. 穫穴住居跡について

竪穴住居跡は計3基検出した。

時期を考えてみると、出土遺物が少なく断定はできないが、SI-02(草田1期)→SI-01(草田3期)→SI-03(草田4期)という順になる。切り合い関係からSI-02→SI-01となるのは確かである。なお、平面プランはどれも圓丸方形であるが、SI-02の方が丸く、SI-03の方が方形に近くなっている。

穴道町内では、弥生時代の集落遺構の検出件数が少なかったことから、当遺跡は弥生時代後期前半から後半までの一連の集落のあり方を考える上で重要な遺跡となった。とくに低地における弥生時代の集落遺構は皆無に等しく、また、宍道湖近くにある遺跡としても隣接する北ヶ山遺跡とともに重要な位置にある。

北ヶ山遺跡の竪穴住居跡は出土遺物から草田3期と考えられ、当遺跡と時期が重複することから一体の集落であったと考えられる。

他に特筆すべきことは、当地域における外周溝である。北ヶ山遺跡の竪穴住居跡にも外周溝が確認されており、その時期はいずれも草田3期である。他の時期の竪穴住居跡からは確認されていないことから、当地域での草田3期の特徴であったことがうかがえる。なお、いずれも当集落内では比較的大規模な住居址であり、草田3期に当集落が最も発展したとも思われる。

ただし、宍道湖南岸低地における弥生時代集落のデータが少なく、また、集落に伴う墓が確認されておらず、今後の資料の増加を待って再度検討すべきである。

2. 横穴墓について

横穴墓は計7基を検出した。横穴墓の位置関係や形態から考えると、北側斜面で検出した7号穴は単独で存在し、3号穴と6号穴、4号穴と5号穴がそれぞれ群を構成していたと見られる。1号穴については4・5号穴に近接するが、淡道部や閉塞施設の構造が異なるため、4・5号穴とどの

のような関係にあったかは検討を要する。2号穴は3・6号穴に後出しし、構造も異なることから群を構成するものではないと考えられる。

横穴墓の玄室形態については、犬井部が崩落しているものが多く詳細は不明だが、平面形でみると3号穴、6号穴は小規模な縱長方形を呈する。1号穴、4号穴、5号穴は両側壁の長さが異なり、奥壁が幅狭になるなど不整形であるが、基本的には正方形を指向しているのではないかと考えられる。7号穴は縱長長方形で、妻入りの家形と見られることは先に述べたとおりである。次に、横穴墓の時期について見る。出土した須恵器から、6号穴が最も古く出雲4期と考えられ、7号穴が出雲4～5期、5号穴が出雲5期、1号穴が出雲5～6期に相当する。2号穴は、前庭部から出土した須恵器が2号穴の時期を示すとすると出雲4～5期である。

これらをまとめると、屋敷古墳群においては出雲4期では横穴墓の玄室平面形は縱長長方形で、出雲5期には縱長長方形と正方形指向の両方を造っていると言えることができる。この時期、出雲東方東部では石棺式石室の影響を受け、平入りの整正家形で平面形が正方形ないし横長長方形の玄室をもつ横穴墓が造られるようになるとされる⁵。II区1・4・5号穴もこの影響をうけて正方形の玄室プランを指向したのではないだろうか。

一方、宍道町内に所在する横穴墓で土に穿たれたものは40基近いが、平入りであることが確実なもののは2例しかない⁶。屋敷古墳群の横穴墓も全て土に掘られたもので、妻入りとなる可能性が高く、玄室平面形と玄室形態が関連を持つことは考えにくい。

宍道町では時期が明らかになっている横穴墓が少なく、玄室の形態によって出雲西部や山間部との比較がなされてきた。今回の調査で、時期が明らかな横穴墓の新資料を加えることができ、玄室平面形の差違には時期的な問題が関わっている可能性が見えてきた。しかし岩盤に穿たれる横穴墓と土に穿たれるものとの性格の違いや、石棺式石室など横穴式石室との関連などは、今後の資料の増加を待って再検討すべき課題である。

3. 炭窯について

II区南斜面で検出したS X-01は横口式炭窯と考えられ、何らかの理由で掘削途中に放棄されたと推定される。構造は、斜面を利用して等高線と平行に窯体をトンネル状に掘り、これに焚き口、横口が付属するものである。構築方法は、まず焚き口と横口を設け、横口の先端を通るように窯体を掘り進むものと考えられる。このタイプの炭窯に通有な、作業面とされる平坦面と窯体先端の煙道は、窯体の掘削後に設けるものと見られS X-01では確認できなかった。

S X-01の時期については、遺構に伴う遺物がなく自然科学的な年代測定もできなかつたため不明である。ただ、形態的には横口の間隔が1m以上と広い点、横口が小形化する点は横口式炭窯の中でも新しい要素と考えられる⁷。

島根県内における横口式炭窯の検出例は今までに3例あるが、いずれも宍道湖南岸地域で確認されている。この地域では、玉湯町玉ノ宮D-II地区で7世紀末の製鉄跡が発見されている⁸ほか、鳥取県西部から島根県東部にかけての海岸部では鍛冶関連遺跡の発見も相次いでいる⁹。横口式炭窯は製鉄用炭の生産を行ったと考えられていることから当遺跡周辺にも製鉄関連の遺跡が存在する可能性が考えられる。一方、出雲地方山間部では、横口式炭窯は今のところ発見されていない。山間部と沿岸部で様相がどのように異なるのか、既に指摘されているように¹⁰、横口式炭窯が当地方で一般的かどうかかも含め、検討していく必要があるだろう。

- 註 1)『宍道町史 史料編』 宍道町 1999
- 2)『南講武草田遺跡』 講武地区堺宮岡場整備事業発掘調査報告書5 鹿島町教育委員会 1992
以下、草田〇期と記したものは、この編年による。
- 3) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
以下、出雲〇期と記したものは、この編年による。
- 4) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鑄について」『櫻原考古学研究所論集』第8
- 5)『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会 1987
- 6)『宍道町歴史資料集』古墳時代編I 宍道町教育委員会 1993
- 7) たたら研究会委員 穴澤義功氏の御教示による
- 8)『出雲玉作跡保存管理計画策定報告書II-玉ノ宮地区』玉湯町教育委員会 1990
- 9)『徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡』一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 島根県教育委員会 1996
- 10)『布志名大谷I遺跡・布志名大谷II遺跡・布志名才の神遺跡』一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4 島根県教育委員会 1997

表3 屋敷古墳群II区遺物観察表

(単位:cm)

遺物番号	種類 基盤	法量(cm)		影響・手法の特徴	出土場所・月日	出土・色調・達成度	備考	
		口径	高さ					
SI-1 底面 高さ	12.3	3.1	外側: 磨耗ナデ、ナデ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	1号穴奥部 取上H.1 980701	1mmの砂粒を含む 淡青灰色	内側や外側に赤色の付着物あり		
2 底面 高さ(身)	11.5	3.7	外側: 磨耗ナデ、ナデ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	1号穴奥部 取上H.2 980701	1mmの砂粒を含む 淡青色 良好			
3 底面 高さ(身)	11.4	4.0	外側: 磨耗ナデ、ナデ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	1号穴奥部室内(褐色土層中) 980701	1mmの砂粒を含む 淡青色 良好	底部に淡黄色、淡褐色の付着物あり		
4 底面 高さ(身)	8.9	13.6	外側: 磨耗ナデ、表面へラグアリ後ナデ、ヘラカニシ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	1号穴奥部通部 上层面 980623	1mmの砂粒を含む 淡青色 良好			
5 底面 高さ(身)	10.3	13.7	外側: 磨耗ナデ、表面へラグアリ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	1号穴奥部通部 取上H.6 980701	2mmの砂粒を含む 淡青色 良好			
6 底面 高さ(身)	14.7	8.7	9.2	外側: 磨耗ナデ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	1号穴奥部通部 取上H.5 980701	1mmの砂粒を含む 淡青色、良好	方形通かし2方向1段	
7 底面 高さ(身)	16.4	9.5	9.6	外側: 磨耗ナデ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	1号穴奥部通部 取上H.4 9807010	2mmの砂粒を含む 淡青色 良好	切り込み状通かし2方向1段	
8 底面 高さ(身)	16.0	9.3	9.4	外側: 磨耗ナデ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	1号穴奥部通部 取上H.3 980701	1mmの砂粒を含む 淡青色 良好	切り込み状通かし2方向1段	
57-1 底面 高さ(身)	11.0	4.3	外側: 磨耗ナデ、ヘラケアリ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	2号穴 PH.9.6 980714 2号穴 ①PH.3.4.5 980704	1mmの砂粒を含む 淡青色 良好	反転復元		
2 底面 大差 (口幅)	19.0		外側: 磨耗ナデ、タキナ底 内側: 磨耗ナデ、アサ具底	2号穴③PH.269, 273, 274, 275, 277, 280, 281, 282 980723	1mmの砂粒を含む 淡青色、良好			
3 底面 大差 (口幅)	22.0	50.1	外側: 磨耗ナデ、タキナ底 内側: 磨耗ナデ、アサ具底	2号穴④ 980713, 980714	1mmの砂粒を含む 外側: 淡灰黑色、内側: 淡褐色 良好	反転復元		
4 底面 大差	16.4		外側: 磨耗ナデ、タキナ底 内側: 磨耗ナデ、アサ具底	小崎穴Ⅱ室底青土・底 980720 2号穴前壁部③ほか	1mmの砂粒を含む 暗灰色 良好	外側に一部自然剥離付 着、一部削落		
5 底面 大差	21.4	45.6	外側: 磨耗ナデ、タキナ底 内側: 磨耗ナデ、アサ具底	2号穴① 980723 2号穴② 980724	2mmの砂粒を含む 青灰色 良好	偏き歪みあり		
62-1 底面 高さ(蓋)	10.1	3.1	外側: 磨耗ナデ、表面へラグアリ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	6号穴 取上H.2 980605	1mmの砂粒を含む 外側: 淡青灰色、内 側: 淡灰色 良好	上面にヘラ記号「X」 あり		
2 底面 高さ(蓋)	13.0	4.3	外側: 磨耗ナデ、表面へラグアリ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	6号穴 取上H.0 980805	1mmの砂粒を含む 淡青灰色 良好			
3 底面 高さ(蓋)	12.3	4.1	外側: 磨耗ナデ、表面へラグアリ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	6号穴 取上H.7 980805	1mmの砂粒を含む 淡青灰色 良好			
4 底面 高さ(蓋)	11.1	4.1	外側: 磨耗ナデ、表面へラグアリ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	6号穴 取上H.10 980805	1mmの砂粒を含む 淡青色 良好	上面にヘラ記号あり		
5 底面 高さ(身)	11.0	4.1	外側: 磨耗ナデ、表面へラグアリ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	6号穴 取上H.4 980805	1mmの砂粒を含む 淡青色 良好			
6 底面 高さ(身)	11.6	4.1	外側: 磨耗ナデ、表面へラグアリ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	6号穴 取上H.5 980805	1mmの砂粒を含む 淡青色 良好	偏き歪みあり		
7 底面 高さ(身)	10.7	4.5	外側: 磨耗ナデ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	6号穴 取上H.6 980805	1mmの砂粒を含む 淡青色 良好	一部反転復元 外側・底部崩壊		
8 底面 高さ(身)	8.9	4.2	外側: 磨耗ナデ、ヘラケアリ 内側: 磨耗ナデ、ナデ	6号穴 取上H.9 980805	1mmの砂粒を含む 青灰黑色 良好	偏き歪みあり 外側に自然剥離付 着		

特因番号	種類 器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	出土場所・年月日	胎土・色調・構成	備考
		口径	底径	高さ				
66-1	須恵器 片口蓋	11.5	3.1	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	5号穴 取上No.1 980601	1mmの砂粒を含む 淡灰褐色、良好		
2	須恵器 片口(身)	10.0	4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ？ 内面：回転ナデ	5号穴 取上No.2 980601	1mmの大砂粒を含む 淡灰色、良好	表面にヘラ記号「×」 あり	
3	須恵器 平口	8.8	6.7	8.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	5号穴 第4層 立室内 980721	1mmの砂粒を含む 淡青灰色、やや軟	入り込み状況かし3万 回1段
71-1	土師器 短底甌			底化？	7号穴前庭 取上No.7 980604	2mmの大砂粒を含む 標準色、不良		
2	須恵器 高身			底化	7号穴前庭 取上No.8 980604	1mmの大砂粒を含む 淡灰褐色 不良	三角形窓かし2方向1 段	
3	須恵器 直口蓋	10.8	12.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ、 へらおこし痕 内面：回転ナデ、ナ デ	7号穴前庭 取上No.6 980604	1mm位の砂粒を含む 淡青灰色 良好	焼き渕みあり	
72-1	須恵器 片(蓋)	11.8	4.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	7号穴 取上No.3 980903	1mmの砂粒を含む 淡灰褐色、良好	焼き渕み 上面にヘラ 記号、油脂分の沈着	
2	須恵器 片(蓋)	12.1	4.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	7号穴 取上No.4 980903	1mmの砂粒を含む 外青、淡青灰色、内 面：淡青灰色 良好	上面に油脂分の付着あ り	
3	須恵器 片(身)	10.4	4.1	外面：回転ナデ、底底、回転ヘラ ケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	7号穴玄室内 取上No.1 980903	1mmの大砂粒を含む 淡青灰色 不良		
4	須恵器 片(身)	10.7	4.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	7号穴 取上No.5 980903	2mmの大砂粒を含む 淡灰褐色、良好	からりほほ全周に焼け 跡	
76-1	須恵器 直口蓋	9.1	13.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	後背壁柱、2号穴上 980722	1mmの大砂粒を含む 淡灰褐色 不良	反転復元	
2	須恵器 片(身)	8.4		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	南斜面 中央土突 980507	1mm以下の白色の砂粒 を含む 淡青灰色 良好		
3	須恵器 片(身)	9.3		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	南西斜面	0.5mmの砂粒を含む 淡青灰色 良好		
4	須恵器 片(身)		9.4	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	南斜面、南北トレーン東 側 表土 980526ほか	1mmの砂粒を含む 淡青灰色 良好		
5	須恵器 平底	12.8		外面：回転ナデ、タタキ目 内面：回転ナデ、アテ真底	南斜面、南北ベルト③以 降表土～茶色土 980601 外	1mmの大砂粒を含む 淡灰褐色 良好		

(単位: cm)

特因番号	器種	全長	頭部長 (刃部)		出土場所・年月日	備考
			刃幅	刃部厚		
52-1	鉄鎌	(10.5)	7.0	3.2	0.25 1号穴 No.4	
2	鉄鎌	(5.4)			1号穴 前庭部 980608	
59	刀子	(7.7)	(2.6)	1.1	0.4 3号穴 前庭 埋土 980724	
73	刀子	(7.2)	(2.2)	0.8	0.2 7号穴 No.2 980903	

(単位: cm)

特因番号	器種	長径	短径	断面径		出土場所・年月日	備考
				横径	縦径		
67-1	耳環	2.0	1.8	長径0.6	短径0.4	5号穴 耳環1 980801	重量5.08 g
2	耳環	2.0	1.8	長径0.6	短径0.4	5号穴 耳環2 980801	重量5.11 g

第4章 鋤崎古墳群

第1節 調査の経過と概要

鋤崎古墳群は、八東郡穴道町大字佐々布2331外に所在する。穴道町西部を流れる江尻川東岸に位置し、西へのびる丘陵が北西と南西へ分岐する付近の丘陵頂部から斜面にかけて立地する。丘陵の標高は、調査区内の最高所で42mである。周辺の遺跡は第2章に記したとおりであるが、北西へのびる丘陵の先端近くには前方後方墳1基、方墳3基が存在し、遺跡の名称は本来この古墳群につけられていたものである。また、第3章に掲載した屋敷古墳群は、北西約100mに位置する。

この遺跡は穴道町教育委員会により分布調査と範囲確認調査が行われ、丘陵頂部に存在する2つの高まりが古墳と考えられていた。

発掘調査は平成10年11月6日に着手した。2つの高まりはいずれも古墳ではなかったが、北側のものについては、横穴墓の後背墳丘と見られる。ほかに、北西斜面で1基、西斜面で2基、南側の丘陵先端付近の斜面で1基、計4基の横穴墓を検出し、12月25日に調査を終了した。

全面調査の方法は、人力による表土掘削の後、人力による振り下げ・清掃を行って遺構を検出した。遺物の取り上げ、実測は調査員による実測と遺跡調査システム「S I T E」を併用し、後者については調査員による補正を行った。

調査後の遺跡全体写真撮影は、リモコンヘリコプターにより実施し、調査後の調査区地形測量についても、リモコンヘリコプターによる空中写真をもとに図化を行った。

第2節 調査の結果

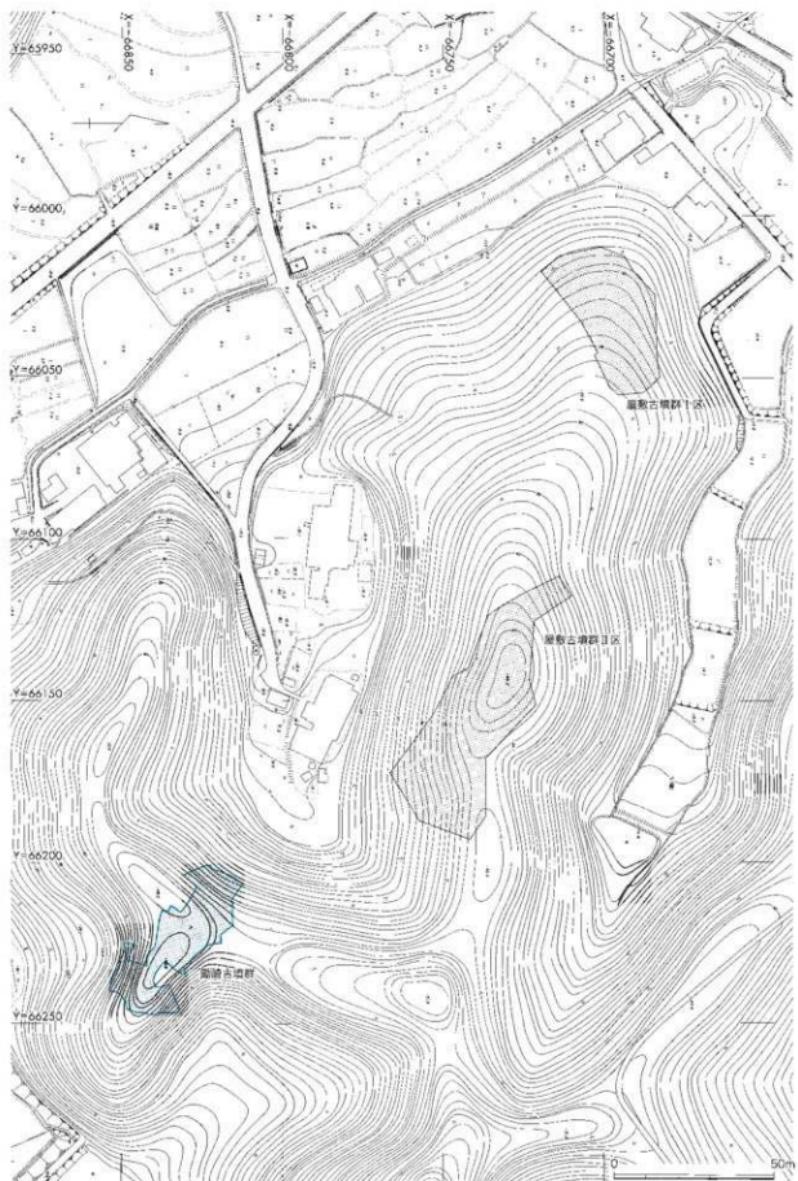
後背墳丘（第79・80図）

調査区北西部の丘陵上に存在する2基の高まりのうち、北西側のものは最高所で標高約42mをはかる。平面形は不整形な四角形で、当初約10m×5m、高さ約1mの古墳とみられた。地山面まで掘り下げて主体部の検出と墳端の確認をおこなったが、主体部は検出できなかった。墳端については、一部でテラス状の部分が確認されたものの、人為的な加工かどうかは不明であり、古墳ではないと判断した。一方この高まりの下方となる北西斜面には後述する鋤崎1号穴が検出されており、これとの位置関係や須恵器の出土状況から、1号穴を主体とする不整形な後背墳丘であると判断した。南東側の高まりについては、後世に山道がつけられた際に北西側およそ1/2が1m以上掘り下げられていた。この断面の土層観察では、搅乱がひどく盛り土や周溝などは認められなかった。この後、地山面まで掘り下げたが主体部や遺物などは認められず、自然地形と判断した。

後背墳丘周辺で出土した須恵器は計7点で、完形品やそれに近いものが多い。器種は壺蓋と壺身で、墳丘南西側から壺蓋2点（第81図-2・3）と壺身1点（第81図-5）、墳丘北東端の尾根筋から斜面へ移行する付近から壺蓋と壺身をそれぞれ1点（第81図1・4）を検出している。

後背墳丘周辺出土遺物（第81図）

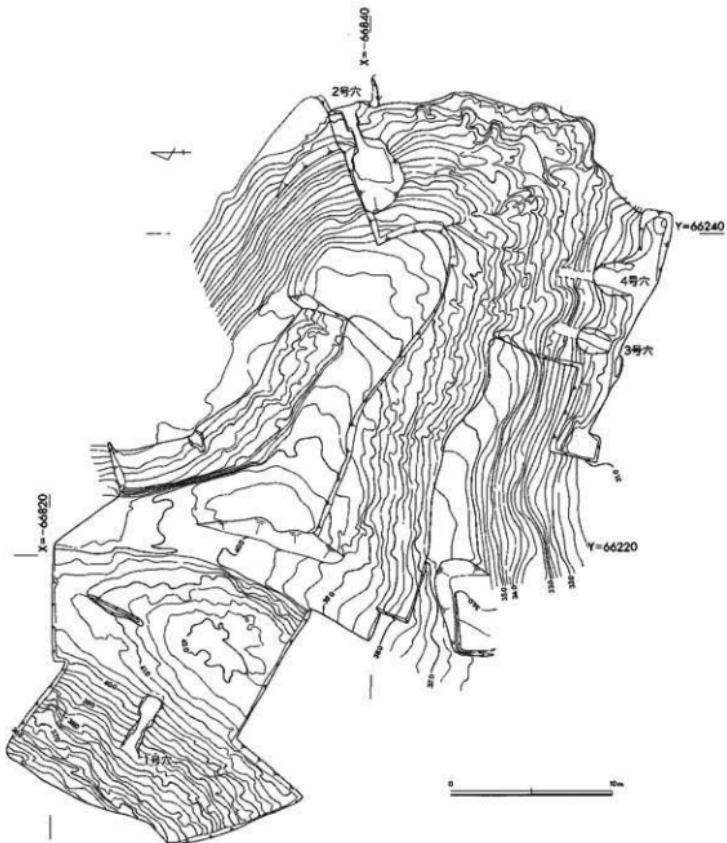
1～3は壺蓋である。1は口径12.7cm、器高は4.1cmで、体部と天井部の境界付近に2本の沈線を施し、突帯を表現している。口縁端部は段状になっており、回転ヘラケズリが天井部付近にのみ施される。2は口径12.6cm、器高4.0cmで、突帯の表現、回転ヘラケズリの位置など調整の手法も



第77図 鶴崎古墳群調査区位置図

ほぼ1と同様であるが、口縁端部のやや上位に沈線を巡らす点が異なっている。3は天井部付近の破片で口径、器高とも不明であるが、突帯の位置が1や2と比較して天井部に近い印象を受ける。突帯の表現方法、回転ヘラケズリの位置などは1・2と同様で、天井部外面には「X」状のヘラ記号をもつ。

4・5は壺身である。4は口径10.6cm、器高4.1cmで、立ち上がりは内傾し、端部を丸くおさめるものである。内外面とも回転ナデで調整され、回転ヘラケズリは認められない。5は口径11.2cm、器高4.1cmで、全体に器壁が厚く体部は内湾しながらI縁部に至る。体部は回転ナデで調整され、底部外面は回転糸切りの痕跡が残る。遺物の時期は、1～4は大谷編年の出雲4期¹⁾、5は出雲8期に相当すると考えられる。



第78図 銚崎古墳群調査後地形測量図 (S = 1 : 300)

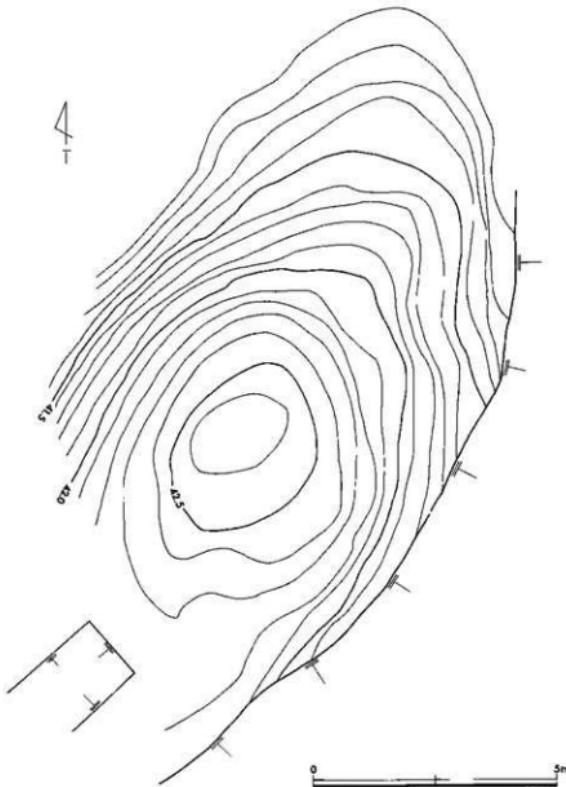
横穴墓

1号穴（第82図）

1号穴は調査区の北西側斜面で検出した横穴墓で、先に述べたように後背墳丘をもつ。丘陵頂部に近い高さに掘り込まれ、床面の標高は38.5mで今回検出された横穴墓の中では特に高い位置にある。後背墳丘頂部との標高差は約5mである。今回、北西側斜面で検出された横穴墓はこの1基のみで、単孔で存在するものである。開口方向は北西である。

前庭部 床面で幅1.1m～0.7m、長さ1.2mで、先端部はある程度流出していると見られる。平面形はほぼ長方形であるが、先端に行くにつれて床面は低く傾斜し南側の壁が南へ大きく開く。

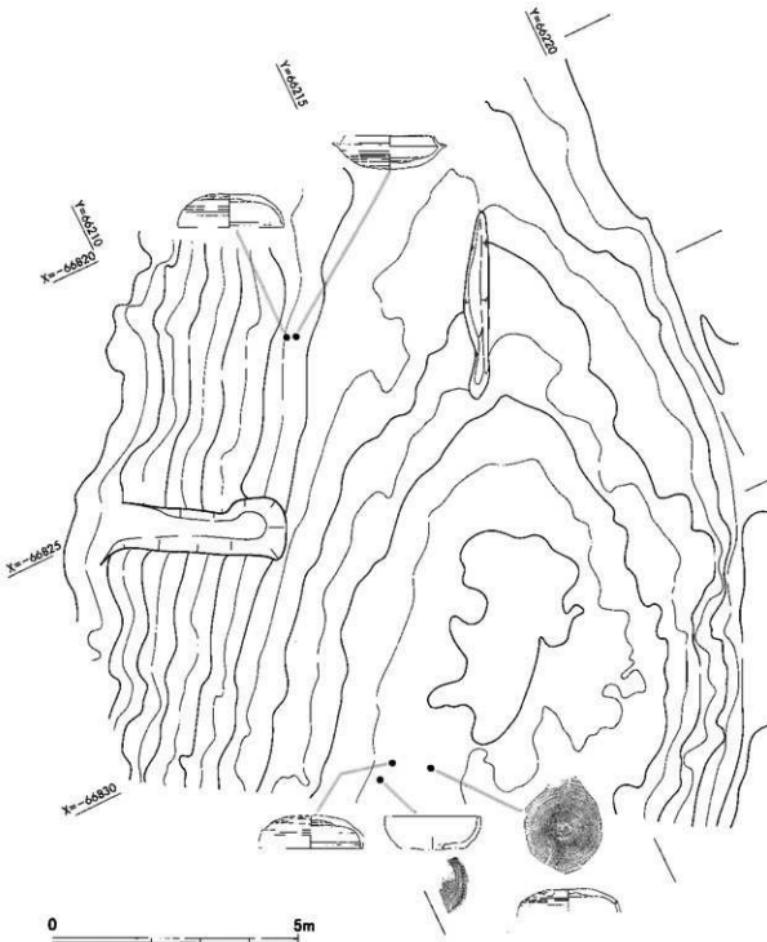
羨道部 幅は0.5m～0.6mで、玄室側でやや広くなる。長さは1.5m、高さは入り口付近が破損して



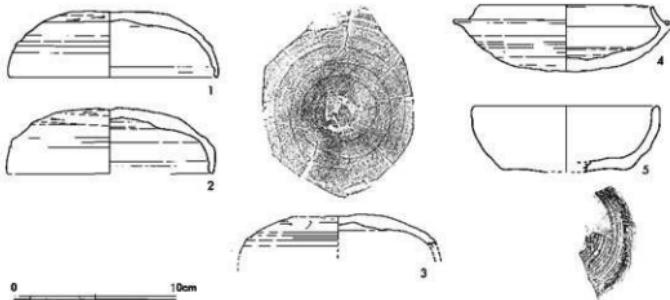
第79図 勧崎古墳群後背墳丘調査前測量図 (S = 1 : 100)

いるが0.6m前後であったと見られる。横断面は半円形で、床面は前庭部との境界で約10cm高くなりさらに玄室に向かって徐々に徐々に高くなる。閉塞用の削りこみや閉塞石などは検出できなかつた。

玄室 前庭や通道部の主軸とわずかに異なる主軸をもつ。幅は1.1m～0.8mで奥壁側がわずかに幅が狭くなり、長さは1.9mでほぼ長方形の平面形を呈する。高さは天井部の剥落が進んでおり、判然としないが1m程度と考えられる。棟線、軒線は確認できず、玄室形態は特定できない。



第80図 銚峰古墳群後背墳丘調査後地形測量図・出土遺物位置図 ($S = 1 : 100$ 遺物 $S = 1 : 6$)



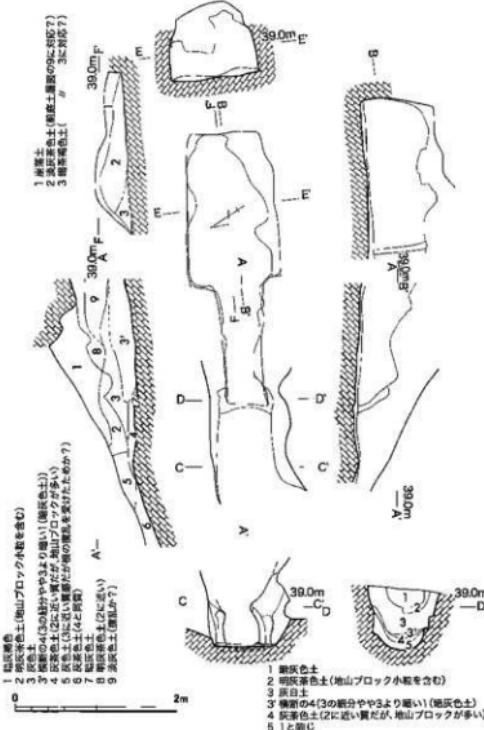
第81図 勧崎古墳群後背墳丘出土遺物実測図 ($S = 1 : 3$)

土層堆積状況 淡道部の状況
などから、盗掘を受けた可能性は高く、2層及び8層の上面が侵入面と見られる。また玄室内の土層は、1層が天井から剥落した土の堆積と見られ、2層は前底部の9層、3層は同じく3'層に対応すると判断した。なお、2層中からは須恵器が出土している。

玄室内遺物出土状況

(第83図)

須恵器が3点出土した。2層と3層は土をふるいにかけたが、他の遺物は検出できなかった。須恵器は2層から出土し、床面から5cm~15cm浮いた状態で検出された。出土状況から二次的に動かされており、追跡の可能性もあるが土層も勘案すると盗掘の影響によることも考えられる。



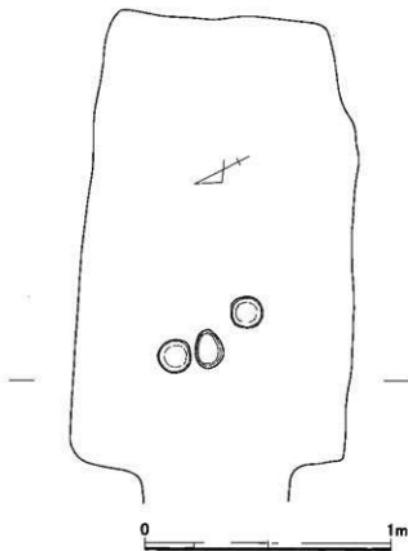
第82図 勸崎古墳群1号穴実測図 ($S = 1 : 60$)

前庭部遺物出土状況（第84図）

前庭部先端付近から前方の斜面にかけて、須恵器、土師器、石製筋鉢車などが出土した。主として前庭部の5層に含まれているが、土器が確認された時点では既に1層をある程度掘り下げていたため、1層と5層の切り合い関係は不明である。前庭部の先端付近の床面から約10cm浮いた位置に、須恵器の蓋坏、短頸壺、砾、土師器の高坏などが積み重なって出土し、斜面下方側に50cm離れて提瓶が1点検出された。出土状況から二次的に移動しているのは明らかであるが、いつの時点で動かされたかのことは不明である。このほか、耳環1点が義道部との境界付近の壁際から出土している。これは盗掘時に移動された可能性が高い。

1号穴出土遺物（第85・86図）

1・2が坏蓋、3・4が坏身である。1は口径13.0cm、器高4.0cmで、体部と大井部との境界付近に2本の沈線を巡らせ、口縁端部は丸くおさめる。天井部付近のみ回転ヘラケズリを施す。2は口径12.8cm、器高4.1cmで、突帯が沈線1本のみで表現される。口縁部内面のやや上方に沈線を巡らせ、ヘラケズリは天井部の一部に施される。3は口径10.4cm、器高4.2cmで、たちあがりは大きく内傾する。回転ヘラケズリを底部の狭い範囲に施す。



第83図 銚崎古墳群1号穴玄室内遺物出土状況
(S = 1 : 20)

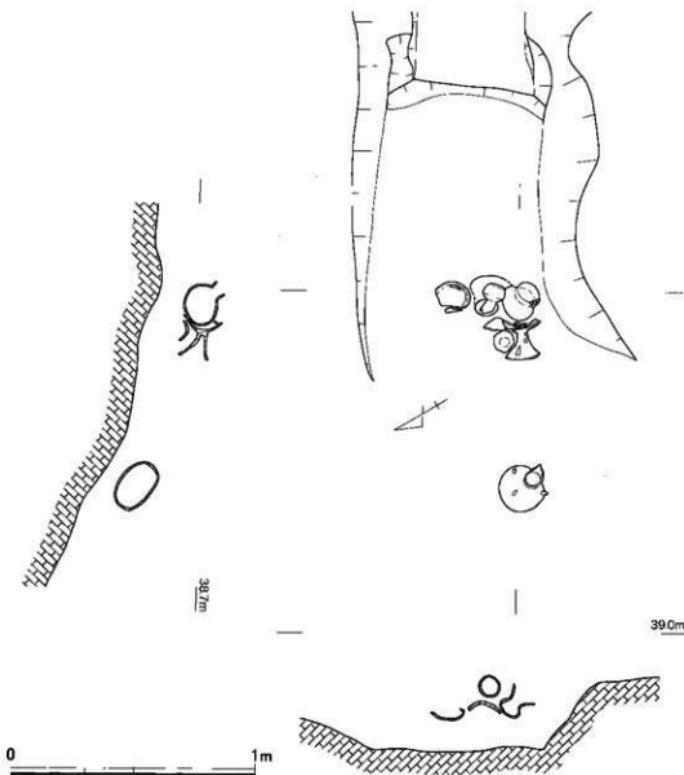
4～10は前庭部で出土した土器で、4～7・10は須恵器、8・9は土師器である。4は坏身で口径9.8cm、器高4.2cmで器形、調整などの特徴は3と同様である。5は砾で、平底の底部をもち底径は5.1cmである。頸部には波状文と沈線、体部には刺突文が施される。調整は体部上半はカキ目、下半は回転ヘラケズリである。6は直口壺で、口径11.1cm、器高14.1cmである。口縁部～体部最大径付近は回転ナデ、体部の中位はカキ目、体部の下位～底部は回転ヘラケズリで調整する。7は有蓋高坏で、口径は12.7cm、底径13.1cm、器高は15.3cmである。立ち上がりは内傾し端部は丸くおさめるもので、脚は直線的にのびる。透かしは三角形の2段3方向で、上段と下段を互い違いに

入れ、間に1本の沈線を施す。調整はナデと回転ナデである。8・9は高坏で、9の底径が10.1cmを測るほかは、法量は不明である。器形は8・9とも同様で、器壁が厚く、坏部は口縁に向かって直線的にのびる。脚は端部で大きく外反し、ほぼ水平になる。調整は丁寧なナデが施され、器表には赤色の顔料ないしは化粧土が塗布されていたと見られる。10は提瓶である。口径は10.1cm～11.0cmで、端部外面には面をもつ。胴部の片面は不明瞭だがやや偏平になっている。把手はつぶれ氣味だが、環状で比較的しっかりしたものである。

86-1は耳環で、長径2.3cm、短径2.2cmで断面径は梢円形である。銅環に鍍金されている。2は石製紡錘車で、径3.3cm、厚さ1.6cmで、孔の径は0.6cmである。上面から側面にかけて面取りされ、丁寧な研磨で仕上げられる。j遺物の時期は、玄室内出土の蓋坏が出雲4期、前庭部出土のものは出雲3期～4期と見られる。

2号穴（第87図）

2号穴は南東にのびる丘陵先端の斜面で検出された。横穴墓が検出された高さは床面で約33mで、



第84図 銚崎古墳群1号穴前庭部遺物出土状況 (S = 1 : 20)

丘陵頂部との標高差は約6mである。横穴墓の標高は後述する3・4号穴と近いものの開口方向や規模などは大きく異なり、単独で存在すると考えられる。開口方向は北東である。

前庭部 床面で幅0.8m、長さ1.0mである。平面形はほぼ長方形である。

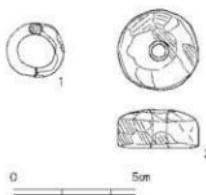
羨道部 幅は0.4m～0.6mで、玄室側でやや広くなる。長さは1.6m、高さは天井部が完全に崩落し



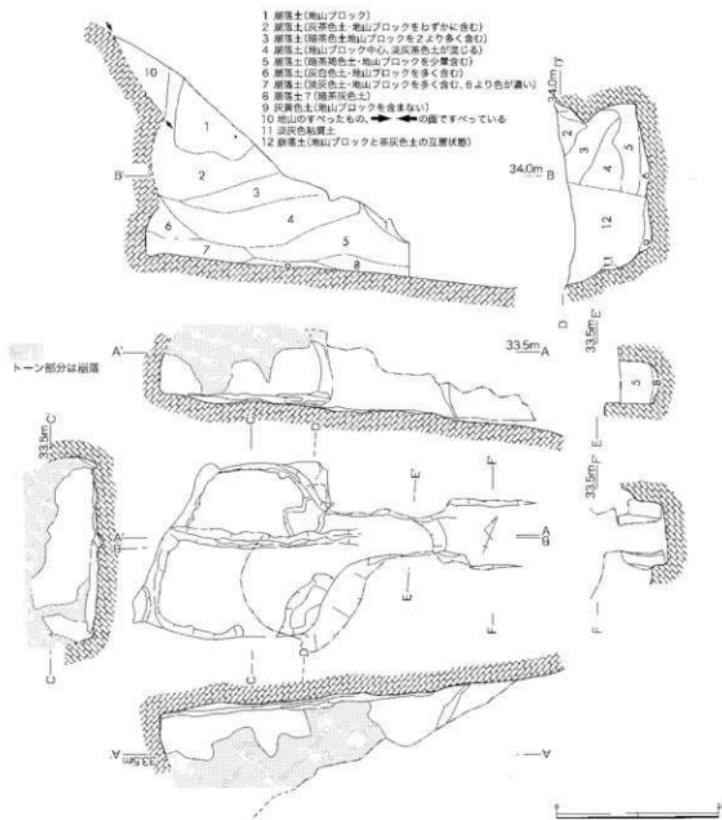
第85図 鶴崎古墳群1号穴出土遺物実測図(1) ($S = 1 : 3$)

詳細は不明だが、0.6m以上あったとみられる。床面は前庭部より約10cm高いが明瞭な段はもない。閉塞石などは検出できなかった。

玄室 平面形はかなり不整形な四角形となっている。規模は前壁側で幅2.1m、奥壁側で幅2.2mであるが、玄室の長さは、左右の側壁沿いで0.7mの差があるため、奥壁が前壁に対して大きく傾く。通道と玄室との境界、各壁の境界も一部を除いて不明瞭である。床面には幅10cm~20cmの溝が設けられ、屍床を意識したものとみられる。天井部崩落のため、高さ及び形態は不明である。



第86図 勧崎古墳群1号穴
出土遺物実測図(2)

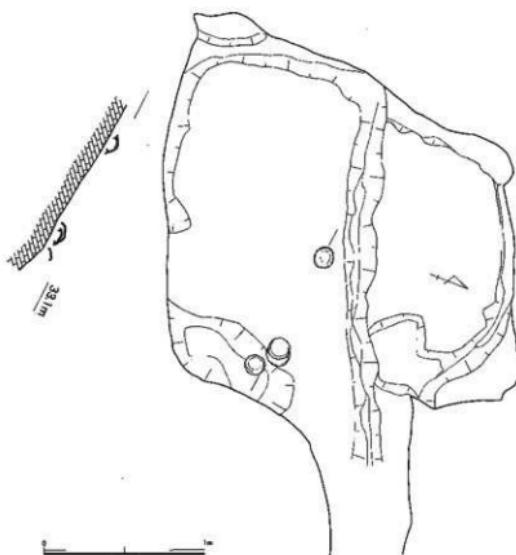


第87図 勸崎古墳群2号穴実測図 (S = 1 : 60)

土層堆積状況 無道部、玄室内の堆積土とも9層を除いて天井の崩落土とみられる。

玄室内遺物土状況（第88図）

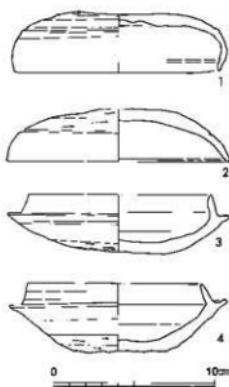
玄室内からは蓋杯がほぼ地山直上で検出された。



第88図 鋤崎古墳群2号穴遺物出土状況 (S = 1 : 30)

2号穴出土遺物（第89図）

1・2は壺蓋、
3・4は壺身である。1は口径12.8cm、
器高3.7cmである。
体部と天井部との境
界付近に2本の沈線
を巡らせるもので、
口縁部は内湾し端部
やや上方には沈線を
施す。回転ヘラケズ
リの範囲は天井部付
近のみである。2は
口径13.6cm、器高
3.3cmで、天井部と
体部の境界は沈線で
表現される。口縁端
部内面に沈線を巡ら
せており、回転ヘラ
ケズリは沈線の直上



第89図 鋤崎古墳群2号穴
出土遺物実測図 (S = 1 : 3)

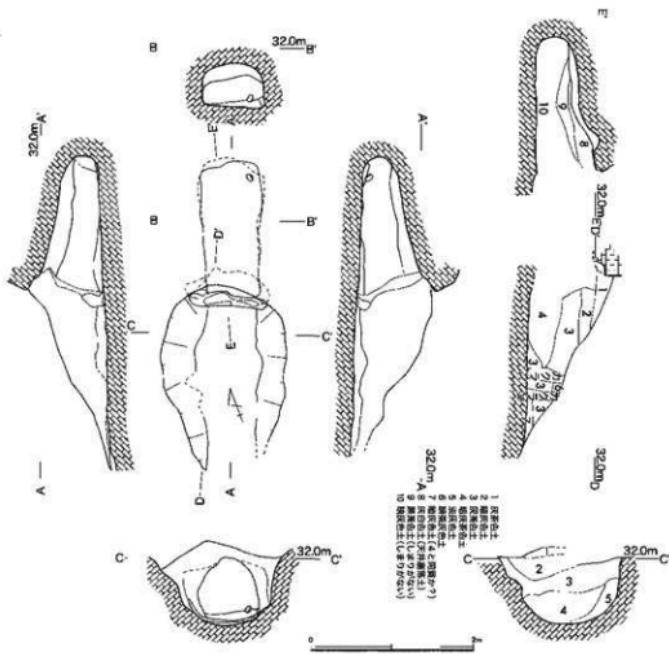
から施される。3は口径11.4cm、器高3.6cmで、たちあがりは
直立して短く、端部はやや鋭くなる形態である。4は口径10.8
cm、器高4.2cmでたちあがりが短くやや内傾するものである。
回転ヘラケズリは底部の一部のみに施される。

遺物の時期は、壺蓋の特徴から出雲4期に相当すると考えら
れる。

3号穴（第90図）

3号穴は、2号穴と同じ丘陵の西側斜面で確認された横穴墓
である。丘陵先端に比較的近い位置に掘り込まれ、高さは床面
で約33mである。東側4mには4号穴が存在する。開口方向は
南西である。3号穴の前庭部は横穴墓に通有のものだが、奥は
無道、玄室の区別がつかない構造をとる。このため、ここでは
閉塞部分より前を前庭部、奥を玄室と呼称して記述する。

前庭部 床面で幅0.6m～0.8m、長さ2.0mで平面形はほぼ長方
形である。床面は中央付近がわずかに窪み、レンズ状を呈する。



第90図 銚崎古墳群3号穴実測図 ($S = 1 : 60$)

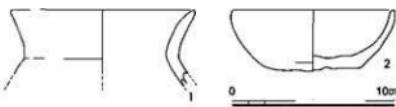
また玄室との境界には長さ1.0m、幅0.2mの掘り込みをもつ。

玄室 内部は、土砂でほぼ完全に埋没していた。長さは1.7m、幅は0.6m~0.7mで、平面形は奥壁側がわずかに広い長方形である。床面は奥壁側でやや高くなっている。天井は玄室前側が1.0m、奥壁沿いか0.3mで、玄室形態は奥壁側が最も低くなるトンネル状である。各壁を画する明瞭な線は認められないが、床と側壁、天井は不明確ながら区別されている。

土層堆積状況 前庭部については、横断面で4層と5層の切り合いで、縦断面で3層と4層の切り合いで関係があるが、追葬や盗掘を示すものかどうかは明らかにできなかった。また前庭部との対応関係が充分に掴めなかつたが、玄室内の埋土はいずれかの時点で流入した土であると考えられる。

3号穴出土遺物（第92図）

前庭部の7層から上師器の甕、玄室内で10層内から須恵器の壺が出土している。いずれも埋土中からの出土だが、この横穴墓に伴うものとみられる。1は口径11.2cmで、口縁部が直線的に立ち上がり、端部は丸く



第91図 銚崎古墳群3号穴出土上遺物実測図
($S = 1 : 3$)

おさめる。2は壺身で、不安定な平底をもち、口径10.0cm、器高3.8cmを測る。調整は回転ナデで、ヘラおこしの跡が認められる。遺物の時期は、壺身が高台をもたず糸切りが用いられないことから、出雲6期と考えられる。

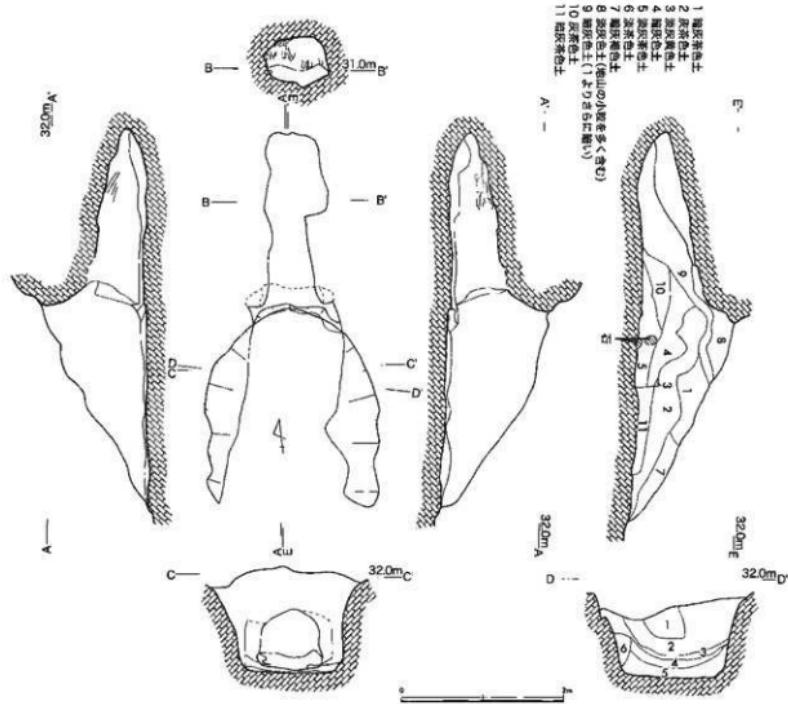
4号穴（第92図）

4号穴は3号穴の南に隣接し、位置や構造などから3号穴と群を構成するものと判断される。床面の標高は約31mで、今回検出された横穴墓の中ではもっとも低い。開口方向は南西である。この横穴墓に伴う遺物は出土していない。

前庭部 床面の幅1.5m～1.1m、長さは2.4mで、規模は今回検出した横穴墓の中で最大である。平面形は先端側が幅広くなる台形を呈し、床面はほぼ水平である。

養道部 幅は0.5m～0.7m、長さは1.1mで玄室側の幅が狭くなる。床面は前庭部より一段高く、その差は約10cmである。天井は高さ0.6m～0.7mで玄室に向かって徐々に低くなる。先端部には閉塞用の掘り込みが明瞭に残るが、閉塞石などは検出できなかった。

玄室 幅は0.6m～0.8mで奥壁側の幅が狭くなり、長さは1.0mで不整形な長方形の平面形を呈する。



第92図 鋸崎古墳群4号穴実測図 (S = 1 : 60)

片袖状の構造で、右側壁は羨道と玄室が明瞭に区別できるが、左側では羨道の壁がそのまま玄室壁へ続いている。高さは羨道部との境界付近では0.6mであるが、犬井と床面の間は徐々に狭くなるため、面としての奥壁は存在しない。玄室奥側の天井及び側壁にはノミ痕が認められた。

土層堆積状況 横断面、縦断面とも追葬や盗掘を窺わせる上層は認められなかった。

第3節 小結

今回の鶴崎古墳群における調査では、横穴墓4基と後背墳丘と見られる高まりを検出した。

検出された横穴墓は天井が崩落していたため玄室形態の不明瞭なものや、遺物が検出できなかつたため掘削された時期の特定が困難なものもあるが、時期と玄室平面形の問題を中心に整理し、小結としたい。

横穴墓の時期は、出土遺物の時期から、1号穴と2号穴が出雲4期、3号穴が出雲6期と考えられ、出雲5期の横穴墓は確認されていない。なお、1号穴については、前庭部で出土した須恵器の中に出雲3期のものが含まれている。これは追葬時に前庭部に持ち出された可能性もあり、1号穴は出雲3期にさかのぼることも考えられる。また、1号穴と2号穴の玄室内から出土した蓋坏は、ともに出雲4期の範疇であるが、比較してみると、体部と天井部の境界付近にある段の表現など1号穴出土蓋坏のほうがやや古い様相を呈するように思われ、4期の中での前後関係の存在も推察される。4号穴については出土遺物がなく時期不明であるが、3号穴に隣接し、玄室形態も近いことから3号穴と同時期のものである可能性が高い。

次に、横穴墓の形態について見る。

横穴墓は、玄室などの形態から1号穴、2号穴、3・4号穴の3つに分類される。1号穴は、玄室平面形が縦長長方形となるものである。2号穴は、不整形であるものの玄室前壁・左側壁・奥壁の長さがほぼ一致することから、玄室平面形は横長長方形または正方形を指向している可能性がある。また、屍床を意識した構造になっている点も注意される。3・4号穴は羨道と玄室の境界が不明瞭で、全体に縦長長方形に近い構造をとる。側壁・奥壁と犬井との区別が明瞭ではなくアーチ形の玄室形態をとるもので、羨道～玄室の天井形態を知り得たのはこの2穴のみである。

横穴墓の玄室平面形と時期の関係については第3章でも触れたが、鶴崎古墳群においては、出雲4期と考えられる1号穴と2号穴の玄室平面形が異なり、玄室平面形が縦長長方形と、横長長方形ないし正方形を指向するとみられる2種類の横穴墓が造られている。出雲5期の様相については、この時期の横穴墓が確認されていないため不明であるが、出雲6期には玄室平面形が縦長長方形となる3・4号穴が造られる。

つまり、この遺跡で玄室平面形が正方形を指向する横穴墓は、出雲4期にのみ確認されると言うことができる。これは、この時期に出雲東部で石棺式石室の影響を受けた整正家形の横穴墓が造られるようになること³⁾と無関係ではあるまい。さらに、1号穴と2号穴に先に述べたような時期差が認められるとすれば、玄室平面形が時期によって変化している可能性も考えられる。

この遺跡の周辺となる佐々布川、江尻川流域の横穴墓には、岩盤に掘り込まれたものと土に掘り込まれたものの2種類がある³⁾。宍道町内で横穴墓は約60基発見されているが、このうち1/3が来待石に掘られたもので、玄室平面形は正方形ないし横長長方形で、平入り構造である。一方、土に掘られた横穴墓の玄室平面形は縦長長方形が多く、平入りとなるものはごくわずかであること⁴⁾

など、この2種類の横穴墓の形態には差違が認められる。今回発見された横穴墓は、いずれも土に掘り込まれたもので、資料数が少ないとおり、来待石に掘られたものを含めたこの地域の横穴墓に普遍化できるものではないと思われる。この地域の横穴墓の全体像については、来待石に掘られたものを含め、既発見資料の再検討と、今後の資料の増加を待って検証していく必要があると考えられる。

註

1) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

以下、出雲○期と記したものはこの編年による。

2)『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会 1987

3) a 「宍道町歴史資料集」古墳時代編 I 宍道町教育委員会 1993

b 『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』中国横断道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7

島根県教育委員会 2001

4) 註3文献aに同じ

表4 鋤崎古墳群遺物観察表

(単位: cm)

横穴墓号	構造 特徴	通量(cm)			剖面、手法の特徴	出土場所・年月日	出土・色調・焼成	備考
		口径	周長	高さ				
81-1 井(奥)		12.7			4. 内面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号墳NW区0.2層 Pm. 2 981201	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	一部反転復元 柱文、焼成文あり
2 井(奥)		12.6	4.0		外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号墳NW区0.2層 Pm. 1 981211	1mmの秒数を含む 淡黄色 良好	
3 道溝器 井(奥)					外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号墳: 北西斜面壁裏2層 981206ほか	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	
4 道溝器 井(左)		10.6			4. 内面: 回転ナデ、ナデ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号墳NW区0.2層 Pm. 3 981201	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	
5 道溝器 横(右)		11.2			外面: 回転ナデ、回転ヘタ切り 内面: 回転ナデ	1号墳 Pm. 7, 9, 10 981130	1mmの秒数を含む 淡黄色 良好	反転復元 軸柄あり
85-2 道溝器 井(奥)		13.0	4.0		外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号穴宝室内 取上No. 1 980121	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	
2 道溝器 井(奥)		12.8			4.1 外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号穴宝室内 取上No. 3 9801215	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	
3 道溝器 井(奥)		10.4			4.2 外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号穴宝室内 取上No. 2 9801215	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	
4 道溝器 井(右)		9.8			4.0 外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号穴前庭段上 No. 6 9801214	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	一部反転復元
5 道溝器 横(奥)		5.1			外面: 回転ナデ、カキ貝、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号穴前庭 取上No. 2 9801214	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	一部反転復元 淡 色文、焼成文あり
6 道溝器 壁口(奥)		11.1	14.1		外面: 回転ナデ、カキ貝、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号穴前庭 取上No. 3 9801214	2mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	
7 道溝器 横片		12.7	3.1	15.3	外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ 内面: 回転ナデ、ナデ	1号穴奥庭 取上No. 4 9801214	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	三角形透かし3万 度2段
8 土器					丁寧なナデ	1号穴前庭 取上No. 7	1mmの秒数を含む 淡黄色 良好	反転復元
9 土器		15.2	0.1	10.4	丁寧なナデ	1号穴前庭 取上No. 5 9801201	1mmの秒数を含む 淡黄色 良好	一部反転復元
10 道溝器 横片	底座: 11.0 壁幅: 10.1		23.4		外面: 回転ナデ、カキ貝、タクナキ 内面: 回転ナデ、ナデ、アラ真鑑	1号穴前庭 取上No. 1 9801201	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	外側に舟形輪、底 部裏に瓦文
89-1 道溝器 井(奥)		12.8			3.7 外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	2号穴宝室内 取上No. 4 9801211	2mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	縦書き墨文あり
2 道溝器 横(奥)		13.6			3.3 外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	2号穴宝室内 取上No. 1 9801211	3mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	内面に油墨系の付 着物あり
3 道溝器 井(奥)		11.4			3.6 外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	2号穴宝室内 取上No. 3 9801211	2mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	
4 道溝器 井(奥)		10.8			4.2 外面: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、ナデ	2号穴宝室内 取上No. 2 9801211	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	
91-1 土器 (口縁)		11.2			外面: 深淵(回転ナデ) 内面: 焼成	3号穴前庭 底面近く 9801203	2mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	
2 道溝器 井(奥)		10.0			3. 外面: 回転ナデ、ヘラおこし 内面: 回転ナデ、ナデ	3号穴宝室内 取上No. 3 9801206	1mmの大秒数を含む 淡黄色 良好	

(単位: cm)

横穴墓号	番号	長径	短径	断面径	出土場所・年月日	備考
86-1	耳環	2.3	2.2	0.5 1.5 981209	1号穴貴賤上部 茶褐色土中 取上No. 1 重量4.95g	
2	飾垂革	3.3		厚さ1.6 1号穴前庭 981026	孔の径0.6cm	

第5章 足頭古墳群

第1節 調査の経過と概要

足頭古墳群は、八東郡穴道町大字佐々布3245-3外に所在する。穴道町の北西部、斐川町との境界に近い丘陵上に位置し、穴道湖に向かって北にのびる丘陵の先端に近い頂部に立地する。丘陵の標高は、最高所で42mと周辺の丘陵よりもや高く、また丘陵先端付近という立地のため眺望は開けており、北東に穴道湖、北西に出雲平野を眼下に望む。調査区は、北西へのびる丘陵とそこから西へ派生する丘陵上に設定した。

この古墳群は、分布調査によって確認されたもので前方後円墳が存在する可能性も考えられていた。また、昭和60年には穴道町教育委員会によって同じ丘陵の北側先端部で発掘調査が行われ、このときに確認された2基の古墳が、それぞれ足頭1号墳、2号墳となっている。いずれも方墳で、1号墳は削竹形木棺1基、2号墳は箱式石棺2基を主体部にもつもので、古墳時代前期～中期に築造されたと推定されている¹⁾。

今回の調査は、平成10年8月11日に着手した。トレンチによる調査範囲の再確認と地形測量を実施した後全面調査を開始し、調査区内の最高所となる北東の丘陵頂部で古墳1基を検出した。地形測量以前の段階では、調査区東側に存在する大小2つの高まりは前方後円ないし前方後方墳の可能性もあったが、調査の結果北側にある大形の高まりが方墳であることが確認され、足頭3号墳とした。前方部の可能性をもっていた南側の高まりとの間は溝で切断されており、西側に存在する高まりについても加工された痕跡はなかったためいずれも自然地形と判断した。3号墳では、箱形木棺、箱式石棺など主体部3基を検出し、南側の斜面から埋葬施設1基を検出した。最後に3号墳の地形測量、調査区全体の空中写真撮影、測量を実施して11月5日に終了した。

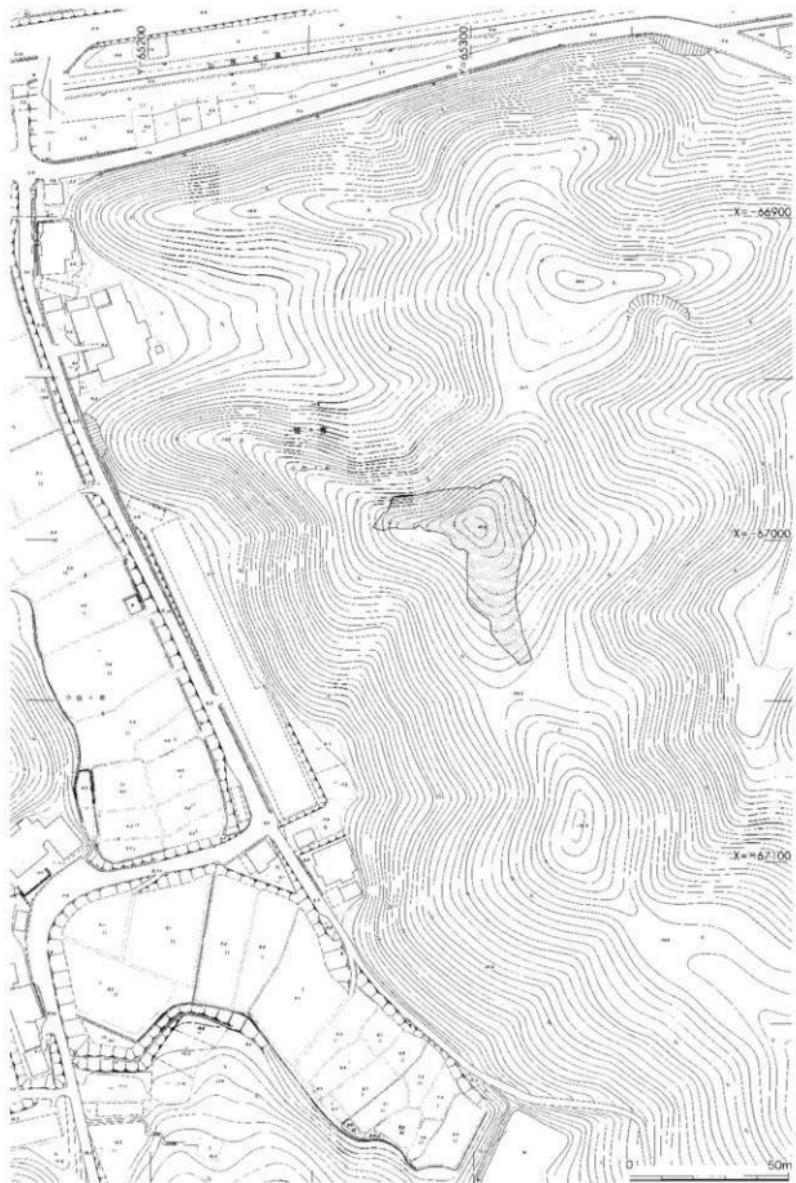
全面調査の方法は、重機及び人力による表土掘削の後、人力による掘り下げ・消掃を行って遺構を検出した。遺物の取り上げ、実測には調査員による実測と遺跡調査システム「S I T E」による実測を併用し、後者については調査員による補正を行った。

調査後の遺跡全体写真撮影は、リモコンヘリコプターにより実施し、調査後地形測量もこれによる空中写真をもとに図化を行った。

第2節 調査の結果（第93図）

調査区は、標高約42mの丘陵頂部に立地する3号墳とその南側、西側にそれぞれ存在する高まりを中心に設定した。南側の高まりは頂部で標高約40m、西側のものは同じく標高約37mであった。

調査前の段階では3号墳を後円部ないし後方部とする前方後円（方）墳が存在する可能性が考えられたため、3号墳とその南側にある高まりについて地形測量を実施した。前方後円（方）墳の可能性については、南側の高まりは前方部としては墳端、墳裾のラインが明確でないことからやや低くなった。3号墳は、北西の墳端と見られる付近が後世の地形変更により削り取られており、東側が急傾斜の谷状になっていることなどから、この時点ではマウンドの形状は確定できなかったが、墳丘東側の等高線が直線的であり1辺15m程度の方形であると見られた。なお、マウンドも低く、墳丘上面の平坦面も墳丘規模と比較し広いものであったことから墳丘の盛土は流出してしまってい



第93図 足頭古墳群調査区位置図 ($S = 1 : 1500$)

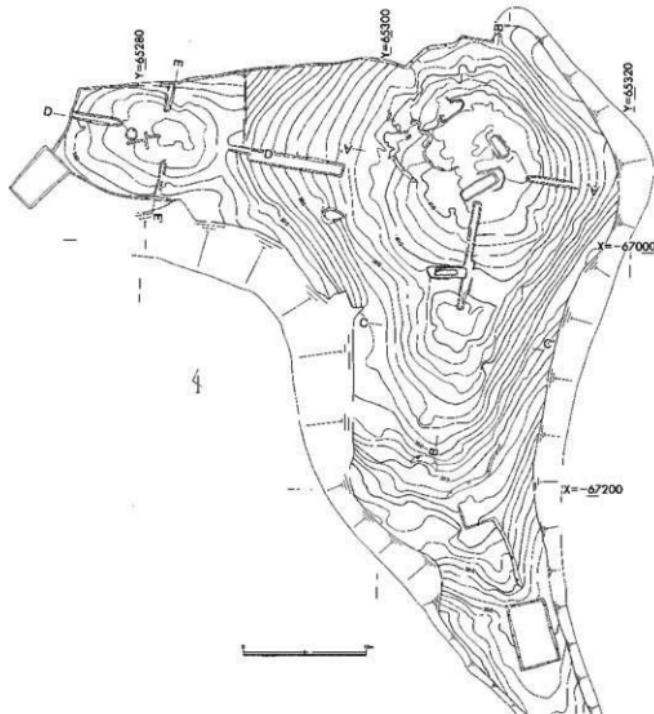
ることも想定された。

発掘調査では、3号墳とその南側の高まりを南北に貫くラインを設定し、これにそって上層観察用トレンチを設けたほか、3号墳、南側高まりそれぞれに東西方向にもトレンチを設け上層観察を行った。(第96図)

3号墳の土層観察からは、調査前の想定どおり堆積土は極めて薄く、墳頂などの浅い部分では10cm、深い部分でも50cm足らずで地山に達することがわかった。堆積している土も表土や地山の風化土がほとんどで、墳端部分でも旧表土、流出した盛り土などは確認できなかつたが、中央付近に主体部と見られる落ち込みが確認され、古墳であると判断した。また南側と西側の高まりでも上層の堆積状況は同様であったが、主体部や地山の加工なども認められず古墳と判断する積極的な根拠がないため、自然地形と判断した。

3号墳(第95・97図)

3号墳は、調査区北東の調査区内最高所に立地し、標高は約41mである。調査の結果、墳丘北側、東側から南側にかけて直線的な等高線が描かれたため、墳丘形態は南北方向に長軸をもつ方墳と推定した。墳丘の規模は東西約11m、南北約15m、墳頂平坦面は南北10m、東西10mである。墳端に



第94図 足頭古墳群調査後地形測量図 (S = 1 : 400)

については、調査後の墳丘測量でも明確な傾斜変換点は認められなかったが、墳丘南側及び北側では40.5mの等高線付近で若干傾斜が緩やかになるため、この付近を墳端とした。東側と西側でも同様にして墳端を推定した。また3号墳と南側の高まりの間は、尾根筋に直交する浅い溝状の加工により切断されていた。この溝は、上端で幅約2m、深さは0.2m～0.3mと浅いものであったが、底面は平坦になっていた。墳丘の高さは、現状では約1.5mであるが、先述したように後世の地形変更や盛り土の流出などがあったと見られるほか、地山の土質が砂質で風化しやすいものであるため、地山も風化・流出した可能性が考えられる。これは、後述する第1主体の検出状況からも窺うことができる。

足頭3号墳で検出した埋葬施設は、確実なものが2基、可能性のあるものを含めると3基である。これらを検出順に第1～第3主体部と呼称する。埋葬施設の配置は、箱形木棺と推定される第1主体部が墳頂平坦面の中央からやや南側に位置し、主軸を北東～南西にとる。組み合わせ式の箱式石棺である第2主体は、墳頂平坦面の中央からやや北東寄り、第1主体部の北東約3mの位置にある。



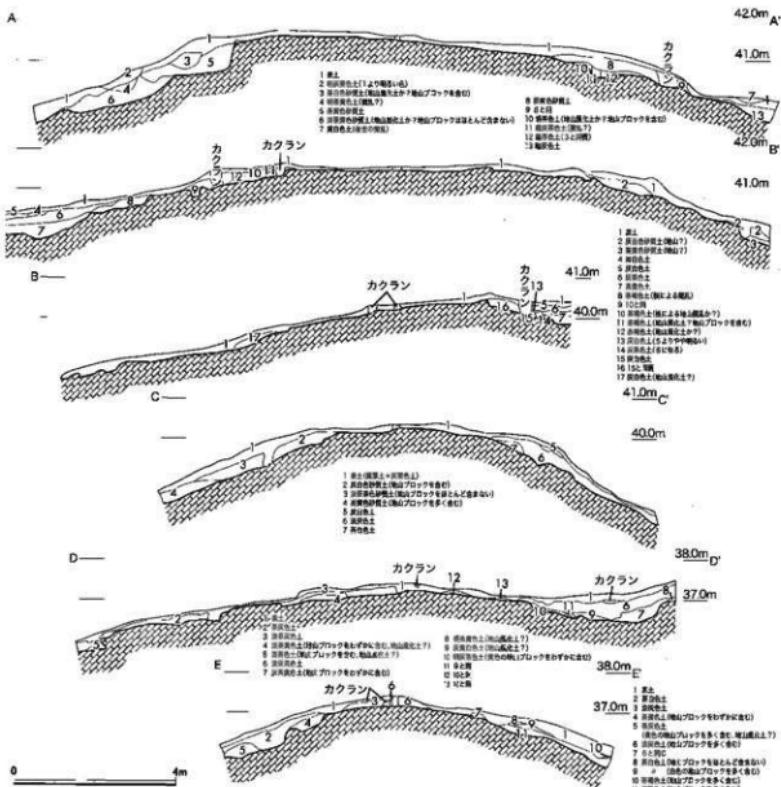
第95図 足頭3号古墳群調査前地形測量図 ($S = 1 : 200$)

主軸は北西－南東にとる。第3主体部は墳頂平坦面の北西端に位置し、第2主体部から北西に約5mの距離にある。主軸は北東－南西にとるものである。以上のように、第1主体部～第3主体部はいずれも墳丘の軸と主体部の軸とが大きく異なる。

これらの主体部のうち、位置や規模から中心となる主体部は第1主体部と考えられる。このほかに、3号墳と南側高まりの中間に土壙が1基存在する。主軸をほぼ東西にとるもので、木棺を内蔵した墓壙と考えられる。以下、第1主体部から順に述べる。

第1主体部（第98図）

第1主体部は、箱形木棺と考えられるもので、墳頂平坦面の中央からやや南に寄った位置で検出された。主体部の主軸はN-53°-Eである。墳頂平坦面は表土がわずかに地山を覆っていたのみで、墳丘を構成するような盛り土は全く認められなかったため、検出面は地山面であった。検出当初は素掘りの墓壙と見られたが、精査中に墓壙の北～東南にかけてわずかな落ち込みが確認された



第96図 足頭古墳群土層図 (S = 1 : 120)

ため、二段掘りの墓壙であることがわかった。また、1段目の墓壙がごく浅く一部でのみ検出されたことから、埴丘は盛り土だけではなく地川についても風化・流出している可能性が高い。

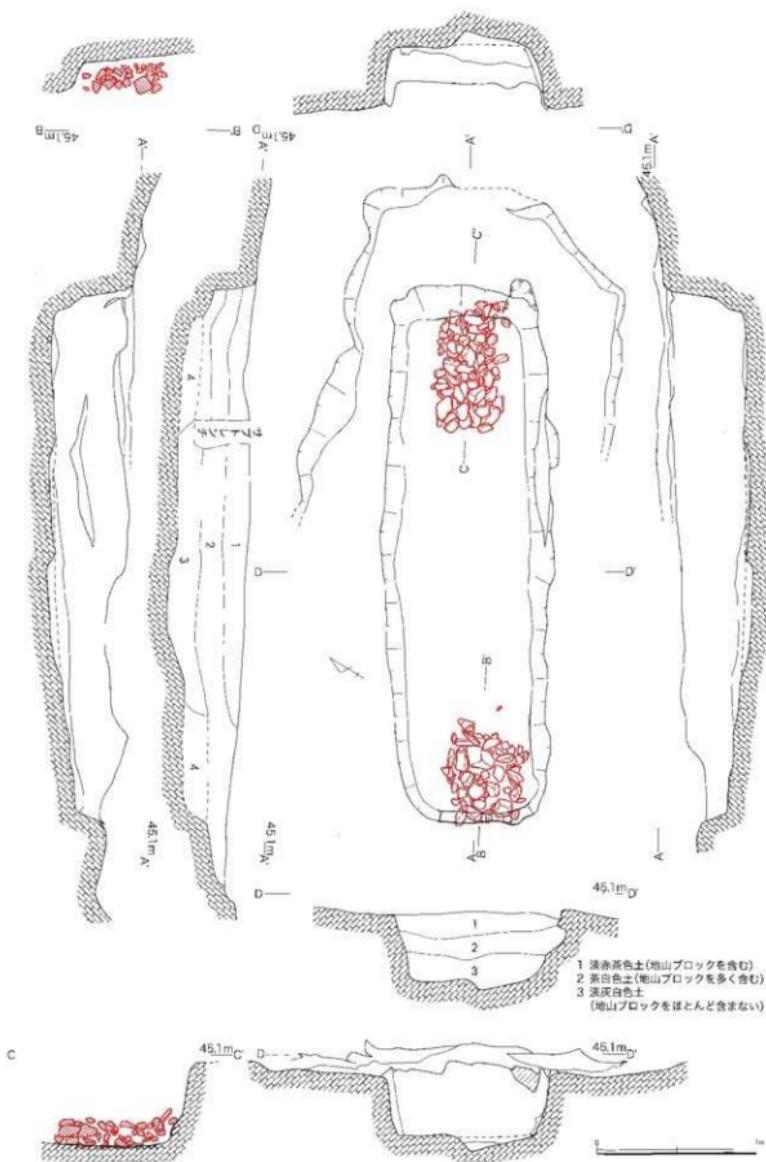
墓壙の1段目は南西側が半分以上失われているが、長楕円形ないし長方形の平面形とみられ、残存部の状況から規模は幅1.8m以上、長さ約4.5mと推定され、検出時の深さは最大でも5cm程度であった。2段目は長さ3.3m、幅は1.0~1.1mで北東側がわずかに広くなつており、深さは約40cmである。底面はほぼ平坦であるが、南西側がやや低く傾斜している。また、底面の北東端と南西端の中央付近には小形の礫多数が集中している様子が認められた。礫は底面から壁面に接するように積み重ねられており、北東端では80cm×40cm、南西端では60cm×40cmの範囲で、厚さはいずれも約20cmである。この礫は木棺の小口部を押さえる役割をしたものと見られ、ここから棺の長さは約2m、棺の幅については40cm~50cmと推定される。なお、礫はいずれも長軸側の側壁とは明確に離れていることから、木棺の側板は2m以上の長さをもって小口板を挟み、壁と礫によって支えられるような構造であった可能性が考えられる。墓壙内の覆土についてはほぼ水平な堆積を示し、木棺の痕跡を示すような層位は認められなかった。遺物は墓壙内の覆土中から鉄器が出土している。

第1主体部出土遺物（第99図）

第1主体部からは鉄器が2点出土している。1は刀子で、現存長4cm、幅1cm、厚さ0.3cmである。2は刀子の茎部と見られるが、詳細は不明である。現存長6cm、幅1cm~1.5cm、厚さは0.2~0.3mmで、断面形は台形を呈する。X線写真では不明瞭ながら円釘孔らしきものも確認されている。



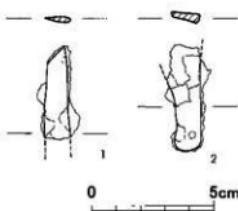
第97図 足頭3号墳調査後地形測量図 (S = 1 : 200)



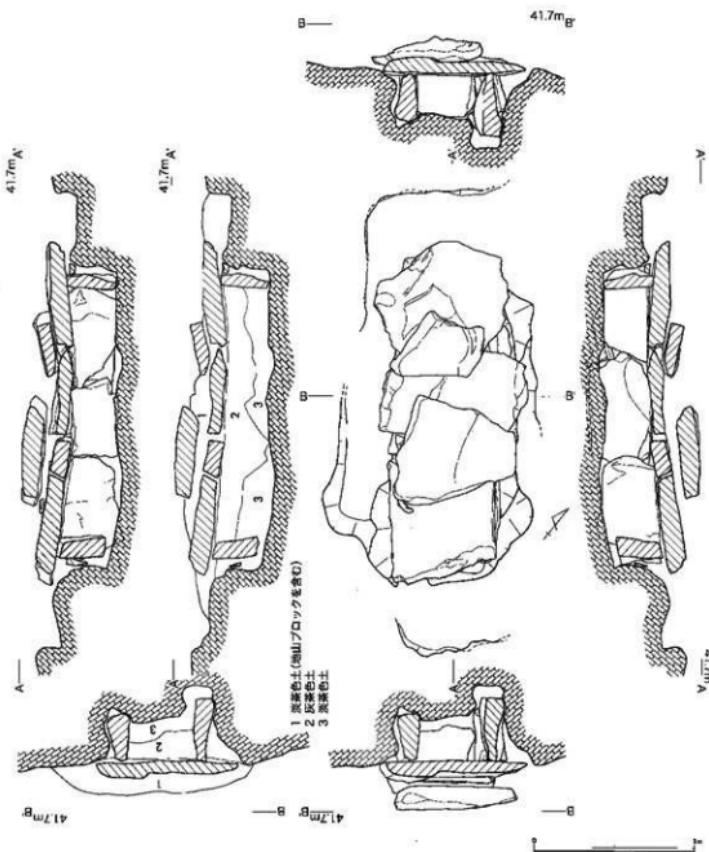
第98図 足頭3号墳第1主体部実測図 (S = 1 : 30)

第2主体部（第100図・101図）

第2主体部は、大形の板石を組みあわせて造られた箱式石棺で、第1主体部の北東で検出された。主体部の主軸はE—53°—Sで第1主体部にほぼ直交する。墓壇は二段掘り状のものであるが、第1主体部と同様に地山の流出があったと見られ、石棺の天井石が墓壇の掘り方を検出した面よりも高い位置で確認された。掘り方についても、一段目の下端を北西から南西及び南東の一部で確認するにとどまり、北東側では全く認められなかった。



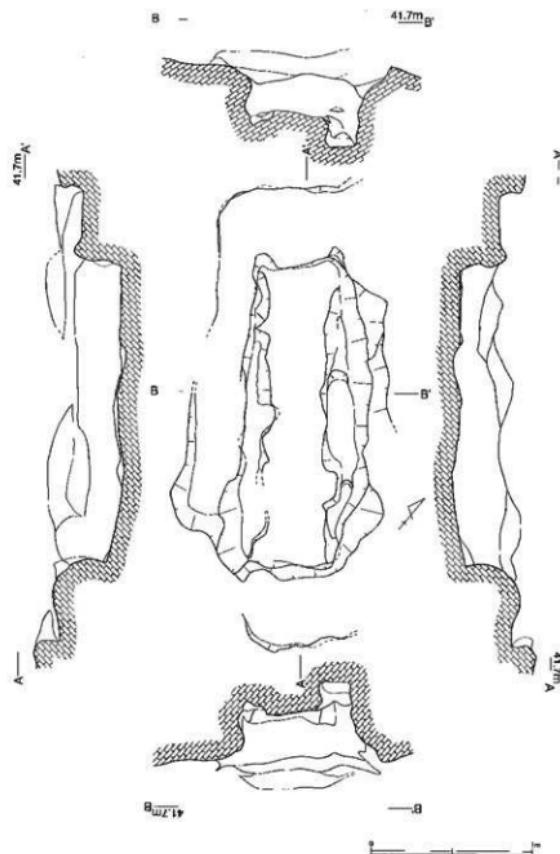
第99図 足頭3号墳第1主体部出土遺物実測図 ($S = 1 : 2$)



第100図 足頭3号墳第2主体部（石棺）実測図 ($S = 1 : 30$)

墓壙一段目の平面形はほぼ長方形と考えられ、規模は長さ2.9m、幅は墓壙下端の位置から推測すると1.2m～1.4m程度であろう。現状での深さは、もっとも深い所でも内側の墓壙掘り込み面まで0.2mである。二段目は、平面形はほぼ長方形で長さ約2m、幅は0.5～0.8mで南東側がわずかに広くなっている。深さは底面まで0.3mである。底面はほぼ平坦であるが、両側の側壁に沿って側石を据えるための掘り込みが認められる。なお、覆土の堆積状況からは、石棺の裏込めまたは日貼りをした痕跡は認められなかった。

箱式石棺は、墓壙のほぼ中央にあったものと考えられ、主軸も墓壙とほぼ同じである。蓋石、棺身共に厚さ10cm前後の板石を用いて構築されており、いわゆる「來待石」は使用されていない。基本的には節理に沿って板状に割り取られたものとみられ、表面を平滑にするなどの加工痕は認めら



第101図 足頭3号墳第2主体部（掘り方）実測図（S = 1 : 30）

れなかつたが、内面に赤色の顔料が塗布されていた。規模は、内法で長さ1.6m、幅0.4m～0.5mで、墓壙と同様南東側がわずかに広くなっている。床面から蓋石下面までの高さは0.3mである。蓋石は長さ20cm～70cm、幅60cm～80cmの板状の石を4枚乗せた後、さらに2枚の石材をその上に積み重ねている。柱身は、両側石で小口側の石を挟む構造をとり、蓋石と同一の石材を使用する。長さ40cm～70cm、高さ30cm～40cmの板状の石を南西側、北東側とも3枚ずつ用いており、石材の高さにはばらつきがあるが、これは据え付けのための掘り込みを石ごとに変えることで上面が水平になるよう調整されている。側石にも目貼りの痕跡は認められなかった。小口側は石を据えるための掘り込みは存在しないが、石と掘り方との隙間に小さな石材が置かれており、石を支えていたと見られる。

この主体部及び周辺から遺物は出土していない。

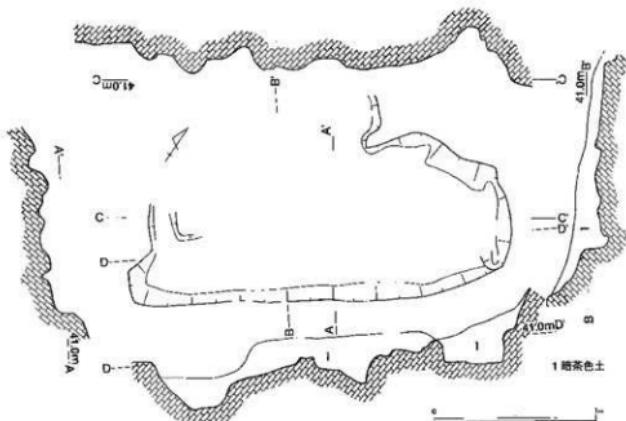
第3主体部（第102図）

第3主体部は、墳頂平坦面の北西隅で検出された。3号墳北西側は土砂の流出に加え後世の地形改変も受け、最も遺存状況が悪い部分である。位置的にも主体部が置かれるには適当でないが、土坑状の落ち込みを検出したため主体部の可能性を持つものとしておく。

主体部の主軸はN-57°-Eで第1主体部とほぼ同一方向である。墓壙は北西側の多くが失われているが平面形はほぼ長方形と推測され、規模は上端で長さ2.3m～2.4m、幅0.7m～0.9mと考えられる。深さは現状で0.2mである。墓壙全体が風化の影響を著しく受け、特に床面では凹凸が激しいため、詳細は不明である。この主体部からも、遺物は検出されていない。

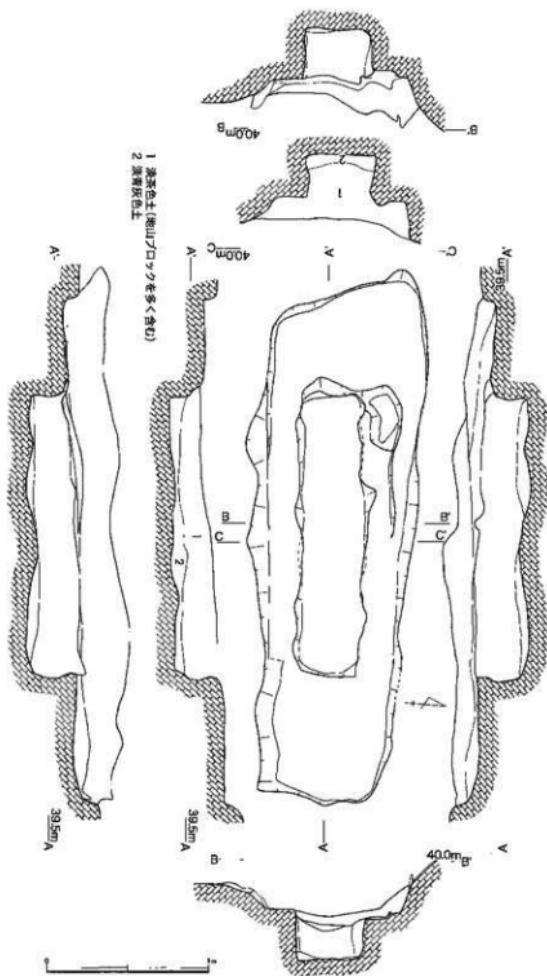
3号墳南溝内墓壙（第103図）

3号墳の南側の溝では、尾根筋よりやや西に寄った場所から墓壙が検出された。これは墳丘斜面を掘り下げている時に地山直上で確認したものである。墓壙は二段掘りで、主体部の主軸はN-85°-Eとほぼ東西方向にとり、尾根筋に直交する。

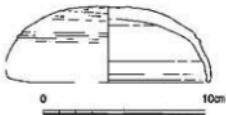


第102図 足頭3号墳第3主体部実測図 (S = 1 : 30)

墓壙の一段目は平面形がやや崩れた長方形で、長さ3.0m～3.3m、幅は0.7m～1.0mで西側が幅広くなっている。深さは二段目の掘り込み面までで10cm～20cmである。二段目は長さ1.8m、幅は0.7mと均等で一方が広がっている様子は見られず、深さは約30cmである。底面はほぼ中央付近がやや高くなっているほか、西側が東側よりわずかに低く傾斜している。また、底面に棺材を据える



第103図 足頭3号墳南溝内墓壙実測図 ($S = 1:30$)



第104図 足頭3号墳
南溝内出土遺物実測図
(S = 1 : 3)

ための掘り込みは認められなかった。このほか、二段日の墓壙北西側に浅い落ち込みなどの加工がなされていた。この墓壙から遺物は出土していない。

3号墳南溝内出土遺物（第104図）

今回出土した土器の内、圓化可能なものは須恵器の壺蓋1点のみで、口径は12.4cm、器高4.7cmである。2本の沈線で突帯を表現し、口縁部内面のやや上方に沈線を入れ、天井部には回転ヘラケズリを施す。時期は、大谷編年の中出雲4期²と考えられる。

土器の出土位置は3号墳南側の溝覆土中であり、墳丘盛り土の流出に伴い流れ込んだ可能性もあるが、この土器の時期が3号墳の時期を示す確証は得られなかった。

第3節 小結

今回の調査では、主体部3基をもつ方墳1基と、古墳南側の溝内から墓壙1基を検出した。

足頭3号墳の墳丘規模は、調査の結果11m×15mと考えられ、3つの主体部が設けられている。位置や形態から主体部ではない可能性が残る第3主体を別にしても、複数の主体部をもつ点は注意される。遺物については刀子を検出したのみで古墳の時期を確定する遺物は出土しなかった。

3号墳から北へ100mの丘陵先端付近にはかつて足頭1・2号墳が存在し、発掘調査が行われている。このときの調査でも古墳の時期が特定できる遺物は発見されておらず、1号墳では主体部が割竹形木棺と推定されることから古墳時代前期～中期、2号墳では主体部が箱式石棺であることから中期以前の可能性を指摘している³。足頭2号墳で確認された2基の箱式石棺のうち大形のものは、規模、構造ともに足頭3号墳第2主体の石棺に近く、石棺材の内面に赤色顔料が残されていた点も似ている。積極的な根拠ではないが、こうした類似点から、足頭3号墳も足頭2号墳とほぼ同時期に築造された古墳と考えられる。

今回の調査では、遺物が少なく古墳の時期や性格について充分に明らかにしたとは言い難いか、中期古墳とされてきた足頭古墳群について、新たな資料を提供することができた。古墳群の詳細な位置づけは周辺の遺跡の調査を待って改めてなされる必要がある。

註

- 「足頭古墳群」『宍道町史』史料編 宍道町 1999
- 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第11集 1994
- 註1と同じ

表5 足頭古墳群遺物観察表

検査番号	種類 遺物	法量(cm)		形状・手法の特徴	出土場所・年月日	地質・色調・構成	備考
		口径	底径				
104 3号墳 3号墳	2.35 2.35	4.7 4.7	2.1 2.1	外輪・凹輪ナメ、回転ヘラケズリ 内輪・回転ナメ、ナメ	1号墳十字レンジ南側3周内 980827	1mm位の砂粒を含む 土色黄褐色、良好	

(単位: cm)

検査番号	種類	全長	頭部長(刃部)	刃幅	刃部厚	出土場所・年月日	備考
99-1	刀子	(3.8)		1.05	0.25	1号墳 981111	
-2	刀子	(4.4)				1号墳 981019	第1主体 墓壙内側 上面上

第6章 長廻古墳群

第1節 調査の経過と概要

平成9年7月～12月にかけて遺跡の概要等を把握するため丘陵尾根上のトレンチ調査を行った結果、石棺の蓋と思われる石材が検出された。

全面調査は平成10年8月10日より開始した。調査区内が伐採されて、調査区の全体像が把握できるようになったため、丘陵斜面を中心トレンチの数を増やして調査した。石棺の蓋と思われる石材を検出した部分は古墳であると想定されるため、石材を中心に十字のラインを設定し、調査を実施した。また、丘陵先端斜面には張り出し平坦面が確認でき、山城の郭跡であると想定されたため、平坦面を中心にトレンチを設定し調査した。

調査を進めると、石材は形態より石棺であることが分かった。しかし、墳丘については山城として利用されたためか、判然としなかった。

斜面のトレンチからは遺構らしきものが、なかなか確認できなかつたが、調査終盤の9月下旬になると横穴がいくつか検出された。しかし、横穴墓の形態を呈しておらず、性格不明の穴であったが、その下方より横穴墓を検出した。

横穴墓を検出したことにより、その斜面には横穴墓群が検出される可能性があるため、調査範囲を拡大し、その斜面一面の調査を急遽実施したが、それ以外に横穴墓は検出することができなかつた。

調査は終盤になり横穴墓を検出するなどあわただしかつたが11月1日に調査を終了した。

しかし、調査終了後、道路建設のため同遺跡の掘削が行われると、丘陵先端斜面より横穴墓が検出された。急遽調査を実施した。

第2節 調査の結果

調査区の立地

本古墳群は、弥生時代後期の住居址や古墳が検出された屋敷古墳群、弥生時代後期の住居址が検出された北ヶ市遺跡の向かい側の丘陵尾根端部付近（標高およそ35mの丘陵尾根端部を中心に南および北東の斜面）に存し、北東側に宍道湖を望むことができる。

当調査区域面積は、約1,700m²である。

当調査区では古墳、横穴墓、山城跡、坑道状遺構を検出した。古墳、横穴墓、山城跡、坑道状遺構の順に各立地について記述したい。

古墳の立地

古墳を1基検出し、1号墳とした。

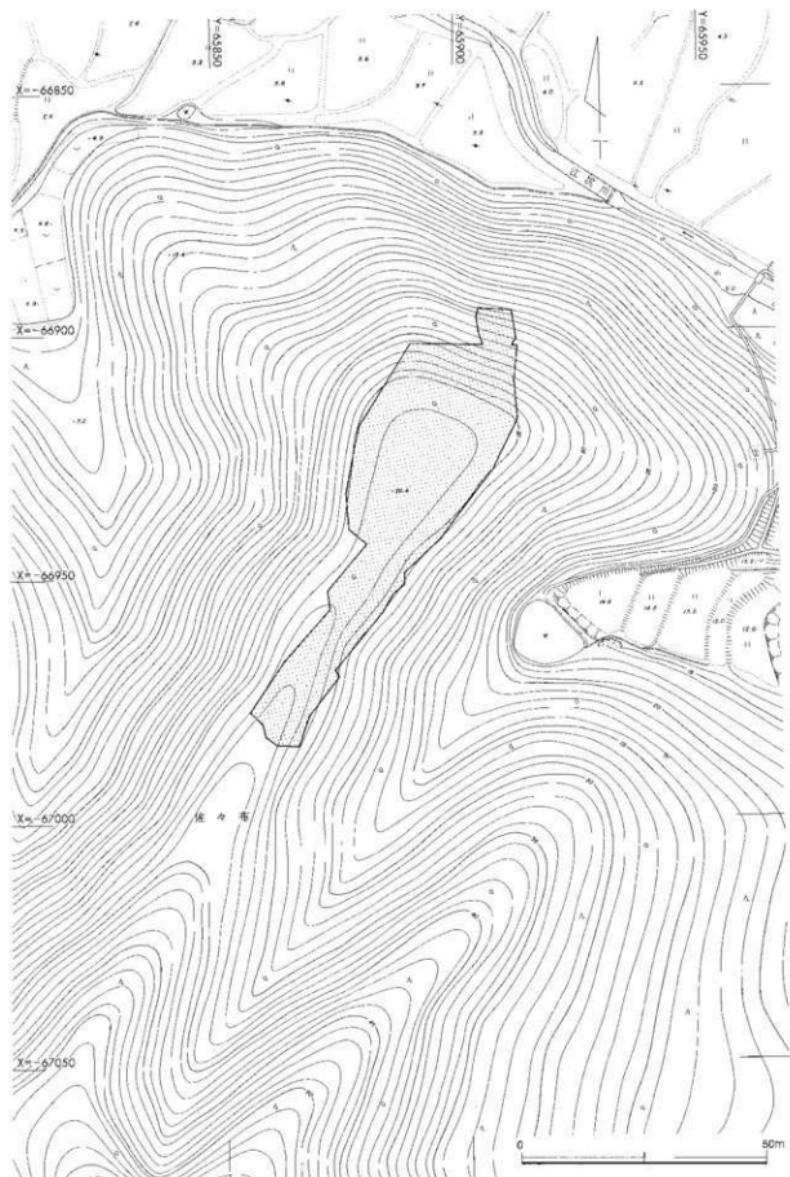
1号墳は、当調査区北東、標高約36mの丘陵尾根中央先端部に位置している。

横穴墓の立地

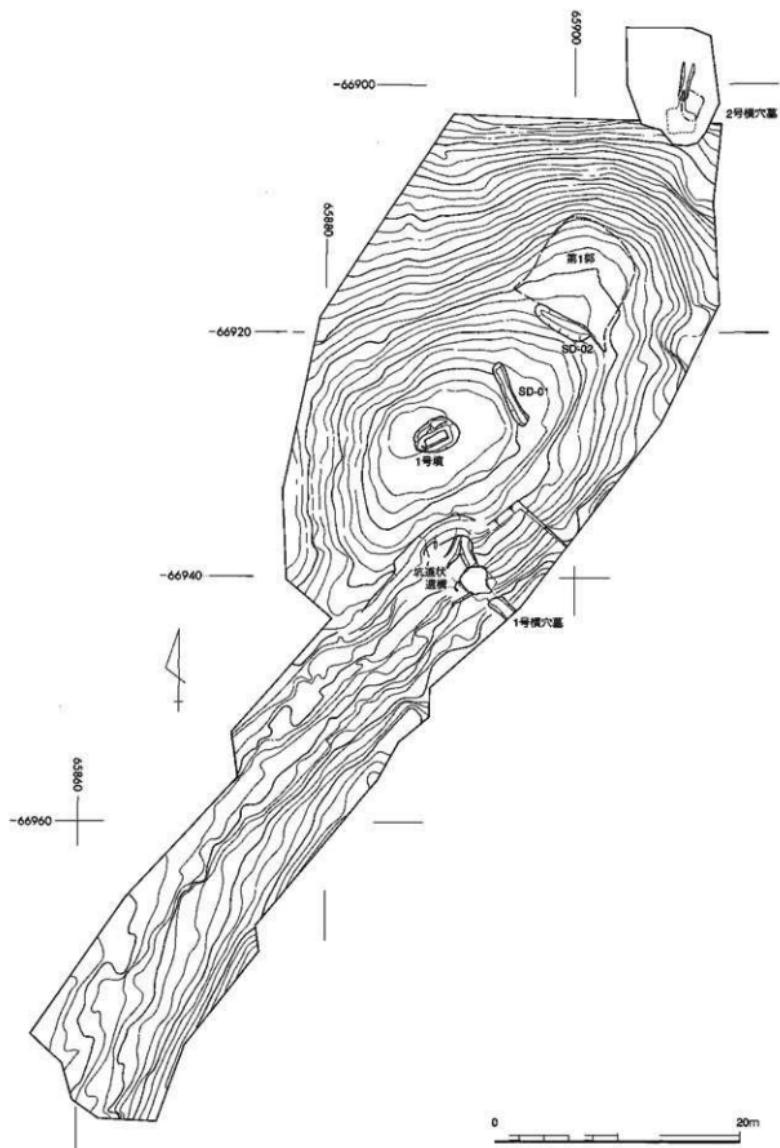
横穴墓は2穴検出した。それぞれ、1号横穴墓、2号横穴墓とした。

1号横穴墓は、当調査区中央南東、標高約32mの丘陵尾根南東側斜面に位置している。

2号横穴墓は、当調査区北東端、標高約24mの丘陵北東端斜面に位置している。



第105図 長廻古墳群調査前周辺地形図 (S = 1 : 1000)



第106図 長燃古墳群調査後地形測量図・遺構配置図 (S = 1 : 400)

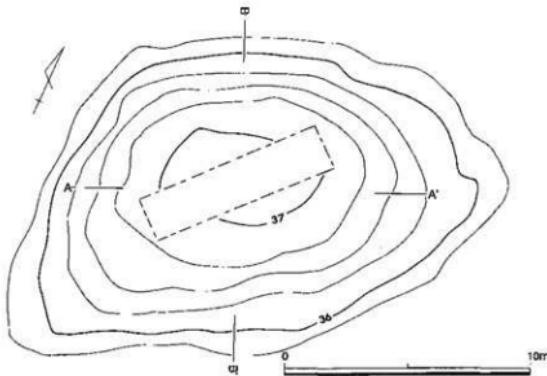
山城跡の立地

調査区北東、標高約35mの丘陵尾根北東端に山城跡と思われる平坦面（郭）が確認できた。

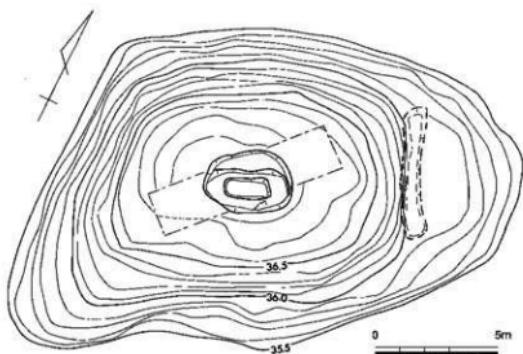
坑道状遺構の立地

調査区中央南東、標高約35mの丘陵尾根南東斜面、1号横穴墓の真上に、奥深くまで続く坑道状の遺構（以下、「坑道状遺構」と呼ぶ）が確認できた。

以下、古墳、横穴墓、山城跡、坑道状遺構の順で各遺構の概要について述べる。



第107図 長廻古墳群1号墳調査前地形測量図 ($S = 1 : 200$)



第108図 長廻古墳群1号墳調査後墳丘測量図 ($S = 1 : 200$)

1. 古墳の調査

1号墳

調査区の設定 測量調査を実施したところ、方墳の可能性が強かったため、各辺の中心と考えられる点を結んだ十字のラインを設定し、4つの区に分けて調査を実施した。

① 墳丘の概要（第108図）

規模・形態 1辺約5mの小形の方墳である。

墳丘の高さについては、墳丘が後世の山城造成により削平された可能性が強く、正確な数値は不明であるが、現状で約1mである。

当古墳の北西側斜面（穴道湖側）の墳裾は不明瞭であった。自然の丘陵傾斜を墳丘の一部として取り入れ、墳丘を大きく見せようとしたのではないかと考えられる。

周溝についても、後世の削平により正確ではないが、現状で墳丘北東直線状の溝を検出した。

墳丘からは、遺物は検出できなかつた。

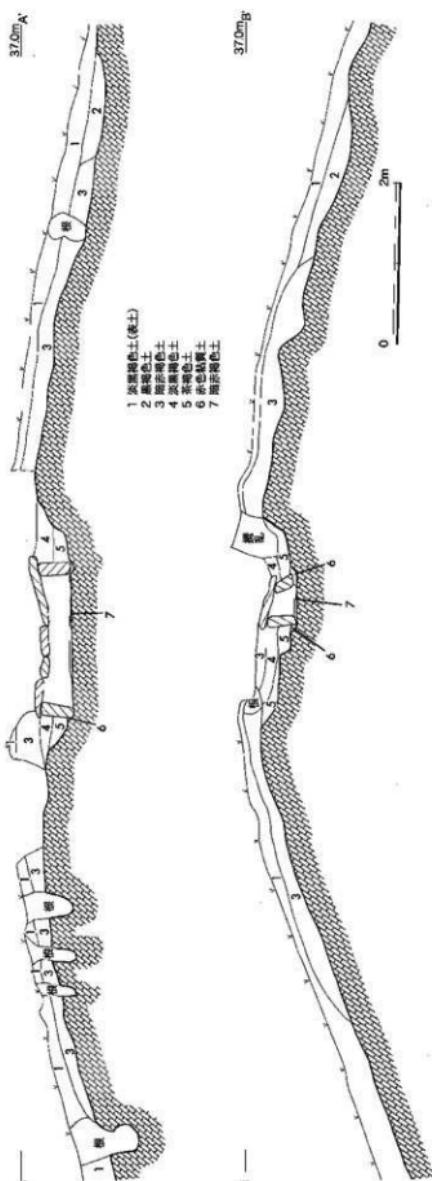
② 墳丘の築成（第109図）

墳丘築成の概要 後世の削平を受けているため判然としないが、基本的に地山を削って周溝を設けて、その残土を盛り上げて墳丘としたと推定される。

③ 埋葬施設

主体部の配置 主体部と考えられる石棺を墳頂中央付近に1基検出した。石棺の主軸はほぼ北東—南西に向いている。

墓壙（第114図） 地山を掘り込んで墓壙を設けたと考えられ、墓壙は、基本的に二段掘りで、平面形は長方形である。若干北東側の幅が広くなっている。



第109図 長延古墳群1号墳墳丘土層断面図 (S=1:60)

る。

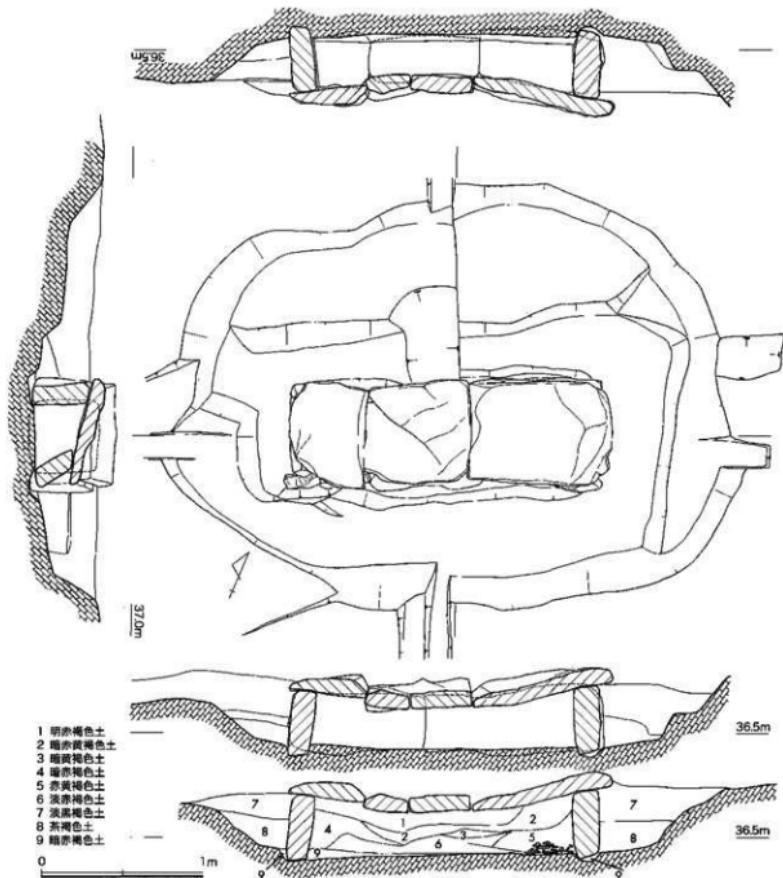
石棺（第110図・第111図）

石材 棺材に用いた石材は、いわゆる来待石である。

規模 石棺は墓壇のほぼ中央に位置している。南東側の側石が石棺内側へ傾いており正確な数値は不明だが、石棺の規模は内法で長さ1.62m、幅40cm、高さ33cmで、北東側が若干幅広くなっている。

棺身 棺の構造は側石で小口板を挟み込むタイプのものである。北西側の側石には2枚、南東側の側石には3枚の石材を使用している。両小口に掘り方を設けた後、石材を配置している。

石棺内部 南東側の側石が内側へ若干倒れており、そこから土砂が流入していた。



第110図 長廻古墳群1号墳主体部実測図(1) (S = 1 : 30)

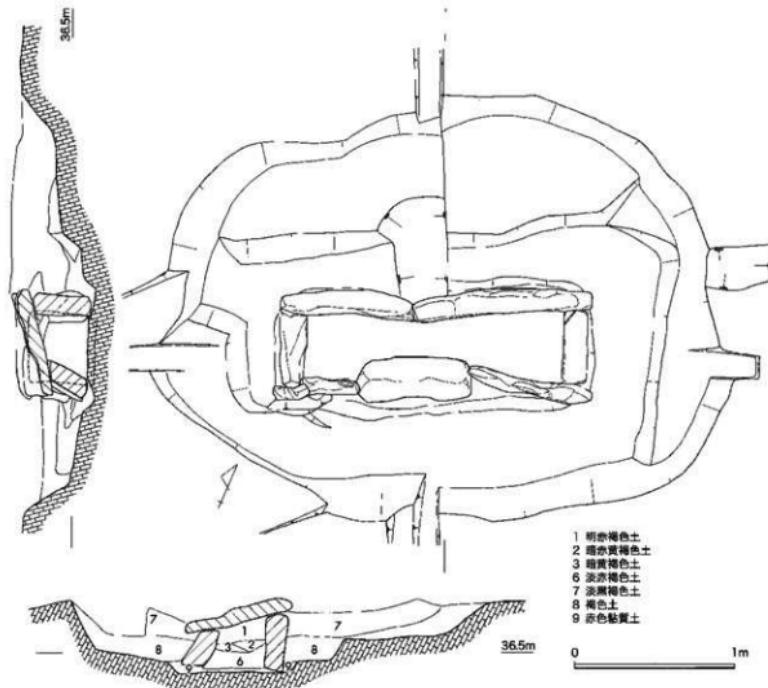
砾 石棺内北東端に親指大ほどの多数の砾が山状に積まれているのが確認された。その山の中央にはくぼみができるように積まれていた。ちょうど枕のような状態になっていた。

遺物の出土状況（第112図） 枕状の砾のすぐ南側の脇から刀子が出土した。

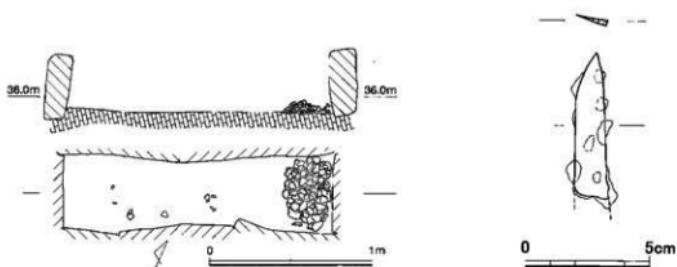
1号墳出土遺物（第113図）

詳細は遺物観察表に譲る。

年代 出土遺物が刀子1点のみであり不明である。

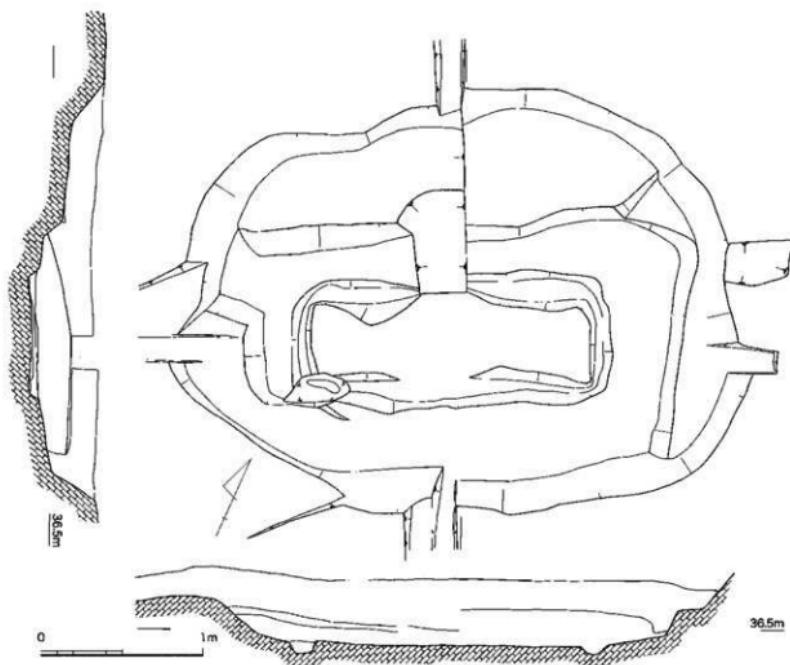


第111図 長廻古墳群1号墳主体部実測図(2) (S = 1 : 30)



第112図 長廻古墳群1号墳石棺内遺物・礫出土状況実測図
(S=1:30)

第113図 長廻古墳群1号墳
出土遺物実測図 (S=1:2)



第114図 長廻古墳群1号墳主体部掘方実測図(石棺除去後) (S=1:30)

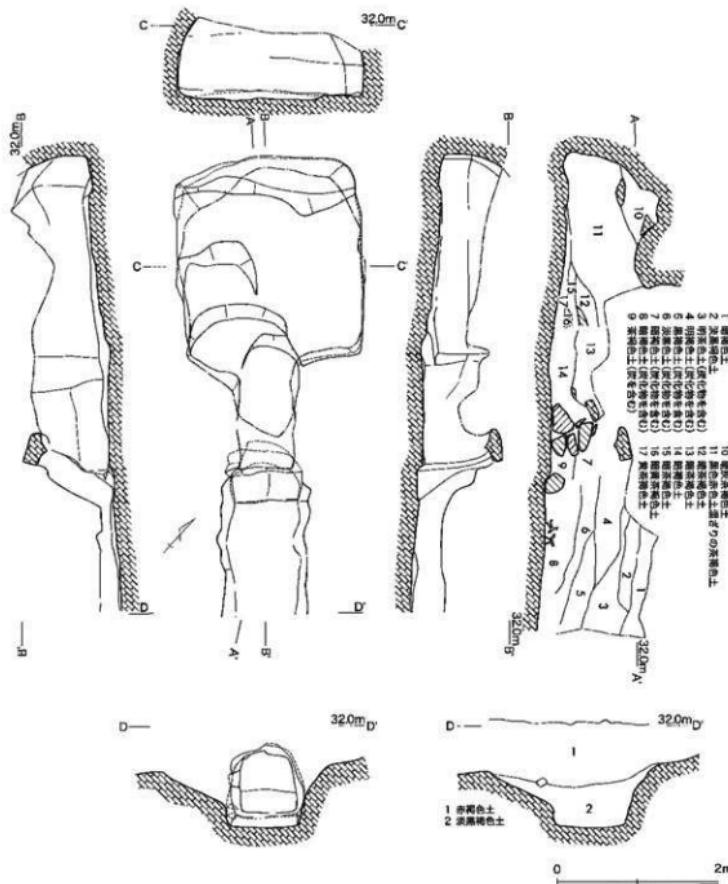
2. 横穴墓の調査

1号穴（第115図～第119図）

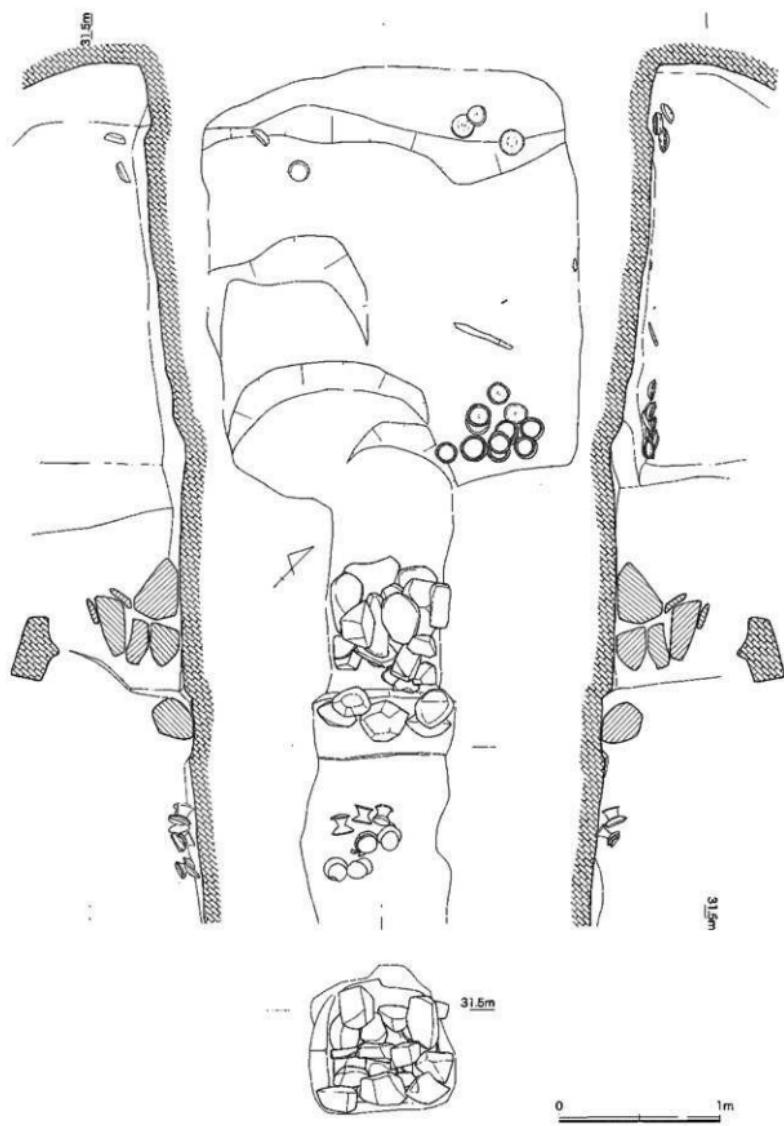
玄室が北西に向かって設けられており、ほぼ1号墳に向かっている。1号墳からは人骨は検出されておらず、1号墳が1号穴の後背墳丘である可能性もある。

南東向きに開口している。

前庭部 1号穴は調査区南東端より検出されており、前庭部の一部は調査区外にあり、前庭部全



第115図 長廻古墳群1号穴実測図 (S = 1 : 60)



第116図 長廻古墳群1号穴遺物・閉塞石出土状況実測図 (S = 1 : 30)

体の調査ができなかつたため、全容は明らかでないが、奥幅0.8mである。床面は羨道部に向かつて僅かな上りの傾斜となつてゐる。

玄門部 犬井部崩落のため高さ、断面形態は不明であるが、平面は奥幅0.8m、手前幅0.7m、長さ1.2mである。

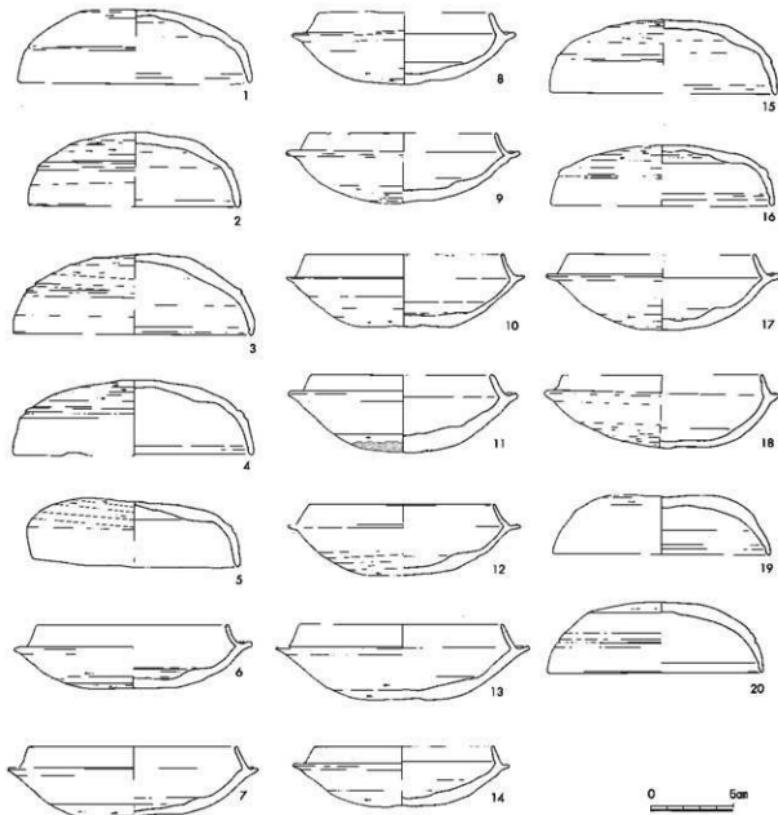
玄室 入口は前庭部の中央よりやや南西側に位置している。平面規模は奥壁側で2.2m、中央幅2.3m、袖側で2.1m、実行き2.7mで、やや縦長の長方形プランを呈する。犬井部崩落のため高さは不明である。四隅からは界線が立ち上がり稜線へと続く。

閉塞状況 閉塞石はいわゆる来待石で、人頭人の石を積み上げて閉塞している。

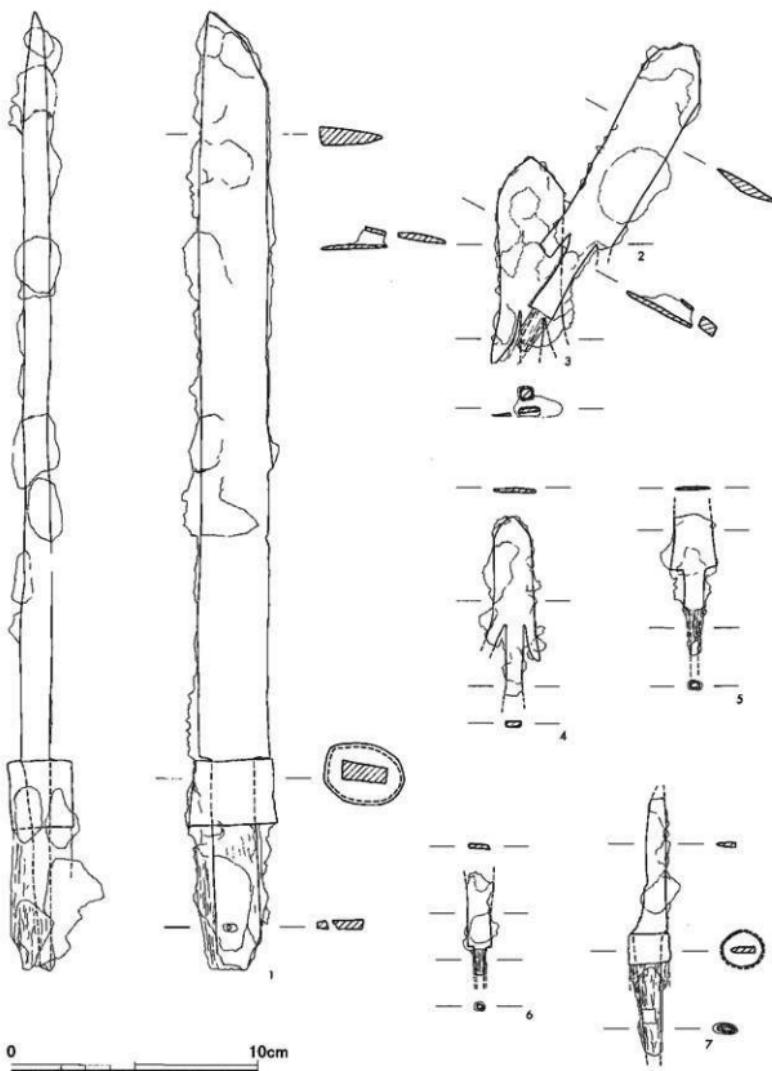
遺物の出土状況（第116図） 遺物は前庭部奥端部と玄室内からまとめて出土している。

前庭部では床面直上に須恵器の有蓋高杯が整然とまとめて出土した。

玄室内では入り口北側付近から須恵器の蓋杯が整然とまとめて出土した。中央北側付近からは大



第117図 長廻古墳群1号穴玄室内出土遺物実測図 (S = 1 : 3)



第118図 長廻古墳群1号穴出土遺物実測図 ($S = 1 : 2$)

刀や鐵など鉄製品が出土した。玄室奥壁付近からは須恵器の蓋環が点々と出土した。

玄室内出土遺物（第117図・第118図） 須恵器蓋環と鉄製品が出土している。

年代 蓋環の特徴から大谷編年の3期もしくは4期³であると思われる。

前庭部出土遺物（第119図） 須恵器蓋環と有蓋高环が出土している。1と3、2と10、4と5が整然と重なり合って出土した。詳細については遺物観察表に譲る。

年代 蓋環の特徴から大谷編年の出雲3～4期であると思われる。

2号穴（第120図～第123図）

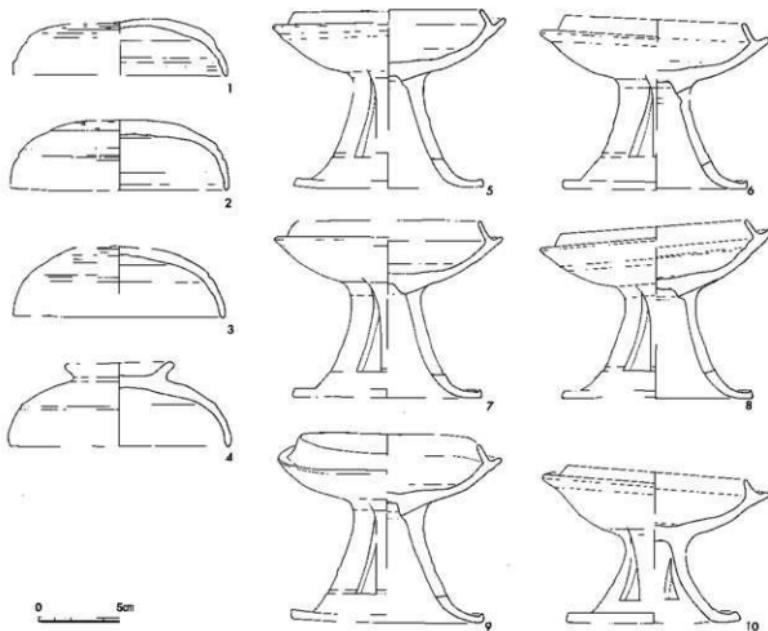
北向きに開口している。

前庭部 奥幅0.72m、中央幅0.3m、前端幅0.6m、奥行き3.36mで、平面形態は中央が狭くなっている。床面は前端部に向かって緩やかに下りの傾斜となっている。

玄門部 奥幅0.48m、手前幅0.42m、奥行き0.72mである。天井部崩落のため高さ、断面形態については不明である。床面中央には排水溝と見られる溝が検出された。

玄室 前庭部の主軸よりやや東側に振った状態で掘られている。入口は中央に位置している。幅は奥壁側2m、袖側2.1m、奥行き1.9mで、ほぼ平面形を呈する。入口付近の天井が崩落しているが、高さは1mである。4隅から界線が立ち上がり稜線へと続く。

閉塞状況 1号穴と同様、人頭大の来待石を積み重ねて閉塞している。



第119図 長廻古墳群1号穴（前庭部）出土遺物実測図（床面付近）（S=1:3）

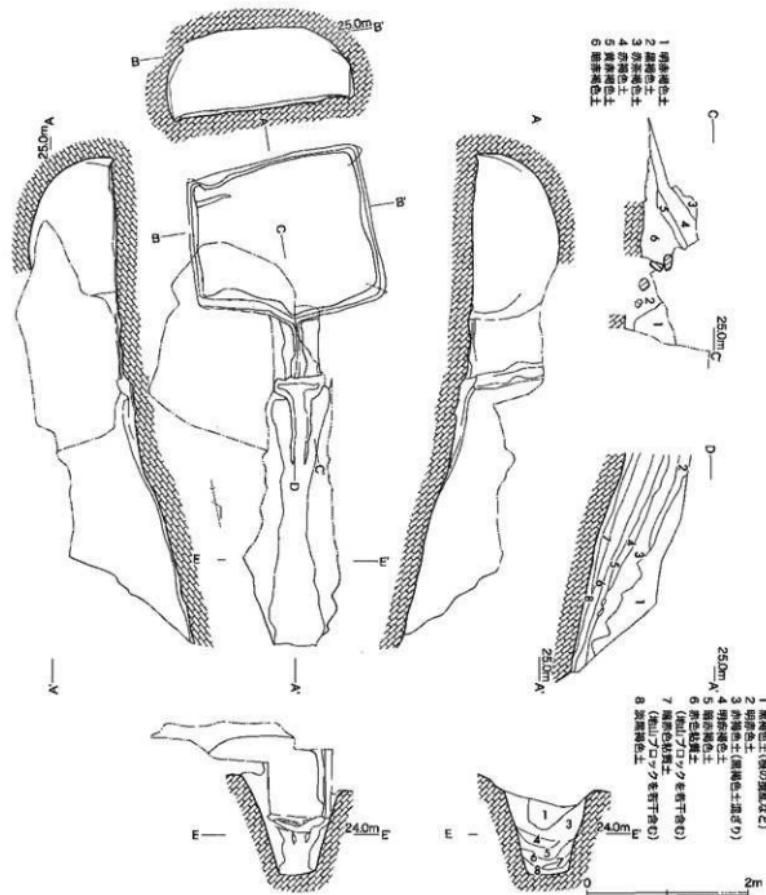
礫床 玄室の北西部分を除いた床面には親指大の礫が一面に敷かれていた。

人骨 奥壁側の礫床上には人骨が点々と出土した。

遺物の出土状況（第121図） 玄室内から須恵器蓋坏、鐵鎌が出上している。

玄室内出土遺物（第122図、第123図） 詳細については観察表に譲る。

年代 出土遺物が少なく判断が困難であるが、須恵器蓋坏の特徴から大谷編年の川雲3期ではないかと思われる。

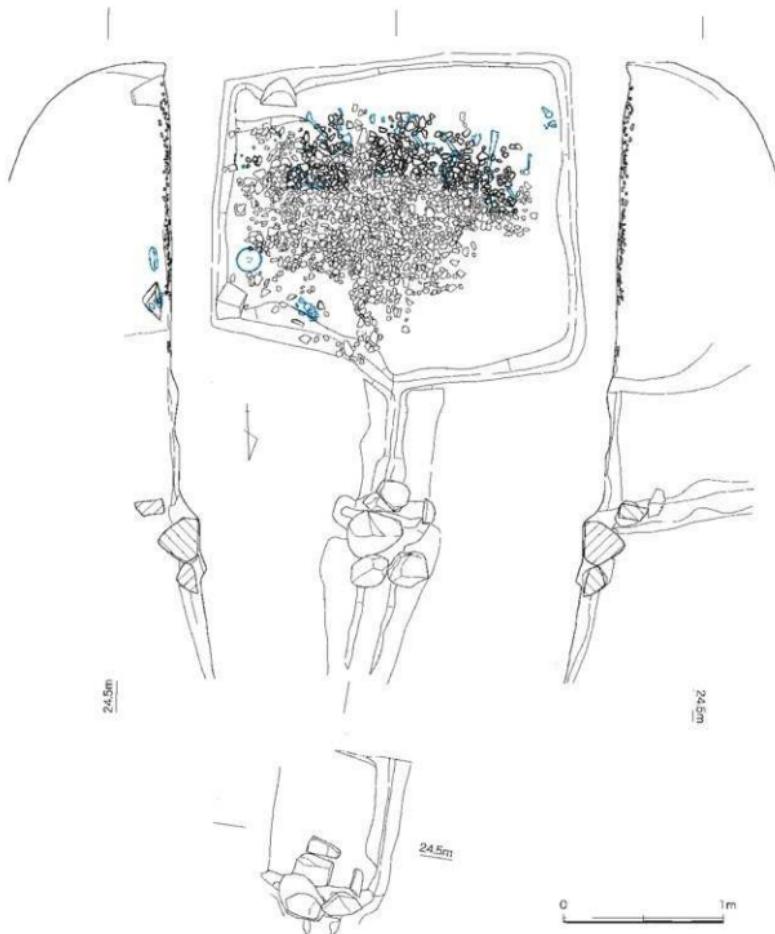


第120図 長廻古墳群2号穴実測図 (S = 1 : 60)

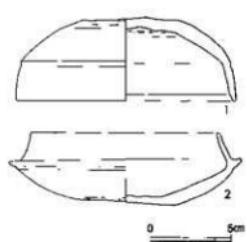
3. 山城跡の調査

第1郭（第124図～第126図）

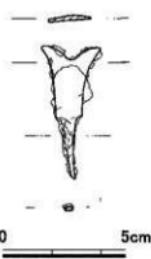
調査区の設定　測量調査を実施し、郭と思われる張り出し平坦面の各辺の中心と考えられる点を結んだ十字のラインを設定し、盛土の状況等を確認するため土肩を中心に調査した。



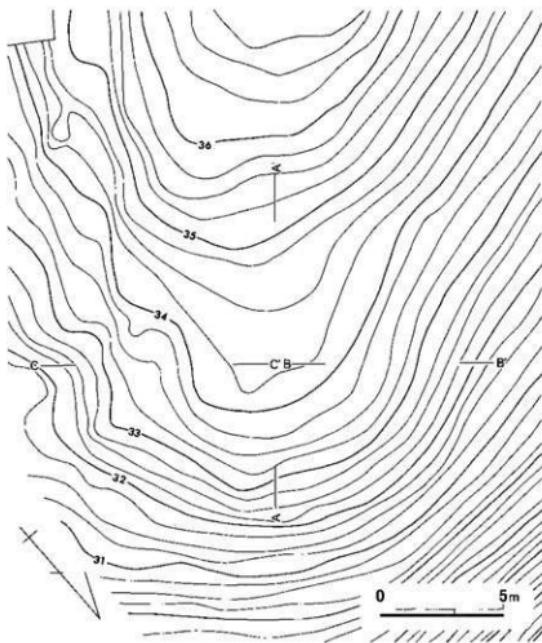
第121図 長崎古墳群2号穴遺物・人骨・閉塞石出土状況実測図 (S = 1 : 30)



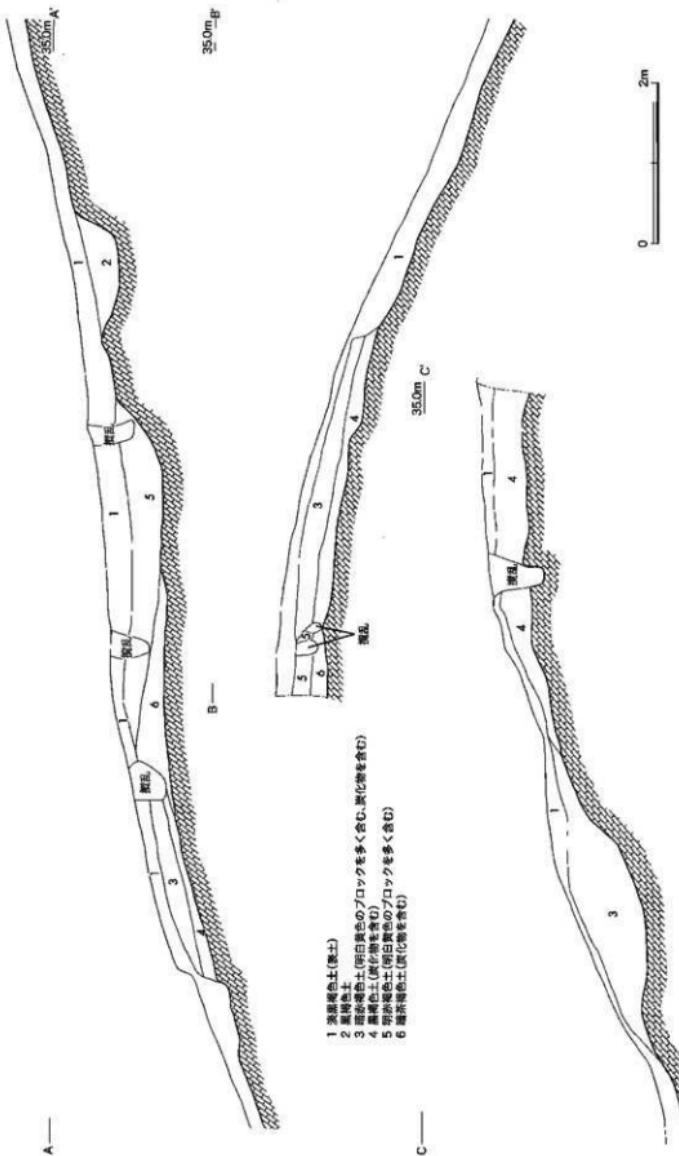
第122図 長廻古墳群2号穴玄室内
出土遺物実測図 ($S = 1 : 3$)



第123図 長廻古墳群2号穴
出土遺物実測図 ($S = 1 : 2$)



第124図 長廻古墳群第1郭調査前地形測量図 ($S = 1 : 200$)



第125図 長廻古墳群第1郭土壘断面図 ($S = 1 : 60$)

① 郭の概要

規模・形態 一辺8mの正方形プランを呈し、丘陵尾根側の裾には幅約1m、長さ約5m、深さ約40cmの溝が検出された。

② 郭の築成

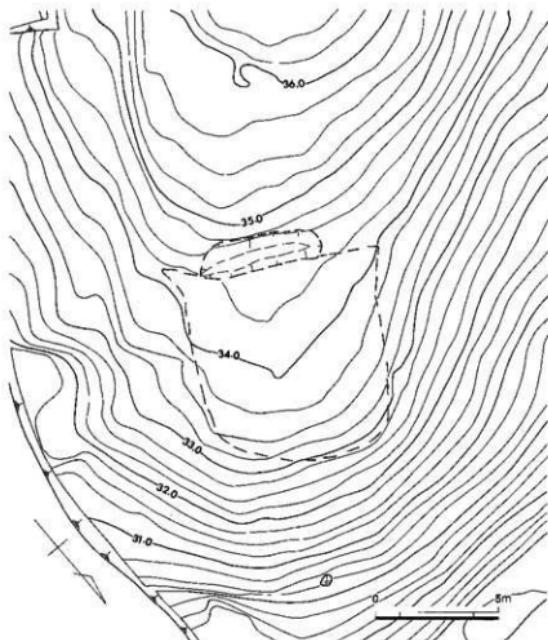
郭築成の概要 土層の状況から基本的に尾根側の斜面を削り、残土を前面に盛上し、平坦面を設けていたと想定される。

盛土の種類 基本的に周辺の地山を削りだしたものを利用していると考えられる。盛土は暗茶褐色土、明赤褐色土、黒褐色土、暗赤褐色土の4種類があると思われる。

年代 出土遺物がなく不明である。

4. 坑道状遺構の概要

1号穴の直上に位置していることもあり、当初穴が確認されたときは横穴墓として調査を進めていたが、横穴墓の形態をとっておらず、また穴が奥深くまで続いており、坑道状遺構とすることにした。この坑道状遺構は相当奥深くまで続いており、崩落の危険があつたため、また坑道状遺構の直上には1号墳もあり天井部を取り壊すこともできないため、調査は可能なところまで断念した。



第126図 長廻古墳群第1郭調査後地形測量図 ($S = 1 : 200$)



第127図 長迴古墳群坑道状遺構実測図 ($S = 1 : 60$)

基本的に3穴確認した。

1号穴の直上にある東側の穴には荒道らしきものが2ルート確認できた。

どの穴の入口前にも平坦面があり、穴は奥に向かって下がっている。

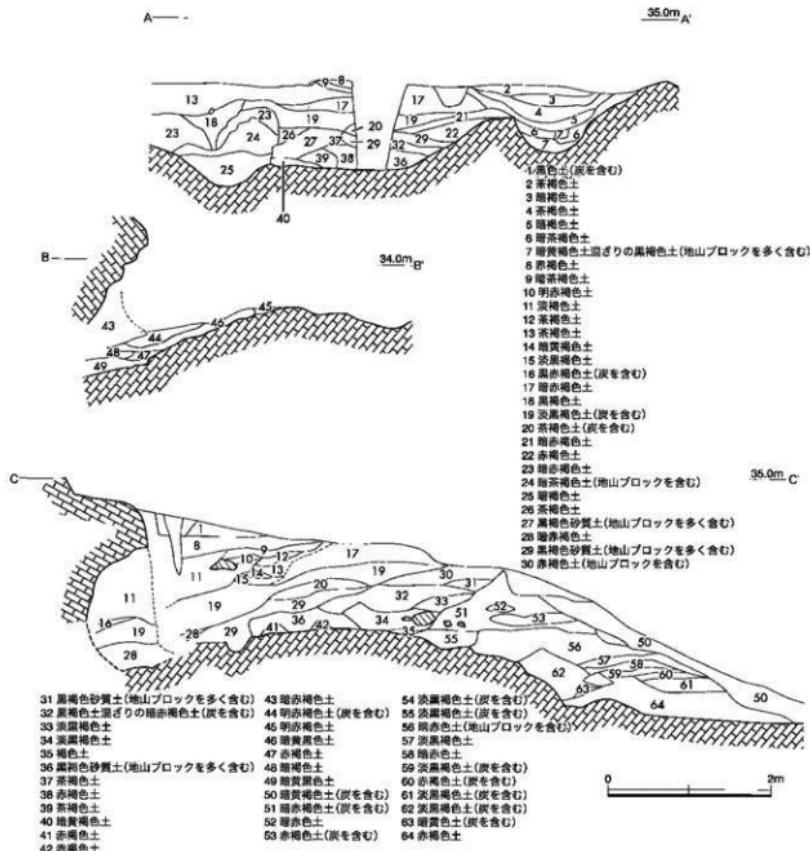
年代 出土遺物がなく不明である。

遺構外出土遺物（第129図）

詳細については遺物観察表に譲る。

第3節 小結

長廻古墳群で確認した遺構のうち、古墳及び横穴墓について整理し、小結としたい。



第128図 長廻古墳群坑道状構土層断面図 (S = 1 : 60)

1. 古墳

古墳は1基検出した。当古墳で特筆すべきことは、埋葬施設である箱式石棺内から検出した積み上げられた砾である。木県では、そのような遺構は確認されていないが、石枕と同様の性格のものではないかと推定される。資料の増加を待つて再検討されたい。

2. 横穴墓

横穴墓は2基検出した。1号穴と2号穴は位置する斜面及びレベルについても異なる。1号穴及び2号穴はどちらも単独で存在すると考えられるが、2号穴は調査区外の状況がわからぬため、今後の資料待ちとしたい。

横穴墓の構造については、1号穴及び2号穴とも狭長な前庭部で、狭道部と幅はほとんど変わらない。閉塞についても、どちらの横穴墓も人頭大の石が積み上げられていた。玄室形態については天井部が崩落しており詳細は不明だが、1号穴は縦長方形の平面プランを呈し、2号穴は正方形もしくは横長長方形の平面プランで家形を呈すると考えられる。

出土した須恵器から、1号穴は出雲3～4期に相当し、2号穴は出雲3期に相当する。2号穴の出土須恵器の数が少ないので断定はできないが、同じ出雲3期でも、2号穴の須恵器の方が、若干古い形態を呈していると思われる。出雲3期となると、1号穴、2号穴とも宍道町内での横穴墓では最も古い部類の横穴墓になるとを考えられる。

のことから、前述の1号墳は、古墳と横穴墓との位置関係、横穴墓の時期の古さ、単独の横穴墓であることなどから、1号穴の後背墳丘である可能性が高くなつた。

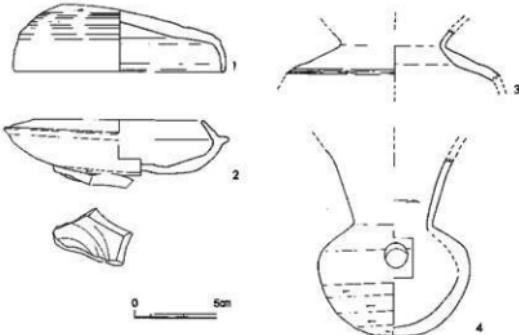
2つの横穴墓に共通な、狭長な前庭部で狭道部と幅が変わらない点、人頭大の石を積み上げて閉塞する点、及び単独で存在する点は、宍道町に導入された横穴墓の特徴であるかもしれない。ただ、資料が少なすぎるため、今後の資料の増加を待つて再検討すべきであろう。

註

1)『宍道町史 史料編』宍道町 1999

2) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地城色」『島根考古学会誌』第11集 1994

以下、出雲〇期と記したものはこの編年による。



第129図 長廻古墳群遺構に伴わない遺物測量図 (S = 1 : 3)

表6 長岡古墳群遺物観察表

発掘番号	種類	寸法(cm)		形態・手縫の特徴	出土場所・年月日	胎土・色調・組成	備考
		口径	底径				
117-1	漆器 杯(蓋)	14.2	4.8	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギ、ナギ	玄室内 取上No.15 98.11.2	3cmの大砂粒を含む 外縁：淡褐色 内縁：淡黃灰色 良好	
2	"	13.0	4.6	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ、ハ ナヨニシ、ナギ 内縁：四輪ナギ、ナギ	玄室内 取上No.19 98.11.2	1~2mm程度の砂粒を含む 外縁：淡青灰色 内縁：良好	
3	"	14.8	5.0	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギ、ナギ	玄室内 取上No.22 98.11.2	1~2mmの砂粒を含む 淡黃灰色 良好	跳躍時に少し変形
4	"	14.5	4.7	"	玄室内 取上No.13 98.11.2	2mmの大砂粒を含む 漆灰色 良好	
5	"	12.2	4.3	"	玄室内 取上No.20 98.11.2	3cmの大砂粒を含む 淡灰色(外縁直脚 淡青白色) 良好	やや変形
6	漆器 杯(蓋) (最大4.7)	11.4	4.0	"	玄室内 取上No.10 98.11.2	2mmの大砂粒を含む 淡青灰色(外縁 やや黄色) 良好	
7	"	12.5	4.6	"	玄室内 取上No.14 98.11.2	2mmの大砂粒を含む 外縁：淡青灰色 内縁：淡青灰色、良好	
8	"	10.5	4.5	"	玄室内 取上No.17 98.11.2	2mmの大砂粒を含む 淡青灰色 良好	
9	"	11.4	4.4	"	玄室内 取上No.16 98.11.2	2mmの大砂粒を含む 淡青灰色 良好	
10	"	12.1	4.5	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	玄室内 取上No.21 98.11.2	2mm以下の砂粒を含み直 外縁：淡青灰色 内縁：良好	へう鉢こしの痕跡あり
11	"	11.2	4.8	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	玄室内 取上No.18 98.11.2	1mmの大砂粒を含む 外縁：淡灰色 内縁：良好	外縁に付着物あり
12	"	11.3	4.4	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	玄室内 取上No.23 98.11.2	2mm以下の砂粒を若干含む 外縁：灰 内縁：良好	へう鉢こしの痕跡あり
13	"	12.5	4.7	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ、ハ ナヨニシ、ナギ 内縁：四輪ナギナギ	玄室内 取上No.24 98.11.2	2mmの大砂粒を含む 外縁：淡青灰色 内縁：良好	
14	"	11.9	3.7	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	玄室内 取上No.11 98.11.2	2mm以下の砂粒を含む 淡青灰色 良好	
15	漆器 杯(蓋)	13.8	4.6	"	玄室内 取上No.7 98.11.2	1~3mm程度の砂粒を含む 淡色 良	
16	"	13.6	3.8	"	玄室内 取上No.8 98.11.2	2mmの大砂粒を含む 淡青灰色(外縁 上部が淡青色) 良好	
17	漆器 杯(蓋) (最大14.3)	11.2	4.7	"	玄室内 取上No.9 98.11.2	1mmの大砂粒を含む 淡青灰色(外縁 上部は淡青色) 良好	
18	"	12.3	4.7	"	玄室内 取上No.19 98.11.2	1mmの大砂粒を含む 淡青灰色 良好	形態が変形している
19	漆器 杯(蓋)	13.0	3.7	"	玄室内 取上No.4 98.11.2	3mmの大砂粒を含む 淡青灰色(外縁 が高張) 良好	
20	"	13.1	4.4	"	玄室内 取上No.5 98.11.2	Jesse下の砂粒を含む 淡灰色 良	
119-1	漆器 杯(蓋)	12.9	3.6	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	漆器 取上No.1 98.10.29	2mmの大砂粒を含む 外縁：淡青灰色 内縁：淡青灰色 良好	外縁に付着物
2	"	13.2	4.4	"	漆器 取上No.3 98.10.29	Denzの砂粒を含む 外縁：灰色 内 縁：淡青灰色 良好	"
3	"	12.8	4.4	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ、ナ ギナギ 内縁：四輪ナギナギ	漆器 取上No.5 98.10.29	4mmの大砂粒を含む 外縁：灰色(一 部淡青色) 内縁：淡青灰色 良好	
4	"	13.2	5.2	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ、ナ ギナギ 内縁：四輪ナギナギ	漆器 取上No.6 98.10.29	4mmの大砂粒を含む 外縁：淡青灰色 内縁：淡青灰色 良好	輪状つまみ
5	漆器 杯(蓋) (最大4.4)	11.6	11.7	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	漆器 取上No.4 98.10.29	4mmの大砂粒を含む 外縁：灰色~淡 青色 内縁：淡青灰色 良好	三角削落かし3方向1 辺(少々変形)
6	"	11.2	10.8	"	漆器 取上No.5 98.10.29	4mmの大砂粒を含む 外縁：淡青灰色 内縁：良好	"
7	"	11.2	11.5	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	漆器 取上No.6 98.10.29	4mmの大砂粒を含む 外縁：淡青灰色 内縁：淡青灰色 良好	
8	"	11.4	11.9	"	漆器 取上No.7 98.10.29	4mmの大砂粒を含む 外縁：淡青灰色 内縁：良好	
9	"	11.1	11.8	"	漆器 取上No.8 98.10.29	5mmの大砂粒を含む 外縁：淡青灰色 内縁：良好	"
10	"	11.0	10.7	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	漆器 取上No.10 98.10.29	5mmの大砂粒を含む 淡青灰色(外縁 1/2強後部) 良好	三方向削落かし2方向1 辺(少々変形)
122-1	漆器 杯(蓋)	13.6	5.2	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ、ハ ナヨニシ、ナギ 内縁：四輪ナギナギ	漆器 取り上げ 98.10.21	1~3mm程度の砂粒を含む 淡白灰色 やや軟質	
2	漆器 杯(蓋)	11.6	4.5	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	漆器 取り上げ 98.10.21	1mmの砂粒を含む(×5.4mmの大石) 堅硬度(?) 淡白灰色 やや軟質	
122-1	漆器 杯(蓋)	13.1	4.2	外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギナギ	2号漆器東面第1層 98.11.17	2mm以下の砂粒を含む 淡青灰色 良好 痕跡時につぶれ、変形 している	
2	"	10.4	3.4	"	2号漆器東面第1層 98.11.11	1mmの砂粒を含む(?) 淡青灰色 内縁：良好	外縁に5mmの漆器 片付着
3	漆器 杯(蓋) 表面不規 則			内・外縁：ナギ	2号漆器東面第1層 98.11.17	1mmの砂粒を含む 淡青灰色 良好	外縁端部
4	漆器 杯(蓋)			外縁：四輪ナギ、回転ヘラケズリ 内縁：四輪ナギ	2号漆器東面第1層 98.11.11	4mmの大砂粒を含む 淡青灰色 良好	

(単位: cm)

漆器番号	種類	全長	頭部長 (刃部)	刃幅	刃部厚	出土場所・年月日	備考
113	刀子	6	1.4	0.2	1.4	1号塗石櫛内 取上No.1	
116-1	大刀	39.4	30.8	2.6	0.8	1号穴	
2	鉤鑓	14.3	10.4	2.1	0.4	"	
3	"	8.5	8.5	2.7	0.2	"	
4	"	7.4	5.9	1.7	0.2	玄室内 取上No.3	
5	"	5.8	2.3	1.5	0.2	漆器上No.2	
6	"	4.3	3.2	0.9	0.2	取り上げNo.2	
7	"	10.6	5.5	0.8	0.2	南東面第2層+床面上No.1	
123	"	5.5	3	1.8	0.2	2号穴玄室入り口付近	

第7章 海部城跡

第1節 調査の経過と概要

調査前から広い平坦面が広がっており、穴道町遺跡地図（穴道町教育委員会 1993）にも「海部城跡」となっており、山城跡であると想定されていた¹⁾。

現地調査は平成10年11月2日より開始した。

調査区内の樹木が伐採されて、調査区の全体像が把握できるようになつたため、平坦面の中心ラインに土層観察用のトレーニングを設定し調査を実施した。

調査を進むと、平坦面の土層は1層しかなく、また、さまざまな時代の遺物が混在して出土したため、後世に屋敷などに利用された可能性があることが分かった。

また、遺物の中には埴輪片が混在しており、遺構は確認できなかつたが、以前、古墳が存在したと想定された。

当初、山城跡ということもあり、遺物、遺構の検出はあまりないと考えていた。遺物についてはあまり検出されなかつたが、遺構については調査区東端より性格不明の穴を検出した。その穴からは人頭大の石が検出された。遺跡は後世の削平により丘陵東端（調査区東端）が途中で途切れており、この穴は、当時はもっと続いていたかもしれない。

山城跡ということもあり、遺物、遺構が少なく、12月21日に調査は終了した。

第2節 調査の結果

調査区の立地

国道54号線のためか丘陵先端部が切られているが、東にのびている標高約19m～24mの丘陵先端部上に位置している。

当調査区の面積は、約400m²である。

(1) 調査前の状況

調査前から国道54号線沿いにある現在の丘陵先端部に比較的広い平坦面が確認できつていて、立地条件、形状からも山城跡であろうと想定していた。

(2) 調査の結果

調査区の設定 郭と想定される平坦面の中央に、盛上等の状況を確認するため、等高線に直角となるラインを設定し、土層を中心とした調査を実施した。

調査の結果 調査区の範囲の関係と当丘陵が削平されていることから当時の郭の規模・形態は不明であるが、丘陵尾根側の裾には幅約2m～3m、深さ約50cmの溝と、調査区東端より性格不明の穴を3穴を検出した。

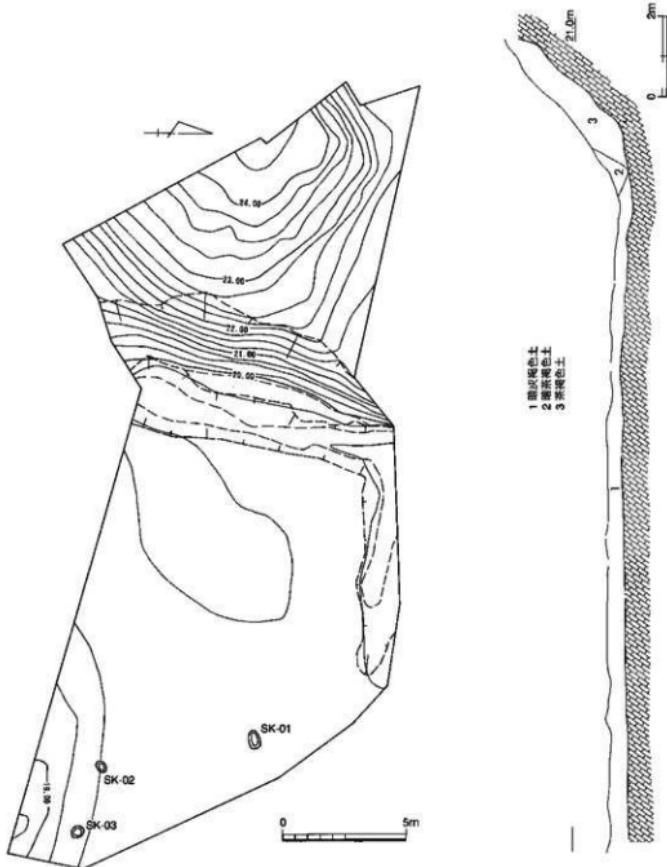
十層を見ると埋土は1層しかなく、またその十層よりさまざまな時代の遺物が数点混ざりながら出土しており、後世に削平、搅乱されている可能性がある。また、調査区南東端からは埴輪片と思われる遺物が出土し、当山城跡は古墳を取り壊して造成した可能性がある。ただし、その古墳の周溝などほかの手がかりは確認できなかつた。



第130図 海部城跡位置図 (S = 1 : 1000)

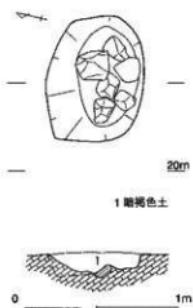
性格不明の穴3穴（SK-01、SK-02、SK-03）のうち、後世の削平によるためのかSK-01とSK-02の深さは約20cmと浅かった。しかし、この2穴からはこぶし大～人頭大の石が地山直上から検出された。これに比べ、SK-03は深さ約20cmと深く、ここからは石などは確認できなかった。

年代 遺構に伴う出土遺物がなく不明である。

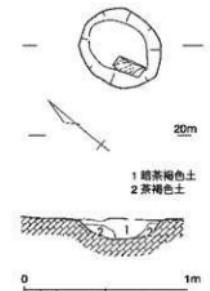


第131図 海部城跡調査後地形測量図・遺構配置図
(S = 1 : 200)

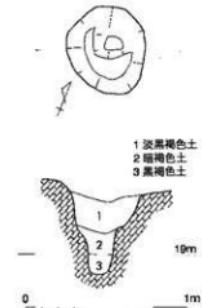
第132図 海部城跡縦断上層
断面実測図 (S = 1 : 120)



第133図 海部城跡
SK-01 (pitNo.4) 実測図
(S = 1 : 30)



第134図 海部城跡
SK-02 (pitNo.2) 実測図
(S = 1 : 30)

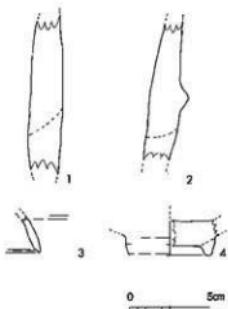


第135図 海部城跡
SK-03 (pitNo.1) 実測図
(S = 1 : 30)

出土遺物 遺構に伴う遺物がなく、遺物はすべて第1層から出土した。出土遺物点数が少なく、その中でも図化できる遺物は第136図の4点のみであった。1・2は埴輪片である。時期については残りが少ないと分からなかった。

図化できた埴輪片はこの2点だけであるが、他にも埴輪片はいくつも出土しており、山城造成前には古墳が存在した可能性を示した。3は須恵器片である。壺蓋の口縁部であると思われ、残りが少なく判然としないが、出雲2期もしくは3期^①であると思われる。

年代 遺構に伴う出土遺物がなく不明である。



第136図 海部城跡出土遺物
(S = 1 : 3)

第3節 小結

今回発掘調査を実施した海部城跡は、文献等の記録もなく、調査地が主郭部分から派生する尾根上の限られた部分であったので、また、後世に改変されているので、山城の規模や構造の全容を明らかにすることはできなかった。

ただ、ピットは調査区端より検出され、当時の平坦面は、もっと国道54号線にのびて広大なものであったということが分かった。

註

- 1) このほか、山根正明「海部城」『宍道町史 史料編』宍道町 1999に記載がある。
- 2) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

第8章 枇子観音I古墳群

第1節 遺跡の位置と調査の経緯・経過

杓子観音I古墳群は、八東郡穴道町佐々布3262-1外に所在する。斐川町との境界に近い穴道町の北西部に位置し、北西にのびる丘陵の頂部から西側斜面にかけて立地する5基の古墳からなり、調査時は山林となっていた（第137図）。分布調査では、5基の古墳のうち今回発掘調査を実施した1基（以下、1号墳とする）について前方後円墳の可能性が指摘されていた。標高は、本古墳群内の最高所で51mである。

周辺には、同一の丘陵の東側尾根上に基の古墳からなる杓子観音II古墳群¹⁾、3基の古墳からなる小佐々布古墳群²⁾があり、この付近が丘陵の最高所となり標高約60mである。また丘陵北西の先端付近には第7章で記した足頭古墳群が位置するほか、隣接する北東斜面に杓子観音I遺跡³⁾、谷を挟んで北東側には古墳時代～平安時代の集落遺跡である荻田遺跡⁴⁾が存在した。このように、本古墳群周辺には、比較的小規模な古墳群や、古墳時代以降の集落などの遺跡が散在している。

本古墳群は、主要地方道穴道インター線改築工事に伴い発掘調査を実施したものである。この事業に伴う発掘調査は平成10年に実施しており報告書作成を残すのみとなっていたが、平成12年8月に本古墳群の所在する丘陵で地滑りが発生し、2基の古墳が崩壊、1号墳にも地割れが生じ、再度地滑りが起きるおそれがあった。当時、古墳群北側の隣接地で主要地方道穴道インター線の改築工事が進められており、地滑りの発生による工事への影響が懸念されたため、急遽発掘調査を実施した。調査は平成12年9月18日から測量調査を開始し、9月25日から掘り下げを行った。測量調査の結果、方墳の可能性が高まったことと、測量調査終了後に地面に新たな亀裂が見つかったことから掘り下げは測量範囲南側の高まりについて実施した。9月29日には主体部を検出し、10月6日には完掘、10月13日には全景写真撮影を行い、調査後の地形測量を実施して調査を終了した。現地調査期間中には、大きな地滑りは起きたものの基準杭の高さが10cm程度ずれるなどの影響があった。なお、10月6日の鳥取県西部地震発生時は墳丘上で主体部の実測中であったが、幸い調査員にも遺構にも被害はなかった。発掘した面積は最終的には150m²であった。

第2節 調査の結果

墳丘と土層堆積状況（第138図～第140図）

1号墳は西へのびる丘陵が北西へ派生する分岐点付近の頂部に立地し、標高は墳頂部で約50mである。墳形は方墳と見られ、南側が広くなる不整形な長方形を呈する。規模は8～13m×15mと推定され、丘陵がのびる方向が長くなっている。墳丘の高さは1m～1.5mであるが、地滑りが発生するようなゆるい地盤であることから、盛り上がりが流出したことが想定された。上層堆積状況は、地山までの深さが10cm～30cmと浅く、明らかな旧表土や盛り土は認められないが、墳丘東側の土層観察用ベルトでは、先端付近でわずかながら地山を削り込んだような十層や盛り土の可能性をもつ層が観察できた。北側ベルト北端でも、地山風化土が急激に落ち込む部分があり、この付近が墳端ではないかと考えられる。主体部は1基を確認した。

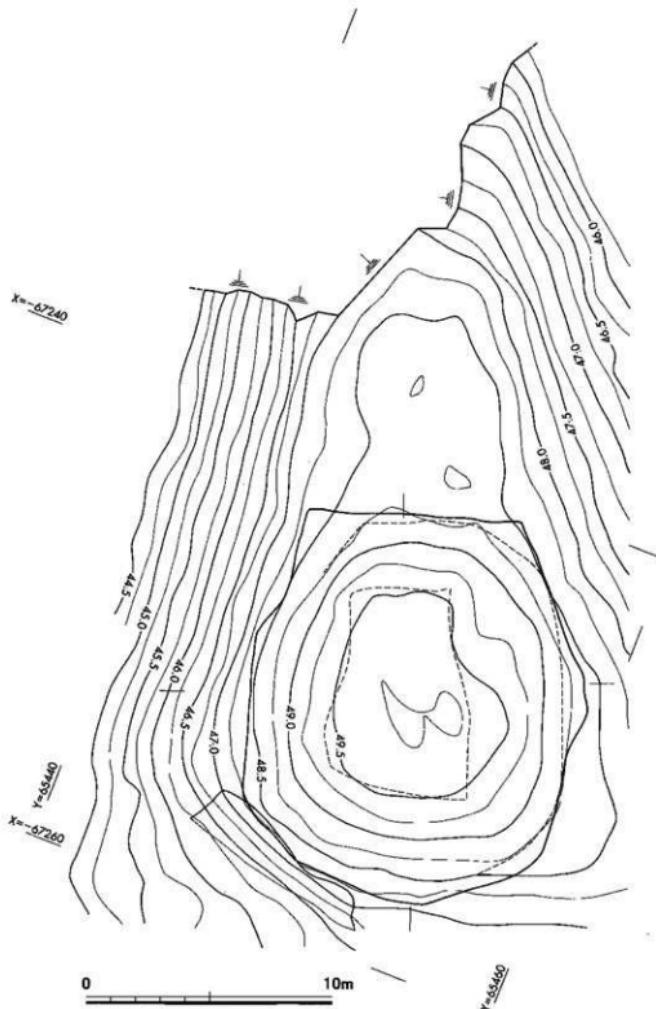
主体部（第141図）

主体部は、箱形木棺と推定され、墳頂平坦面中央からやや東寄りで検出した。墓壙は、主軸を墳丘の長軸方向からわずかに東へ振る。規模は長さ4.6m、幅は北側で1.4m、南側で1.7mと南側がやや幅広となる長方形を呈する。深さは0.3～0.5mである。墓壙の側壁には、幅10cm～20cmのテラス

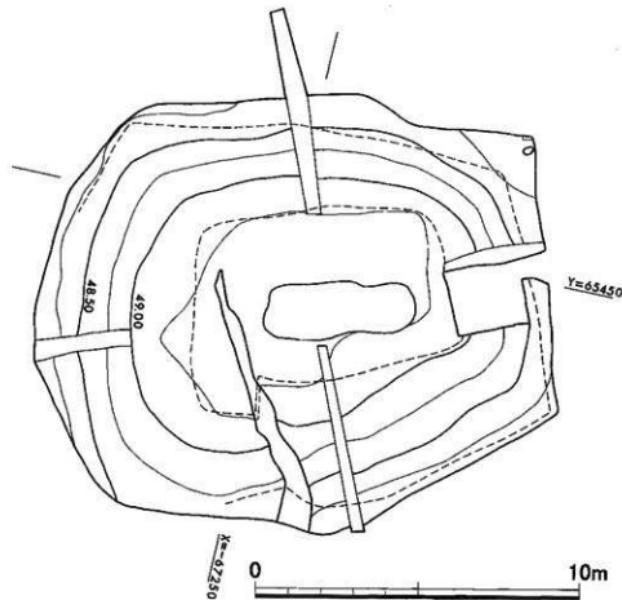


第137図 枇子観音I古墳群・枸子観音I遺跡調査区位置図 (S = 1 : 2500)

状の加工が施され、南西側の一部では小口側へ回り込んでおり、一見二段掘り状を呈する。墓壙下端部には底面壁沿いを全周する幅10cm～40cm、深さ約10cmの溝が掘り込まれ、墓壙中央が高くなるように掘り残されている。この範囲は棺底を示すと考えられ、棺の内法とほぼ一致するものであろう。範囲は現状で2.4m×0.5mで、わずかに南側が広くなっている点、また北側に低く傾斜している点から、南頭位であったと見られる。

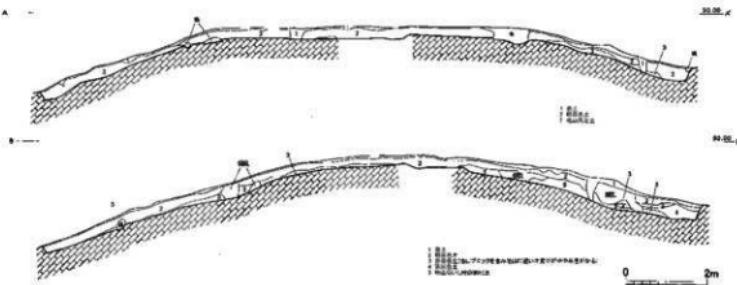


第138図 枝子観音I古墳群1号墳地形測量図 (S = 1 : 200)

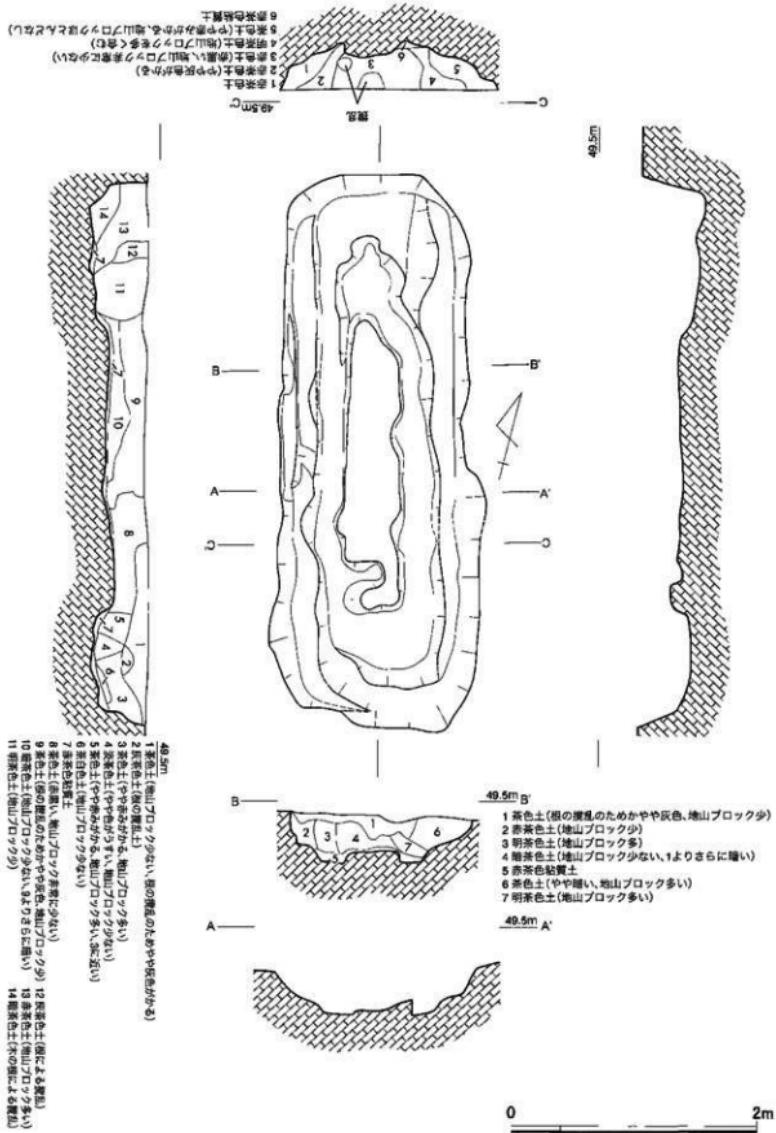


第139図 純子観音I古墳群1号墳調査後地形測量図 ($S = 1 : 150$)

墓壇内の土層観察では、棺の明確な痕跡を確認することはできなかったが、木棺の規模を推定できる層が認められた。縦断面の土層では、墓壇底面中央の高まりに接するように地山のブロックを含む茶色上（5層、11層）、溝内及び底面中央の一部にかけて粘質土（7層）が存在し、横断面でも同様の堆積が観察されている。地山ブロックを含む層は、木棺が腐朽した後そこに流入した土ないし木棺の裏込めに使用された上と考えられる。溝内と棺底で検出された粘土層については詳細は不明であるが、棺材が存在したと見られる位置から見つかっていることから木棺との何らかの関係



第140図 純子観音I古墳群1号墳土層断面図 ($S = 1 : 120$)



第141図 枇子観音I古墳群1号墳主体部実測図 ($S = 1 : 40$)

が想定される。なお、墓壙底面の溝は墓壙側壁に沿って小口側の下端まで達しており、棺底の小口側に掘り込みが認められることから、両側の側板で小口板を挟むタイプのものと考えられる。

出土遺物 今回の発掘調査では、上器、鉄器などは出土しなかった。墳丘の調査中に石材1点と、主体部底面近くで石を1点検出したが、いずれも人為的な加工は認められない。主体部から出土した石は自然石で、加工痕、顔料の痕跡なども認められないが、調査区周辺で見られる石ではないため、自然に落ち込んだものではなく、外から持ち込まれた可能性も考えられる。

第3節 小結

今回の調査では、方墳1基を検出した。墳丘に対して墓壙の規模が大きく、主体部は二段掘り状の構造をとるもので、底面には棺材を据えるためのしっかりした溝を巡らせていました。

底面に溝を有するこのような墓壙は、周辺では長廻古墳、足頭2号墳、同3号墳第2主体部などで確認されているが、いずれも棺は箱式石棺を採用するもので、箱形木棺を主体部とする類例がない。今回の調査では石棺材が確認できなかったこと、上層観察でも石棺材が抜き取られた痕跡は認められなかったことから、棺には箱形木棺が使用されたと推定したが、検出例の増加を待って検討すべき問題である。

古墳の時期については、墳丘、墓壙いずれからも遺物が出土していないため判断は困難である。杓子觀音I古墳群に属する他の古墳も未調査で、遺物も採集されていないため時期推定の材料とはならないが、同一丘陵の北側先端付近に位置する足頭古墳群が古墳時代前期～中期とされることから、この古墳も足頭古墳群とほぼ同じ時期と見ておきたい。

古墳が所在する佐々布地区には、上師器を出土し前期古墳とされる佐々布下1号墳が存在し、古墳時代前期末には南北約2kmに上野1号墳が築かれる。中期以降、周辺の各地域でも古墳が築造されるようになるが、前期古墳からの流れを追うことができるこの地区で新資料を加えることができた。

註

- 1)『宍道町遺跡地図』宍道町教育委員会 1993
- 2) 註1と同じ
- 3) 註1と同じ
- 4) 村上勇「宍道・荻田住宅団地遺跡（I・II）」『島根県埋蔵文化財調査報告書』XII・XIV
1986・1988
- 5)『宍道町歴史資料集』古墳時代編I 宍道町教育委員会 1993
- 6)『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』中国横断道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 島根県教育委員会 2001

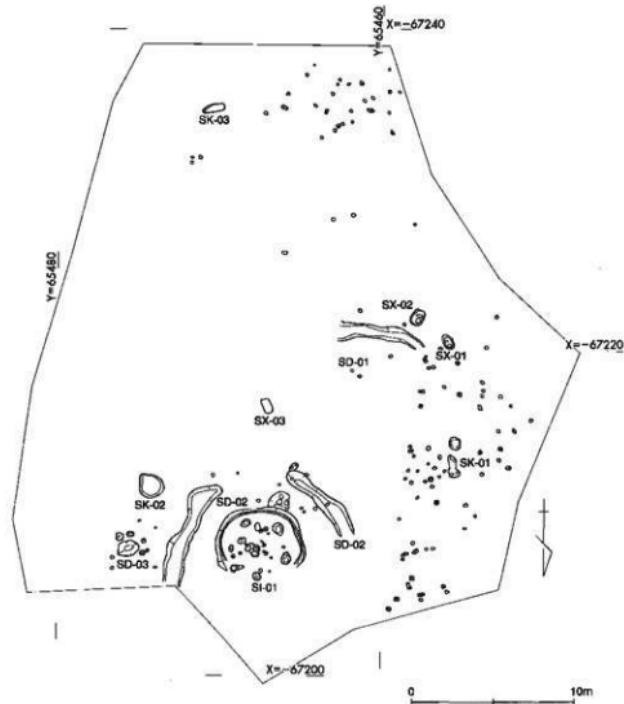
第9章 杓子觀音 I 遺跡

第1節 杓子觀音 I 遺跡の調査の経過と概要

調査の経過

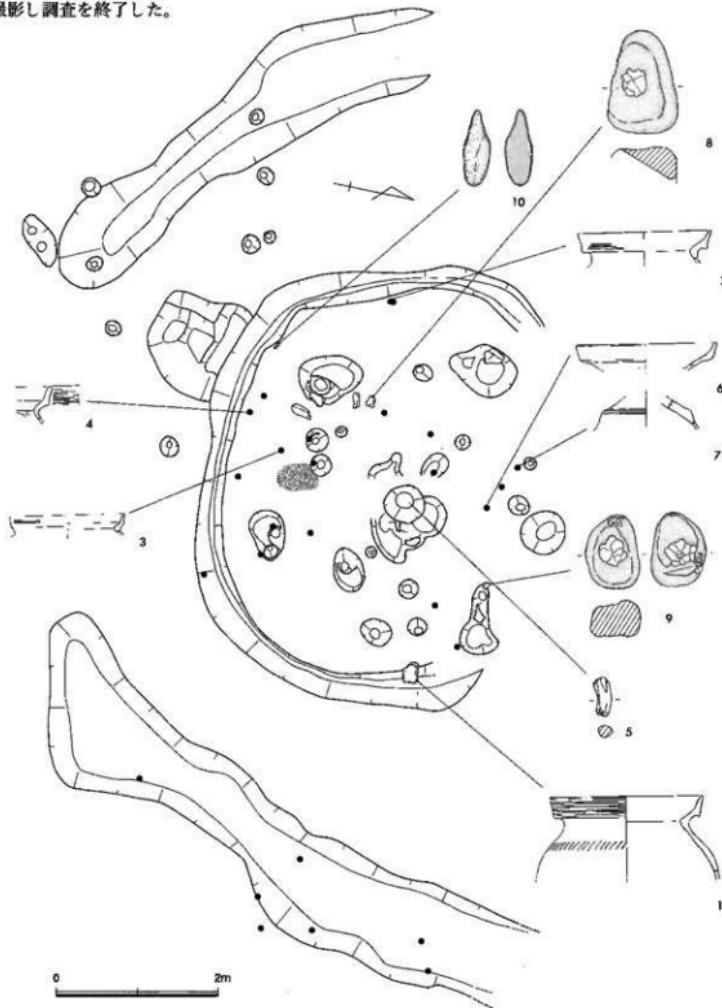
杓子觀音 I 遺跡の調査は、穴道インター線の敷地内に地滑りによる亀裂が確認され、平成13年9月に10ヶ所のトレンチを設定して、試掘調査を行った。その結果、石器、弥生土器、中近世の遺物が出土し、本調査に着手した。

調査は、立木の伐採の後に調査対象地全面の表土を除去し、10月22日から発掘調査を行った。体を動かすと汗ばむような気候の中で表土を除去し、調査区のほぼ中央部から五輪塔の石材が確認された。本調査は、調査区の北側の斜面の低い方から、人力掘削により精査を行いながら南側の斜面上部へと進めていった。暗褐色の土を除去すると、黄褐色の地山に掘り込まれたビットが多数確認された。また、斜面の下方において大きな黒色のプランが見られ、住居址の存在が確認された。住居址と思われる場所の近くからは土器片も数点出土し、その位置を記録しながら掘り進めた。斜面の中央部の五輪塔が確認された場所では、長方形のプランが確認された。

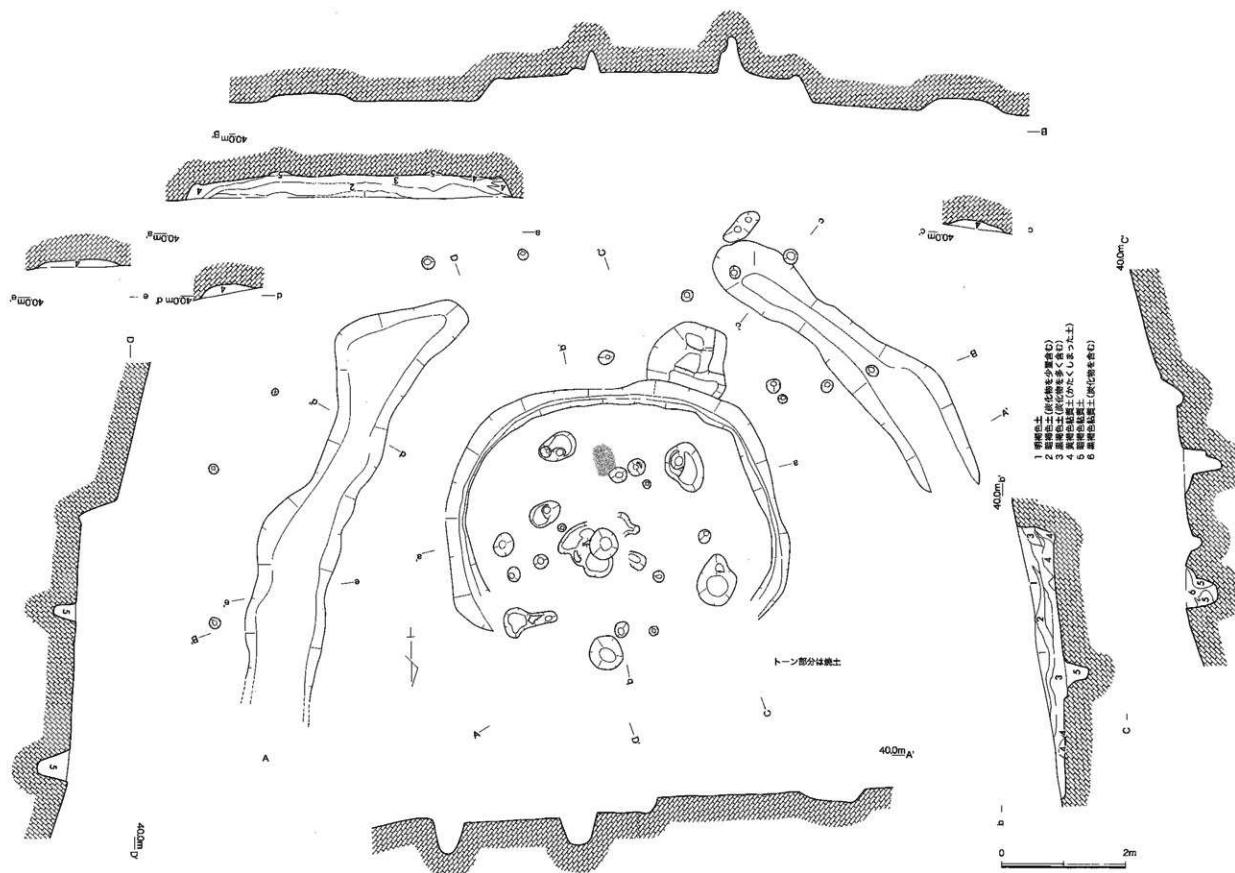


第142図 杓子觀音 I 遺跡遺構配置図 (S = I : 300)

堅穴住居を検出したところ、その外側に暗褐色の土が巡り、溝状の遺構が確認され、住居址を取り巻く溝であることが判明した。調査区中央部の長方形のプランは掘り下げるに、壁が全面赤く焼けており、底には石が敷かれており同様に焼けていた。同じような遺構は、全部で3基確認している。ピットは調査区の西側の斜面に集中することが判り、順次検出していった。11月28日、休憩用の小屋ではストーブが必要な寒さとなる頃、住居址の図面を記録し、北側の丘陵部から全景写真を撮影し調査を終了した。



第143図 勅子観音I遺跡S I - 01・SD - 02遺物出土状況 (S = 1 : 60)



第144図 勾子御音I遺跡 S I-01・S D-02実測図 (S = 1 : 60)

第2節 調査の概要と結果

1. 調査の概要と遺構の配置

杓子観音I遺跡は北向きの斜面に位置している。この緩斜面は、北東方向に開く谷へと続いており、昭和48年に調査され住居址が検出された荻田遺跡がある。斜面上部の丘陵の西側、南側頂上には杓子観音古墳群が位置している。

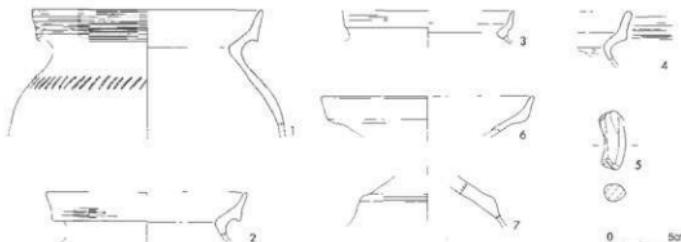
遺構は、斜面の北側において竪穴住居跡1（S I - 0 1）、中央部において中近世の火葬墓3（S X - 0 1～0 3）、時期不明の土坑3（S K - 0 1～0 3）、西側において溝1（S D - 0 1）、ビット多数を検出している。調査区の東側に南北方向に伸びる地滑りによる段差が見られるが、この場所から遺構は検出していない。

2. 調査の結果

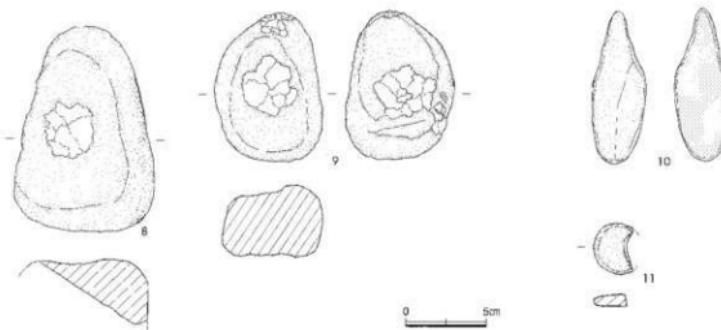
S I - 0 1 (第144図)

調査区の北側、標高40mの北向きの斜面に位置している竪穴住居跡である。住居跡の位置する場所の斜面は、谷筋の中央にあり傾斜が緩やかである。

掘り方の位置と柱穴の配置に多少のずれが見られるものの、主柱穴4本で平面が隅丸方形である。規模は床面の壁体溝の内側で長軸5.0m、短辺4.3m以上である。竪穴の東西の外側1.2～1.5mの場



第145図 杓子観音I遺跡S I - 0 1出土土器実測図 (S = I : 4)



第146図 杓子観音I遺跡S I - 0 1出土石器実測図 (S = I : 3)

所に溝が巡っている。南側の高い場所では溝が途切れている。住居跡の北側の斜面下側は流失のため遺構が確認できなかった。本来の地山が傾斜しており、堅穴は盛り土により堆積が作られていたと考えられる。堅穴の中に堆積した土は、上層から明褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黄褐色粘質土の順に堆積している。

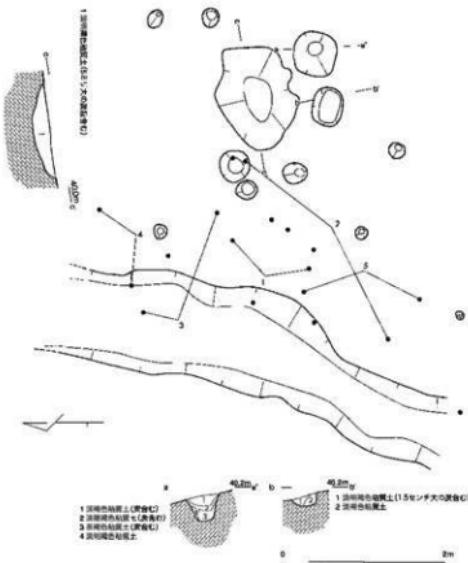
柱穴の規模は、P 1 が $60 \times 80\text{cm}$ 、深さ 60cm 、P 2 が $70 \times 80\text{cm}$ 、深さ 50cm 、P 3 が $50 \times 55\text{cm}$ 、深さ 50cm 、P 4 が $35 \times 55\text{cm}$ 、深さ 35cm であり、P 4 だけ深さが浅くなっている。柱間距離は 2.2m で、P 3 と P 4 の間が 2.4m である。床面のほぼ真中に中央ピットがある。中央に円形の深いピットがあり、その周囲に浅い落込みが取り囲む形となっている。中央ピットの深さは、 40cm である。P 1 と P 4 の中间の床面が $50 \times 30\text{cm}$ の範囲で焼けており、赤く変色している。

堅穴の南西コーナーのから外へ向けて幅 1.3m 、長さ 1.0m の落込みがみられる。この中は階段状に加工されており、合計 3 段が確認された。住居の斜面上部に向けての入り口と考えられるもので、住居外の溝もこの部分は途切れている。

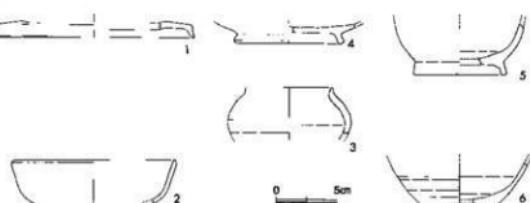
堅穴の外側の溝は、東西に分かれ、弧状に曲がる形で掘られている。西側は、幅 $0.6 \sim 1.2\text{m}$ 、深さ 0.15m である。東側は、長さ 7m 以上、幅 $0.8 \sim 1.45\text{m}$ 、深さ 15cm である。

遺物出土状況（第143図）

堅穴内からは、土器、石器が出土している。P 1 と P 4 の間で弥生土器（3, 4）、石器（8, 10）が出土している。中央ピット内から、弥生土器（5）が、P 3 の付近から弥生土器（6, 7）が出土し、床面の東端で弥生土器・甕（1）が口縁部を上に向けて出土している。土器は床面から、やや浮いた状態で出土している。図示出来なかった土器片は、堅穴の中央部と住居を取り巻く東側の溝内から出土している。



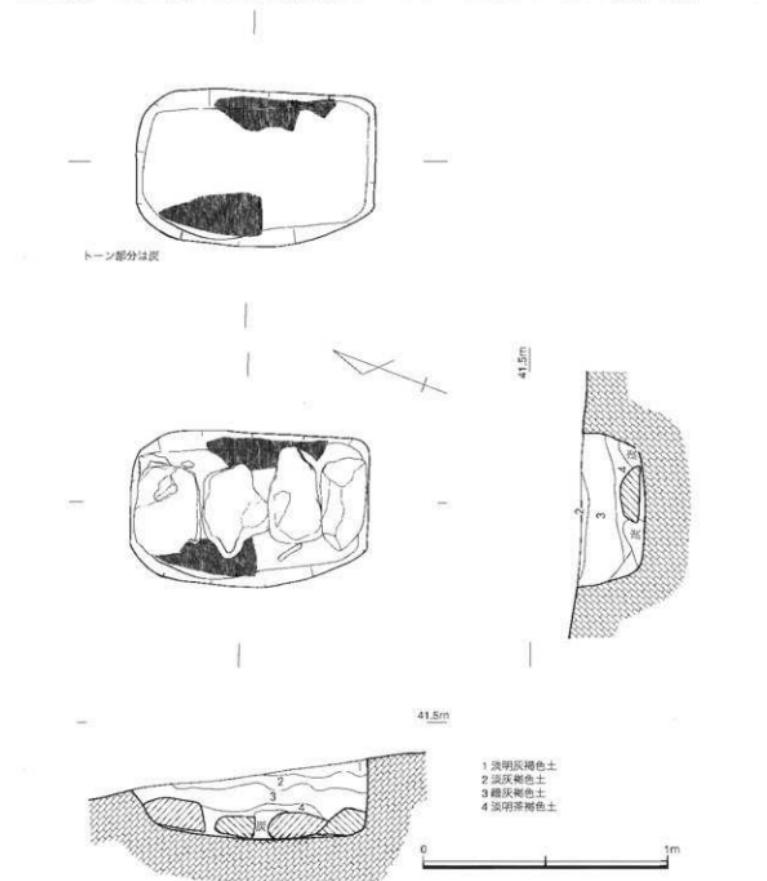
第147図 狛子観音I遺跡S I - O 1 東側Pit群実測図
(S = 1 : 60)



第148図 狐子観音I遺跡Pit群周辺出土遺物実測図 (S = 1 : 4)

遺物（第145図、第146図）

1は甕で口径18.8cmを測る。口縁部が上方に伸び、下端部は僅かに下方に突出する。口縁の外面に7条の沈線を入れ、体部外面の上半に板状の工具によると思われる押し引き状の刺突文を施している。内外面とも風化が進み調整の残りが想いがけ口縁部の内面はヘラミガキ、内面頭部以下はヘラケズリ、体部の外面にヘラミガキを施している。外面の全体にススの付着がみられる。2は小形の甕で、口縁部が上下に突出している。推定口径16.5cmを測り、口縁部の外面に4条以上の沈線を巡らす。口縁部の内面にヘラミガキを施している。3も小形の甕で推定口径13.6cmを測る。内外面とも風化が著しいため、調整が不明であるが口縁外面に2条の沈線を入れている。4は甕の口縁部である。外面に6条の沈線を施し、内面頭部以下にヘラケズリを施している。口縁部の外面にススが



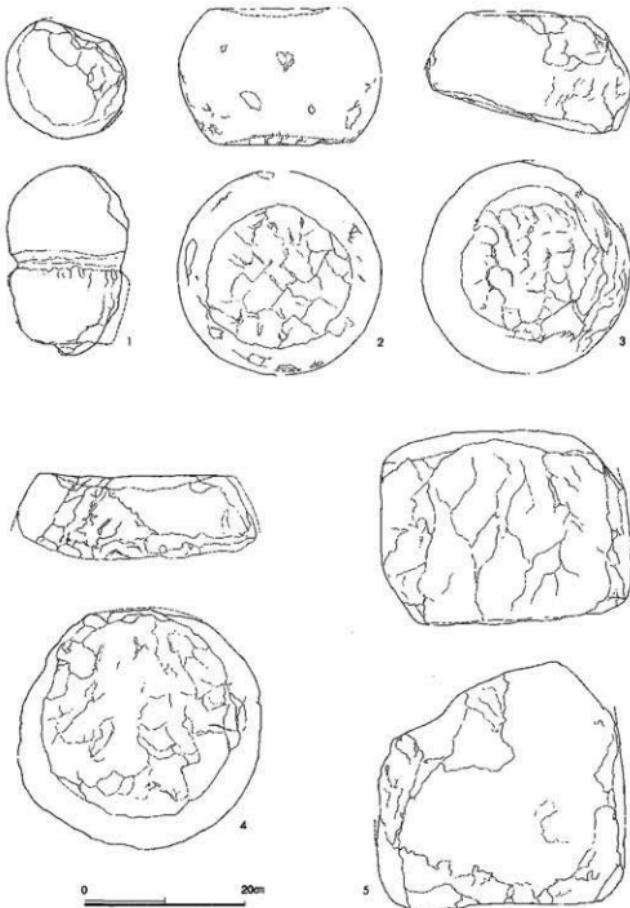
第149図 杓子観音I遺跡S X - 0 3実測図 (S = 1 : 20)

付着している。5は取っ手の破片である。6は器台の受け部と思われる。内面にヘラミガキが施される。7は器台の脚部で風化のため調整は不明である。8、9は石器で、敲き石では8は片面、9は両面に使用による溝みが残る。10は全面に使用により摩滅している。11も丁寧に磨かれている。弥生土器の時期はV-2期³と考えられる。

S I - 01 東側ピット群

(第147図)

S I - 01 の東側において検出したピットである。表土を除去する段階からこの周辺において遺物が出土しており、遺物を取り上げ精査しピットを検出している。中央にやや大きめのピットがあ



第150図 枇子縹音Ⅰ遺跡 SX-03 五輪塔実測図 (S=1:6)

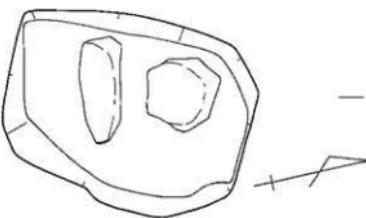
り、その周間に小さめのピットがある。建物に伴う柱穴のように明確な掘り方ではなく、それぞれに規格性は認められない。

遺物（第148図）

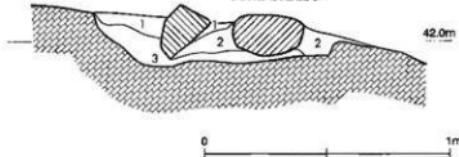
出土遺物遺物は、須恵器である。1は、輪状のつまみが付くと思われる杯・蓋である。2は杯で高台を有していたと思われる。4は、高台をもつ杯である。底部外面に回転糸切り痕を残している。3は、短頸壺である。5は、高台を有する壺、6も壺である。須恵器の時期は、1、2が大谷編年8期²⁾と考えられる。

S X - 0 3 (第149図)

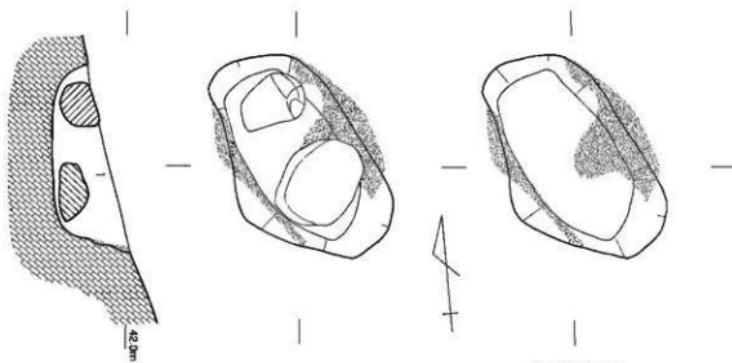
調査区のほぼ中央部から出土している。主軸方向がN-20°-Wとほぼ南北方向を向いている。



1 淡灰褐色粘質土
2 淡墨褐色粘質土(底の有機物を多く含む)
3 淡褐灰褐色粘質土

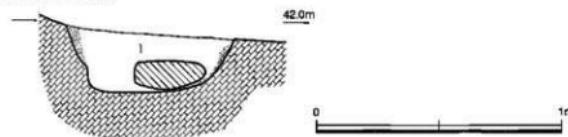


第149図 枠子観音 I 遺跡 S X - 0 3 実測図 (S = 1 : 20)

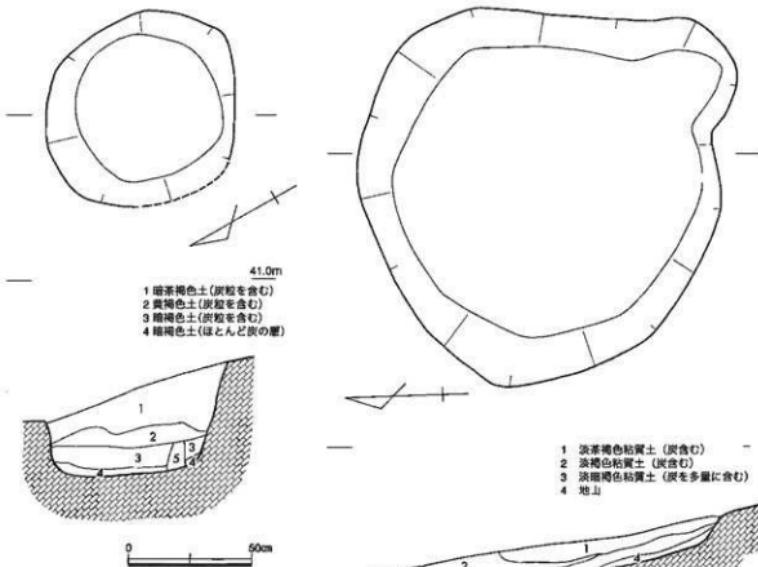


トーン部分は焼土

1 淡灰茶褐色粘質土(炭・焼土ブロックを多く含む)



第150図 枠子観音 I 遺跡 S X - 0 3 実測図 (S = 1 : 20)

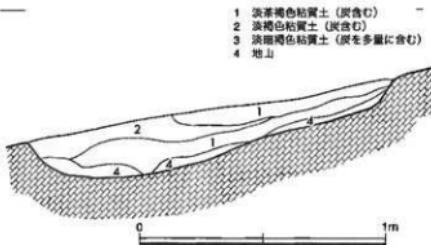


第153図 約子観音I遺跡
SK-01実測図 (S = 1 : 20)

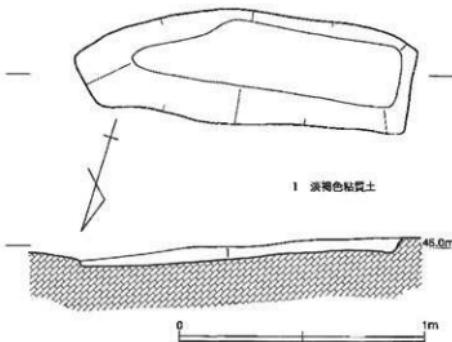
平面形は長方形で、規模は長さ0.98m、幅0.63m、深さ0.3mを測る。地山を長方形に掘り盛り底に石を4個敷き詰めている。石の表面と土壤の側壁は、焼けて赤く変色している。覆土中には炭が多く含まれており、原形を保つものもあった。底面近くから骨の破片も確認され、火葬墓であると考えられた。この土壤の上部からは五輪塔が確認されている。

五輪塔（第150図）

五輪塔の部材は全部で5点出土している。1は空風輪部、2~4は水輪部、5は地輪部と思われる。石材は地元山の石が使用されている。2の空風輪部が白来待石（安



第154図 約子観音I遺跡 SK-02実測図 (S = 1 : 20)



第155図 約子観音I遺跡 SK-03実測図 (S = 1 : 20)

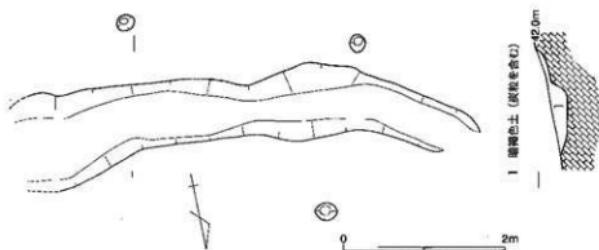
山岩溶岩)、その他は来待石(凝灰質砂岩)である。各部材とも30cm大の石から加工された小形品であり、梵字も表現していない。Iの空風輪部は一石で造られている。空輪は尖りがなく丸く仕上げられている。空輪と風輪の径がほぼ同じでくびれも浅い。水輪部は2の一点のみが完形である。上下面は浅く窪み粗い工具痕を残している。胴部はあまり張らない。5は幅30cm、高さ24cmの長方体で、幅に比して高さがある。これらの所産年代は16世紀を中心とする時期ではないかと考えられる。

S X - 0 2 (第151図)

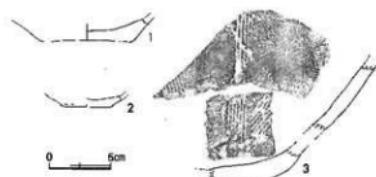
調査区中央部の西側で、S X - 0 2 と近接する位置にある。平面形は、長方形を呈している。上端の四壁は、焼けて赤く変色している。底には石が2個入れられており、石の表面も焼けている。覆土は淡灰褐色土、淡黒褐色土、淡明灰褐色土でいずれも炭を多く含んでいる。

S X - 0 1 (第152図)

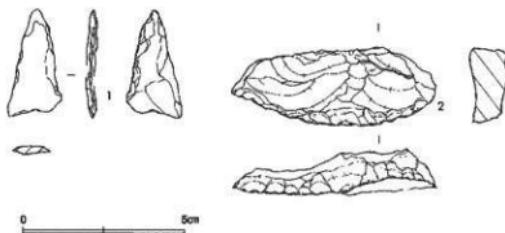
平面形は不整長方形で、壙底には石が2個置かれていた。長さ0.95m、幅が0.57m、深さ0.25mである。土壤の四壁と石の表面は焼けて、赤く変色している。底面の一部も焼けている。



第156図 約子観音I遺跡SD-01実測図 (S = 1 : 60)



第157図 約子観音I遺跡遺構外出土七器実測図 (S = 1 : 4)



第158図 約子観音I遺跡遺構外出土石器実測図 (S = 2 : 3)

S K - 0 1 (第153図)

調査区の北西側の斜面に位置している。径0.8mを測る、平面形が円形の土坑である。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、上層から暗茶褐色土、黄褐色土、暗褐色土でいずれも炭化物を含んでいるが、最下層は炭の層であった。遺物は出土していない。

S K - 0 2 (第154図)

調査区の東側に位置している。平面形は不整の円形を呈している。底面は傾斜しており、覆土は淡褐色土に炭を多く含んでいる。遺物は出土していない。

S K - 0 3 (第155図)

調査区の南側の斜面上部に位置している。平面形は長方形の短辺が崩れた形である。長さ1.87m、幅0.46m、深さ0.06mと極めて浅いものである。覆土は淡褐色粘質土で、遺物は出土していない。

S D - 0 1 (第156図)

調査区の中央部や西側の斜面に位置している。長さ5.5m以上、幅0.6~1.2m、深さ0.2mである。覆土は淡褐色土であり、炭化物を含んでいる。溝の底はほぼ平坦で傾斜は見られない。遺物は出土していない。

遺構外出土遺物 (第157図、第158図)

1は調査区の北側から出土した、弥生土器・壺の底部である。底径7.4cmを測り、外面にナデを施している。内面の調整は風化が著しく不明である。2は中世の土師壺・壺の底部である。底部外面が風化するものの、回転糸切りにより切り離される。3は中世の擂鉢・底部にかけての破片である。内面に擦り目が残り、使用により摩滅している。焼成は土師質のものであり、在地で生産されたものと思われる。1は石鐵で、石材はサヌカイトと考えられる。2は黒曜石製のスクレーパーであり、刃部は一方から剥離しており、その対角の面は疊び面が残る。

第3節 小結

今回の調査は、前年度の調査した古墳の北側の斜面であった。この斜面の谷筋を下ると、古墳時代の住居跡が調査されている荻田遺跡がある。今回の調査で発見された住居跡は弥生時代後期後半のものであり、時代的には漸るものの中落の広がりが確認された。弥生時代の竪穴住居跡で斜面の上部に溝を巡らすものは、安来市から宍道町にかけての中海、宍道湖沿岸部に顕著に見られる。また、住居への入り口と見られる階段状の構造は、松江市勝負遺跡³⁾において確認されている。

中世墓は3基検出しており、いずれも火葬墓である。土坑の底に石を敷き、その中で遺体を焼いたものである。中世後半の同様の火葬墓としては、松江市中竹久遺跡⁴⁾、二反田遺跡⁵⁾において確認されている。両者ともその周辺において石塔を確認しており、石塔を伴う墓として共通している。

註

- 1) 松本岩雄「出雲・隱岐地域」「弥生土器の様式と編年」山陽・山陰編 1992
- 2) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
- 3)、4) 島根県教育委員会『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査IV』1983
- 5) 松江市教育委員会『二反田古墓』1987

第10章 自然科学的分析

第1節 屋敷古墳群II区1号穴出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室

井上 晃 孝

島根県八束郡宍道町地内の屋敷古墳群II区の1号穴の玄室右奥部に、人骨が若干、集骨状に散在していたが、骨の遺残性は不良である。

被葬者は1体で、若年者の女性である。

出土人骨について、その概要を下記の順に報告する。

1. 骨の遺残性
2. 遺残骨名とその部位
3. 推定性別
4. 推定年齢
5. 推定身長
6. その他
7. 考察
8. まとめ

1. 骨の遺残性

遺残骨は集骨状に散在、脆弱化しており、遺残骨数は少なく、遺残性は不良である。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

歯牙：遊離歯牙 1ヶ

右上顎第2小白歯（臼）

脊椎骨

頸椎骨：Na不明の椎体部の1部

胸椎骨：Na不明の椎体部の1部

腰椎骨：Na不明の椎体部の1部

胸郭骨

肋骨：左；第1肋骨

上肢骨

尺骨：左；近位～遠位部（茎状突起部欠）補完最大長215mm

右；近位～遠位部

桡骨：右；近位～骨体下部

下肢骨

腓骨：左；骨体中央部

右；骨体の一部

足骨：左右不明；踵骨の1部

左右不明；楔状骨の1部

3. 推定性別

遺残する上肢骨(尺骨と桡骨)と、下肢骨(腓骨)は細く、きやしやで粗面の発達も弱い。

歯牙（上顎）の歯冠径も小さいことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年齢

上肢骨の左右の尺骨の遠近両端の骨端線は完全閉塞(融合)、右桡骨の近位部の骨端線は完全閉塞(融合)していることから、本屍は成人域(20才以上)に達している。

歯牙（上顎）は完全萌出、咬耗度は極めて軽微であることから、本屍の年令は若年者で、壮年前期(20代前半)位が推定される。

5. 推定身長

遺残する左尺骨はほぼ完形、補完最大長215mmから、本屍の生前の身長は藤井法¹⁾で146.0cmである(ピアソン法²⁾は尺骨からの身長推定式がない)。

6. その他

遺残骨数が少なく、完形骨もなく、脆弱化しているので、遺残骨からは特異的損傷、骨折、疾患の有無は不詳である。

7. 考察

玄室右奥部に人骨が若干、集骨状に散在していた。

右奥部に遺残する人骨の部位は、骨格順に示すと、歯牙1ヶ、脊椎骨の1部、肋骨の1部、尺骨(左右)、桡骨(右)、腓骨(左右)と足骨(左右不明)の1部である。

本屍が埋葬されて、白骨化後、恐らく祭祀の際(?)人為的に骨の移動が行われた形跡がある(遺残骨の配置只合からみて)。

玄室中央部に位置していたと思われる本屍の主要骨(頭骨、上腕骨、骨盤、大腿骨、脛骨)上に、真上の天井からの落土が大量に堆積、その為に主要骨は風化、消失したものと推察される。

そして、たまたま玄室右奥部は天井からの落土がなく、上記の人骨が若干遺残したと推察される。

8.まとめ

島根県八束郡宍道町地内の屋敷古墳群II区の1号穴には、玄室右奥部に遺残性不良の人骨が若干、集骨状に散乱していた。

被葬者は1体で若年者である。

本屍骨は、性別女性、年令壮年前期(20代前半)位、身長約146.0cmと推定する。

遺残骨をみる限り、後世の人為的攪乱(集骨状)の形跡がみられた。

文献

1. 藤井 明 (1960) ;四肢長骨の長さと身長との関係について。順天大保健体育、3, 49-61.
2. Pearson,K. (1899) : Mathematical contributions to the theory of evolution,V.On the reconstruction of the stature of prehistoric races,Phil.Trans.Roy.Soc.London.ser.A.192,169-244

第2節 屋敷古墳群II区7号穴出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室

井上 兄 孝

はじめに

島根県宍道町地内の屋敷古墳群II区7号穴には、被葬者2体が埋葬されていた。

横穴玄室の右奥部に集骨状に遺残する人骨を1号人骨、左奥部に若干遺残する人骨を2号人骨と仮称する。

玄室中央部は大井の土砂の崩落があり、その真下に位置する骨は土砂の堆積で埋まり、風化消失していた。

右奥部の集骨状（成人骨）の遺残骨（1号人骨）の中に、2号人骨の小児骨の頭骨片が一部混在していた。

両者の骨の遺残性は不良であった。

1号人骨

玄室右奥部に、集骨状に遺残していた一群の人骨で、主に頭骨（上、下頸歯牙：遊離歯牙）と下肢骨若干であった。

1) 骨の遺残性

遺残性はきわめて不良で、完形の骨はない。

上、下頸の歯牙はすべて遊離歯牙で散乱状に遺残していた。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：頭頂部～後頭部（右人字縫合上部にインカ骨1ヶ）、左後頭骨片、鼻骨の一部、

左頬骨上頸部、右眼窩下縁～頬骨部、右側頭骨（錐体部を含む）、右上頸骨（7～11：歯槽開放、死後欠）

下頸骨：剥離状を呈し、破損化

左下頸体歯槽部（頬側のみ）、右下頸体歯槽部（頬側のみ）

歯牙：全て遊離歯牙21ヶ

J	7	6	×	×	×	×	J		2	3	4	5	6	7	8
7	6	5	4		1				2	3	4	5	6	7	8

J：破損部位

×：死後欠（歯槽開放）

下肢骨

大腿骨：左；骨体中央部（後面）、骨片化

脛骨：左右不明；骨体の一部

3) 推定性別

本屍頭骨後頭骨の頂平面が平滑である、外後頭隆起の突出がきわめて弱い、歯牙の歯冠径が比較的小さいことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4) 推定年齢

① 頭蓋冠縫合

外板：矢状縫合は少し離開ぎみで、融合の程度不明、人字縫合は左右とも未融合。

内板：矢状縫合は孔間部融合、後部やや融合、人字縫合は左右とも未融合。

② 口蓋縫合

切歯縫合はほぼ完全融合、横口蓋縫合は未融合。

③ 歯牙の咬耗度

中、側切歯：プロカーナーの2度

小臼歯：咬耗なし

大臼歯：プロカーナーの1度

以上から、本屍の年齢は壮年中期（30代）位と推定する。

5) 推定身長

遺残する本屍骨の長管骨（下肢骨）が骨片化しており、完形骨がないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) 疾病・骨折の有無

本屍の遺残骨をみる限り、疾病の有無は不詳である。

損傷（骨折）

左頭頂骨の中央部に板間層（頭蓋骨の外板と内板の中間層）に達する不整形の陥没（凹）部（よこ10×たて16.5×深さ2.5～3.5mm）が1ヶみられた。

損傷部周辺骨の増殖が認められることから、受傷後ある期間生存していたものと推察される。

成因は不詳であるが、生前銃器による骨折で、法医学的には上記損傷は“頭蓋骨陥没骨折”という。

7) その他

本屍の頭蓋骨後頭骨の人字縫合部の右上部にインカ骨（介在骨）を1ヶ認めた。

2号人骨

玄室左奥部に若干の未熟な骨が散在していた。玄室右奥部の1号人骨（成人女性）の遺残骨の中に、2号人骨の頭骨片が一部混在していた。

1) 骨の遺残性

遺残骨数少なく、骨の遺残性きわめて不良であった。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：骨片化

前頭骨後面、頭頂骨片（矢状縫合部）、左側頭骨の一部（錐体部）、右側頭骨の一部（錐体部）

下顎骨：下頸体（前面正中部）

J	3	2	1		1	2	3	J
×	×	×	×		×	×	×	

×：死後欠（歯槽開放）

J：破損部位

歯 牙：遊離歯牙1ヶ；右下顎第1大臼歯（61）、歯根2／3形成

3) 推定性別

本屍骨は骨片化、歯牙（61）は永久歯で萌出歯牙であるが、10才未満の小児で、性別は不詳である。

4) 推定年齢

遺残歯牙（61）は永久歯で萌出歯牙で6才以上、しかし、歯根形成は未完で10才以下、歯根は2／3形成されている所から、本屍の年齢は7～8才位の小児と推定される。

5) 推定身長

本屍の遺残骨は頭骨のみで、長管骨がないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) 疾病・骨折の有無

本屍の遺残骨をみる限り、疾患・骨折の有無は不詳である。

7) その他

特記事項なし。

考察

インカ骨

島根県横田町地内の角・宮ノ崎横穴墓¹⁾には被葬者2体が埋葬されていた。

1号人骨は40代老年前期の女性、

2号人骨は40代後半の壮年後期の女性であった。

両者の頭蓋後頭部に、同じ形態のインカ骨を認めた。

両者の副葬品の須恵器はともに山陰編年歴のIV期で時期差もあまりなく、母娘の関係よりも、姉妹の関係が推察された。

このインカ骨の出現頻度は、日本人では男性3.1%、女性2.2%ときわめて少ない²⁾。

インカ骨は遺伝形質であり、血縁関係の濃い問柄では出現頻度が高くなる。

本遺跡第7号横穴墓の1号人骨（壮年中期30代の女性）の頭蓋後頭部の人字縫合の右上部にインカ骨を1ヶ認めた。

もし、2号人骨（7～8才の小児）の頭蓋骨が遺残し、後頭部の人字縫合部が完形で、同時にインカ骨が認められたら、1号人骨（30代の女性）と2号人骨（7～8才の小児）とはきわめて血縁関係の濃い問柄が想量される。

しかし、2号人骨の頭骨後頭部が遺残していないので、両者間の血縁関係の有無は不詳である。

まとめ

島根県宍道町地内の屋敷古墳群II区7号穴には、被葬者2体が埋葬されていた。

玄室右側奥部の1号人骨は、女性、年齢は壮年中期（30代）位、身長は不詳である。

本屍頭骨左頭頂部の中央部に、不整形の陥没（凹）部があり、生前の“頭蓋骨陥没（凹）骨折”痕が認められた。

さらに、後頭骨の人字縫合部の右上部にインカ骨を1ヶ認めた。

玄室左側奥部の2号人骨は、10才未満（7～8才位）の小児（性別不詳）、身長不詳である。

本屍頭骨は骨片化しており、インカ骨の有無は不詳である。

従って、被葬者同士の血縁関係の有無は不詳である。

文献

1. 井上晃孝（1994）：横田町宮ノ崎横穴墓出土人骨について、角・宮ノ崎横穴、柏原遺跡発掘調査報告書、14-25、島根県横田町教育委員会。
2. Dodo,Y. (1975) :Non-metric traits in the Japanese crania of the Edo period,Bull. Nath.Sci.Museum.Scr.D.41-45.

第3節 長廻古墳群2号穴出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室

井上晃孝

はじめに

鳥根県八東郡穴道町地内の長廻2号穴には、玄室やや奥部に集中して、骨が集骨状または散乱状に遺残していた。

骨の掘り上げに際し、左奥から左手前に向かっての1群の骨を1号人骨、次にその右側に位置する人骨を2号人骨、その右側の骨群を3号人骨、次に4号人骨と5号人骨に分けて骨を採取した。

全般的に、骨の遺残性は不良。とくに、小児骨が多かったので、未熟骨のため、破損、消失骨が多い。

被葬者数は5体で、成人1体、小児4体であった。

歯牙の記載法

A～E：乳歯

1～8：永久歯

○：倒植歯牙

△：遊離歯牙

×：死後欠（歯槽開放）

●：埋伏歯（可視）

・：埋伏歯（不可視）

最後に、長廻古墳群2号穴出土人骨一覧（付表）にまとめた。

1号人骨

玄室左奥部に頭骨片と歯牙が遺残、骨の遺残性が極端に悪く、上、下顎の歯牙9ヶを検出した。

1. 骨の遺残性

遺残性はきわめて悪い。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：左右の頭頂骨片

下顎骨：左右不明の歯槽部骨片

歯 牙：遊離歯牙（9ヶ）

△△	△	△	△	△
5	4	1	1	4
5			5	7
△			△	△

3. 推定性別

遺残歯牙は全て永久歯で、その歯冠径をみると、一般的に小さく、本尾歯牙は女性と推定される。

4. 推定年齢

遺残歯牙の咬耗度はプロカーラーの1~2度で、本尾の年齢は壮年期（30代）が推定される。

5. 推定身長

遺残頭骨片と歯牙からは、身長推定できないので、本尾の生前の身長は不詳である。

6. その他

遺残骨からは、これ以上の情報は得られない。

2号人骨

1号人骨の右側に位置する1群の骨を2号人骨とした。

遺残骨は頭骨片、下顎骨（完形）と上肢骨若干であった。

1. 骨の遺残性

本尾骨は幼若骨で、下顎骨を除いて遺残性は悪い。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：左右不明の頭頂骨、側頭骨片

上顎歯牙1ヶ（遊離歯牙）

下顎骨：完形（乳歯、永久歯：釘植、埋伏歯）

歯 牙：

		A	△
		A	A
E	D	A	B
C	B	B	C
O	O	C	D
○	○	D	E
○	×	○	○
○	×	○	○
7	6	1	2
6	5	2	3
5	4	3	4
4	3	2	5
3	2	1	6
2	1		7
●	●	●	●
●	●	●	●
●	●	●	●
●	●	●	●

上肢骨

鎖 骨：左右不明；骨体の一部

上腕骨： 左 ；骨体部

左右不明；骨体の一部

3. 推定性別

本尾骨は幼若骨（未熟骨）で小児骨であるので、性別は不詳である。

4. 推定年齢

本尾の下顎骨は完形で、乳歯と永久歯が併存している。

乳歯は左右の第1、2乳臼歯（D、E）が萌出、乳中切歯（A）、乳側切歯（B）、乳犬歯（C）は萌出していたが、死後歴であった。

永久歯は左右の第1大臼歯（6、M₁）は未萌出の状態で、当分萌出する気配がない。

通常、この歯牙は6才頃萌出するので、6才臼歯と言われる。しかし、この歯牙は埋伏歯の

状態で、現代の小児なら4才位である。

しかし、古墳時代の栄養状態が現代よりも若干悪かったと想定すると、歯牙の萌出も若干遅れ気味が推察されるので、本屍の年齢は4～5才位と推定される。

5. 推定身長

本屍骨の長管骨で遺残しているのは、左上腕骨だけで、幼若骨で骨幹部のみ遺残、上、下の骨端部が消失しており、眞の骨長が不明であるので、本屍の生前の身長は不詳である。

6. その他

本屍骨の上腕骨骨幹部に小動物（ネズミ）による咬傷痕が若干認められた。

3号人骨

2号人骨の右隣りの散骨状の1群の骨を3号人骨とした。

骨の遺残性は悪く、若干の骨が遺残していた。

1. 骨の遺残性

本屍骨は幼若骨で、骨の遺残性は極めて悪い。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：頭骨片2片（左側頭骨片、右側頭骨片）

胸郭骨

肋骨：右；骨片（Na不明）

上肢骨

橈骨：左右不明；骨体中央部の一部

左右不明；骨体中央部の一部

3. 推定性別

本屍骨は幼若な小児骨であるので、性別は不詳である。

4. 推定年齢

本屍骨は幼若骨で、骨の遺残が悪く、年齢推定できる骨の遺残はないが、橈骨の大きさは小児域であるが、それ以上の年齢区分は不詳である。

本屍骨は年齢不詳の小児であるとの推定にとどめたい。

5. 推定身長

遺残骨からは、本屍の生前の身長は不詳である。

6. その他

特記事項なし。

4号人骨

3号人骨の右隣りに位置し、やや集骨状で遺残骨は脊椎骨、上、下肢骨で、遺残性は悪い。

1. 骨の遺残性

本屍骨は小児骨で、主に上、下肢骨が遺残していたが、遺残性は悪い。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：左眼窓下縁部～頸骨の一部

脊椎骨

腰椎骨：椎体部 1ヶ (No.不明)

胸郭骨

肋 骨：左；骨片 (No.不明)

右；骨片 (No.不明)

上肢骨

上腕骨：

肩甲骨：右；関節臼窓部と肩峰の一部

下肢骨

寛 骨：右；仙腸関節部と大座骨切痕部

大腿骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

左右不明；下端骨の一部 (頸間窩)

3. 推定性別

本屍骨は小児骨で、2号人骨 (4～5才位)、3号人骨 (年齢不詳の小児) よりも大きい小児骨であるが、本来なら、性別不詳すべきであるが、あえて大座骨切痕の形状から、本屍骨は男性の小児が推定される。

4. 推定年齢

遺残骨を見る限り、本屍骨は未熟骨で、長管骨の骨端線から、全て上下とも消失している。

2号人骨と3号人骨と比較すると、若干加令がみられ、骨も大きく、本屍骨は10才前後の小児が推定される。

5. 推定身長

遺残の長管骨は完形でないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6. その他

特記すべき事項なし。

5号人骨

玄室右奥部に散乱する1群の骨を5号人骨とした。

遺残骨は未熟骨で小児骨のため、破損骨が若干遺残していた。

1. 骨の遺残性

本屍骨は一見して未熟骨で、小児骨で頭骨片と上、下肢骨の一部が遺残していた。

骨の遺残性は極めて悪い。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：右頭頂骨片と連続する右側頭骨片

上肢骨

上腕骨：左；骨体中央部のみ

尺 骨：右；近位部～骨体中央部

下肢骨

寛 骨：左；仙腸関節部と脛骨の一部

右；脛骨体の一部

3. 推定性別

本屍骨は未熟な小児骨で、遺残性が悪く、性別判定する部位もないので、性別は不詳である。

4. 推定年齢

本屍骨は明らかに未熟な小児骨である。

本横穴から出土した小児骨（2～5号人骨）について、骨の大きさ等を比較検討すると、5号人骨の骨の大きさは、2号人骨（4～5才）、3号人骨（年齢不詳）、と比較的類似しているが、4号人骨（10才前後）より小さい。

以上から、本屍骨の年齢は推察の域を出ないが、あえて推定すると5～8才位である。

5. 推定身長

遺残骨からは、本屍の生前の身長は不詳である。

6. その他

特記事項なし

考察

1. 骨の遺残性

骨の遺残性は、出土する遺跡の土質と骨の成熟度に大きく左右される。

木遺跡の長廻2号穴出土人骨の遺残性は、東出雲町の横穴群¹²⁾と同様に、全般的に悪い。

木遺跡は、とくに、小児骨が多かったため、未熟骨で破損、消失骨が多かった。

しかし、例外的に2号人骨（4～5才の小児）の下頸骨が完形で検出された。

下顎骨には乳歯と永久歯が併存しており、歯牙の萌出、未萌出が確認され、年齢が推定しえた。

2. 歯牙の萌出状態から年齢推定

古人骨の年齢推定する指標の1つに、歯牙の萌出状態がある。

乳歯と永久歯の萌出は、ある一定の順序で萌出するので、その萌出状態で年齢推定が可能となる。

古代人でも、現代人でも、歯牙の萌出順序は一定であり、時代差はそれほどない。

極端に、栄養状態が悪くならない限り、健常者では歯牙の萌出は半年くらいの早、遅で萌出してくる。

通例、乳歯は生後7、8ヶ月頃から中切歯が萌出、2才半までに第2臼歯が萌出、完了する。

永久歯は6才頃から第1大臼歯が萌出、12、13才位で第2大臼歯が萌出完了する。

第3大臼歯（智歯）は、17、18才頃から萌出し、25才位まで萌出完了する。

1) 乳歯の萌出状態から年齢推定が可能だった事例

鳥取市六部山古墳群23号墳³⁾の小石棺内のはば中央部に、小児骨が集骨状に埋葬されていた。

本屍骨は骨の遺残性が比較的良好で、上、下顎の歯牙の遺残が良く、とくに下顎骨はほぼ完形で、乳歯の萌出状態が良く保存されていた。

下顎の前出歯牙は左右の乳中切歯（A）、乳側切歯（B）と第1乳臼歯（D）で、未萌出（埋伏）歯牙は左右の乳犬歯（C）と第2乳臼歯（E）であった。

この萌出状態は、現代の小児では1才半位に相当する。古墳時代人の栄養状態は現代人と比較すると、幾分悪かったと推察されることから、歯牙の萌出も若干遅れ気味と思量され、本屍小児骨の年齢は2才前後位と推定した。

2) 永久歯の萌出状態から年齢推定が可能であった事例

鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡のS X - 79号墳^④の小石棺内には、小児1体が仰臥伸展位で埋葬されていた。

頭蓋骨と下顎骨は、発掘時ほぼ完形であった。本屍小児骨の歯牙はほとんど遺残していた。

乳歯は全て完全萌出、永久歯は一部の歯牙がわずかに萌出しかかっているが、他の永久歯は全て歯槽内に埋伏（未萌出）の状態であった。

本屍小児骨の左下顎第1大臼歯（6、M₁）は萌出しかかっているが、右下顎の第1大臼歯（6、M₁）は埋伏（未萌出）の状態で、現代の小児では5才位に相当する。

古墳時代人の栄養事情を考慮すると、現代人よりも歯牙の萌出も若干遅れ気味であろうと推察されることから、本屍小児骨の年齢は5～6才位と推定した。

3) 長廻2号穴出土2号人骨（小児）の年齢推定

2号人骨の下顎骨は完形、乳歯と永久歯が併存していた。

乳歯は全て萌出、左右の第1、2乳臼歯（D、E）が剝離、左右の乳中切歯（A）、乳側切歯（B）、乳犬歯（C）は死後まで歯槽開放であった。

永久歯は左右の第1大臼歯（6、M₁）が未萌出（埋伏歯）の状態であることから、6才以下の小児である。

乳歯が完全萌出、永久歯が未萌出の状態で、第1大臼歯（6、M₁）が未だ当分萌出する気配がない所から、現代の小児では4才位に相当する。

古墳時代の栄養事情を考慮しても、本屍小児骨の年齢は4～5才位と推定される。

鳥取市六部山古墳群28号墳の小児の年齢は2才前後位、鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡S X - 79号墳の小児の年齢は5～6才位である。鳥根県穴道町長廻2号穴の2号人骨（小児）の年齢は4～5才位であり、前2例の中間的年齢である。

まとめ

島根県八束郡宍道町地内の長廻2号穴には、人骨が多数散在していた。

骨の遺残性は全般的にきわめて不良であった。

例外的に、2号人骨（小児）の下顎骨が完形で検出された。乳歯と永久歯が併存しており、その萌出状態から、年齢が確実に推定できたのは幸運であった。

被葬者数は5体、内訳は成人女性1体、他の4体はすべて10才以下の小児であった。

1号人骨は女性、年齢壯年期（30代）、身長不詳である。

2号人骨は性別不詳、年令4～5才位の小児、身長不詳である。

3号人骨は性別不詳、年令不詳（5～8才？）の小児、身長不詳である。

4号人骨は性別男性（？）、年令10才前後の小児、身長不詳である。

5号人骨は性別不詳、年令5～8才位の小児、身長不詳である。

2号人骨の上腕骨に小動物（ネズミ）による咬傷痕が認められた。

文献

- 井上晃孝(1997)：島田池遺跡1、4調査区横穴墓群出土人骨について、島田池遺跡、鶴賀遺跡（本文編）、252～274、建設省松江国道工事事務所・鳥取県教育委員会。
- 井上晃孝(1998)：渋山池古墳群IV区横穴墓出土人骨、渋山池古墳群、163～187、建設省松江国道工事事務所・鳥取県教育委員会。
- 井上晃孝(1995)：六部山古墳群26、28号墳出土人骨について、六部山古墳群II、109～117、鳥取市教育福祉振興会。
- 井上晃孝(1983)：長瀬高浜遺跡出土人骨の報告（昭和54～56年度）、長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V（本文編）、299、鳥取県教育文化財団。

付表 長瀬古墳群2号穴出土人骨一覧

被葬者No	推定性別	推定年齢	推定身長	備考
1号人骨	♀	壯年期（30代）	不詳	
2号人骨	不詳	小児（4～5才）	不詳	上腕骨に小動物による咬傷痕
3号人骨	不詳	小児（不詳5～8才？）	不詳	
4号人骨	♂（？）	小児（10才前後）	不詳	
5号人骨	不詳	小児（5～8才）	不詳	

写 真 図 版



I区S I - 01 完掘状況



I区S I - 01 濕形土器 出土状況

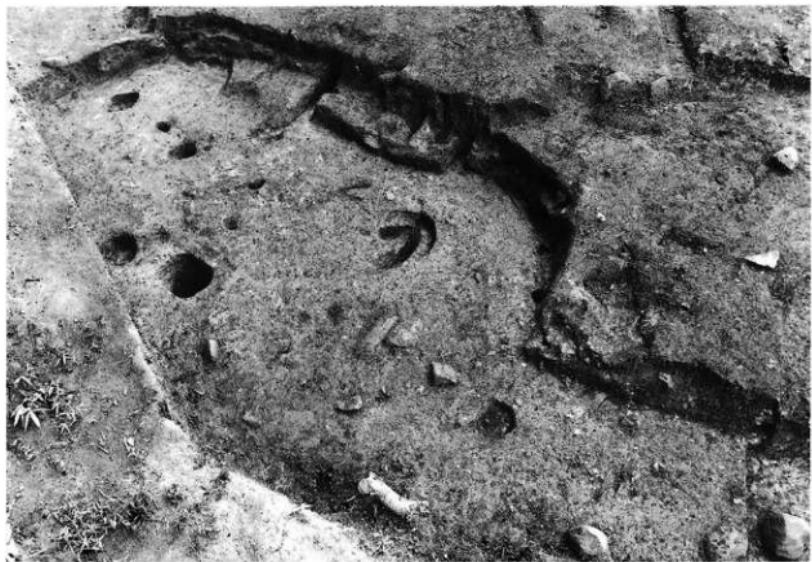
星敷古墳群 圖版 2



I区SI-01 鉄器出土状況



I区SI-02 完掘状況



I区S 1-03 完掘状況



I区加工段1・2・3 完掘状況

屋敷古墳群 圖版 4



I 区加工段 1 土層



I 区加工段 1 遺物出土狀況



I 区加工段 2・3 完掘状況



I 区加工段 2・3 土層

屋敷古墳群 図版 6



I 区加工段 4 完掘状況



I 区加工段 4 土層



I 区加工段 4 遺物出土状況



I 区加工段 5 土層

屋敷古墳群 図版 8



I 区 SK-01 遺物出土状況



I 区 1号墳 調査前



I区1号墳



I区1号墳 主体部

屋敷古墳群 図版10



I区1号墳 土層（墳丘北側を西から）



I区1号墳 土層（墳丘南側を東から）



I区1号墳 土層（墳丘東側を南から）

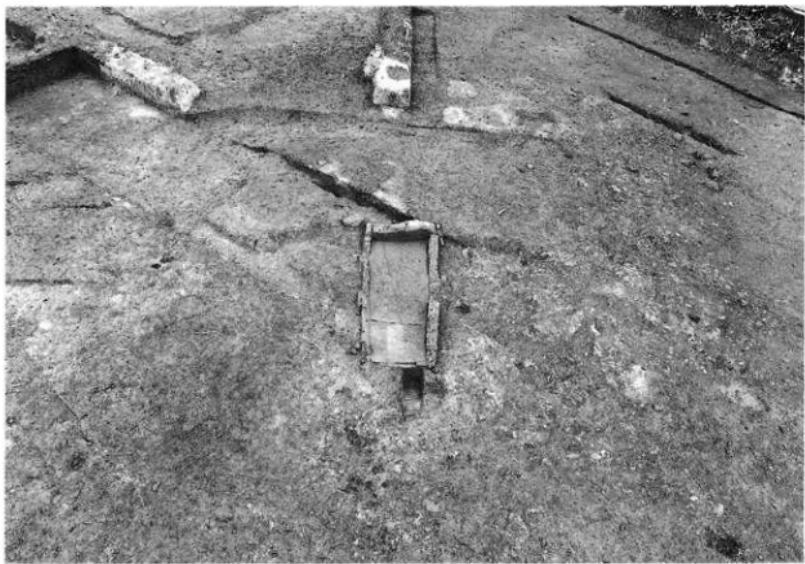


I区1号墳 土層（墳丘西側を北から）

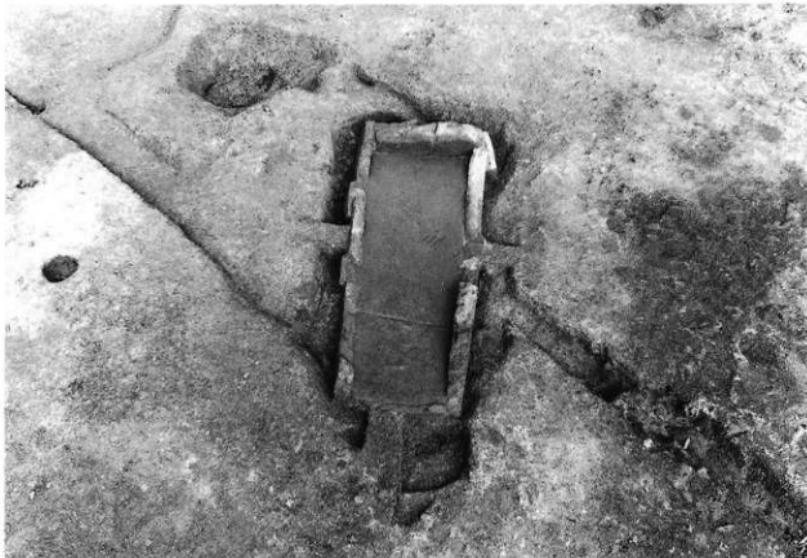
屋敷古墳群 図版12



I区2号墳



I区3号墳 石棺及び周溝完掘状況



I区3号墳 石棺掘方 掘削状況

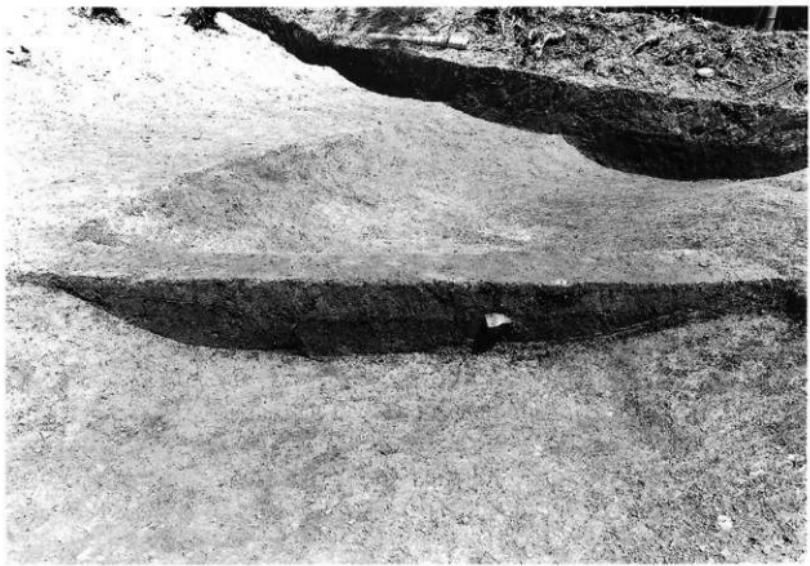


I区3号墳 石棺取上げ後状況

屋敷古墳群 図版14



I区SD-03 土器溜まり



I区SD-03 土層



I区SD-03 完掘状況



I区竪歛間